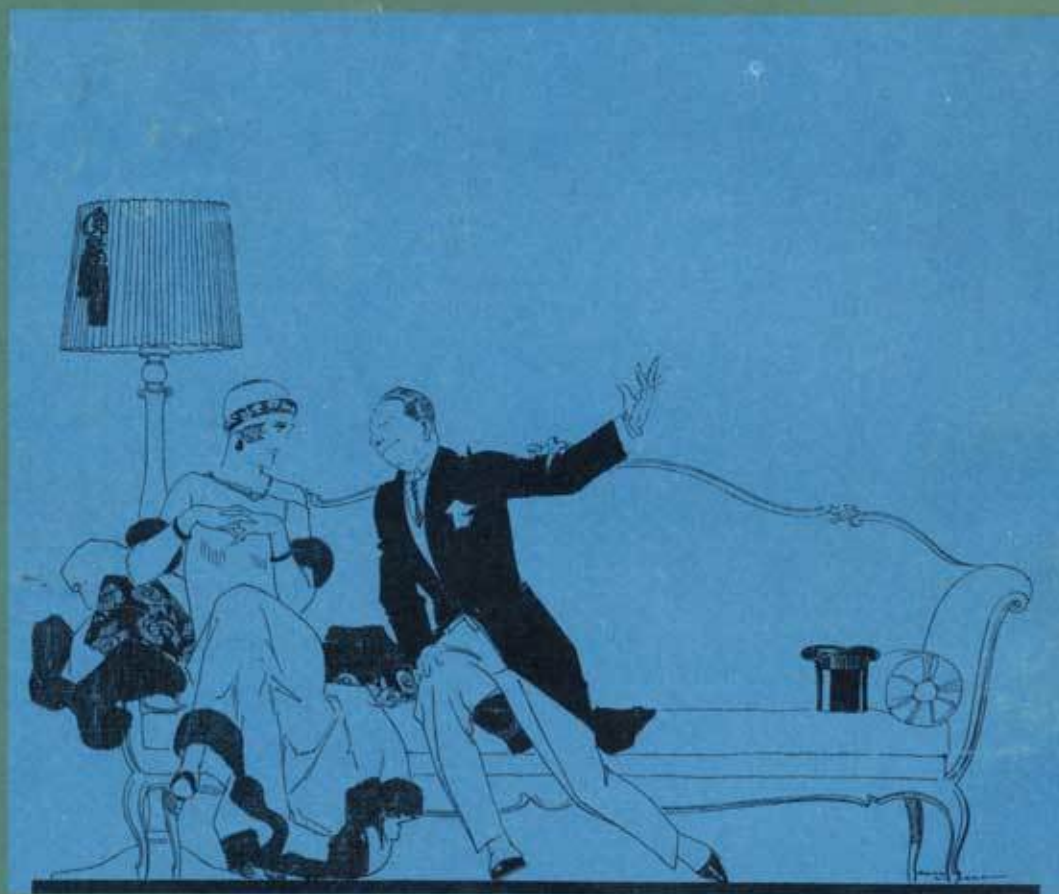


奇譚クラス

新しい風俗文献誌

2月号



1964・2

奇譚クラス

2月号

定価 二五〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



今月の新版
代理部分譲品案内

〈新人、遠藤百合子の巻〉

今回、特に遠藤百合子さんの御希望により次の通り、分譲品として発表しました。グラビヤにない迫真的で身近な彼女の数々のポーズを手にとってごらん下さい。

全裸緊縛姿態開陳 略号 (ゆり)

大手札印画紙焼付 四枚一組 四〇〇円
汚れを知らぬ美しい百合子の全裸の姿態が乳房もゆがむ、きびしい細目に、くねくねとしなをつくって、曲りくねる。グラビヤに出せなかった百合子さんの良さを、マニヤの方だけに見て頂きたいと願うばかり。

鼻をいたぶる 略号 (ゆは)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円
この写真は、いじめられる鼻を中心として余りにも刻明に、はつきりと顔が出てしまうので、口絵には出さないでという百合子さんの願いで、特に分譲品としました。

白晒六尺褌 略号 (しは)

大手札印画紙焼付 四枚一組 四〇〇円
真白い六尺褌を脱ぎだして、きりりと、いなせに締めた姿。可愛いお尻、くびれたウ

エスト、正面の六尺褌姿、恥らいに、身をくねらし、両手を挙げたポーズの数々。

白晒六尺褌 略号 (しろ)

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円
双丘の間にぐっと喰い込んだ晒木綿、禪堂にとっては、まことに魅惑的な六尺褌のバックスタイルを、ぐいとはかりお尻を持ち上げて、たっぷり見て頂けるフォト。

黒フンドシの女 略号 (くま)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円
前袋も前を僅かに覆うばかりのきりぎりきにきゅっと締め上げた黒フンドシの魅力。女のフンドシは黒に限るといわれる方へのプレゼント。百合子の美しいポーズでどうぞ。

黒フンドシの女 略号 (くろ)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円
黒シユスのフンドシが尻の割目に捻じるように喰い込んで、むくりと二つの双丘が右に左に盛り上がり、くねる。肌が白いだけに細い黒フンドシの間にかなり出ず奇妙なコントラストが、黒フンマニヤの目を奪う。

相撲褌締め込む 略号 (すい)

大手札印画紙焼付 四枚一組 四〇〇円
雲霧の白の相撲フンドシを、正式に締め込

んだ百合子さんが、そのポリウムのある裸身で、前面、背面、側面と、さまざまな姿態をごらんいただけます。肉体が素晴らしいだけに、堂々と相撲フンドシを締めた姿は前袋もはりきって見事なものです。

浣腸をする女 略号 (ゆか)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円
百合子さんに浣腸器を持たしたら、彼女はぱっと顔を真赤に染めて、「あら、こんな大きなので浣腸しますの」と、あとは声もなかった。若い女の人の口から、直接、浣腸とか猿ぐつわという言葉を聞くと、妙になまめかしい。結局、彼女は初めから終りまで、浣腸については恥しがり通しだった。

バンドを脱ぐ女 略号 (ゆお)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円
月経帯の替ゴムの生ゴムのむちむちした感触を楽しみながら、ゴムもあらわにバンドを脱いでゆく百合子さん。その中で、ゴムのよく見たのはばかり三葉選びました。

月経帯のまま縛り 略号 (ゆす)

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
後手の高手小手に縛られて、今は両手の自由のきかない百合子さんは、黒の月経帯をはかされて、蒲団の上にくるがされる。起き上ろうとして身体を起せば、思わず両足が開いて、月経帯がすっかり見えてしまう。

【新版】女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選 大手札印画紙 (9×13cm) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一五〇円
五組十枚	五〇〇円
十組二十枚	九〇〇円
二十組四十枚	一七〇〇円
三十組六十枚	二五〇〇円
四十組八十枚	三二〇〇円
五十組一百枚	四〇〇〇円
六十組一百二十枚	四七〇〇円
七十組一百四十枚	五四〇〇円
八十組一百六十枚	六〇〇〇円
九十組一百八十枚	六五〇〇円
百組二百枚	七〇〇〇円

E1	全裸の悦唐プレイ (愛川)
E2	仕置を受ける裸身 (大塚)
E3	荒縄に苦悶する肌 (愛川)
E4	ムチに耐える美肌 (関谷)
E5	豊胸と豊胸しぱり (愛川)
E6	全身の後手観像 (大塚)
E7	足から眺めた裸身 (水本)
E8	全裸エビ責尻強調 (関谷)
E9	ハリツケられた娘 (大塚)
E10	強烈後手高小手 (愛川)
E11	責め抜かれた疲勞 (梨花)
E12	逆エビにもだえる (大塚)

E13	拘禁された美囚女 (大塚)
E14	浴室に覗く股間縛 (愛川)
E15	海老責に泣く足首 (大塚)
E16	乳房強烈締めつけ (愛川)
E17	牢獄で泣く縛り娘 (大塚)
E18	美しき全裸股間縛 (大塚)
E19	全身に溢れるマゾ (関谷)
E20	ベッドにもだえる (関谷)
E21	身体中に強烈な縄 (愛川)
E22	放置された海老責 (東浦)
E23	ゴム衣で縛られる (東浦)
E24	ローソクで責める (大塚)
E25	寝台の排便ポーズ (絹川)
E26	足指先に濡る媚態 (関谷)
E27	後手吊り正面裸像 (関谷)
E28	厳重な高小手縛 (東浦)
E29	女体の全部を晒す (愛川)
E30	激しいムチ打の果 (関谷)
E31	若肌も縛にくびれ (東浦)
E32	投げ出した胸線美 (絹川)
E33	膣中心の腹部緊縛 (梨花)
E34	セーラー服の哀飲 (梨花)
E35	赤いムチ痕の臀部 (関谷)
E36	仰向けの囚女の女 (梨花)
E37	制服の女学生縛り (梨花)
E38	悦唐にむせぶ若妻 (関谷)

E39	痛打にくねる裸身 (関谷)
E40	乳房に加える金具 (大塚)
E41	鼻責めにあえぐ顔 (大塚)
E42	あぐら縛りを拒む (大塚)
E43	流腸ポーズの裸身 (梨花)
E44	羞烈なエビ責苦悶 (大塚)
E45	敷布の上ののびて (絹川)
E46	鼻いじめのアツプ (梨花)
E47	柔肌に喰込む麻縄 (東浦)
E48	縄にくびれる裸身 (東浦)
E49	椅子に晒された女 (大塚)
E50	臍そうじをされる (大塚)
E51	荒縄のトゲに狂う (絹川)
E52	火のついた煙草責 (四方)
E53	踏みつけられた胸 (梨花)
E54	裸身をゆだねた娘 (大塚)
E55	手足猪りりの美態 (絹川)
E56	囚女の美しき緊縛 (絹川)
E57	締めた観念全裸像 (水本)
E58	縄にもだえぬく姿 (絹川)
E59	黒髪を吊られた女 (大塚)
E60	女奴隷美しく悶 (絹川)
E61	袋の中の緊縛裸身 (竹本)
E62	ビニール袋に蒸す (竹本)
E63	亀甲型の雁字揃目 (大塚)
E64	緊縛裸像の舞踏会 (絹川)
E65	野外的後手宙吊り (梨花)
E66	足首に鎖錠実施中 (四方)
E67	室内の後手宙吊り (梨花)
E68	雨装束の悦唐姿態 (梨花)
E69	乳房いじめ踏つけ (大塚)

E70	足の裏ハネ操り責 (梨花)
E71	乳首ブライヤ挟み (竹本)
E72	野外的逆さ吊り責 (梨花)
E73	梯子責にあう美女 (梨花)
E74	逆さ吊りに揺れる (梨花)
E75	娘十六縛り加減 (花坂)
E76	踏みにじられた顔 (大塚)
E77	逆エビに反る足先 (大塚)
E78	両手吊りのお仕置 (絹川)
E79	責折檻に呻く若妻 (梨花)
E80	豊麗を誇る正面像 (大塚)
E81	食卓上の縛り人形 (大塚)
E82	むしられる下着 (大塚)
E83	月経帯の羞恥縛り (梨花)
E84	寝台上的の若妻狂態 (関谷)
E85	強烈全裸エビ縛り (東浦)
E86	後手縛り満腹部晒 (東浦)
E87	後手縛り豊満部晒 (関谷)
E88	黒髪いじめ凌辱図 (大塚)
E89	令嬢後手高小手 (絹川)
E90	膣部乳房強調緊縛 (東浦)
E91	責衣にくるまれて (東浦)
E92	全裸逆エビ責め (水本)
E93	ローソク乳首責め (梨花)
E94	全裸後手縛り悶晒 (関谷)
E95	強打全裸のあえぎ (関谷)
E96	肉体美の責衣ゼメ (東浦)
E97	バンド二ツ折縛り (梨花)
E98	全裸正坐縛り猿轡 (関谷)
E99	豆しばりの猿轡 (絹川)
E100	強烈縛り膝いじめ (東浦)

集 募 約 予

限定版——縛られた女体ばかりの超豪華アルバム（全部実写フォト）

コロタイプ美術印刷、両面特アート使用

頒価 一〇〇〇円（送共）
略号「美 3」

アルバム ↓ 緊縛女体百二十態 / 本誌優秀モデル陣総登場

鮮明なるコロタイプ印刷によって、印画紙に焼付けたと同様の美しい百二十ポーズの女体緊縛フォト「美しき縛しめ」を限定版にて企画、予約募集いたします故、直ちにお申込み下さい。すでに写真の選定に着手しております。

美しき縛しめ 第三集

必ずや皆様の御期待にそえる素晴らしい逸品を作成いたします。両面特アート紙にギツシリと満載された緊縛美女オンパレードは本誌ならではの企画です。写真はいずれも、今まで一回も発表されたことのない、とっておきの未発表の秘蔵品です。すぐお申込み下さい。

二月中旬完成予定 一般書店売りは一切いたしません 直接お申込み者に限る

「美しき縛しめ」 第一集、第二集では、アート紙に対するコロタイプ印刷によって、往年の緊縛モデル達の麗姿をアルバム上に再現した。が、このたびは再び十年ぶり、珍重され、美しき縛しめの第三集を企画しました。これは限定版のため、予約御申込み下さった方にのみ頒布いたします。書店売りは一切いたしません。故、必ず直接お申込み願います。

（登場モデル名）

絹川文代、長野良子、大塚啓子、梨花悠紀子、関谷富佐子、遠藤百合子、新井マリ子、五月亜紀子、茂良子、東浦ひかる、竹野ひろ子、愛川悦子、小夜子、四方清美、桜井葉子、栗本ミチ、大井緊縛ポーズの中、皆様の貴重なコレクションの一端を担う価値のあるものを作成いたします。



奇譚クラブ 昭和39年2月号 目次

第一 グラビア
吊り上げられた梨花 梨花悠紀子
椅子逆エビしぱり髪吊り 大塚啓子
黒縄後手高小手棒責め 絹川文代
猿ぐつわの種々相四態 大塚啓子
夫婦のSMプレイより 新宮明夫・提供
生首晒し

巻頭口絵
女囚第30283号 四馬孝・画
貴婦人と貞操帯 四馬孝・画
アイデア画 抜歯の幻想 四馬孝・画
マゾ画 「美女と奴隸男」 四馬孝・画
マゾ画 「耽溺(たんでき)」 白川潤・画
女相撲 「奉納娘相撲」 雪崎京人提供
女相撲 激斗する二人の美女 雪崎京人提供
女切腹 落城譜美女奪戦 四馬孝・画

第二 グラビア
縛り刑 妖しい視線 大塚啓子
縛りのポートレート 加茂良子
妖しい視線 加茂良子
膝小僧のポリウム 大井小夜子
雨具の光沢と縄 梨花悠紀子
鼻をいじめられる 大塚啓子
緊縛の正面と背面 長野良子
革拘束具装着 大塚啓子
奇クサロン 編集部構成 (33)

○おへんとおしりとおチチ 編集子、○期待する二新人 藤村若葉、○女体縛りの執念 塚本鉄三、○屈辱の行進 葉村正一、○おとし雑考 野中信敏、○風船腹についてなど 羽村京子、○スケートの乙女 昨亭数久、○パンティに魅せられた男 花上良海、○腰元の切腹、○偶感、十二月号を読んで 佐渡耕作、PLAYの思い出 ささ木十郎、○私の随想、マゾの発端と

尾行の果 大中 忠 (49)
「奇譚三十九夜」物語 辻村 隆 (56)
嗜虐千一夜 (悪童日記) 忍頂寺 実 (70)
隠花植物 悦虐絵灯籠 四 万田 不仁 (72)
空想の城から 「天国とその隣」 九雅 節夫 (79)
天女と小悪魔 安堂 馨 (82)
十三人の女死刑囚 (カポー篇) 佐出 須登 (90)
「妖異不死身娘」 滝沢 史郎 (100)
△マニヤ通信△私のマゾ日記 遠藤百合子 (117)
長篇SM小説 宇宙のどこかで 佐治 麻造 (122)
九・十・十一・十二月号の魅力ある責めの感想 柴島令子 (135)
「読者体験記」 恋人同志のSMプレイ 甘木 笑夫 (137)
少年の回想 三村 敏夫 (141)
連載小説 花と蛇 (第八回) 団 鬼六 (146)
浣腸 憧憬度 原 了吉 (155)
私の告白の断章 「女主人の脚」 天泥 盛英 (158)
偏執雑記 臍窩とその周辺 須藤 律夫 (162)
浣腸という絆で結ばれた 「私とあなた」 小泉 尚子 (166)
女相撲小説 山中での娘相撲 岡平 吉夫 (172)
読者通信に寄せて 「深夜の独白」 堀 夏彦 (176)
女体切腹 殉 難抄 中康 弘通 (178)
教師の記録 摩耶 馨 (180)
読者通信 (192)

(今月の新版分譲品)

自己愛の女神、長野良子

臨時増刊号のグラビヤにて初めて登場して、満天下ファンの絶賛を博した美人モデル長野良子嬢の、とおきの緊縛ポーズを特にマニヤの方にごらんにいます。

全裸脚拳姿態

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 長野良子
略号 (てい)

可愛い容貌と初々しい肢体の持主でありながら、齡に似合わない大胆さで自己愛を満足させる露出癖の長野良子嬢が肉づきのよい脚を挙げて緊縛の肢体をくねらし、自慢の全身をレンズの前にさらけ出したとおきの三葉。

全裸アグラ縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 長野良子
略号 (てへ)

これこそ露出癖の長野良子ならではの大胆きわまりないポーズ。後手高手小手で両手の自由のきかぬ彼女が、自ら逞ましい両足をアグラにしてポーズをとった他のモデル嬢では見られないフォト。

全裸屈伸縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 長野良子
略号 (ては)

巨大な乳房、逞ましきヒップ、膨満した腹部、白い脂肪のかたまりのような長野良子の美しい縛りめの全身が、その裸身が異性の前に誇るように投げだされた涎の垂れるような素晴らしい迫力に満ち満ちたポリウム自慢のフォト。

六尺禪の変形姿態

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 長野良子
略号 (てに)

きりりと締め込んだ白晒フンドシのよく似合う豊満な肉体が、フンドシこそ、露出癖を満足させるのには、恰好の小道具だとばかり脚を伸ばし身体をそらし、さまざまの姿態をくりひろげる長野良子の六尺フンドシ変形ポーズ。

蹲踞と拍手

大手札 二枚一組 二〇〇円

モデル 長野良子
略号 (てり)

六尺禪を締めた良子が、相撲の仕切りの時にするように蹲踞の姿勢で両股を真一文字に開いて正面

を向いたところと、同じ姿でカシワ手を打っているところの二態。

鬼面と接吻する

大手札 二枚一組 二〇〇円

モデル 長野良子
略号 (てち)

鬼の面にキスする全裸の美女の立像。妖奇と裸美のかもしれない出するあやしい雰囲気の写真面いっぱいにひろがった、アブ好みと自称する長野良子が、自らすすんで演じたアイデア。正面向いたあどけない顔と、異様なばかりに美しい起伏を見せた正面裸身が素晴らしい。

強烈エビ責め

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 松本アサ子
略号 (まと)

「臨時増刊号」に初めて登場した愛読者のモデル志願者が自己のマゾ性を満足させるために、すすんで最も強烈な縛りを要求したカメラの前に晒した全裸エビ責めのポーズ。両足先が顎近くまで折り曲ったこのエビ縛りは、時間が経つに従って、苦痛が増してくる。全身脂汗を流して耐えるシーン。

裸身に羞らう

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 松本アサ子
略号 (まつ)

誌面のグラビヤでは、あからさまに顔を出すことをためらっていた松本アサ子嬢も分譲写真となれば、そのためらいもかなぐりすて、大胆なポーズで顔を正面むけて、マニヤの方たちを凝視してやまないマゾ性の發揮の一場面。

女賊捕縛

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚啓子
略号 (へい)

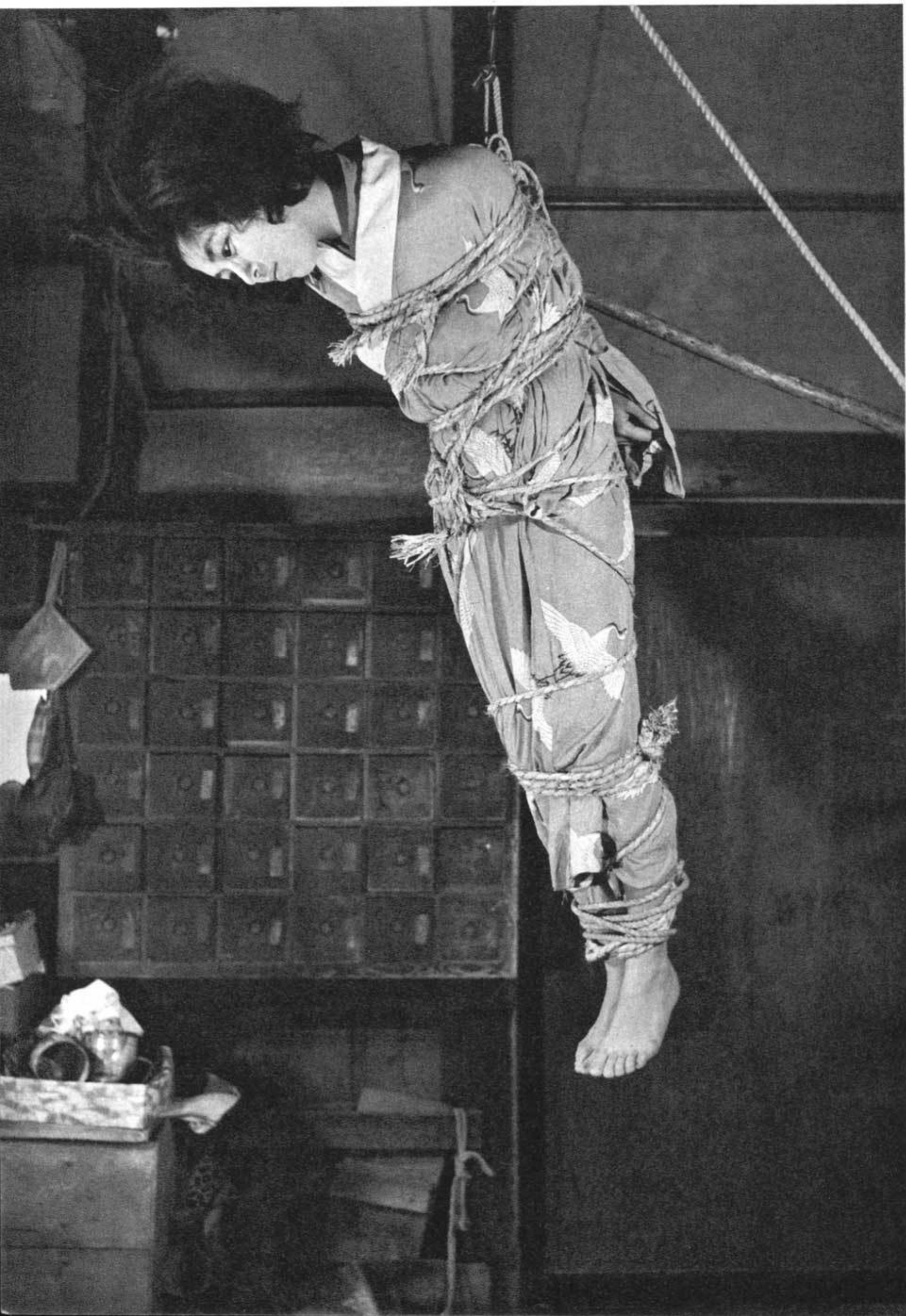
白晒のフンドシ、胸高にしめた腹巻、白鞘の短刀を落ち差しに、頬かむりをした女賊が、捕えられてきりきりと後手高手小手に縛しめられ、柱に括りつけられて逃げようともがく有様。

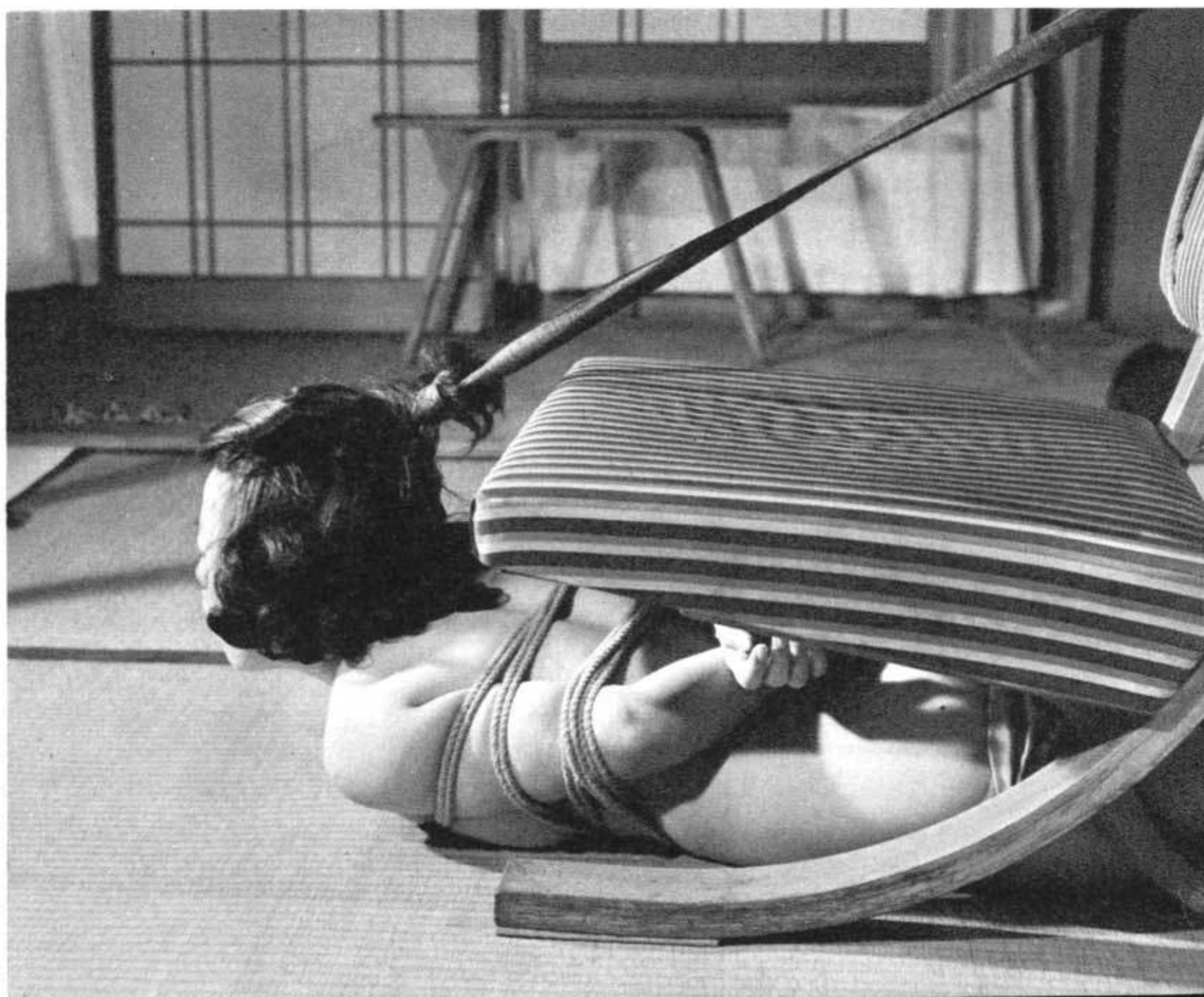
女賊処刑

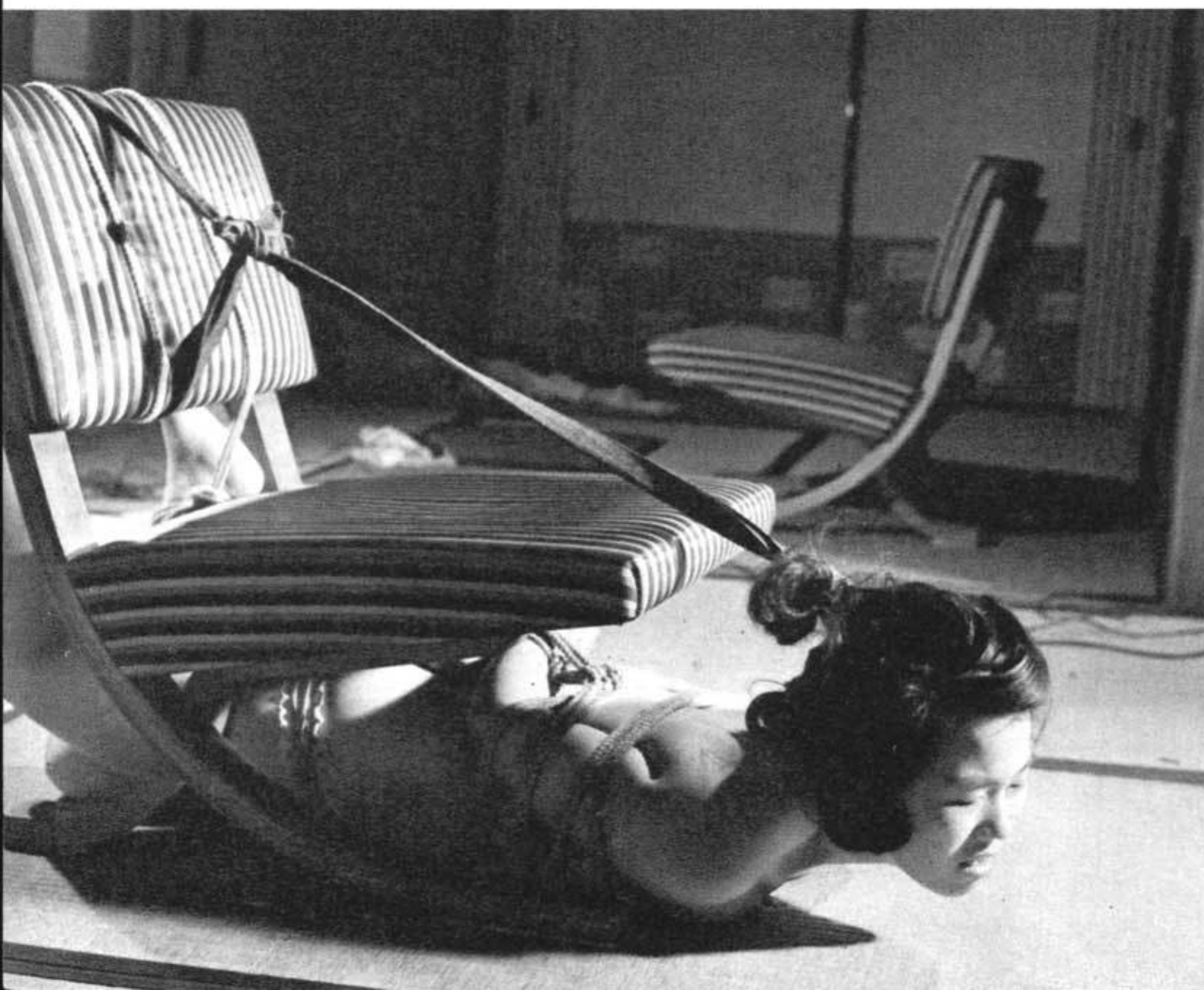
大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚啓子
略号 (へは)

捕えられた女賊は、逃れんとし、でも、その術なく観念してうなだれ処刑の辞をきく。自ら持った短刀は男の手に抜きはなたれ、ドキドキとする抜身が女の首筋に当てられ、今まさに振り下されようとする緊迫した一瞬。





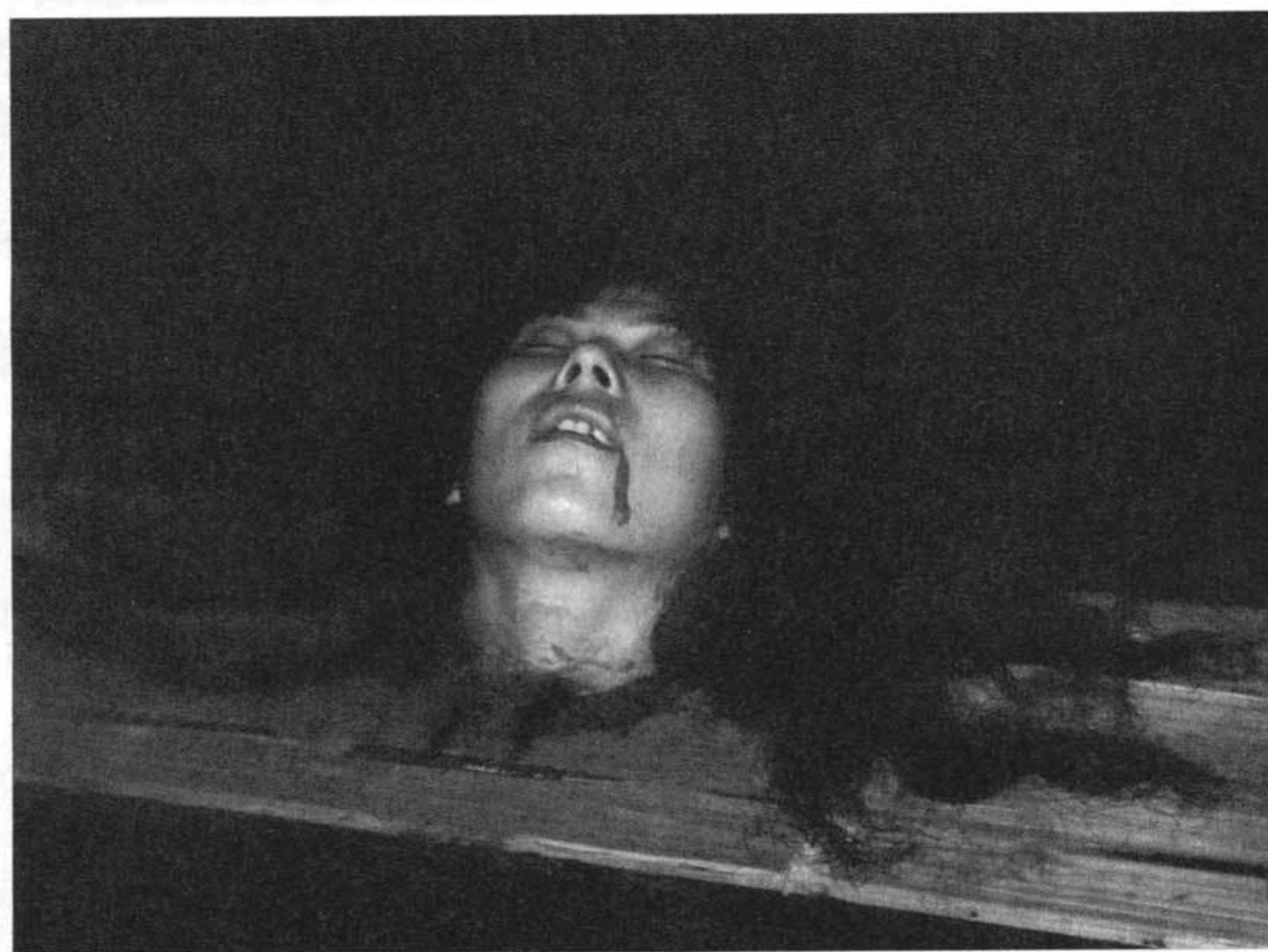
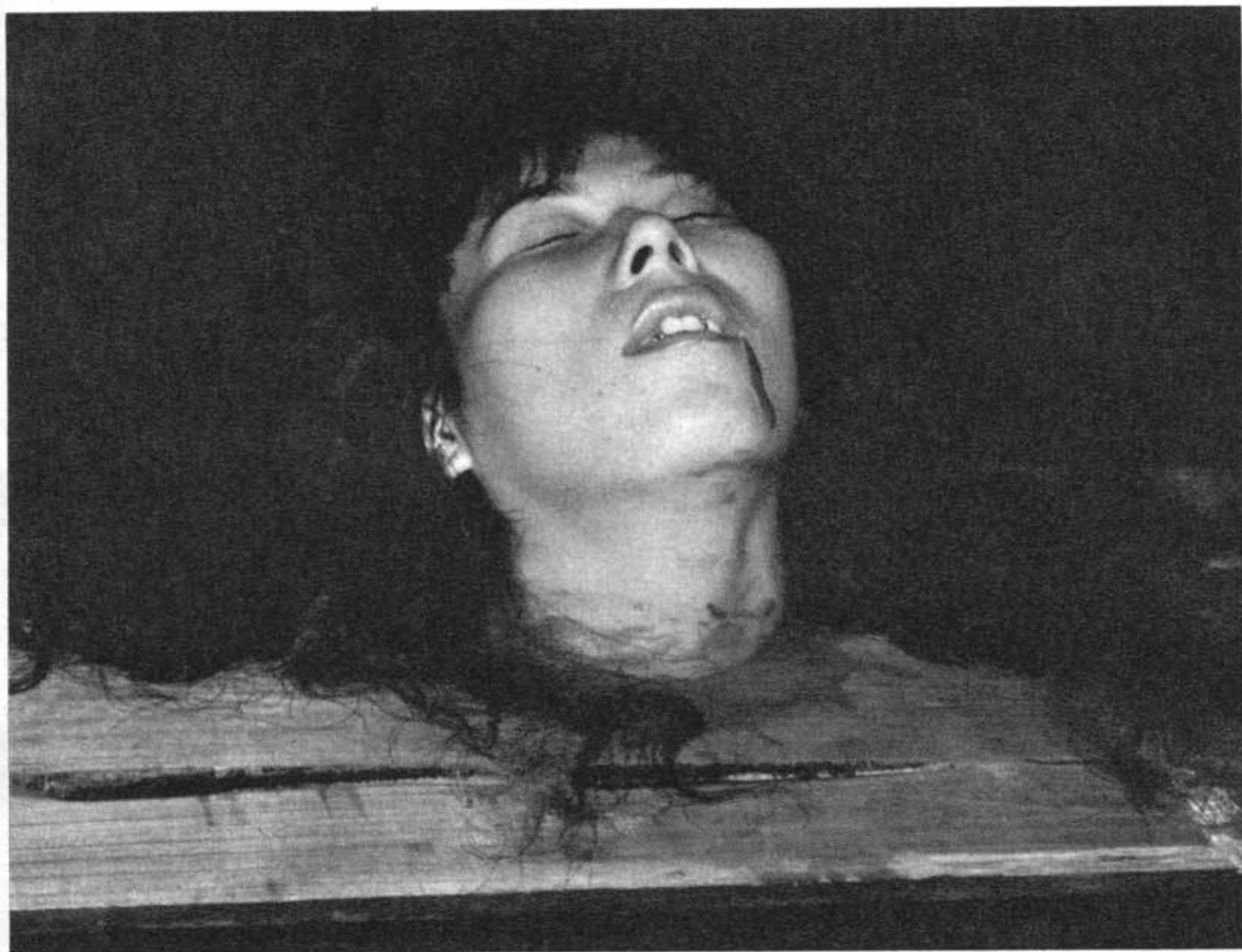












女囚30283号

四馬孝・画



美女と奴隷男

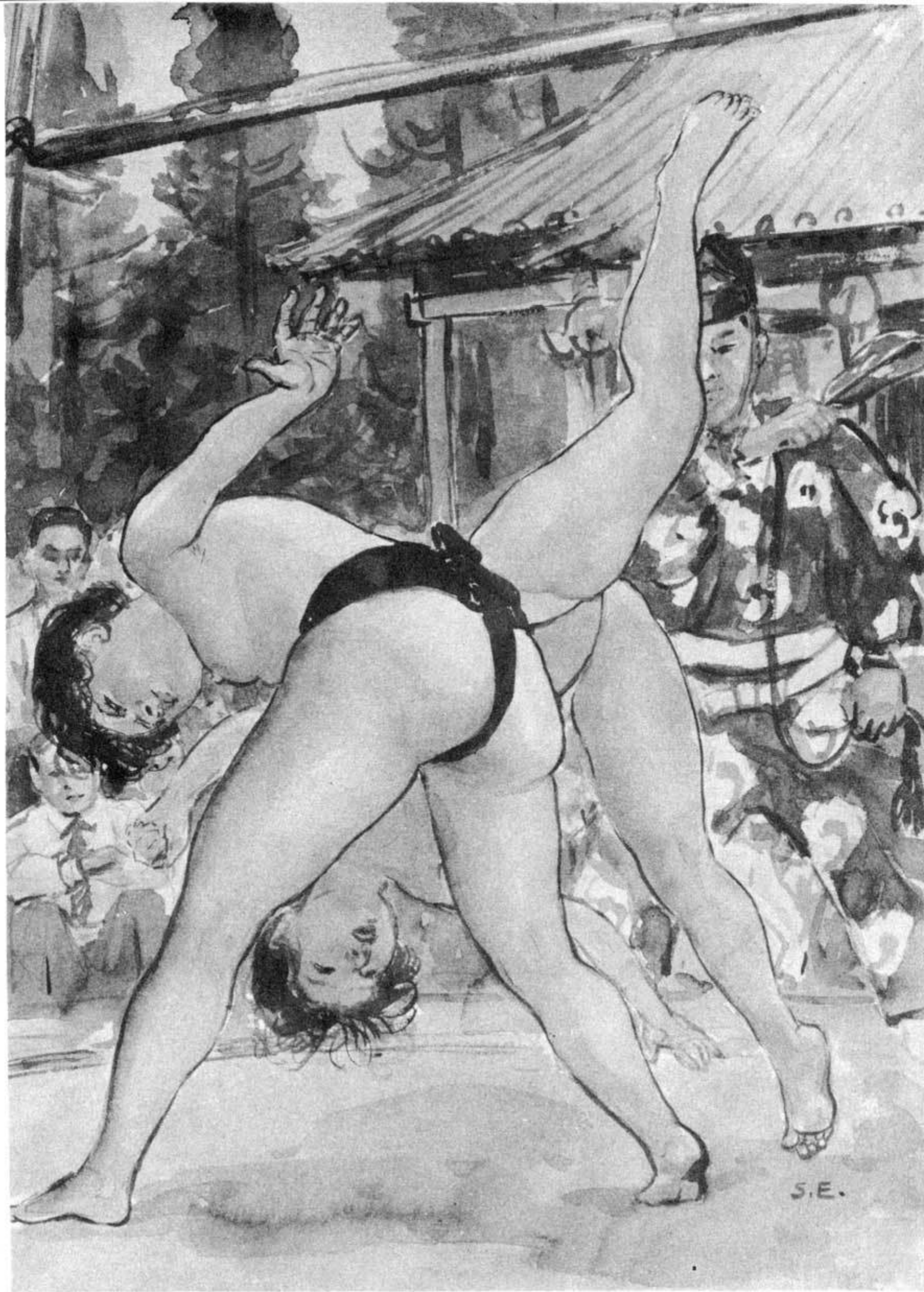
四馬孝・画



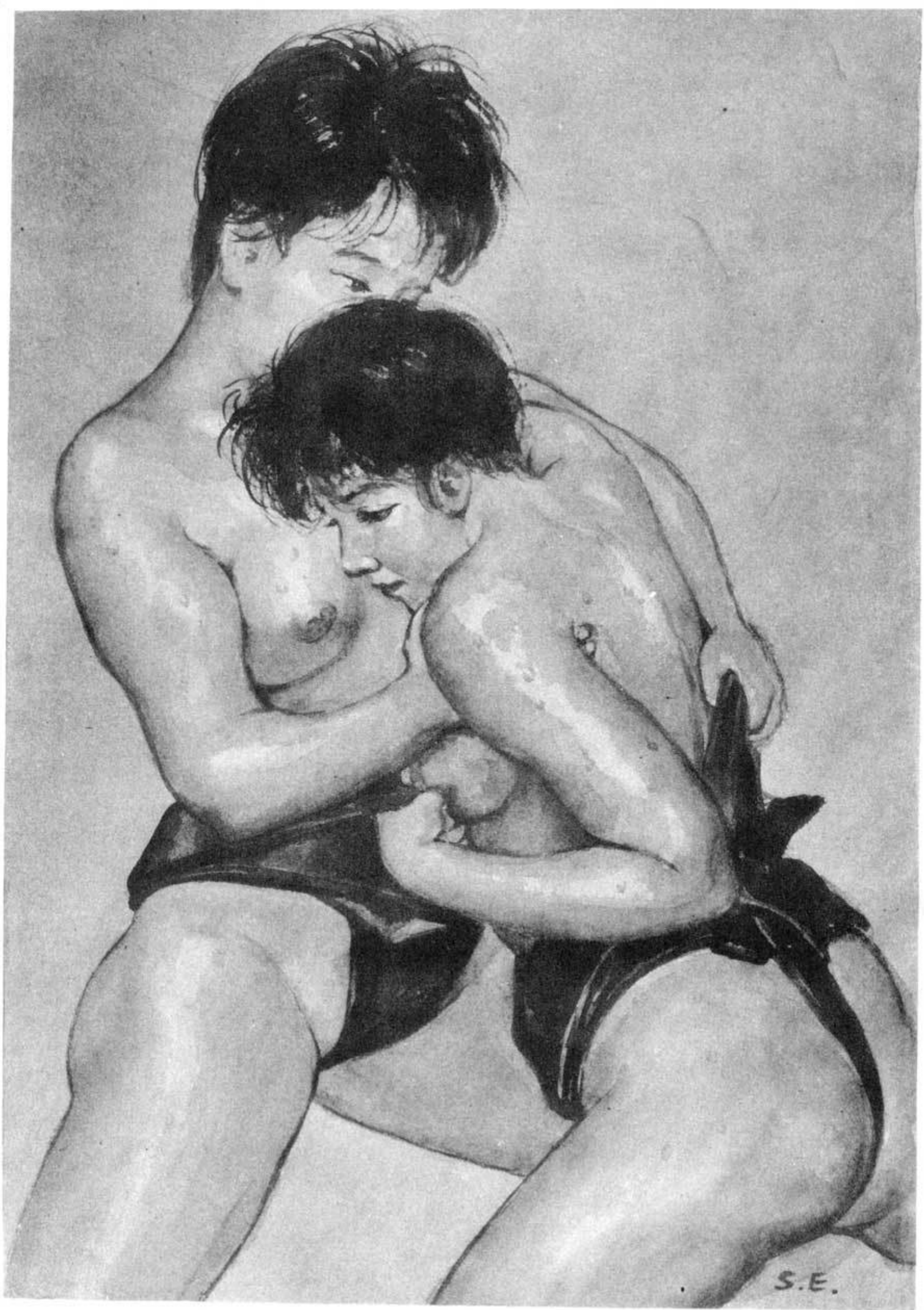
耽 溺

白 川 潤 ・ 画





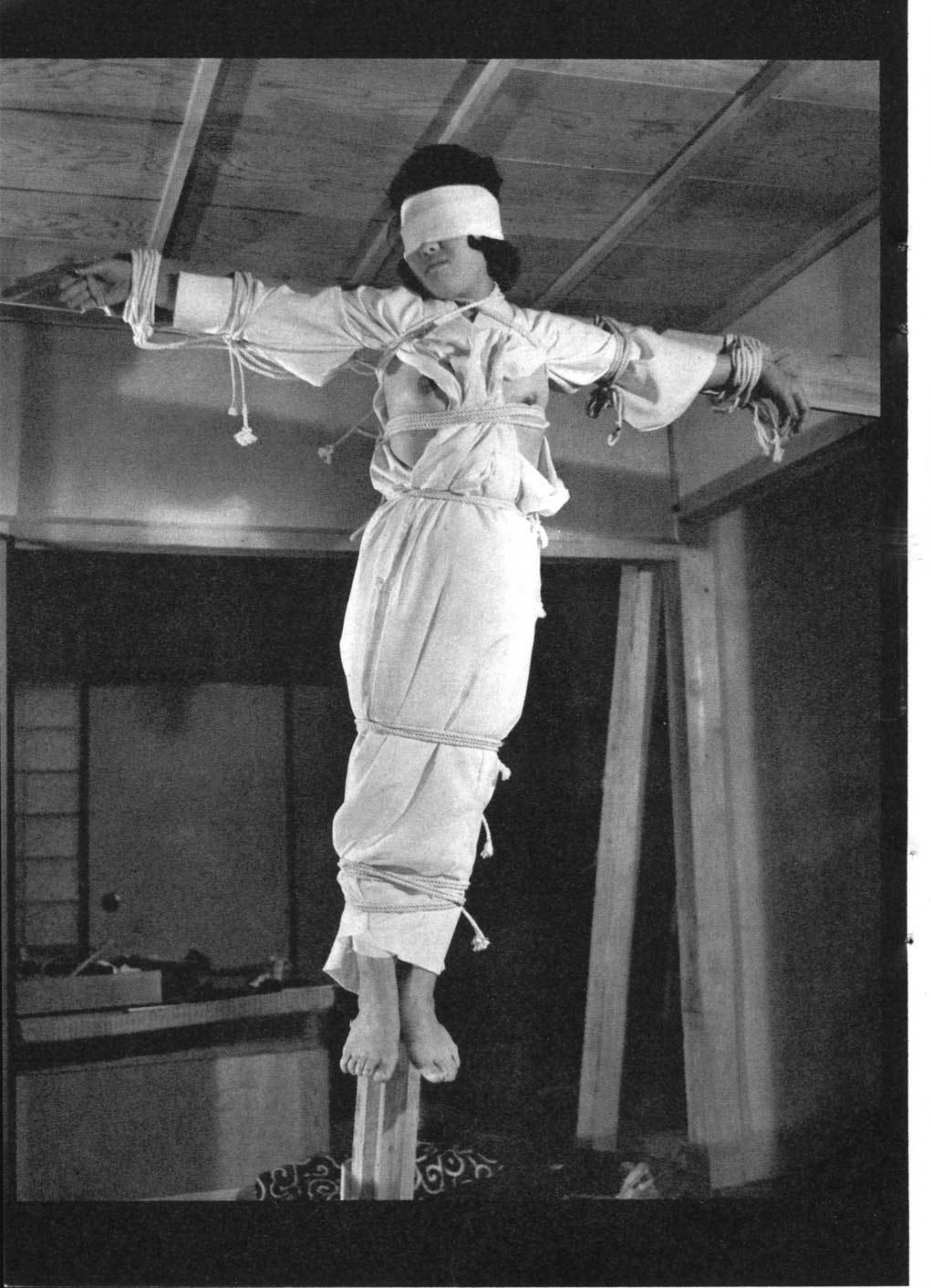
奉納娘相撲



激斗する二人の美女



落城美姫奮戦

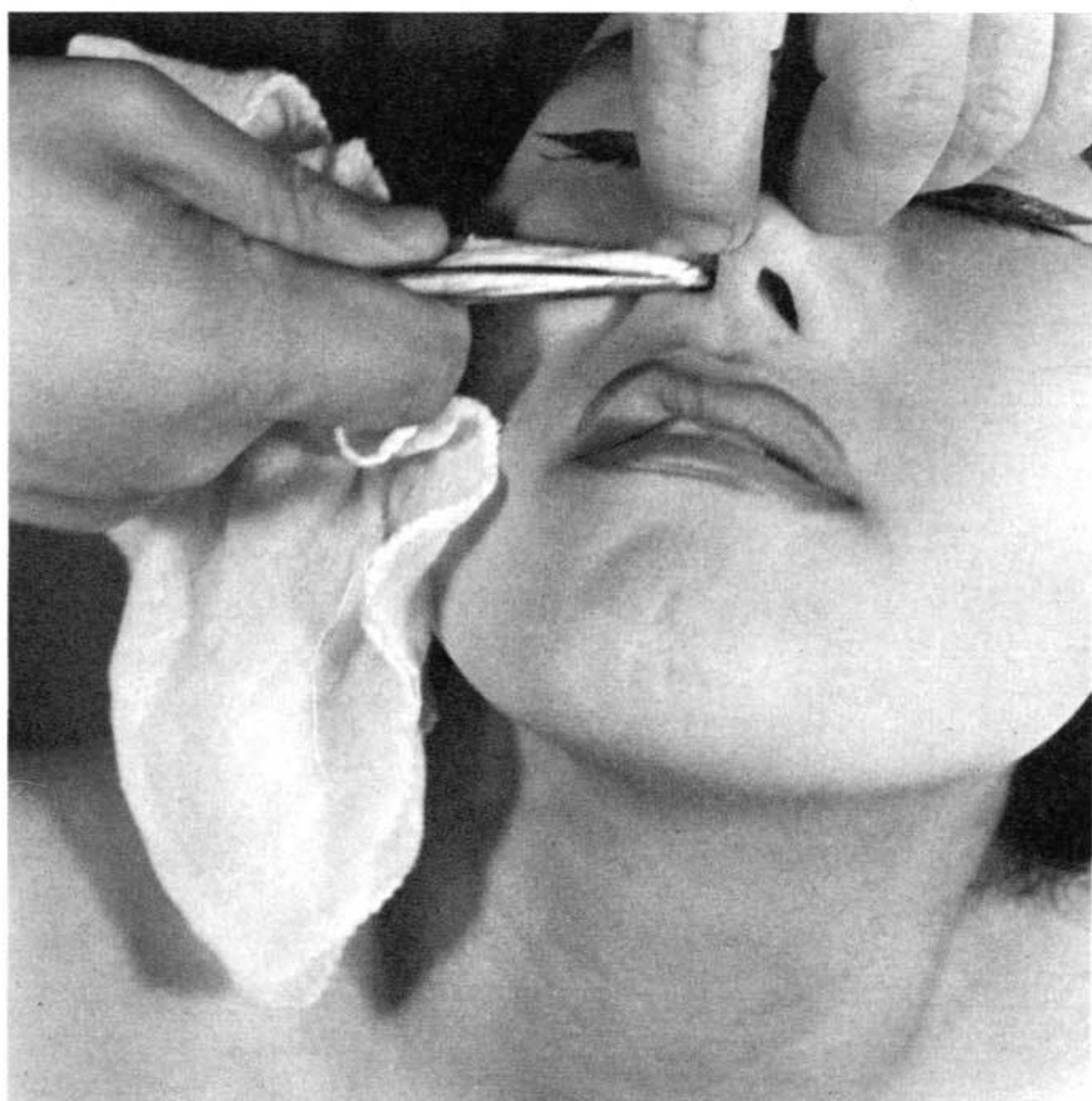
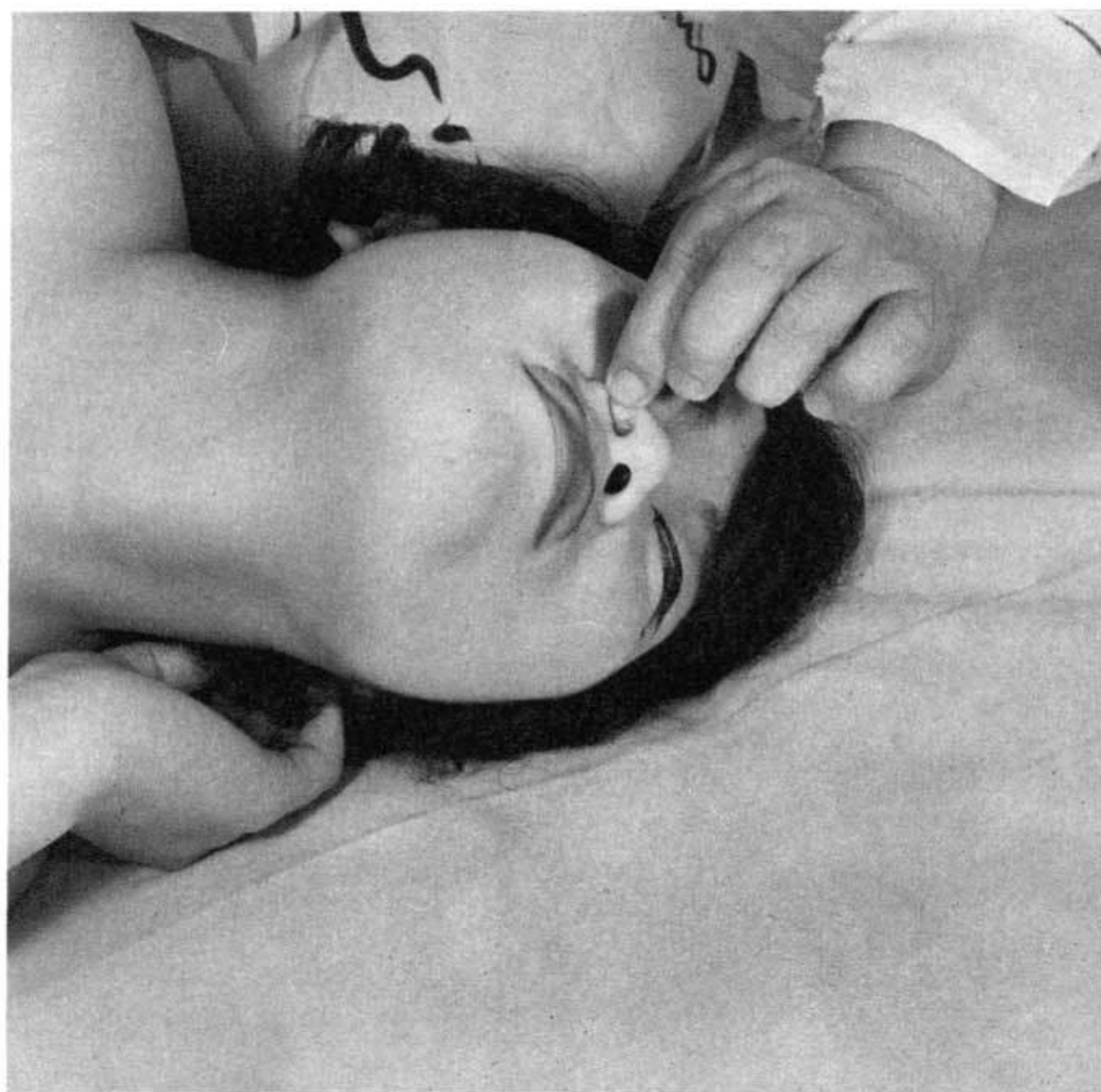


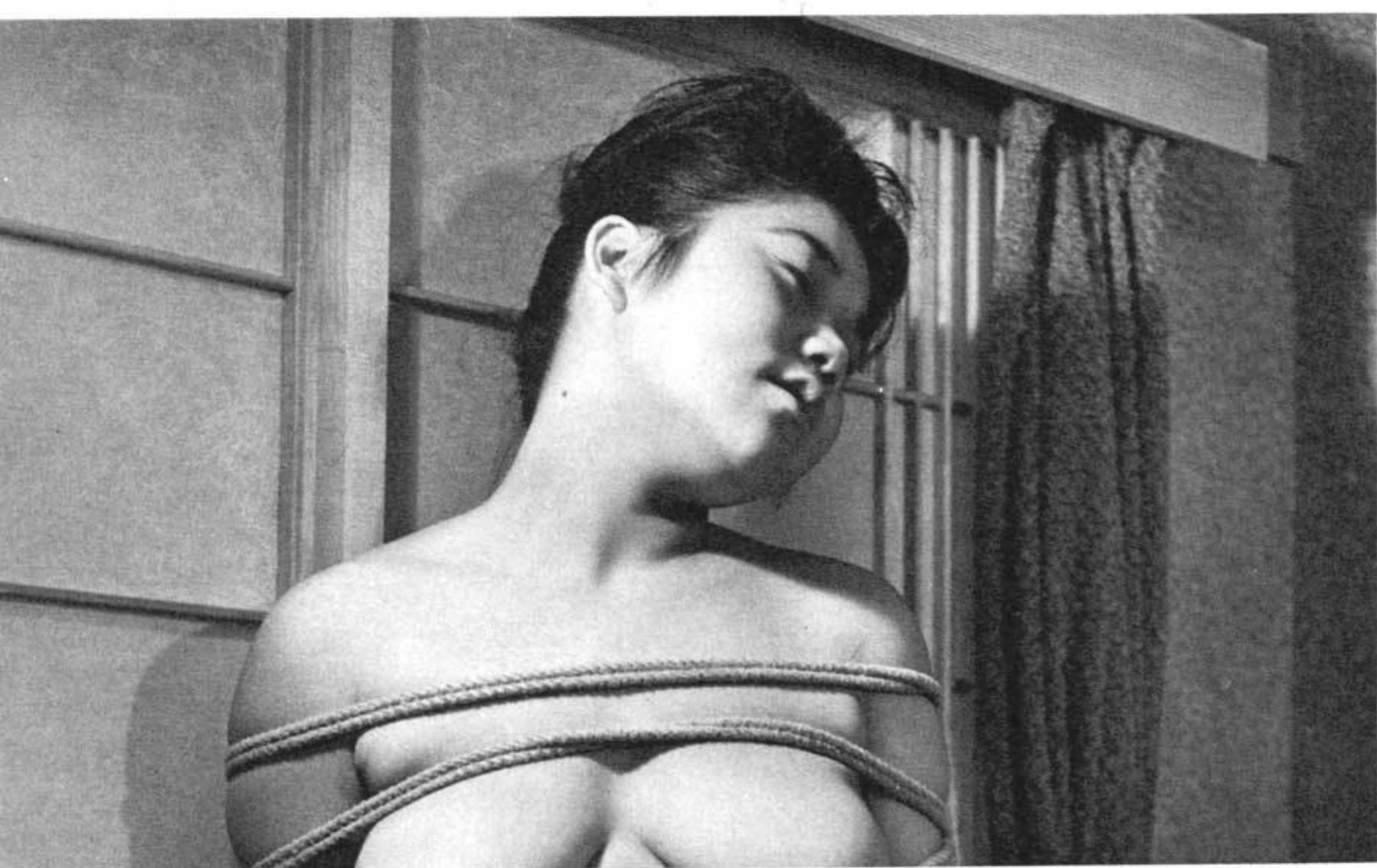


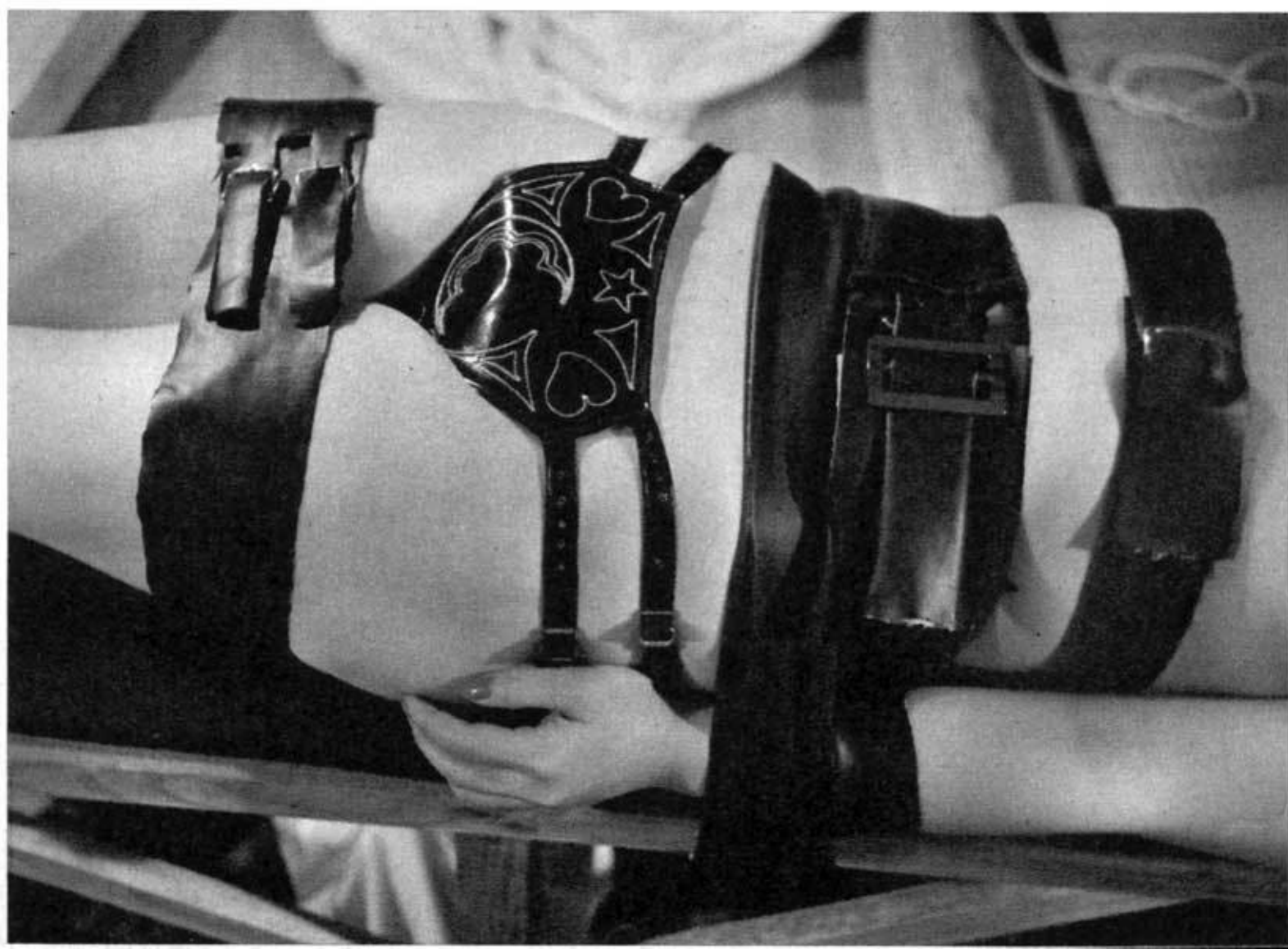














悪書追放運動の余波ならぬ正面波を真っ向から受けて、本誌も各地の書店から忌避されている実情ですが、その間、多くの読者の方から激励の手紙をたくさん頂きました。その一部は先月号の読者通信にも載せましたが、その殆どは殊更掲載しませんでした。しかしそのご厚意だけは誌上を以って厚くお礼申し上げます。

扱て、雑誌倫理協議会の申し合せ事項として、グラビヤ口絵写真には女体のお臍、お尻、乳房を露さないようにする事を決定しました。これは、十月十一日に規成申し合せした八表紙の構成について1、ヌード、ビキニスタイルは使わない。2、徒らに肉体部の露出を避ける。3、上半身（ヘソの上部から）のみに限るVに引続いて十一月下旬発売の新年号から実施

することになったものです。

これは、悪書呼ばわりされた雑誌を、悪書ならぬ雑誌にするための自粛行為で、最も注目され易い口絵のグラビヤ写真を、先ず改革してゆこうというものです。書店に並んだ新年号をべらべらとめくってみると、各誌ともこの申合せ事項をよく守って、苦心の編集をしていることが、よくうかがわれます。

この点、本誌新年号のグラビヤ写真で乳房を露出したものが若干あったことが指摘されましたが、これは自己反省の上、二月号からは、十分注意して編集することを

約しました。

どんなグラマー美人でも、乳房と臀部とお臍をかくしてしまったり、その威力は相当程度に減殺されるでしょうから、この申合せ事項は、悪書を追放する上に於て、まことに適当した条件だと思えます。この方針を、題目、挿絵、本文の内容にまで漸次及ぼしてゆくなら、この日本から青少年に悪影響を与えるかもしれない悪書なるものが姿を消してゆくでしょう。

如何に、その本や雑誌が大人の楽しみのために存在価値があったとしても、青少年に悪影響があるかもしれないとしたら、その出版物は排撃されなければならない。ということですから、面白い本を楽しまたい大人の方も、次代を担う大人になる現在の青少年のために辛抱しなければならぬ、ということになります。

そんなわけで、本誌も発行部数が減少し、収支が非常に困難な状態になってまいりましたが、引続いて毎月確実に発行してゆくため

にも、十分に内容の自粛を徹底すると共に、更に一層の充実をはかってゆきたいと思えます。

興味本位の目先筋はきつと離散してゆくことでしょうが、奇くを愛して下さる根強い支持層は、必ず確定票として残って下さることと確信いたします。発行部数はよし多くなるとも、少数派の支持のもとに、ささやかな歩みの歩みを続けてゆきたいと思えます。

少数派であるがために、更に迫害されるかもしれませんし、それに対して、一言半句の反論どころか弁解さえ示すことの出来ない力弱い存在かもしれませんが、二十年後、三十年後になっても価値のある文献誌としての真価を発揮するためにも、頑張ってゆくことが今まで永らくご愛読下さった皆さまに對する義務ではないかと考えます。

全国の書店の方々が、上部からの圧力や強制によるのではなくて本当に自発的に売って下さらないというのであれば、私達はいさぎよく、筆を折ってしまいたいと思います。除名されても、と訴える書店があるということは、一体何を物語っているのでしょうか。

おヘソとおシリとおチチ

編集子

「写真と絵画」

文献特集号

讀後感

△期待する二新人▽

藤村若葉

女体縛りの執念

塚本鉄三

三十八年十一月十五日発行の臨時増刊号を見て、私自身が感じた事を（あくまで私一人の）秋の夜長を友とし語らせていただきましよう。

さて、まず第一グラビヤ「自己愛の女神を写す」はサテンの縄が喰い入る肉体は、まず見事の一言につきまます。ただ顔自体にもう少しの工夫が（演出）があっても良かったのではないでしようか。

次の「後手縛りのワンカット」

「転がったエビ縛り女体」に於け

る大塚さん、相変らず豊満な肉体と柔軟性、まだまだ健在の感を深くさせてくれました。特に右頁上の、大きく吊り上った後手が良かった。

次の初めてお目にかかる新井マリ子さん。「棒責め愉悅」「ムチ打たれる肌」では「ムチ打たれる肌」の上の表情がよいし、「両手吊りの構成」では口に噛まされた猿轡が彼女の顔に良くマッチしていた。更に「台所のめしうど」、「飼育のヴァリエーション」「椅

子上に呻
めく」で
は白い体
に巻きつ
いた黒い
布と口に
嵌められ
た黒光り
する布？

が私を興奮させてくれました。一体あの黒い猿轡に使用された物は何なのですか?「椅子に呻めく」の上段のポーズと顔の表情がよかったが、下の方はもう一歩進んで

タバコらしき物を彼女の鼻の穴に入れてはしかった。後「女奴隷の飼育効果」「下着の散乱する中にて」「用意周到なる馴致」では、「女奴隷の飼育効果」が興味を魅いたが、黒ヒモの猿轡が少々ゆるんでいたのが残念です。

次にもう一度大塚さんに移りますが、多種多様のフオトが登場しているので私の気に入ったのだけを語らせて戴きます。

まず、「顔なふり、踏みつけ」「押しつぶし、足逆取り」では表情の良さが最初に私を魅きつけた。顔、背中、肩、足とあらゆる所を責められていながら半ばウツトリとした表情は、私の心の奥

七月はじめから撮りはじめた写真が臨時増刊号の「文献」として発売された十月中旬、折柄全国的に澎湃として燃え上った悪書追放運動の大嵐の中で、大海に浮かんだ木の葉のような存在の「文献」が哀れで仕方なかった。生れたばかりの赤ン坊がどのようなもまれ方をするかと思つと、私の撮影意欲は完全に喪失していた。

新人モデルを得て、これから脂ののりきった作品をとって、いた矢先だけに、出鼻を挫かれた打撃は大きかった。丁度、秋の良い気候で時期的にはよかったのだが、十月の一カ月は一回の撮影もなかった。

最初は只のお義理でカメラを向けていた「縛りフオート」の撮影であったのだが、次第に興味を覚え、今になって、一カ月のプランクにより、はじめて女体縛りから離れた淋しさが身にしみてわかった気がした。



深くまで魅了してしまいました。それから、「床柱縛りに耐える表情」「煙草一服の鑑賞」では、がんにがらめに縛り上げられ、更に口には、数条のロープが噛まされている。あの諦観のポーズがなんともいえない。猿轡の役目をするロープの非情さ！、私の心の琴線をゆさぶります。

「鼻腔測定」と、「鼻料理と鼻掃除」の二つの鼻責は、前者は縛りあり、後者は縛りなしのでしたが縛りなしに於ける鼻責の方がはるかによかった。「鼻料理と鼻掃除」に於ては、恥じらいを浮かべた手の位置が良かった。また、同じフオトの右頁上は、本を反対方向から見ると更に面白い。下のピンセットでの鼻責は、左右の鼻の穴の大きさが同じなので、いささか興味を欠く。とにかく、この四枚のフオト（鼻責）は私に興味を与えてくれた。

次に新人の五月亜紀子さんであるが、「軽い拒否と羞らい」「美しい諦観のポーズ」「恐怖と怨嗟の目ざなし」「組上の鯉と料理の仕方」いずれを取っても、初歩的な縛りであるが、彼女の品位ある姿態に、なんとなく合っている様な気がする。一度、彼女の美しい

顔を鼻責でいためつくしたいものである。五月さんの四枚のフオトを見ていると感ずるのだが、縛られるにしろ、猿轡を嵌められるにしろ、ただジツとなんの抵抗もなくしている様に思われて仕方がない。これは遠藤百合子さんにも通ずる様な気がする。

遠藤さんの「長襦袢と腰巻」、
「豊満への擦過」を見ていると静かに、またひっそり一人で楽しんでいられる様である。自分の縛られたポーズを自身でしみじみと味っているが如くである。新井マリ子さん、五月亜紀子さんらと共に、KK誌から去って行って貰いたくない被縛モデルである。

以前からのファンであった梨花悠紀子さんのフオトに移りたい。「海老責め二態」「厳重な本縄掛け」の緊縛。非情な猿轡。美人であるだけに痛ましい感を受けるが彼女の場合、どのフオトを見ても可愛いニンブ（妖精）を想い出させる。私の好きなタイプのモデルである。

さて最後にベテランの域に達した感のある絹川文代さんのフオトであるが、彼女は、この号に限って精彩がない。「鼻責のシーン点綴」の凄まじい鼻責六枚のフオト

は、美しい顔に加えられるだけに私の心を強く魅く。

ピンセット、こより、ガラス棒ハサミとありとあらゆる物で責めさいなまれている鼻。最初、本を手を取った時は、正直いってフルエました。私の希望は手の指を鼻の穴に捻じ込み、鼻の奥をまさぐっているフオトと鼻かがみで力いっぱい押しひろげられている鼻の穴です。

長々と拙い文を書きましたが、KK誌も以前からのと較べてみますと、構成もスマートになり見易くなりました。また色々な点が以前と変化しているのにも気付きました。その最も大きいのは、モデルに嵌める猿轡です。大きく口と鼻を包む東洋的な型の猿轡から歯と歯の間に卡ます西洋的な猿轡に変化してきています。東洋的猿轡にも西洋的猿轡にも一長一短があり、やはり双方を混ぜて使用するのが一番良いと思います。

夜具に入りながら、いきなり下書きもせず書いたので誤字や文法上の誤りもあると思いますが、ただ一生懸命マジメに書いた事だけは信じて下さい。この文がいつかの本に活字になることを期待しながらペンをおきます。

十一月になって、先の見通しもつき、大体の方針も確立したので、再び撮影を開始した。今になって思えば、発表するあてのない妊婦フオトなんて撮影しても仕方ないと、放置していたのは、まことに残念だった。これは、いつでも撮れるというものでないだけに、悔まれてならない。

しかし、本誌口絵グラビヤでは、内容が大幅に制限されるであらうから、折角撮影しても没になるものも多いことだろう。それに、従来撮影したものも掲載不能のものが沢山あることだろう。図のものと、その線に沿って考えてゆかねばならない。

今月号の大塚啓子さんをモデルとした「椅子逆エビしぼり」は、女体の臀部、乳房を隠蔽して（物で掩うというより、ポーズの工夫によって）いながら、強烈な縛りの効果を發揮するよう研究した苦心の作である。単にブラジャーとパンティを着けるといふ常套手法を用いなければ、たんに注目していただけたら、撮影者として幸いである。



体験記

屈辱の行進

葉村正一

制服の処女、なんと悩ましい言葉、健康にはちきれんばかりの肢体。ほころびかけた蕾の清純さ。澄んだ瞳には、どこか成熟の影を宿して三々五々と連れだって校門を出る女子高生達の群。

私は以前から女子高生を見る

と胸が躍ってしかたがなかった。

白いズックの靴の底をなめて掃除させて下さい。泥はねで汚れた純白のレインブーツの甲をおなめ致しましょう、と、その奴れいに

なることを希い、そのはずかしめを受けたいと希っていました。

と、ある日。市内ではどちらかというと、あまりよくない方に数えられている某高女の周囲をめぐる路が実に狭く、その路を登校、下校の女学生群が列をなして通り一般人の通行は殆どないという、この世の楽園を発見したのである。

私は彼女達のふべつを受けるべく考えたのが、今日ご紹介するマスクです。人はすれ違う時、

見るとすればやはり顔を見ます。その顔の下半部をゴムのマスクで覆うのです。ゴム、そうです。女子高生なら皆知っている。現にすれちがう私を見、マスクを見てゆく女学生の数人の者は、その同じ品物を恥らいながら、身体の奥にぴたりとあてている。メンスバンドの掛替ゴム、それを端のポタン穴に二つのゴム輪で耳にかけ紐を作り、マスクとしてあるのです。

程よいゴムの弾力と共に、あの生ゴム特有の臭いと肌ざわり、味これだけでも、かなりの興奮に値する上に、ゴム膜は熱い吐息にびっしょりと濡れ、弁状に動いて息を吸う時は、顔にはりついて息が出来ず、次第に息苦しくなると、興奮の階段を昇ります。

私はスクーターで通勤していましたが、今日はそちらに回って、その狭い人が横に四人でやっとなんという路地を並んで通る女学生達の群に向ってエンジン止めたスクーターを押しながら、一人一人可愛い女子高生の諸君がいうも恥しい衛生帯の替ゴムで鼻と口を覆って、息使いも荒く故障したのかスクーターを押してゆく白面の青年紳士をどう見るか、

思い切りふべつして貰いたいと思いつながら、そのかなり長い小路をはずかしい思いで胸もつまりそうに、息使いも荒く、時には立ち止まらざるを得ないはめにもなりつつ、通りました。

顔のマスクを取りたい。ほんとにそう思いました。でもそんなことをしたら、その時こそ、どんなひどい屈辱的行為を悪魔の様なもの一人の私が考え出すかを思った時、だまって相手の好奇とふべつの入りまじった視線のなぶりものになって立ちつくしているより他ありませんでした。

彼女達は少し行きすぎて必ず溜息とも聞える一種の声を発して通り過ぎてゆきました。

その声は、私の耳にはまるで嵐の様にげしく伝わりました。目は新たなご主人から、さげすみを受けていました。鼻はゴムの臭いを伝えてきます。呼吸は制限され苦しまぎれに口を覆うゴム膜を舌で押せば、ほろ苦いゴムの味がします。

私は狭い路地が終らぬうちに、激し終極の脈打ちを感じて、この輝やかしい屈辱の行進の感激を永久に忘れることの出来ないものにするのでした。

おこし雑考

野中 信敏

私は十一月号に掲載させていただいたネル地とネルのおこしに嗜好をもつ者です。私はその後色々とおこしについて調べて見たことを述べて、また私の夢について書いてみたいと思います。私はネルがおこしに使用され始めたのはいつごろからかと色々調べましたが中々分りませんでした。先日、古本屋で大正十年頃の婦人雑誌を見た所、下着の記事が書いてある所におこしの用布としてネル地が良ように書かれていました。私は考えますにネルが広く売られだした頃から、女の人がああ暖さと柔かさは、ことに注目して素肌に締めるのに適当なので、おこしに用いはじめたのだと思います。また大正時代の女学生は袴の下に桃色のネルのおこしを締めていたそうです。今から考えると大正、昭和初期にかけての町の風景は、実によい物であったでしょう。家々の

物干場には多くのネルやその他の布でできたお腰が乾されており、また道を歩いている女の人の裾からチロツとネルが見られるし、呉服店や百貨店の肌着売場には色々なおこしが売られていたことでしょう。ほんとにうらやましいことです。もし私がそんな時に生れていたら、今よりもっと多くのお腰が手に入り、また一度も洗っていない汚れたおこしの類も手軽に手に入ったかもしれない。そして私はそれらのお腰を心ゆくまで狂愛できたであらうでしょう。

おこしに用いる布には絹、メリヤス、モスそれにネルですが、その中ネルには平織と斜紋織があります。平織は固く締めて見ると肌によくまつわりつかずネル感が十分楽しめます。斜紋織の方は一般に良く起毛され布にいわゆる「腰」がなく、締めた時良く肌にまつわってネルの感触が十分味え

ます。女の人で真にネルの感触の好きな人は、多分斜紋織の方を好まれることでしょう。私はおこしという言葉を知り、すぐに桃色のネルのおこしが想像されるのです。

私の夢 私は現在二十三才ですが、まだ一度も女の人の肌に手を触れたことはないのです。多分ネルと同じような触感があるのでしょう。私はこんな空想をしているのです。私が呉服屋でネル地を買って外に出ると、色の白い二十八九の和服を着た女の人からさそわられてその家に行くと、その女の人には自分の締めていたネルのお腰を私にくれたりと、押入れの中から古いネルのお腰や肌襦袢を出して私にくれるのです。そして行李の下の方から桃色のネル地や赤色のネル地を出してきて、お腰や肌襦袢の作りかたをおしえて下さる

たり手伝わせたりさせてくれるのです。そして私にネルの肌着を着させて、彼女のおこしを洗たくさせてくれるのです。こんな女性に私はあこがれを持つのです。私はこの世からネル地がなくなることが一番さびしいのです。ああ、私の好きなネルのおこし、こんな私の変った気持ちを分ってくれる女性があつたらと思います。こうして書いている私は今古着屋でこっそりと買った長襦袢について先日、神戸の新聞地の商店でやっと見つけた桃色のネルのお腰を二枚も素肌につけています。そして体を動かすたびにあのなんともいえないネルの柔かい感触にひたりながら書きましました。他のおこし及びネル地のフェチシストの皆様、どしどし体験等を発表してください。奇くのご発展を祈ります。

(終)

奇クサロン
原稿募集

「奇クサロン」は、好評で毎月掲載してほしいという希望が、たくさん来ています。読者の方々の共通の広場という意味からも、またここに楽しい有意義なページだと思しますので、文章、

絵、写真、なんでも御投稿下さるようお待ちします。今後より一層充実した楽しくて面白い家族的なムードに包まれたセクションを皆様と一緒に作成してゆきましよう。



風 船 腹

についてなど

羽 村 京 子

最近の奇クでは、毎号浣腸記事が特に多いように思います。それも大量注入による腹部膨満にふれたものがだんだん増えたような気がします。わたしにとってはもちろぬうれしいことで、妊婦への関心に相まって、腹部フエチーナルシスというのでしょうか、「太鼓腹」「風船腹」「蛙腹」「西瓜腹」「臨月腹」などということばが、次つぎに頭にうかんでまいります。人間のお腹も風船と同じことで、空気を入れてぐんぐん膨らますことができるのだということ

大分旧聞に属しますが、昭和三十八年二月十三日の中部日本新聞の記事から拾ってみました。大変珍らしい事故ですが実際に起ったことで、まず全文をそのまま紹介しましょう。

「圧搾空気で思わぬ事故

腹ポンポンで重傷

橋げた塗装中後方から掃除機噴射

十二日午後三時五十分ごろ、名古屋市中川区清川町二ノ一、滝上工業会社名古屋支店作業場で、同支店下請けの三好組工員望月安治

さん（三八）が中村区大宮町二ノ二一が橋ゲタの塗装作業中、近くで他の橋ゲタを清掃していた同僚の工員A（一九）の持つ圧搾空気掃除機のホースの先が、誤って望月さんの腰部に向けられた。

このため七気圧の強い空気がズボンをとおして望月さんの肛門からはいり、腹部が大きくふくれ、倒れた。近くの掖済会病院で手当てしたが、望月さんはS字状結腸が約三センチさけ一カ月の重傷で空気が腹部から注射器で抜いた。

中川署で調べたところ、望月さんは高さ約一メートルの台上に五十センチ間隔で並んだ橋ゲタに、上体をまげ中腰で塗装作業をしようとして台をまたいださい、ホースの先がたまたま望月さんの肛門付近に向き、強い空気を吹きかけたものらしい。同署はAを業務上過失傷害の疑いで調べている。

この圧搾空気掃除機は、塗装後に鋼鉄にたまったゴミを吹きはらうもので、約六十メートルのホースの先に直径四センチの噴射口のある金具がつき、始動したら元のスイッチをきるまで、圧搾空気の噴射はとまらない。

三好組の話、現場には十数人の作業員がおり、ものすごい風圧な

ので気をつけてはいたが、いつものなれた作業なので、こんなことになるとは思わなかった。

掖済会病院熊沢医師の話「さけた結腸は縫合したが、珍しい事故だ。ズボン、パンツも破れないまま空気がはいったようだが、肛門がゆるむ姿勢で作業していたのだろう。動物実験でもしてみたいようなケースだ」

以上ですが、「動物実験でもしてみたいような」とお医者さんがいうようなケースが、実際に「人体実験」で起こったのですから、マニアには大変耳よりな話だと言えましょう。被害者の方にはまったくお気の毒という外はありませんけど。ちょうど蛙のおしりに麦わら突きさして、空気を吹きこんでふくらませるように、人間がまるで蛙みたいにくらまされてしまったわけです。この七気圧というものすごい噴射機をつかってわたし自身も蛙みたいにくらまされてしまったり、と想像してしまいます。人間だって、風船玉のように簡単にふくらむものなのですね。

しばらく前、週刊紙で読んだのですが、娼婦にたいするやくざのリンチの方法として、肛門に焼



た火箸を突っ込むという残酷なことが行なわれていると聞くが、こんな非人道的なことは一日も早くなくしたいものだ、とありました。そういう話がちよくちよく耳に入るとすれば、実際にもあることなのでしょう。ありかねないことだと思っています。

また太平洋戦争中、南方で日本軍が行なった残虐行為の中に、熱湯で浣腸する、というより熱湯を肛門から注入する、というのがあったそうです。これも同じような着想だといえないでしょうか。望月さんは背後に注意しなかったためにとんでもない災難に遭われたのですが、女性を背後から襲撃する、という点にこれらのリンチのと

くはサド的な性質があります。後ろから襲われる、あるいは後部を犯されるということが、臀部露出についての女性の特殊な感覚と相まって、とてもマゾヒスティックな印象をわたしに与えます。わたしについていえば、一・五メートルから二メートルぐらいもある大きな青大将を、肛門から体内に入りこませてみたい、という空想的アイディアを持ったことがあります。もちろん実行したら大変ですが、かりにズベ公グループのリンチとして、若い女の肛門にそんな大きな青大将を頭からおしこんだら、と想像してみるのです。蛇はウロコを立てて前進するので後進はできません。頭を先に首の

ところまで押しこめば、あとはスルスルと尻尾まで全部入ってしまったでしょう。そして苦しまぎれに腸を食いやぶって腹腔に出、腹部内臓をメチャメチャに食いちぎってしまいうちにちがいありません。かわいそうに彼女は、猛烈な苦しさにのたうちまわり、気狂いのようにもがきつづけて、数時間のうちに悶え死にするでしょう。狂い死にするでしょう。翌朝になって死体の腹を切り裂いてみるならば、腹腔一杯の血の海の中に、グチャグチャに破られちぎられた臓器の間に、白い腹を見せた太く長い蛇の死がいを見ることができるといいます。

さようなら

スケートの乙女

畔亭 数久

彼女は三才の年から父親に従ってスケートを始めて、今年十七才になる乙女だが、今ではスケート学校のコーチをやっている。両手足と両足首をリボンで結んだまま、彼女の妙技が氷上狭ましと繰りひろげられてゆく。固唾をのむ視線に見守られながら。

△告白▽

パンティに魅せられた男

花 上 良 海

私は幼少にして父と死別し母親の手一つで育てられた。そのせいか内向的で人前では何一つしゃべることができない程気が弱かった。

私の家の近くにK機械製作所の工場が建ってから、その工場の女子寮にされ、母は寮母として女子工員の面倒を見る事になった。終戦の翌年で、私を初め三人の子供の母として、女手一つでその日その日を生きてゆくのは、大変な時代だったのだ。

そんなわけで、私の家には十数人の若々しい乙女達が生活の苦しさを吹き飛ばすかのように明るく元気な毎日を過していた。

私はその時、中学の一年生だったが、性に目覚める頃というのか娘達が湯上りのほてった身体に黒いズロースに木綿のスリッパをつけた下着姿がまぶしく目にうつるようになっていた。

夏の暑い日の事、学校から帰ってきた私は、汗ばんだ下着を取り替えようと裸になって洗濯物を取り込んである裏庭の縁側に行くと自分達家族の洗濯物の横に、山のように積まれた工員達の洗濯物に目をやった時、ゴムのついた黒いパンティが目に入った。

何げなくはいいた時、暑くほてった身体にゴムのヒンヤリとした感じが快かった事を、何でもはつきり覚えていた。これが私が女性の下着に興味を持つようになった最初で、それから母の目を盗んでは女子工員のメンス・バンドやら黒いズロースをはいてみるようになった。

中学校を卒業すると叔父の紹介で板前の見習に行く事になったが行った先が伊豆の伊東温泉。なにしろ全市の六割が女性という女の街である。田舎の私には刺戟が

強すぎた。旅館、キャバレー、飲み屋、みやげ物店の女子寮が多く外に出れば、いやでも窓ぎわに下った洗濯物が目に入る。生活もよくやく安定してきた頃で下着類もだんだんと華やかになってきた。色とりどりのパンティ、ブラジャー、スリッパ、そしてメンス・バンドと、それらは強烈に私の官能をゆさぶった。

ある公休の日。映画を見ての帰り道、薄暗い路地で一見してそれと分る若い女に声をかけられ、小遣いに余裕のあった私は、一軒の小さな旅館につれ込まれた。

金を受取ると女は事務的に上衣をぬぎ始め下着姿になったが、日頃から憧れているパンティを實際に女が身につけて目の前に立っているのを見た私は、狂喜の声を上げそうになった。

女はパンティをぬぐと押入れから布団を出して敷き始めたが、そのすきに私は、女のぬいだパンティを手にとって鼻に押し当てて見た。香水の匂いと共にかすかに女性の体臭の匂がした。

帰る時には変な顔をするその女から、パンティを買い取って持ち帰り、小さな箱に納め毎日それをながめては楽しんでいた。

それからというものは、私の頭からパンティの事が離れず、悪い事とは思いつつ、バーやキャバレーの女子寮から一枚ずつ失敬して来たパンティが、現在三十二枚になっっている。

白、ピンク、黒、ブルー、黄など色とりどりのパンティが、きれいな箱に納められて、毎日私をなぐさめてくれるのです。

今ではパンティを眺めるだけではもの足りず、若い女性にパンティを使っとうんといじめられてみたいと思っています。

私が時々見る夢は、こんな夢なのです。

ブラジャーとパンティだけの若い娘さんに、じゅうたんの上で素裸にされ、まず最初荒縄で手を後手にしばり上げられ、始めにネットのメンスバンドをはかせて貰い次に白いナイロン・パンティ、次にピンクのフリルのついたパンティ、そして一番上に女学生のはくような黒いブルマーをはかせて貰います。

胸にはパットを入れたブラジャーをしめて貰い、その上からスリッパを着せて貰います。この時、縄は解いて貰わなければなりません。が、再び後手にしばり上げられ

てから、最後に汚れたメンスバンドを口に押し込んで猿ぐつわをして貰います。

こんなになされた私は全身を走る幸福感に、じゅうたんの上をころげ回る事でしよう。

読者投稿切腹画

「腰元の切腹」

投稿者名 失念

(御連絡願います)



滝れい子
描く、矢絰りの着物を着た腰元風の女を模して、腰元の切腹を描いた、という但書きがありました。一人は既に切腹し果てて仰向けになって絶命し、一人は今まさに下腹に突き立てたところ細いタツチでよく描けています。

偶感 十二月号を読んで

佐 渡 耕 作

悪書に奇クが指定され、一般書店から姿を消しました。このために奇クの内容を改めるような事はないで下さい。悪書という莫然とした批難は、いくら奇クが後退したところで消えるものではないのです。仮りに消えた時は奇クの本質を失っているでしょう。

奇クは決して、その本質を失うことなくあくまで美を追求し、その独自性を高めていくべきです。私達は出版の自由を憲法に保障された国に住んでいるのです。刑法の猥褻罪も奇クが独自の美追求をその本質に従ってなしていくならば問題はないでしょう。例えば梨花さんの名作「涕泣」「縄解かれたれど」「臍窩の愛嬌」「暗黒の麗人」その他逆さ吊りの作品にまた、四馬孝氏の傑作色刷の「麗畜の洗礼式」画集「被虐の白い花びら」「悦虐の部屋」「白ターバンの女」等どれ一つとして美がなく、猥褻といえるものがあるでしょうか。全て美しいものばかりです。

そしてこれが奇クの本質なので、処置に挫けることなく秀れた作品を発表して下さる事を望みます。

〔編集部よりお答え〕

言論出版の自由ということで、貴段と同じような読者の方々からのお便りを沢山頂きました。確かに憲法では、検閲はこれをしてはならないと明記されてはおりますが、今回の悪書追放運動は、小売販売部門を動かして(そのやり方については、新聞雑誌にいろいろ書いてありました)圧迫を加えようとすると、青少年保護条例に於けるように、指定を受けてから異議を申立てることができるとか、或は正式の裁判を請求するといった途もないものです。

従って私達は雑誌倫理協議会の自主規制によって編集し、その範囲内で皆様方のご期待に添うべく最大の努力を払う考えでありますから、何卒、書店へ予約注文下さるか、直接予約注文下さるようお願い致します。



読者体験記

PLAYの思い出

ささ木 十郎

分譲写真本日多数送付載き落手致しました。

絹川文代の絞首処刑は前々から希望していたもので誠に絶妙のものであって、ストーリーはともかく想像にまかせることとして、この様なドラマチックなものを多く製作していただきたいと考える。又、臨時増刊「文献」掲載のトカゲグループ「ズベ公天使」なども又同様――。

そして更に望むところは、前記へこうVについて首繩の掛け方がお粗末であり、せめて二巻き位にして腰がやや浮く程度につり下げでは、どうだろうか。

単なるモデルならば拒むこともあり得るが、演技モデルの絹川文代ならば、本人の望むところ？

脇腹を突きさす位置は血のりの表現の関係もあることながら、もう少し下の方がよくはないか。

瞬間の表情はよいが、全身的に一瞬けいれんの状態の表現が乏しいことが淋しい。少くとも脇腹を刺されたときの全身の表情は、写真に見る様な、なまやさしいものではない。モデル自身としても演技にもっと力を入れるべきではないでしょうか。

胸繩はカメラ位置の関係上、左乳房の方を上下巻とし、右乳房の

方をつぶし二巻とした方が緊縛としての迫力があります。

血のりはもう少し多量に使用して、荒むしろの上に落してもよいのではなからうか。絹川文代が唯一回刺されたのみで絶命するとは全く惜しい限りです。思いきり上体、下肢をあげばらせて、心ゆくまで死の道程を表現し、愛読者分譲写真として吾々の目を楽しませてほしい。

脇腹はせめて五寸以上刺さないで腹動脈に達しない、致命傷とはならないでしょう。

絶命後の横に置いてある抜身は腹部刺傷のものと刀身の長さが同

じだから、従って腹には刺さっていないことになります。ですから後者のものは、やや長身のものを使い、その先を血のりで汚すことです。

初めての御便りをしながら、大変悪口に及びましたが、私は昭和二十八年来、表紙がまだ白色の時代からの読者で、当時はトリックなしとの注記がしてあった川端多奈子の逆つり写真など、印象の一つとして残って居ります。

新宮明夫提供、愛読者夫婦のプレイ、そして「こう」等をミックスし、トカゲグループなども又、大中判各々十枚程度を本年度棹尾の分譲大作として、是非共企画をお願いします。

キクは私のテキストであって、現在には私の好む身近かのマゾ女性に恵れていません。かつては梨花悠紀子式の女性がいて、ふとしたことからマゾ・プレイが好きになり、自ら望んでストーリーを作成し道具さえも揃えて私の出現を待つこともしばしばでした。

私は勤務の都合で月に一、二回しか相手ができませんでしたが、それでも、彼女は徹底的に自分のストーリーによって演技を行って喜んでいました。

本誌のピンチに際して

此の頃は毎日のように、書店で姿を見ないが発行しているのか、どうかというお問合せが来ています。新年号にて発表しました通り、本誌は今後確実に発行いたします。

しかし書店の中で取扱わないところが非常に多くなっていますので、中々皆様の目に

つかない事と思います。それでも、まだ都会では扱っている書店を探して買うという方法もあるでしょうが、地方では中々入手困難だろうと思います。それで、直接発行所へお申込下さるか、予約して下さい。さるよう特にお願ひします。尚、書店へやかましく言うて

皆様へのお願い

それは、過去に於ける或る冬の日のことでした。
荒むしろを敷いた暖房のない洋室で、彼女はスパイ容疑で捕われた身を横たえていました。赤い赤巾の腰布一枚のみが僅かに与えられていただけで、荒縄で後手高手小手、胸に二巻き、その縄尻を取られて引き据えられています。
十九時の扇風機は全回転で冬の木枯しをかなでています。何回かの問答が私と彼女との間に交された末、振り上げた皮バンドのムチの音が数回、彼女の柔肌の上で鳴りひびきました。
遂に打首の処刑ときまった女は寒さと恐怖でおののいています。抜身の長刀が一閃。女の首すじ

を打った。女の身体は一瞬飛び上ってドスンと横に倒れた。まだ首は胸についている。そしてうめいている。テーブルの一輪挿しが倒れて黄いろいバラの花が床に落ちた。生きている。女は未だ生きている。
胸腹を思いきり、切る。突く。女は苦しい声を出して不自由な身体を最大限に動かしてもがく。半死半生の状態になって、演技はまだ続いている。
女は涙を流していた。苦しさか悲しさか、死に直面した哀愁か。それとも、このプレイの喜びか。それはわからない。いくら斬っても死なない女は、ローソク責めにする事になった。だが、ローソク

クがない。近所の店に求めに行かなければならない。さて、その間女はどうしておるか。致し方なく縄尻を柱へつなぎ、両足首を荒縄でしっかり結び、さるぐつわをかませ、荒むしろをかぶせて外へ出た。
求める店に大型ローソクがなく室へ戻ったときは、三十分近くも経っていた。女は死んだように動かなくなっている。一言二言呼びかけると、自ら上体を起してきたので、むしろを剥ぎ、一気に縄尻を取って引き起し、さるぐつわを取ると、ふーと大きな息を一つした。何かいいたいようだったが、何もいわなかった。
用意してあったビタミンアンプ

ルを二本飲ませて、次の行動に移った。女は早く殺して下さいと言いつた。再び荒むしろの中央に引き立てられた女は、二つ、三つ足蹴にされてころがった。
三本のローソクは一つに束ねられて点火された。ローソクは女の胸腹、太ももと、ところきらず流れた。足首は縛られ縄尻はとられていたので、断末魔のものがき思うにまかせない。
以上は、もちろん合意の演技でしたが、しかし、半ば本格的な所作にまで及んだのは確かでした。縄を解き、ローソクを落すのは大変でした。
彼女は翌朝、定時に会社に出勤したとのことでした。BG、二十才。身長一六七センチ、体重六〇キロ、野生的な肌の持主。髪は長髪。ローソクは瞬間熱いが、ヤケドはしませんと、彼女はいいました。

現在は二児の母親で貞淑な人妻として幸福に暮しているとのこと。その後、私との交際はありません。

「人間は誰でも人に知られたくない秘奥の領域を持っている」
私もその一員である。

(福岡市八ささ木十郎)



私の随想

マゾの発端と本誌のマゾ

若駒 仰

他にこんな性向の人間が居るとも知らず一人マゾに悩んでいた私自身非常に残念でならない。本誌を読み始めてから、すでに四年になるが、私自身のマゾ傾向というものは、それよりずっと以前に芽生えていた。

時は一九五二年、ヘルシンキ・オリンピックで日本がアマレスによって唯一の金メダルを獲得したその直後であった。期待された水泳はボゾン、或いはフォード、紺野に敗れ全敗の時、全く思いもよらなかったアマレスの金メダル獲得に国内は沸き立ち、国内全紙がこれをトップ記事にもって来た。そんな時、或る新聞で何処かのキヤバレーのショウか或いはストリップショウで行なわれていた女子レスラーの格闘が写真も大きく掲

載されていた。その内の一枚に相手の太股に首を絞められ、苦しがつてもがいている女の表情がアツプで捉えられていた。

この一葉の写真で私自身の潜在物であるマゾが抬頭して来たようだった。この写真を見て、身体中血が沸騰するかのように沸き返りしまいにはもがいている女を羨ましく思い、又出来るならこの女の身替りになって自分が苦しみたいというような気持になったまま飽かず三十分も、いやそれ以上もその一枚の写真に喰入って見ていた。

それから二年経った或る日、今は亡き兄の部屋で旧刊の本誌を発見、何気なく見たグラビアの一葉のフォト、これぞ今でも私の脳裡に焼きついて離れない「まぞひす

ちつく・ふおと」と銘打った「女に蹴られる男」と題された二葉の写真だ。前者はそれ程魅力を感じなかったが、後者はそのモデルの残忍な表情から非常に緊迫感を与え、ここでも又、男性モデルに替って私が……。等と私自身特有の夢想が始まったのである。このモデルこそ偉大なる女性サディスティンという形容がぴったりたる春日ルミ女史と小沼正三氏だったと思う。

その後、少々のブランクがあったが、馴染んでから四年ちよつとと言うところなのである。しかし白表紙の頃は写真の印刷は余りかんばんしくなく、仲々イメージが湧きにくかったのに反して、読者通信等では女性全盛だったようであ

る。特に昭和三十四年十一月号のM・A女史等は強烈な印象を受け今でも時々読み返す程である。

さて、ここで最近一年間の本誌掲載フォト等を顧みた時、何とも言えない淋しさを感じる。特に女性サディスティンのモデル諸嬢がマゾ傾向の方が強いという事が最大の難点のようである。サド女性として登場されている絹川、大塚両嬢共、マゾ女性として出ている以上、往年の春日嬢のような強烈な印象を与えては呉れない。やはりマゾ・サドは一本の線で仕切られるべき性格ではないだろうか。確かに両嬢共、そのポリシーは素晴らしく、縛られた時の写真になんとなく魅きつけられる事もあるが、それがそのまま主客転倒しての女性サドとするのは本誌としては、はなはだ本意なのではないだろうか。サド女性となった大塚嬢、或いは絹川嬢に表情の注文がつけ難くなり、不本意な写真を掲載する事になってしまいううである。彼女等にサドの「冴え」が足りないのも無理からぬところであらう。

この点で本誌の読者のマゾの方々に本来のサド女性出現を渴望している方も多いと思うのである。

連載異色責小説

遊蕩児の面目

土岐進



ダンス逆さ縛り

畔亭数久

小生の友人に真田という根っからの坊ちゃん育ちの男があったが、友人といっても小学校が同じだというだけで、彼は中学、高等学校、大学というコースを辿って卒業するなり父の経営する会社の重要なポストへ着いた幸運児だし小生の方は私立の鉄道学校を出て新聞の広告取りや保険の外交員、

化粧品店のセールスマンなどで、さんざん苦労した挙句、とどのつまり街頭のスナッフ写真屋から現在では、DPの下請の助手というではない小遣稼ぎに憂身をやつしている潜在失業者の一人というのだから余りにも境遇がかけ離れ過ぎていてお話にならない。それが偶然なこと、といっても

彼が車でわざわざ現像の依頼にきた写真機店ではったり顔を合せてしまったのだから、このDPの下請という商売も万更捨てたものでもないわけだ。二十何年ぶりといっても、やはり昔の俤は互に残っているものだ。やや暫く顔を見合わせた末、真田という名前を聞いてすっかり思い出した。彼は小生が写真の技術を持っていくというのを知って、アルバイトで手伝わないうかというのだ。早速待たせてあった彼の車を走らせて国道一号線を京都へと向った。加茂川沿いの瀟洒な料理屋の二階に落ち着いて、昼風呂に汗を流し夕食にまだ早い膳部に向ってビールを飲んでいると、まだ陽も高いというのに四人の芸妓が三つ指をついて入ってきた。

二階の窓から眺めた加茂の眺めうっとりとはる酔い機嫌の湯上りの雰囲気は、貧乏人の小生にとっでは生れて初めての経験だった。それに芸妓といっても洋髪に着物の二十才前後びちびちとした美人に取り囲まれて、いやはや竜宮城へでも来たような気分になせられてしまった。小生は彼とゆっくりいろいろの話をしたかったのだが、妓が来てからは、そうもいかず、それからは飲めや歌えやの乱痴騒さわぎで、陽が落ちてから更には二人の年増芸者も加わって、酒にいささか自信のある小生も、すっかり酔いつぶれてしまい、畳の上に仰向けに寝ころんだままでは知っていたが、それからあとは、もう白河夜舟の境地だった。急に咽喉が渴いて目がさめたら身体が埋まるような絹夜具に包まれて寝ている自分を発見した。それに驚いたことに傍には若い妓が緋の長繻絆姿で側寝しているのではないか。小生の目のさめたのを知った女はトイレへ案内してくれ冷たい水をコップに入れて持ってきてくれた。時計の針は〇時半を指していた。頭の奥底がズキンズキンと脈うつように痛んだが、目の方は妙に冴えて寝つかれなかった。

その翌朝、寝不足と二日酔いで寝呆眼で床を離れたが、真田の奴は朝飯も喰わずに自分で車を運転して大阪へ帰ったと聞かされて、矢張り金儲けのうまい男は小生のような貧乏人根性の者とは違っていてエネルギッシュだわいと感心している中に、風呂が沸いたというので真田には悪かったが、朝風呂としゃれこんだ。

(続く)

山田久仁子さんに

—切腹研究夜話—

中 康 弘 通

筆者は切腹の歴史、文芸、心理等について永年にわたり史資料を集め迷作も試みているので、本誌一月号に見えた山田久仁子さんのレポートには関心を魅かれた。

山田さんはこれが二回目か三回目の寄稿らしいが、前稿の記憶が薄れているので、若し以下に述べるところで、既に山田さんが先に説明しておられることがあればご容赦下さい。

また、山田さんのアドレスが調べられないので、公開質問の形式を執ったことの非礼をお許し願います。

むかし筆者が中学生であったころ、歴史の先生が、歴史上の事件には五つのWが含まれている。この五つの要素を説くことが、歴史を語ることである、とご教示下さった。その五つのWとは、

WHEN Ⅱ いつ

WHERE Ⅱ どこで

WHO Ⅱ だれが

WHAT Ⅱ どんなことを

WHY Ⅱ 何故

というのである。不遜なる中学生は、心ひそかに更に一つの要素をここに加えた。

HOW Ⅱ どんなふうに

そして爾来星霜あまた重ねた今日も、筆者が切腹の歴史、文芸、心理等について説述する際、頭に思い浮かべるのはこの六つの要素である。この公式に従って筆者は研究を進めて来たといつてよい。

いま、山田さんのレポートを拝見していると、ご本人も断わり書きをしておられるが、WHYの要素を欠くことが、このレポートの真実性を幾分か稀薄にしているのではなからうか。何はともあれ

うら若い女性の身でいくらか心通い合う同性の仲とはいえ、半ば裸身を幾人かの他人の眼に曝らしつつみずから切腹を模して見せることが、決してたやすいことではないのは、想像にかたくない。ましてやたとえ浅かろうと、実際に己が腹部を傷つけるといふことは大変なことである。なればこそ、なお意義深いのだと駁論されればそれまでであるが――

こうした異常な事実がもしあるとすれば、筆者の知っている某研究家もいうように、眼の辺りにその実景を見るなり、集会の終りに先立って撮られたという写真でも眼にするのでなければ何とも信じがたいような出来ごとではある。

ここにはサンプリング的に、最もエキサイトした集会の一例として、昭和三十七年十二月九日に、五人の女性によって持たれた集会の終始が報告されているけれども何としても、集い来たる女性の必然性を説明すべきWHYの要素が欠けているだけに、メンバーの多持性も、また一種実験の様相を呈し、またそれぞれに皮下脂肪が覗けるほどの軽からぬ傷をみずから与えながら、その手当、また治療経過などが明らかでないことは

更に真実性を稀薄ならしめている感が深い。

要するに、何故五人の女性が切腹にこれほど深い関心を持つに至ったのか、如何にして集い寄るに至ったのか、が明らかでないことがレポートの基礎を浅くしてしまつたことは惜しまれてならない。しかしまた、何にしてもこれが事実とすればいふん思い切つたことをする人たちがあつたもので、身体髪膚コレヲ父母ニ享ク、敢テ毀傷セザルハ孝ノ始メナリといったような時代感覚は余りにも遠くなりすぎたのであろうか。思えば戦時中のこととして筆者が聞かされた話に、若い女子軍属が、たまに切腹に深い関心を持ち、万一のときはこの方法でと心に決めて幾度か手習ううち、一日、誤って本当に真刀を腹に突き刺してしまい、今はこれまでと一下士官に介錯を請うて、世を去つたというから、遊びとはいいいさ、よほど慎重でなければならぬだろう。

こうした遊びが、レポートとして読んだとき、他の一連の残酷遊びと本質的に異なるのは、やはり往時切腹が武士道精神の支柱であつたという歴史的背景を持つていた故に、一つの儀式的厳肅感と悲愴



(一月号で掲載が間に合いませんでしたので、読者通信として、添付された前川成雄氏の通信だけを載せました。△二〇二頁▽)

首級を挙げる禪裸女二題

前川 成雄

美を以って裝飾されている。ただその一事に尽きるのであるか。この辺にこそ、山田さんのご意見

を伺いたいものである。また、このグループの人たちは、たとえば終戦時、身を護る唯一の手段とし

て、あるいは敗戦の現実悲憤して、壮烈悲痛な切腹を遂げた十六、七才から二十一、二才の娘さ

んたちの、心事と行為を、どうお感じになるかは是非承りたいものである。



いずれも黒または赤の禪一本というあられもない姿の年若い裸女が白刃をもって登場します。血みどろな凄惨図の中に一脈の妖美を見出すべく、女の生首、それも切りとられたばかりの血まみれの生首をモチーフとして選んだものと思われまふ。筆者と同様に、マニヤの方々からの、この種の絵画に対するご批評を頂けることをお待ちしております。先月号の「読者通信」をご参考として下さい。



告白

ある

耽
美
男

の
生
涯

水上流太郎

たった一人の異性の友だち、花ちゃん。二人でござの中でくるまっていた幼い日の夢のような思い出が、薄れた忘却の記憶の中かすんでいる。

大正頃ののんびりした露路の奥で、そしてあの暗いなつかしい雨戸を閉じた二階で、小さな王様と小さな女奴隷とがいた。彼女はよく泣いた。泣きながら王様に哀願した。涙に濡れた可愛い、その顔、そこで王様がいった。
「お前のお母さんのオコシを持つ

てこい、そしたら遊んでやる」
皆が彼の事をボンといった。彼はその呼称に常に反発を感じていた。それは女郎屋とカフェーを経営していた父への尊敬であった。拝金的な権力への呼称だった。十六才。彼には遊廓が何をするとおろそかによく解らなかつた。ただ美しい多くの姐さん達が、美しい看物や派手な長襦袢姿でぞろぞろしていた。
それは全く不思議で奇怪な世界であった。その周辺には二階建て

は珍らしくなかつた。三階建てもあり洋館もあった。そしてそのどこにも十数人の美しい日本髪のお姐さん達が住んでいた。

女達は時折り表の廊下へ出て手すり格子によりかかって道行く男達をつかまえて呼んだり話したりしていた。

夕陽を浴びて美しい着物をきた彼女たちの色どりあざやかな姿は彼には浦島太郎が行ったという竜宮を思い出させた。乙姫様はきつと彼女達のように美しかったのだらうと考えていた。

一枚の露にぬれた窓ガラスに朦朧と映った数人の女達の肢体。豊満に輝くような白さの肌が想像された。彼女たちの入浴の姿であった。腕を磨くもの、足を磨くもの背中を流すもの、胸を顔を、思い思いに精魂こめて洗っている。
もやもやした薄暗い白煙の中で妖しく蠢動する女体は、まるで速度のない幻灯のように、豊満なしむらをスローモーな動きをしていった。

彼女たちが湯から出て腰巻や長襦袢をつける風景は、さして珍らしくはなかつた。

その頃の誰もが同なように、彼も学業の勉強が嫌いな学生だっ

た。そのかわりに冒険や探検の物語が好きだった。吉川英治の「神州天馬俠」、高垣眸の「豹の眼」等は愛読おかなかった。それから赤表紙の世界大衆文学は、彼の座右の法典だった。

彼は余り光りのささない三帖の小部屋の丸窓の下に机を置いて、そんな本をうつらうつらと読んでいた。その丸窓を開けると、隣接した三階建ての遊女屋の窓が咫尺のところに見えた。

そこに一人の遊女が住んでいるらしく、時々窓の手すりに、その女がよりかかっているのが眺められた。ある時は半開きの彼方の窓障子のスミから華麗な夜具の裾端が見えたり、赤塗りの化粧台の前で花模様長の襦袢姿で化粧している後姿がよく眺められた。

視野を変えると、柱にかかった長襦袢や腰巻も見えたり、余り上等とは思えない簞笥が見え、その上に振袖をつけた市松人形がのっているのが眺められた。

だが、彼女の部屋をその視点から眺める事は可成り顎が痛いし、苦痛だったが、例えば昼寝している彼女の顔などは、その角度からでないとは見えなかつた。

(おわり)

サジスチック・ストーリー・シリーズ

尾^び行^{こう}の果^{はて}

大 中 忠

新緑の美しい公園。きらめく緑の輝きを映していたベンチも、太陽が西に傾き、肌寒さが公園全体を被うようになると、座る人もなく、ひっそりと淋しげに見える。公園の中にはもう殆ど人影はない。人目につかない木影に、自分達だけの世界に浸るアベックが、一組、二組と見えるだけ。

その静寂を破ったのは一人の女性の靴音だった。体にぴったり合ったスーツが美しい曲線を露わにしていた。彼女はベンチに寄ると何を思ったか、すっと腰を下ろした。そのまま何をするでもなく、唯、辺りを何気ない風

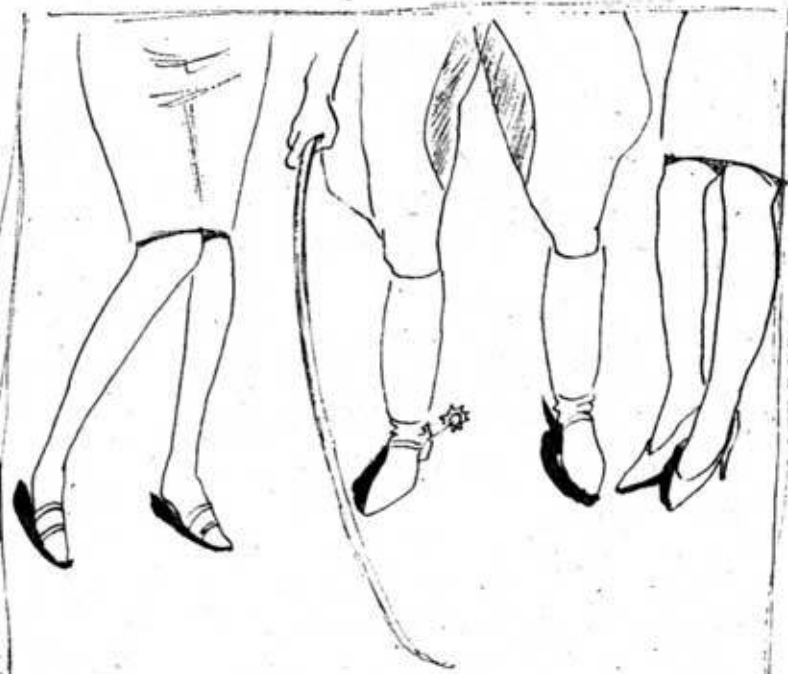
で、しかし鋭い目付きで見回わした。何も動くものはない。人の気配など勿論ない。充分にそれを確かめると、女はベンチの下に身をかがめ、四角な紙包みを取り上げると、素早くハンドバッグに押し込み立ち上った。ふたたび注意深く辺りを見回わす、ハイヒールのかかとを踏みつけるように足早に歩き出した。今迄歩いて来た時のスマートな足取りとは全く違っている。少しでも早くこの場を離れたい、出来ることなら走り出したい、そんな様子だ。時々落着かない様に後をふり返りその度に足元がふらつく。百米、二百米そし

て五分、十分と過ぎて行く。街の雑踏が辺りを包むようになると、彼女はやっと歩調をゆるめた。それでも時々そっと後をふり返る。繁華街を過ぎて住宅地帯に入ると、もう彼女は落着いた足取りで一軒離れた大きな家に入ってしまった。旧式な洋館だ。傾斜の急な青い屋根、青々とした蔦が古びた壁にとりついていて。色褪せた瓦、黒ずんだ壁、まわりの近代的な明るい住宅とはそぐわないが、それだけに一種の風格を持っていた。

彼女が家に姿を消してから間もなく、何処からあらわれたのか、一人の青年が辺りを注

意深く見回してから続いて門を潜った。

青年は青木、私立探偵だ。あの女性が公園に入ってきた時から、ずっと目を離していない。あれ程迄に注意深く歩いていた女性だが青木の巧妙な尾行には、ついに気付かなかった



れが犯人の条件だった。その依頼人は、それを実行した。しかし、娘は帰って来なかった。そこで、私立探偵をやとって、なんとか娘を救い出そうとしたのだ。だから犯人をつきとめること、娘をとり戻すこと。そして出

長年の経験で培われたカンを大事にした。そして又、それがめったにはずれたことがなかったのだ。

今も、彼はそのカンを頼りに玄関のドアをそっと開けた。恐らく先程の女性は、もうす



っかり安心して仲間と一緒に居るか、誘拐して来た娘の所に居るだろう。その警戒心の空白を狙うのだ。青木はポケットの拳銃をにぎりしめると大またに薄暗い家の中に一步ふみ込んだ。その瞬間、彼は自分のカンが女性相手では大きく狂うこと、そして、今最悪の状態になった事を悟りながら気が遠くなった。もろくもくずれ落ちる青木の姿を見ながら、ドアの蔭の女は手にした拳銃をもち直した。

たようだ。

青木はある依頼人から一人の人間の生命を預っているのだ。その依頼人の、十五になる娘が、学校からの帰りに誘拐されたのだ。三十万円の身代金と警察に知らせないこと、こ

来るなら、三十万円をとり返すことも、青木一人の肩にかかっているのだ。だが青木は自信があった。今迄相当凶悪な男を相手にしたが一度も敗れたことがないし、特に尾行には絶対の自信があった。それに何よりも、彼は

透明ガラスを通して冬の陽が温かく、室内にさし込んで来る。小学校五・六年の少年と少女が一冊の本に頭を寄せ合っている。「この人可哀そうね」

「後できっと助けられるよ」

「だけど痛いでしょうね。こんな恰好で縛られるなんて」

「こんなのまだましだよ。もっとすごい見たもん」

「あら、どんなの」

少女の目は本から少年に移った。

「裸にされちゃって、上から吊るされたり、鞭で打たれたりするんだよ」

「本当。どんな気持ちかしら、こんなに縛られるの」

少女はセーターに包まれた両手を後にまわしてみた。

「縛ってやろうか」

「ええ」

「それぬいだら」

「そうね」

少女はセーターをぬぐと、一寸考えたが驚く少年の前に下着一枚の姿になった。

「だって、本当に縛られてみたいもの」

少女はむき出しの細い腕を後にまわした。

少年は少女の素肌にふれるのが恐ろしいように後手に縛り上げた。まだ平たいが、柔らかい胸にも縄はからみつき、またたく間に被縛の若い肢体が出現した。幼い頃は少年と少女

の体に大した変りはない。肌は柔らかく肌理が細かい。少年は冬の陽だまりで縛られている少女と自分を置きかえてみた。どちらにしても、彼等にとって素肌を受ける縄目の刺激は鋭かった。動かない両腕、むき出しのもも……。

青木は痛む頭をふりながらも意識を取り戻そうと努力した。倒れる時、目の片隅に白い女の脚が入ったが……しまった。気がついた青木は自分が全く無残な姿にされているのに愕然となった。彼はパンツ一枚の姿にされた上、部屋の中央の椅子に後手に縛りつけられているのだ。そして彼の前には三人の若い女性。夫々頬に笑みを浮かべて立っていた。その一人には見覚えがあった。彼が尾けて来た女性だ。彼女と、小柄な一人はショーツから豊かな脚をむき出しにし、ポロシャツのようなもので胸のふくらみを強調していた。もう一人の大柄な女性は乗馬姿で手に鞭を持っていた。

「気がついたね、探偵さん」

乗馬姿の女性が近付いた。

「どうしようというのだ」

彼は自信を持っている尾行が失敗したことと、こんなに浅ましい姿にされたことに反抗

するようにいった。

「えらそうにするんじゃないよ」

いきなり、彼の左頬が鳴り、彼はのけぞった。その反動で椅子が倒れたら、椅子の背を抱くように縛られている彼の腕は折れてしまった。一瞬胆を冷やしたが、椅子は微動だにしなかった。床にしっかりと留められてあるのだ。

「あれを見てごらん」

女は鞭で彼の右斜前を示した。今迄かかってあったカーテンが引かれると、隣の部屋が硝子越しに丸見えだ、その中に、一人の女学生が、両手を挙げた姿で縛られていた。

「あっ」

むき出しの彼のものに鞭が鳴り、色白の肌に赤い筋が走った。

「お探しの嬢さんさ。静かにしないとあの娘が無事に帰れないようになるよ」

青木は唇を噛んだ。こうなったら、面子にかけてもあの娘だけは取り返さなければ。

「三十万頂いたのだから返してやっても良いのだが、それでは面白くないから、一つ我慢比べをしてみないか」

「我慢比べ？」

「そうさ、これから十時間、私達でお前を責

めるから、参ったといわなければ、二人共無事に返す。勿論殺しはしないさ。その代り降参したら、あの娘は返さないよ。もう三十万位頂くからね」

「よし、良いだろう」

「あの娘を連れといて」

「何するんだ」

「見せるんだよ。そしてもしお前が抵抗したりしたら、あの娘の身体に、それがふりかかるのだからね」

青木は縄を解かれ、改めて前手縛りにされた。その気になれば女三人位軽くやつつけられる青木だが、人質をとられていては手も足も出せない。青木は両手を高々と吊られた。爪先でやっと立てる位だ。腋腹の筋が引きつれるようだ。きたえられた体だが筋骨隆々という程ではない。肌理の細い色白の肌。一杯に伸ばされた腕だけがたくましさを示しているようだった。やがて彼の正面にあの女学生がつれて来られ、柱に後手に縛りつけられた。脚も揃えて縛られている。猿轡が顔半分をおおっているので表情は判らないが、悲しみと驚きに見開かれた目は美しい。少女の横に小柄の女が立った。

「行くよ」

乗馬服の女が後で声を掛けると青木のむき出しの背中に焼けるような痛みが走った。

「むっ」

青木はのけぞりながら痛みを耐える。爪先を中心に体がぐるっとまわり、手首に縄が喰い込む。白く巾広い背中に赤い筋が走った。

「それ／＼」

「むっ」

素肌にふり下ろされる鞭は、女の力とは思えない程の強さを持っていた。

青木は幾度か悲鳴を上げそうになった。手首に喰い込む縄目は骨迄締めつけるし、背中はもう燃えるようだ。打ち手が代ると鞭の当り方も自然変る。一カ所に鋭い痛みを与える鞭、鞭巾一杯に叩きつけるような打ち方、力も技も変っていたが、青木にとってはもうどのような打ち方でも耐え難い苦痛だ。こんな苦しみを受ける位なら、もう、降参してしまおうかと思ひさえたが、腕の立つ私立探偵としてのプライドが辛うじてそれを支えていた。背中はまだ一面に赤く、痛々しく脹れ上っていたし、水でもかぶったように汗でぬれ目の前が暗くなり、もう駄目かと思った時、鞭の嵐は止み、縄が解かれて、青木は床に崩折れた。

腰を襲った鞭の為にパンツは引き裂かれ、彼はもう裸も同然だった。彼は床にうつ伏し荒い息をくり返した。赤く脹れ上った巾広い背中が激しく動く。女学生は責めが始った時から目をしっかりと閉じていたが、両手を後手に縛られていては耳をふさぐことは出来ない。嫌でも激しい鞭音と荒々しい息、押し殺した悲鳴が耳に入り、閉じた瞼の裏に高々と吊られて責められている青木の姿がありありと写る。思わず悲鳴を上げようとしたが、小さい口を割って嚙まされた猿轡がそれを阻んだ。

鞭音が止む、床に崩折れる音、少女は恐る恐る目を開いた。痛々しい青木の裸身。彼女はあわてて、ふたたび目を閉じた。

「どうだい、もう降参かい」

青木の耳に遠くから聞えてきた。

「まだまだ、これ位で」

青木はふりしぼった声で答えた。

「中々ファイトがあるじゃないか。では次にするか」

青木の手は後にまわされ、手首を縛り合わされた。脹れた背中に縄が痛く、彼は思わず手を背中から浮かした。さらに女達は両足首を縛り合わせた。女達の目の前に男性のすべ

てがさらされていても、彼女等は顔色も変えないが、柱に縛りつけられた少女は又、目を閉じた。

青木が足首の縄で逆吊りにされると、丁度頭の下に水を一杯張った桶が置かれた。青木

み呼吸を整えようとしたが、鞭打ちの刺激がまだ残っている彼にとって、それは容易ではなかった。まだせき込んでいる内にふたたび水中へ。彼の全体重を支えている足首の縄目も骨に迄喰い入って耐え難いが、息が充分出

力なく逆さにぶら下った青木を見た女達は彼を下に下ろすと縄を解いた。そして足首と手首をそれぞれ二十糎ばかりの鎖で結び合わせた。今の青木はどうされようと裸身をさらしたまま身動きもしない。無駄のない筋肉が若々しい肉体を美しく見せていた。

青木から手を離した女達は、今度は女学生の方に近付いた。

「むむむ」

「静かにするんだよ」

猿轡の上から少女の頬が鳴った。柱から放された少女は、女達の手によって



はまだ意識がはっきりせず荒い息を続けているが、滑車のまわる音と共に水音がし、同時に水を吸い込んでへと我に返った。逆吊りの青木の頭は木桶につつまれている。間もなく引き上げられた時、彼はあわててせき込

来ないのが何といってもこたえる。水に入れられる間隔も不規則なので落着いて息も整えられない。彼はふたたび息苦しく、意識が遠のくのを感じた。頭に血が下り、頭全体がわめき出した。

またたく間にセーラー服も、下着もはがされ、パンティ一枚にされ、改めて後手に縛り上げられた。白く艶やかな裸身だ。処女特有の張り切った柔肌、小さく、だが丸くふくらむ胸にも縄は深く喰い込んでいた。むっちり

とした太ももが、恥しそうにふるえていた。

この時、やっと青木は意識を取り戻した。

背中の鞭跡はまだ燃えているし、頭はまだ霧に包まれたままだ。

「さあ、しっかりしな」

青木は四つんばいにされた。手足の鎖が床にふれて音を立てる。女達は少女を青木の背にまたがらせた。少女の柔らかい肌だが、鞭に痛めつけられた青木の背中には痛かった。

直接肌と肌がふれあう気持等、ゆっくり味合うゆとりは、彼になかった。唯、視野の端に見える肉付きの良い素脚と、落ちないように彼の胸を締めつけた太ももの力を感じるだけだった。青木は女の鞭の音で歩き出した。そこには男性としての、いや、人間としてのプライド等見当らなかった。使命を果たして、この少女を無事につれ戻す為の手段だが、それにしても、この姿はあまりにもなさけなかった。むき出しの若い肉体を四つん這いの姿で歩む若い男。その背中に、後手に縛られ、猿轡をはめられてまたがる少女。彼等の姿は囚われの姫と、それを乗せて歩む馬の姿に他ならなかった。

女の鞭は青木の尻に、太ももの裏側にと鳴り時とすると、少女のむき出しのをもを打つ

て少女の体をもがかせた。青木の手足の鎖は床に激しく音を立てた。少女とはいえ発育の良いこの娘の体はきたえた青木の体にもたえる。膝が前に出なくなり、両肘がともすると曲がりそうになる。少女は背中中縛り合わされた両手をしっかりと握りしめてうつ向いていた。何の為にこんな浅ましい姿にされなければならぬのか。丸いふくらみを見せる乳房を見せるのさえ恥かしいのに、殆ど丸裸同様の姿にされた上、後手に縛られている。今迄、彼女は演劇部に入っていた関係もあって、縛られたことはあった。拷問の場面さえあった。しかし、それらはすべて劇の上でのことなので、彼女も平気で縛られ、鞭打たれていた。だが今は事情が違う。女達は少女を青木を恥かしめることを目的にしているのだ。青木が若々しい体を、苦痛にのたうたせプライドを奪われる苦しみ泣き、少女が羞恥に身をふるわせ、白い肌を染めることに喜びを感じているのだ。

乗馬姿の女はこの次にどんな責め方をしようかと考えていた。初めは青木だけを責めるつもりでいたが、こうして少女を裸にして縛ってみると、この少女も一緒に責めてみたくなった。清らかな乳房や腹部を縄で締めつ

け、鞭で彩ってみたくなった。まだ世間を知らない少女だけに、苦痛はより激しいだろうし、柔肌は責めに悲鳴を上げることだろう。そして青木の方は、今度は大の字に床に縛りつけて体中の毛をむしり取ってやろうか、それともがんじがらめに縛ったまま浣腸をして苦しむ様を笑ってやろうか、女の胸の中にはサディスティックな考え方が渦巻いていた。青木の動きはにぶくなった。そして、囚われの少女を背中にしたまま床に崩折れた。

「おやおや、もう駄目かい、降参するの」

青木は必死になって首を横にふった。

「しぶといね。もう体の感覚がないのだろう」

女達は青木の上から少女の体をどけた。素肌に手がふれると少女は体をふるわせる。

乗馬姿の女が青木の足の鎖をはずし、手の鎖もはずした。もうあきらめ切ったような青木の態度だったし、責めに足腰が立たない様子にふと気がゆるんだのが不覚だった。青木は死物狂いでバネのようにねえきると、少女を柱に縛りつけようとしていた女の脇腹に足蹴りを食わせた。そうして驚く乗馬姿の女の首筋に手刀を一発お見舞すると、残る一人に飛びかかり右腕を後にねじ上げた。他の二

人は思いがけぬ激しい一撃を喰って悶絶していた。

青木は怒りにまかせて、女の服を破りずけるようにむしり取った。その激しい有様に声も出ず無抵抗のまま薄い肌着一枚にされた女を、青木は先程迄自分を責めていた縄で厳しく後手に縛り上げた。脂のよくなった女体は

縄にくびられ、床にころがった。

青木は手を休めずに、他の二人も同じ姿にしぼり上げた。床に後手に自由を奪われた三つの白い肉体が並べられると、青木はやっと手を止めて息をついた。目がまわりそうだが、今迄の責めに対する怒りだけが辛うじて彼を支えていた。彼は荒い息をしながら少女

誘拐された美少女の詩

海原にありて歌える

菅谷はるみ

赤いベレー帽、白いセーターに紺のブリーツのスカート。オレンジのロウヒール、まあるい顔にパッチリした瞳、肉づきのよい両脚の女学生のような少女。二十才の紡績女工、川路美奈子さんは、〇〇紡績労組で女組合長なんだって。でも、痛ましい縛しめは、この『婦人斗士』をも打ち挫いて猿ぐつわの下で嘔り泣き、呻めき腕き、更に、純白の制帽、制服、純白のナイロン、ストッキング、純白のパンプス姿の清純な看護婦が縛られている。

××病院の佐々木その子さんの。長い

髪をうしろで巻き髪にしてまとめ、紺の事務服に白いカラー、赤いスカートにナイロンストッキング、青いヘップシュエーズの少女は、▽▽商事の市川恭子さんよ。

黒い長髪、黒いワンピース・ドレス、黒の長目のナイロン手套、肌の透き通った黒のナイロン・ストッキングに黒のパンプス、銀のイヤリングとネックレス。黒ずくめに白いベレー帽を斜めに冠った清楚な令嬢は、××省の局長秘書、浦上敬子さんだつて。

みんな、ほの暗い般倉の片隅に、身じろぎすら出来ず、今は呻めく力もなく、うずくまる女達。三千ドルで取引された一箇の商品として囚われた女達——。

の縄を解いた。柔かな白い二の腕に縄目の跡が赤い筋になって脹れ上っていた。少女が急いで服を着るのに目もくれず、青木は床に落ちた鞭を拾って三つの裸体に近付いた。

「油断大敵というところか。このまま警察に電話しようか」

「止めて！」

一番小柄な女が叫んで、上体を起した。豊かな乳房の上下に喰い込んだ縄が肌に没して見えない位だ。

「警察だけは止めて、どんなことをしても良いから」

「縛っても打っても良いから」

「私達の体はどんなにしてもいいから、警察にだけは知らせないで」

女達は口々にいった。青木は、それなら一層思い切って彼女達を打ちのめしてやろうと思った。三人の白い体が赤く彩られ、苦しみの汗にまみれ、一個の動物となる迄、責めて責めて、責め抜いてやろうと彼は鞭を取り直した。

「ピシリ！ ピシッ、ピシッ」

青木が力まかせに、ふり下した鞭が三人の女たちの背中で、弾力的な音を立てて激しく炸裂していた。

(完)

「奇譚三十九夜」物語

〈第三十二夜〉

辻 村 隆

菊の盛りも過ぎて朝夕寒さが肌に一入身に沁む今日此頃です。退屈男達は八人——時間にはいつかきまった定位置へ、誰もが当然の様に深々とソファ―に凭れ込み、黒い気炎を赤い酒で掻き立てているのでした。

推理小説流行の昨今、二人の選手が、サジスチックな推理の物語りを発表することになって居りました。

最初はステッキ氏——

「本格的なものは到底、私の才に非ずです。まあ、推理めいたもの——、その程度で我慢して頂きましょう」

そう前置きして語り始めたのです。

第七十三話 妊婦ヌード殺人事件

比佐子は、体の自由がきかない夢にうなされ、身悶えするうち、悪夢からさめた。

しかし、それは夢の出来事ではなかった。霞んだ映像が次第に判っきりしてきた時、比佐子は夫の潤吉が、ダブルベッドの上に起き上って、彼女の顔をじっと見つめているのにぶつかった。

自由がきかないのも道理、比佐子の手足は、白いロープで堅く縛られていた。

寢室の時計が、ボン、ボン、ボン、ボンと四時を打った。夜明け前のアパートはシーンとして音もない。

比佐子は判っきり目覚めた。そして常にない潤吉の、怖い真剣な顔にハッと胸を打たれた。

「どうなさったの——、こんな時分に……。私を縛ったりなんかし

て、いやいやよ。そんな怖い眼でみつめないで、早く解いて頂戴。ああ、手がしびれて動かないわ……」

「……」

「ねえったら、早く解いてよ。何だか貴方ヘンだわ。一体どうしたっていうの……何が怒ってるの？……」

それでも夫は返事をせず、思いつめたように比佐子のネグリジェに包まれた豊満な胸の辺りを凝視していた。両手を胸の前で揃えて縛り、両脚を縛った縄とつながりであった。

昨夜、比佐子は努めて気嫌よく潤吉の帰りを迎え、精一杯の媚態を示して、夫を満足させた筈であった。妊娠七カ月の身体も気にならなかった。

その儘、気懶るいねむりにウトウトと惹き込まれ、彼女は、潤吉の傍で寝入ってしまった筈であった。

目覚めた直後の感覚では判断出来なかったが、夫は確かに異様であった。結婚以来二年四カ月、潤吉は未だ嘗て、この様に比佐子を縛ったようなことは一度もなかった。

「どうだい、縛られた気持は……。嘸かし、いい気持だろう——」

「えっ？」

「縛られて嬉しいかと聞いているんだ——」

「……」

咄嗟に比佐子は応え様がなかった。そして、或る事実に思い当たって、愕然とし、忽ち全身の血がスーッと引いて行く思いがした。

「いえないのか……。そうか……じゃあ、ボクからいってやろうか。

同僚の花田賢司——、奴に逆吊りにされて、膨れた腹をのたうたせ乍ら、快楽の呻きを上げていたのは、お前じゃないというのか。知

らぬは亭主許りと考えていたろうが、そうそう甘くはないよ。おや、顔色が変わったな——、震えなくてもいいさ。そのうち、永久に震えなくなるんだからな……」

潤吉は眼を血走らせ、握りしめたコブシをけいれんさせ乍ら、遂にいうべき事をいい切ってしまった。

「泥棒にも三分の理ってこともある。お前にもいい分はあるだろう。しかし、女房を寝取られた、夫の立場が如何にみじめなものか、お前は、花田と被虐の遊戯にのたうつ間に、少しでもボクのことを考えた事があるかね」

「あ、あなた、それは……」

「もう言訳は遅いよ。明日では遅すぎるのだ。いずれそのわけはもう少ししたら話すがね。ボクはお前と結婚する迄は女は知らなかった。結婚後も死ぬ程お前を愛して来て、他の女性には目もくれず、他の仲間の様に、アルサロやバーで、浮気一つした事のない、善良なる夫であった筈だ。お前が欲しいというものは、どんな無理をしてでも買ひ与えた筈だ。安月給のボクが、無理算段をして、毛皮のコート、ステレオ、カラーテレビ、それにこの高級アパートだってボクの給料から考えれば、到底住めたものじゃないんだ。お前にゾッコン惚れ込んでいたればこそこのことじゃないか——」

「わかってるわ。だから私……」

「いうなッ。いいわけはききたくない。その腹の子だって、誰の子だか分るもんか。ボクはその事実を知った時、気が狂いそうになったぞ」

「貴方の誤解よ、きいて——、これにはわけがあるの……」

「わけなんか聞きたくない。ボクはお前が、その大きくなった腹を

曝し、裸で縛られ、鞭打たれる姿を、この臉に判っきり描いて見たんだ。今更何をいおうとするのか——。ボクは、ついで、自分の女房をそんな対象に考えたことはなかった。桃色に輝くお前の肌を、まるでビーナスのように、いとおしく、優しく撫でさすり、大切にきて来た、その肌が、奴の手で、粗々しく縄をうけ、犇々と肌に縄目をくいこませて、ボクの愛惜おく能わざるお前の体と、奴はまるで、荷物かなんぞのように、何の仮借もなく乱暴に扱かっていたではないかし。ボクの掌中の宝は奴の為に、ズタズタに冒瀆されたのだ、これが憎まずにはおられようか——。ボクは決心した。他人の奴等にオメオメ曝したその裸を、今更大切にするのは愚の骨頂だね。さあ、覚悟してくれ。これが、最初のそして最後のいましめとなるだろう」

「待って、あんまりだわ、あんまりだわ。私の話も聞いて頂戴——」

「いくな売女ッ！」

そういうなり、潤吉はこめかめをピクピクひきつらせて、いきなり、前夜から脱ぎ捨ててあった、比佐子のナイロンのストッキングを彼女の口へ押し込んだ。必死にもがくのをぐいと押えつけ、寝巻の紐で猿轡をかませた。潤吉は激情を押えかねるようにドタバタと歩き廻ると、整理タンスを開き、引越用に使った縄の束をドサリととり出した。

憎い男が、比佐子を縛ったように、彼も亦、最愛の女房を、逆さに縛りつけようとしていた。憎さ百倍の気持が、徐々につのって、既に彼の理性は麻痺し、比佐子を殺して自分も死ぬ気になっていた。どうせ殺すにしても、最も残酷な殺し方を考えていた。

アパートだから天井は塗り込めてあって、生憎吊り下げるにも梁

はなかった。

彼の生涯で、ついで持ったことの無い、嗜虐的な想念が、コキユという立場になった今、湧然と立ちこめて来たのである。

彼は、カーテンで蔽われた、外部に開く、廻転窓を少し押して、その窓枠にロープをかけた。カーテンをしめた儘にして、ほんの僅かの隙間だから、外部から覗ける心配はない。

潤吉はベッドから、比佐子の体を床に抱き降すと、窓枠にかけたロープと、足の縄を強く繋いだ。鉄製の頑丈な枠だから、少々力がかかってもビクともしない。

彼は窓枠の下へ、キッチンテーブルをおき、ルームのライトを消した。影がうつるからであるが、ライトを消しても、夜明けの空の白みが、薄い紗のカーテンを通して、かすか乍ら部屋の内部に明るみをもたらしていた。

既に新聞配達、自転車の通るのが、外気の静寂を破っていた。

比佐子の体を抱き上げると、部屋はスチームも消えたのか初冬の冷氣でつめたくひえているのに、彼女の体は熱っぽかった。腹のふくらみが夜目にもくつきりと盛上り、胎内の成長を物語っていた。

抱き上げて、キッチンテーブルの上にのせ、潤吉は窓枠にかけたロープを力一杯引っ張った。ジリジリと比佐子の腰がうき、両足が窓のカーテンにひだをつくり乍ら、窓際にそって天井に向かって浮かび上っていった。と共に両手の縄が両足に連結している為、上半身が、机を離れて少し浮き上がった。足の縄が、吊り下げる様に縛っていなかったの、縄目が足首からくるぶしまでものびて、足の甲のところ、深く深く喰い込んでいた。緊縛のプレイなら、苦痛が非道くて、到底辛抱出来ず、恐らく、縛り直したであろう、この足縛

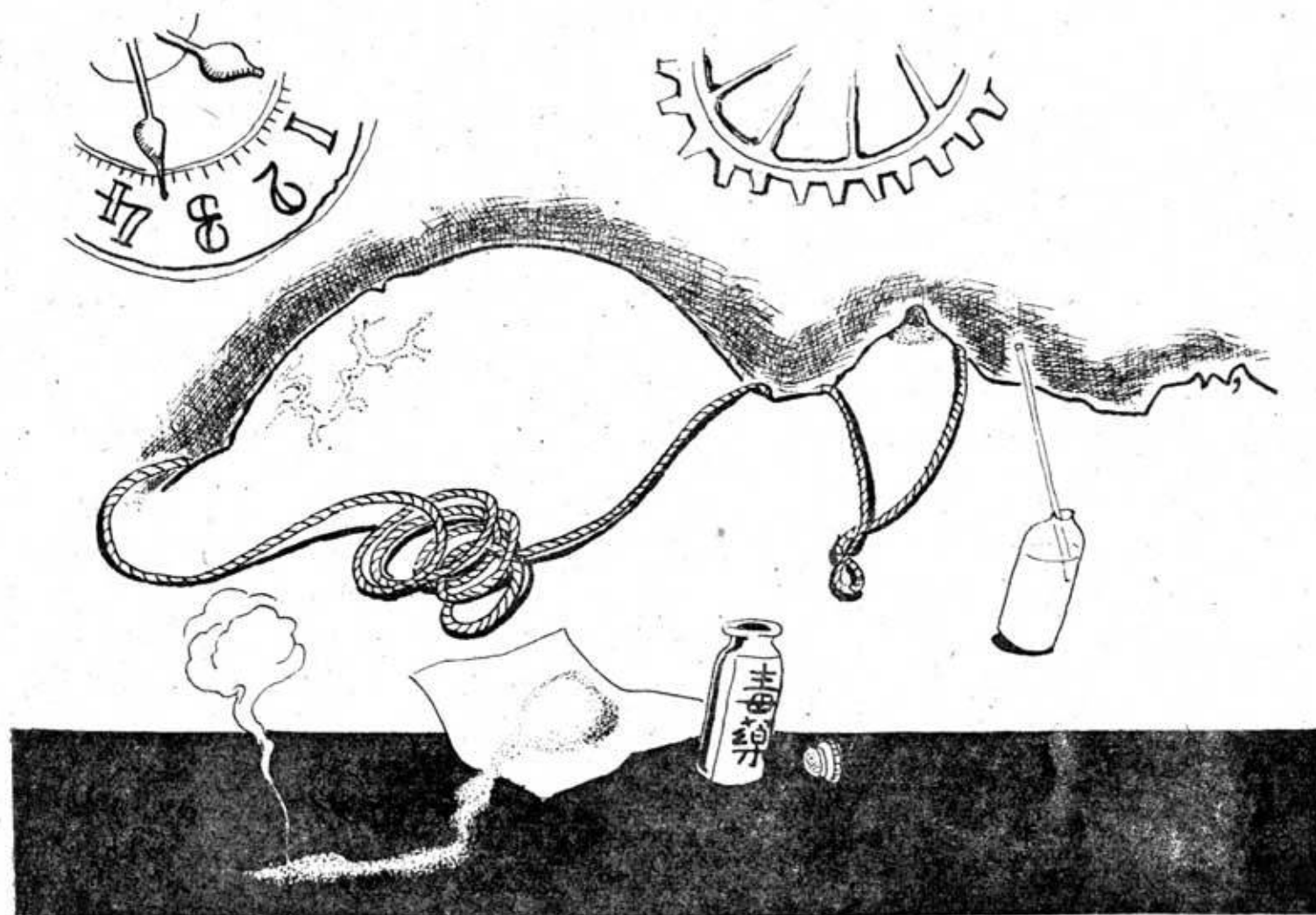
りも、比佐子を残酷責めの挙句、殺すつもりだから、苛責はなかった。

面倒臭いことはやる気にならず、彼は鋏をとり出すと、手と足をつないで縄をプツリと切り放ちかえす刃で、ネグリジェをズタズタにきまっつて、比佐子の体から一切を奪いとった。

豊かに張り切った乳房が露わに冷気に触れ、それが生もののようにピクピクと震えた。愛撫し、いつくしんだこの乳房——、その乳頭の黒ずみ迄が、今は激しい憎悪の対象だった。

キッチンテーブルを外すと、比佐子の体は逆さに窓にダラリと垂れ、頭が床にスレスレに付いた。彼女は少しでも足の比重を軽くしようと、縛られた両手をつっぱって必死に体を浮かそうと、果敢ない努力をつづけていた。

潤吉の殺害の真意を知れば、彼女は恐らく絶望感に打ちひしがれ失心したに違いない。



しかし、幸か不幸か、残酷な吊り責めの過程は無言のうちに運ばれていた。

だから、この様に吊り下げられ胎児の重みを胸に感じ、苦悶に呻いても、いずれ夫は許してくれるだろうと、比佐子は未だ、たかをくくった気持でいた。いやむしろ夫にそうされることによって、比佐子の心の奥深く、深沈した、内攻性のマゾが、徐々に芽を吹き出し、虐げられ、いじめられることに、秘かな欲びすら味わっていたのだった。夫はこの私の体を、これからどの様に取扱かうのだろうか——。鞭打つのか、愛咬するのか、それとも、もっと非道く責めるのか——。どちらにして、口にえない或る種の期待を抱いて、夫のなすが儘になっていたのである。

△あの人に較べて、何とぎこちないことだろう。私は許されれば、これを機会に奴隷妻になってもいいわ。夫は私の不貞を口実に、毎

夜、縛り、いじめてくれる。そんな夫になって欲しいと念じ乍らもいい出し得ぬ私であった。それが、今日を境に生れかわるかも知れない――

比佐子は眼を閉じて、そんな悠長な、呑気な夢と期待を描いていた。

頭が充血によって、刻々と重くなり、ボーッと霞んだようになって、顔がカッカツとほてり始めていた。

「早く何とかすればいいのに。歯搔ゆいたらありゃしない。あの人なら、高々と吊り下げた私を、ブランコを押す様にビュンビュン体を押しまくって、前後に空中に体をゆらめかせ、手切れそうに痛む足首の骨が、キクキクと音をたてるのにも、委細かまわず、パチリパチリとカメラでとっていたのを想い出すわ――」

ややあって、潤吉は、ぼつてりとふくらんだ比佐子の腹に眼を転じ、縄をとり上げると、首に輪にした縄をかけ、直線に下へ通して背に廻すと、首縄で結んだ。別の縄で、膨らんだ腹を押し潰すように押さえ乍ら、ぐいぐいと腹部を幾重にも引絞り、縦縄にかけて、ひょうたんのようにくびらせて縛り、強くしめつけた。

比佐子の鼻腔が大きく開き、呻きが猿轡を通して微かに洩れた。肩で喘ぎ始めた彼女を、潤吉は憎々しげに見下し、しつとりと汗のにじんだ顔を、スリッパでギューギューとふみつけ、にじった。

妊娠七カ月の膨らみは、無漸にも強い縛しめに依って圧迫され、幼ない胎内の生命も危機に瀕していた。

比佐子の頬や頭は、汗と涙とはこりでまみれ、眼は充血して真赤になっていた。

スリッパで彼女のひたいを強く踏みつけ乍ら、潤吉は渴いた声で

きれぎれに叫んでいた。

「比佐子、いっぺんには殺してやるものか。ボクが怒りに震え、苦しめただけの時間をかけて、じわじわと殺してやるから――」

同僚の中にやっかみ半分の親切な奴がいてね。お前と花田が、喫茶で顔つき合せて、ヒソヒソ話合っていると幸か不幸か見たと、ボクにわざわざ告げてくれたのさ、ボクは始め冗談かと思った。

「嘘だと思ふんなら、花田が欠勤した日、奥さんを調べて見給え。何かの確証を握れるかもしれないよ」とこういつてくれるんだ。

三日前、奴は欠勤した。ボクが帰ると、お前は莫迦に愛想がい。自分の非行をカバーしようとするのと反ってそうなるもんだって何かの本で読んだよ。しかもお前は自分から求めて来た。その体だよ。ボクはお前の体から何かと嗅き出そうと懸命になった。お前はスタンドを消してくれといったね。そしてネグリジェをぬがなかった。歴々と胸に腕に残る、縄のあとを見られたくなかったからだろう。ボクは寝たふりをして、お前の熟睡するのを待った。瞞著し終えたと思ったお前は、スヤスヤと軽く口を開いて寝息を立てていた。ボクはスタンドをつけ、そつとお前の胸を開いて見た。まぎれもない縄跡がくつきりといっていたではないか。ボクは気が狂いそうになった。そつとネグリジェをまくり上げると、太腿に、そして胸から下へ、鞭のあとが、桃色に色づいて、お前の肌のにたくっていた。大切な腹の胎児まで鞭打たれたかと思うと、ボクの腹は煮えくりかえりそうになった。そして、ボクはその時、お前の相手の、花田賢司を殺し、お前も殺して、ボクは花田を、お前が殺したように擬装する気になったのだ。

奴に今日、お前の名前でチョコレート詰合せの箱を送っておい

た。毒薬を注射針で注入してね。奴は今頃、それをよだれを垂らし、嬉んで喰って、ひっくり返っているに違いない。チョコレート箱にはお前の名刺を入れておいた。青酸カリの反応で、サツは直ちにチョコレートを調べるに違いない。青酸カリの検出は間違いないから、お前の名がすぐに容疑に浮んでくる。その頃お前は、縛られた体に時限爆弾を首にぶらさげて、刻々ときざんでゆく針の、秒読みをしているというわけだ。

お前の字で書置はつくってある。一昨夜、ボクは手を怪我したからといって、お前に代筆させただろう。手なんかチツとも悪くないよ。代筆させた文章の中に、遺言に必要な字をチャンと組み入れておいたのさ。ハハハ、見せてやろうか、お前の手紙を敷いて、紙に写しとり、出来上ったのがこれさ。

『お詫びに、花田をころして、私も行きます。比佐子』どうだ、これで十分だ。殺すという字や、死の字さけて行くにしたところなど芸が細かいから、お前は全然気付かず、先輩への病氣見舞文を丁寧にかいてくれたよ。さあ、これでいふべきことはいった。午前七時爆弾が破裂した時、お前の雁字搦目に縛り上げた体は、腹の子諸共、木ッ葉ミジンだ。ハハハ、怖いかネ。もっと苦しむがよい。泣くがいい、喚めけ、叫べ！』

潤吉は、比佐子を憎々しげに見降し、窓枠のロープをといて彼女の体をどきりと床におろした。そこで、テキパキと、海老縛りに縛り直した。もう、比佐子は失心寸前だった。

△夫は誤解している。それを一言も聞かずに、私を殺すなんてあんまりだわ。助けてー、猿轡を外して、せめて一言いわして……。ううむ、おなかが押しつぶされそうだわ。おなかと胸がピッタリつい

て、私は今にも口から、おなかの赤ちゃんを吐き出しそうだわ。苦しいわ——助けて……。▽

ウワウワウワと言葉にならぬ呻きを発して、比佐子は無我夢中でもがいた。極度に圧迫された腹部は、今にも破裂しそうに痛んだ。いや、それは痛みという生易しいものでなかった。全身にけいれんが去り、彼女の眼は吊り上って、今にも息たえそうな、塗炭の苦しみであった。

潤吉は冷やかに、もがき苦しむ比佐子を見下し、手製の時限爆弾をとりつけた。午前七時になれば爆発する筈である。その時間までにはまだ四十五分許りあった。

初冬とはいえ、流石に辺りは白み、灯を消した室内も薄もやの中にぼんやりと浮んで見えていた。首に時限爆弾をぶら下げて、比佐子は、平家蟹のように、平たく床に轟々と縛られてうづくまっていた。

「さらば最愛の妻よ——、といたいたが、小田潤吉の童貞を奪った上、不幸のどん底につき落した女よ——。心おきなく地獄へ行き給え。

ボクは行かねばならぬ。アリバイをつくる為にね。めいどの土産にいつておこう。ボクは昨夜家へ帰る前、コールガールを連れて、連れ込みホテルに宿泊している事になっている筈だ。おかしいと思うだろう。それがチットもおかしくない。現に今ボクがここにおり乍らね。なあにちよいと細工をして、言葉たくみに、ビタミンだといって、睡眠薬をのませ、眠ったのをたしかめて、ホテルの窓から飛び出してきたのさ。ホテルの一階の裏の、道路に面して窓のある部屋——、この計画の為に、ホテル街を歩き廻り、ガンをつけてお

いたのさ。今からホテルへ帰って、そっと窓から忍び込み、元通り窓をしめて、コールガールと同衾して、朝の十時頃にでも眼覚めて欠勤すればいいのさ。会社でタコをつられるが、殺人罪にくらべるとネ。女房をねとられて、やけのやん八とでもいえば同情してくれる女もあるかも知れないよ——」

直蒼な顔をひきつらせて潤吉はいい終ると、昨夜帰って来た通りの姿に着換えた。

カバンをとり出し、ネクタイをつけ終り、パジャマをたたんで押入れに入れようとして、彼は、その押入の奥に小さい紙包を見つけた。何気なく開くと、バラで三本のアンプル液がつつまれてあった。強壯、強肝、強精と三拍子そろった、流行のインスタント即効薬である。

「畜生、ボクに内緒で、花田の奴にこんなものを服用させて、元気をつけさせていたんだな。恰度いい工合に、縛り疲れた処だ。お前の贈りものをのんでいってやるよ。コールガールの為にも元氣をつけなくちゃ……」

彼はボンとアンプルの先を折ると、紙と一緒に包まれていた一本のストローの包紙をしごいて破き捨て、チュチュチュと一気に啜り終った。

彼は帽子を蔽り、鞆を手にして、部屋を出ようとして、急によるめいた。

バタリと手にもった鞆が床に落ち、潤吉は咽喉をかきむしった。そしてズルズルと扉にそって崩れるように腰を落し、扉に無惨な爪跡を残して、けいれんを始め、やがてけいれんが終ると動かなくなってしまう。彼の呼吸は止っていた。潤吉が必死にしがみつ

て、半開きになっていた扉が、朝風をうけて、ユラユラと微かに揺れた、そして静かにしまった。

コチコチコチコチ。時限爆弾の秒針が、規則正しく回転し、不気味な静けさの中に、比佐子の必死の呻きが、死の呼び声のように部屋にこもって空転していた。

△死ぬわ——、誰か助けて……。ああ、もう駄目だわ。潤吉は死んだ。そして私も死ぬんだわ。いやいやいやッ、死ぬのはいやッ、助けて……。▽

比佐子は必死に叫ぶが、声にならない。

扉をノックする音——、それが一際高くなった——。

△花田の殺人がわかって、警察がかけつけたのだわ——、そうに違いない。ああ助かったわ。早くあけて入って——、早く……早く……▽

そして、扉を蹴立てて、瞬間、潤吉の屍体につまづき、倒れそうになって、あわてて飛び込んで来たのは、殺された筈の花田賢司だったのだ——。

小田潤吉の死は、無理心中による自殺ということではケリがついた。

大急ぎで花田は時限爆弾の針をとめ、現場をその儘にして、勿論比佐子も縛られた儘の姿にして、一一〇番に急報したのである。

朝早く現われた花田賢司の一件は、毒入りチョコレートで釈明された。

「いやとんだトバッチリをうけるところでしたよ。いつかボクがチヨコレートは大嫌いだと貴女に、何かの折話をしていたのに、その嫌いなチヨコレートを貴女が送って来たので、ヘンだなあと思いました。これはてっきり小田の仕業だとにらみましたね。小田のつかい込みを貴女が知って、会計係長のボクのところへ、何とかしてほしいと泣きつかれた時、実際ボクも弱りましたよ。調べて見たら、百三十万円程穴をあけているんですね。貴女の為に使った金らしいと聞いて、何とか帳簿をやりくりし、貴女が実家から百万円許り借用されて、兎も角も穴繕らいをし、折を見て小田に話して、徐々に元に戻して行くつもりだったのに、どうして又、急に無理心中する気になったんでしょうね。ボクと内緒で逢って、色々と奴さんの為に気をつかっておられるのが、使い込みがばれたとでも邪推したのでしょうか。全く莫迦な奴ですよ——」

花田賢司は、一通り比佐子をなぐさめ、今晚の御通夜に又来るからと、悔みをのべて帰っていった。

独りになって、比佐子の臉から一筋の涙の糸がひいて流れた。ポケットから紙きれをとり出すと、長くまるめパチリとガスライターをつけ、それに火をつけて燃やした。潤吉のつくった書置である。

出勤の姿で自殺する男があるのか——。警察は随分捜査したが、結局、アンプルが発見され、やや不明朗であるが自殺で片附いた。比佐子が雁子搦目に縛られ、時限爆弾を首にぶらさげていた事が、何より比佐子を容疑圏外においた理由だった。

▲潤吉は私が殺したのだわ。でも私の意志によってではなかった。夫は誤ってあれをのんでしまったのだわ。花田さんと逢って、夫の使い込みの件もどうやら内聞でうまくゆき、私の妊娠の緊縛ヌード

をとった、あの人の口を塞ぐ為、あの人を殺すつもりだったのに——。可哀そうな潤吉……。私があの人を秘かに自殺に見せかける為、アンプル液の、ストローを一本だけ入れておいて、ストローの内側に青酸カリを仕込んでおいたのに、嫉妬に狂った夫が、花田と思ひ込み、あれを見つけてのんでしまった。皮肉な試だわ。あれからズツとお腹が痛むしきつと流産したに違いないんだわ。

でもあの人の、あのサジストの強烈な眼、激情的な動作、考えて見ると、たまらなく懐かしいわ。

結婚前、悪友に誘われ、フト、アルバイト稼ぎであの人の緊縛モデルになり、その時、冗談のように、お腹がふくれたら一度でいいから撮らせてくれよ。と頼まれて、その時は、まさかと、いい加減にウンウンと返事したのが、私の一生を狂わせてしまったのだわ。

あの人は、私が妊娠してそろそろ目立ち始めた頃、突然何の前触れもなく現われ、断ればよかったのに、夫に前歴がしれるのが怖さに、ついつい許したのがいけないかったのだわ。毎月毎月、お腹がふくれて行くのをあの人はとりたいていったわ。あの人に縛られフラフラにされて、その儘帰ればよかったのに、花田さんとの約束があったので、その足で出逢ったのが誤解のもとだった。

でも、もう私は一人——、ともすればあの人のふところに飛び込み、身も心もズタズタにされたいと願うのはどうということだろう。

ああ、私はいけない女——▽

比佐子の身も心もズタズタにした男——、その人の名は辻村隆——。

「……というのは如何です、スバル氏よ——」

ステッキ氏はオチまでつけて、スバル氏を振返って笑いました。「有難いですネ。一度でいいから、比佐子さんの様な女性をとって見たい。それは偽らぬ私の本心ですよ。でも犯罪の構成はカンシンしないな。私はヒューマニストですからね。危うく、辻村隆、ついで一命を落すところでしたよ。桑原桑原——さて、お次は誰方？」声につられて、それではと、ライカ氏が座り直しました。既に相当量の酒が廻っているようです。

「唯今は、草加次郎ばりに、時限爆弾までにぎにぎしく飛び出しましたが、少し物騒なハナシですので、私は、軽いスリラーで御気嫌を伺いましょう」

第七十四話 足が知っていた

「私は二十九才。職業はキー・パンチャー、月収一万九千七百円の手取り。Sアパートで一人暮らし——。容貌を人は、白川由美にそっくりという。身長一六二センチ、それにつれて、ウエスト、バスト、ヒップは比例して、大きい方である。体重は五六・五キロ。私の名前は、由利みさお。」

私は二十四才の、結婚適令期のやや焦りを感じていた時、幸か不幸か恋をした。

相手は、私の直属上司の営業計算課長、並川清二である。妻と子供二人ある男にである。彼の年齢は三十八才——。

道ならぬ恋と知りつつ、それは人間の理性を盲目にする。私と彼は、週一度は必ずデイトし、アベックホテルで、遣瀨ない恋のひとときに盲獣と化していた。

二十五才——、私は国許の父や、親戚の結婚のすすめ、見合話を遮二無二断わり続けて、彼との果敢な逢瀬に浮身をやつしていた。

三十六才の春——、恋は行きつく処まで行きついて、私は彼の奔走で、Sアパートに移った。二流の上という部類で、家賃八千円（勿論彼が支払ってくれる）のアパートの、生活は快適だった。

世に謂う軽妾——、私は月極め、二万円を頂戴して、逢いたい時に逢い、アパートの私の一室には、彼の衣服、食器一式、揃う様になった。

それから……、二十八才の秋まで、私達の関係は破綻もなく続き彼は私をこよなく愛し、アパートの人々は、彼を私の旦那であると諒解し、黙認した。

二十八才の秋になって、始めて体の中を風が吹き抜けた。恋し、愛する者のみが知る。空虚な味である。彼はその時、営業計算課長から、傍系の会社の総務部長に栄転していた。週に一・二度が、二週に一度、三週に一度となって、月極めの手当は続いたが、泊る事も殆んどなく、義理か厄介の感じが段々強くなって来ていた。一年前、私は彼との関係の曝露を恐れて、他社へ鞍替していたから、彼の会社での動静は分らなくなっていたが、彼が里心ついてそうだったのか、又は、新しい愛人が出来て変ってきたのか、知る事に躍起となった。

私は秘かに興信所に依頼した。半月後、私は、キタのバーの女が彼の新しい愛人である事を報告された。

二号的存在の私は、如何ともし様なかった。

その時になって、私は彼の奥さんの気持が、しみじみ分る様になった。

男の心変りに、別れようかとそんな気になった時、私は二十九才になっており、既に二回も胎児を始末した体であった。

如何にして彼の愛をつなぎ留め得るべきか、私はその事にのみ日夜腐心した。

新らしく人生を再出発するには、私は年をとり過ぎ、彼に甘え過ぎていた。手当の二万円に代る収入源もなかったからでもある。

彼の訪ずれる日、私は狂おしい許りに献身的な奉仕を試みたが、一旦心の離れた彼にとっては煩わしいのみであるらしい。私が試みれば試みるほど、彼はおぞましうにした。

恋がお互いを激しく燃え立たせていた頃、彼は私の形よい足を賞美し、爪先に唇をつけ、私のすんなりと硬くしまった、湯上りの桃色にほてった足を胸に抱きしめては、くちづけの雨を処構わず浴びせ、小指を乳首のように、吸い、しゃぶり、飽くことを知らなかった彼であったのに……。

私は自身の事のように、嫌で見に行かなかったが、「フウテン老人日記」の映画が封切られた時など、彼はあの老人と同じ様に、私の足形をとるのだといって困らせたりした。

更に、新派で上演された時は、数日間通いつめ、花柳と水谷の演技に、耽溺していた様であった。

それ程に、垂涎措く能わざる私の足を、彼は一顧だにしなくなつて来た。私が故意に足に注意を喚起するように、殊更のポーズをして見ても、彼は一瞬それに気をとられるが、すぐ思い直した様に、私の足から眼を外らした。

キタのバー「ガルガンチュワ」の女、はなぶさ——本名は、谷川英子というらしいが——の足が、私以上に素晴らしいのであろう

か。

彼と恋し初めた頃、彼はしきりに私の足をほめ、若鮎のようだとか、ヴィナスの足だとか、まるで齒の浮く様な美辞麗句を並べ立てたが、私はそれを嬉しい言葉にとり、尚更、褒めて貰おうと、日がな一日、脚の手入れに憂身をやつした事もあった。彼から褒められるまでもなく、私は自分のよく伸び、引き締り、曲線美に輝やく、自分の脚に誇りと満足を覚えていた。某靴下会社の主催の、脚線美コンクールでは、残念にも、ミス脚線美の榮譽は射止め得なかったが、準ミスに選ばれ、内心は、ミスに較べて決して遜色のない自分の脚に、審査員の眼の節穴を嘆いた程の、自信の持主でもあったのに……。

数年の歳月が、私の脚線美を減減させたのであろうか。いや、そうでない。私は彼の為のみではなく、私自身の為にも、脚の美に心を砕き、絶えず美への研鑽を怠らなかつたつもりである。

彼は訪れても、段々と私の脚に触れなくなった。嘗っては足下にひれ伏し、私の足先をうやうやしく頂だいて、くちづけし、愛撫し舌舐めたのに、その彼はどこへ行ったのであろうか——。

女王の様に振舞い、足下の彼に、足のマッサージをさせ、足裏から踵の垢まで舐めさせて美容させたのに、あのフェチシストはどうして変心してしまったのだらう。

私は失望と落胆で、憂々した日を送った。そしてその挙句、彼を私から奪った、バーの女、はなぶさの脚を一度この眼で確かめてみたい慾望にかられた。

私は以前、私の女友達を通じて、紹介されたことのある辻村隆のことをフト思い出した。

彼なら、この私の悩みをきいてくれ、そして何かいいアドバイスを授けてくれるに違いないと思った。

私は、古いポケット手帳を引っ張り出し、彼のドレスの電話をくった。

運よく受話器をとった主は辻村隆らしかった。私は女友達で、今も、ある風俗雑誌のグラビアを飾っているモデルの、友人である事を告げると、相手はすぐ分ったらしく、（ああ、あの時の脚の綺麗な人でしたネ）と、私の特徴まで覚えていてくれた。

お目にかかって相談にのって戴きたいことがあるというと、辻村隆はすぐ諒解した。喫茶店で彼と出逢った私は、単刀直入に今の悩みを述べ、助力を乞うた。

——なあんだ。そんな相談ですか。ボクは又、モデルにでもなってくれるのかと、こうしてカメラまで準備して来たのに——、いやまあ、いいですよ。相談にのりましょう。兎も角、そのバー「ガルガシチュワ」のはなぶさという女の子を連れ出せばいいんですね。しかし、それとは別に、由利さんが、旦那さんと絶対うまくゆくヒケツを教えてあげますよ。これはヨクない事です、二人の仲がどうなるかという境目だから、やむを得んでしょう。

彼の本妻さんに悪い気もするけど、由利さんが退いても、そのはなぶさという女が後釜にすわれば、どっちへ転んだって、本妻さんには五十歩百歩でしょうからネ。でもうまくいったら、一度でいいから、その素晴らしい貴女の脚をとらして下さい。辻村隆は最後にそうダメを押した。彼との仲がうまく復活さえすれば、一度ぐらい辻村隆の頼みもきいてやらなくてはならない。勿論、私の友達のように、縛った写真をとるつもりなんだろうけど……。

その夜、私は梅田町のとある寿司屋にいた。辻村隆がはなぶさをここへ引張り込んで来る予定で、私はその彼女を、近くで観察する手筈になっている。

午後十一時半……バーのカンパンには少し早かったが、約束通り辻村隆は、はなぶさという女を伴なって現われ、私を一瞥すると、隣りの泊り木の廻転椅子に並んで腰を据えた。

私は素早く彼女の足に視線を落した。私より少々細い。しかし、彼が目をつけただけのことはあって、素直にしなやかに伸びた両脚は見事だった。併かし、私の脚は、彼女に勝るとも劣るとは思わなかった。

はなぶさは、みた処、私より四ツ五ツ若く、恰度、私が始めて彼と恋愛関係をもった頃の年令に見えた。

年のおとろえのハンディはあっても人間生ある限り当然である。当のはなぶさにしても、数経てば、私と同年令になるに違いないのだから——。年を経て、捨てられれば、若い女はそれでいいかも知れないが、捨てられて行く女こそ、いい面の皮である。

男も同時に年とって行くのに、地位と金のある男は、なんと自分勝手なんだろうと、私はつくづく思わざるを得なかった。

はなぶさを見返す方法の一つ——。彼の足への憧憬を、再び私の方へ惹きつけるより外に道はない。

私は辻村隆のアドバイスをつくづく感謝した。

ふりの客である辻村隆は、大体、私の目的が足りたのを知ると、あっさり寿司代を払ってはなぶさを伴って表へ出た。

私が寿司屋を出ると、四ツ辻の角で、手を振って、はなぶさと別れる辻村隆のたのもしげな姿が目についた。



うまくさえ行けば、一度でも二度でも、辻村隆のモデルに、喜んでなつてあげるわ——。

私は感謝の念から、そんな想念を抱いて、アパートへ帰っていった。

あの夜から数えて十六日の午後八時頃、少々不気嫌そうな様子で彼は私のアパートの扉を開いた。合鍵を持っているから、彼は何時

でも自由に出入出来るのである。

私はいそいそと、つまみものを整のえ、彼の好む、バット69の栓を抜いて、グラスになみなみとそいでも、彼のプスツとした表情は変らなかつた。余程面白くないことがあつたに違いない。

「チエッ、いまいまいしいなあー」

彼はそんな呟やきをもらしていた。

私のまめまめしい、そして涙ぐましい心遣いが、やっと彼にも通

じたのか、氣をとり直す様に彼は立上り、服をぬぎ始めた。

私は既に風呂へ入ったあとで、運よく、湯を流していなかったの

で、彼は、バスにつかつた。私はいそいそと、足を磨き、この脚に一心をこめて、彼の愛撫をとり戻そうと努めた。

まったく涙ぐましくなる私の氣持だった。

バスから上った彼は、この頃になく機嫌よくなっていた。何か傷心の彼の心を、優しくいたわる私の愛情が彼に通じたに違いない。夜のムードがただよい、私の部屋は久し振りに男性の空氣を交えて、ほのぼのと燃え立っていた。久しく味えぬ、彼の足の抱擁が

始まり、私は目を閉じた。私は軽いめまいを覚えた。

彼の唇は爪先から始まり、徐々に昇って、膝頭から腿に唇が近づいていた。

私は常になく、激しい情慾にとらわれた。それは彼も同じであつたらしく、私達はその夜、朝方まで一睡もしなかった。

「君はやはり素晴らしい、うん、素晴らしいよ……」

彼はキレギレに叫んでいたのを、夢幻の境を私はほうこうして、嬉しく聞いていたのを覚えている。

三日にあげず、彼は通い始めた。私達の仲はすっかり復活した。

私は彼の顔を見るまでいらいらし、彼と逢うと、桃源境に遊ぶ様になった。彼も亦、狂おしく私の脚を求め、夜長をひねもす狂態に過ごすことが多くなった。

私は彼の幻影が自分の脳裡をかすめ、しかも、それは淫らな幻影ばかりであった。

私は彼の訪問せぬ日は、何ということもなく、いらいらしたり、又はウツラウツラとして過す様になった。

そんな一日、辻村隆が何の前触れもなく私を訪れた。

「どう——うまくヨリが戻ったかい？」

「ええ、お蔭様で予想以上にネ——」

「じゃあ、約束通り、一度撮らしてくれよ」

「いいわ、いつでも……」

辻村隆は、その日三時間許り、私をあれこれと縛って、自分の気のすむだけ、私の部屋で、裸の縛り姿の私をとった。約束だから仕方がない——、でも、こんな処、もし彼に発見されたら、弁解のし

様もない。ひる間は滅多に來ないから大丈夫だけれど———と思ひ乍らも、私は最後まで、ドキドキし、ひやひやして過した。

バッグにすっかり片付け終ると、辻村隆はフト私にたずねた。

「愛情こまやかになる例のもの、返してもらうよ。まだ残ってるネ？」

私はうなづいて、三面鏡の抽出からそれを取り出し、辻村隆に返した。復活した今は、もう無用に思われたからである。

「体どうもない？」

「ええ、でも、近頃、何だかイライラしたり、彼が帰ったあと、まる一日寝たり、何か錯覚を起したり、体が変調なのよ——」

「そうかい、クスリが効き過ぎたんだよ。これでボクの役目も終りだ——。じゃあ御氣嫌よくね。あとでこれを読んでくれ給え——」

辻村隆は、バツの悪そうな、困った様な顔で、私に目でサヨナラを送って、出ていった。

私は彼の残した四角い封筒を開いた。乱雑な字で、こんな事が書かれてあった。

△彼の為に、いい事をした様な、悪い事をした様な複雑な氣持だ。

私は君の依頼をうけ、彼氏である並川清二の身辺を調査員に調べて貰い、商事上の交友関係を洗ってみた。私の同好者がいないかと思つたからである。幸い、彼の会社で、上得意に属する。A工機重役が、私の異色な道の知合であつた。

私は君の事を話して、重役Sに、バーの女はなぶさを、業務上にかこつけて横取りして欲しいと頼んだ。Sは快く引受けてくれ、並川氏に自分の接待役を仰せつけ、大きい取引をタテに、強引にバー「ガルガンチュワ」にと二次会をもつれさせて、連れてゆかせた。

並川氏の席に、勿論はなぶさは顔を出した。S氏は、はなぶさの仲介を並川氏に口説いて、成功させた。S氏とはなぶさとがどうなったか——それはここでは論外である。重役とホステス……。なる様になっているかも知れない。内心の憤懣やる方ない並川氏は、恐らく君を訪問したに違いない。心のウサの捨て処を、君に見つけようとしてネ。

そこで、君は、かねて私が手渡しておいた惚れ薬を、忠実に実行して、液体に溶いて、君の脚部に塗布されたことと思う。

結果はどうだった？、恐らく、君達の仲は、昔以上に激しく燃焼し、復活したに違いないと私は確信している。

君の脚線に接吻した並川氏は、君の足から脛から、惚れ薬を存分に吸収したに違いないからだよ。

ではタネ明ししよう。惚れ薬は、外でもない或る種の麻薬なのだ。

並川氏は、君の足にくちづけする度に、甘い陶酔にひたり、やがて陶酔は濃化し、身心は爽快にして、徹夜の飲薬も辞せず、しかも疲れをしらない。

並川氏の連鎖神経は、君の足を愛撫し、接吻する事によって、快楽を得られると錯覚する様になってくる。だから以前にも増して君の足に愛着を覚え、フェティシズムの極致を味わおうとする様になるだろう。

これで、コトは足れりとして、私は浅はかにも麻薬を君に、惚れ薬と称して手渡したんだよ。然し、私は大いなる誤算をしていた。

並川一人を対象に考えていた私は、この種の麻薬の塗布が、塗布者自身をも、麻薬化されてゆく事を、実にうっかりと失念していた

んだ。許してくれ給え——。

医学的にいうと、仮りに、○・一グラムのモルヒネを注射すると○・一グラムのその儘に吸収されるが、これを吸うと、○・〇一グラム、つまり十分の一しか吸収されない。

だから、私は塗布が微量の効果しか發揮出来得ないと思っていたが、これは大いなる間違いであった。

煙草の吸口につけて吸ったり、鼻先で嗅いだりするのが定石であるが、君に教えた様に水にとかしてそれを舐めるのも、大いに効果を發揮することになるのだ。

私はこれを並川氏に適用したが、君自身が並川氏と同量に麻薬化して行くことに気付いて愕然としたんだ。

医学書をひもとけば、この種の原末を肛門にじかにすり込んだり或いはスポイトで、その溶液を肛門に注入することもあるし、又耳の穴に入れたり、目薬の様に使う手もあり、時には、掌や手の甲に擦り込む場合もあると書かれてあったのだ。

満州国建国当時、満人の要職の人々は、長時間の会議になると、阿片常習者が多かったから、やむなくポケットにこれを忍ばせ、そろそろ体からモヒがきれて苦しくなり出すと、常にそれを手の平にこすりつけ、辛うじて、長い会議を持続させたという話だ。

麻薬はそれほど浸透性の強いものなのだ。飲んだり、舐めたり、注射しなくても、君の体に塗布した、例の惚れ薬は、君の機能を徐々に犯し始めていたのだ。今なれば幸い初期だ。このまま止めれば回復も早からう。並川氏との仲の復活を、惚れ薬の力を借りず二人の力でしっかりと強い絆でとらえておいてくれ給え。

悪魔の惚れ薬には絶対に二度と手を出さぬ様に——それを進めた

私自身、君にこの事をいうのはおかしいかも知れぬが、願わくば、君達二人の為だ。切に祈っている。辻村隆

私は真実をきかされ、怒りと驚きと、感謝と不安が、一どきに押しよせてきた想いだっただけだ。

いらいらと、幻影、それに、最近よく平気で嘘をつく様になったり、彼との徹宵の快楽も、すべてはこの麻薬のなせるわざだと始めてしまった。

一度知った味をきれるか、どうか——。幸い、彼は、それが麻薬によるものであることを知らず、今は只単に私の足を求めている。

彼が再び私から離れ去ろうとする時、私はよく、これを使わずにすまされるかどうか。

辻村隆は私に黙っていてくれた方がよかった。その方が、私自身悩まなくてすむのに——、麻薬の禁断症状が、私の半ばむしばまれたかかった肉体の中で、妖しい幻想、焦燥を起させ、先程の肉体の緊縛が、甘美な快楽となって蘇がえってくる。ぎりぎり責めさいなまれ、縛られて転がる私を、彼に見せたい慾望にかられる。

すべては麻薬による、被虐的な妄想であらうか——。

ボクが物心ついた頃、ボクの家は前に川が流れ、石垣を積んだ高台に建っていて、うしろは小高い山になっていた。

川には上に土をのせた頑丈な橋が架っていて、橋を渡ると櫟の木が堤防の上に土止めのように植っていて、その遙か下を県道が走っていた。

何もかも私の足だけが知っていた——。そう、足だけが知っていた方がよかったのかも知れない。

「又しても辻村隆が登場しまして、どうもスバル氏には申し訳ありません。期せずしてこんなことになっちゃって——。ステッキ氏が辻村隆を使うとは思わず、このモチーフは、私が以前より暖めていたものですから、どうかあしからず……。何も辻村隆でなくともいいわけなんですネ……」

こういって、ライカ氏はスバル氏に向って頭を掻いて、心持ち詫びる恰好になりました。麻薬の悪習や、その恐ろしい弊害が、一座の人々をガヤガヤいわせ、そして誰からともなく立上りました。窓を開くと、スーッと冷い夜気が、酒のほてりを快くさましてくれる様に忍び込みます。

十二階のビルの頂上から見ると、地上より又一入冴えて輝やきを増して、澄んだ中天にかり、逝く秋を惜しむ様に、淡い冷めたい光を投げかけていました。

(了)

小学校へ上ったボクは、成績はよかったが、餓鬼大将で悪戯ばかりするので、操行はいつもと乙だった。初夏になると麦畑から麦ワラをとってきて、蛙の尻から突っ込んで、風船のようにふくらまして、川へ浮かべて遊んだ。

皆のこわがる蛇も、ボクに見つかるか災難だった。シッポを持ってぐるぐるとふりまわ

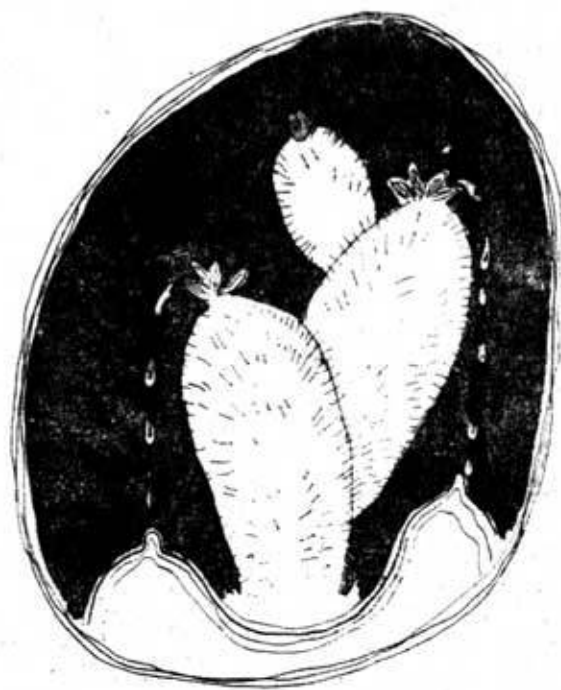
すと、大抵の蛇は目がまわるのか、ぐったりと死んだようになった。ときには、地べたにぶっつけて殺した。石垣のすき間なんかへ逃げ込んだときなどは、そのままでは抜けなかったが、一度ゆるめて、すかさず引くと、た易く、ずるずると抜けた。あとは投げたり踏んだり、結局は悪童の餌食にな

るのがオチだった。

家の庭には、大きな泉水があつて、鯉がたくさんいた。おヘソのあたりまで泥の中に埋まりながら、鯉捕りをやらかしたときは、さすがの父も怒り、土牢のような格子戸の中へ入れられたこともあった。中学へ行くようになってから、県史を

図書館で読んでから、ボクの家は、三好三人衆の流れをくむ郷士で他からこの地へ移り住み、附近を支配した土郷であるということを知った。

暴れ者の血筋は先祖代々から受け継がれたとみえて、明治維新のときには、一族の中から、徳川幕府に味方して、奥羽から函館まで走った者があつたらしい。若し、徳川の天下が続いていたら、一族から一国一城の主が生れていたかもしれない、と父が語っていたが、母は行方不明となつたまま帰って来ない、それらの人達のことを悲しんで、戒名のない位牌を仏壇に祭っていた



嗜虐千一夜

悪童日記

忍頂寺 実

ことを覚えている。

大学を卒業した頃、日支事変は泥沼の様相を呈し、航空機の部品製造工場へ勤めたまま応召し、幹部候補生として予備役少尉に任官して除隊になった。丁度渡辺はま子の「忘れちや嫌よ」という流行歌が風靡していた。

昭和十八年一月、再び応召して、同年八月末、門司港より輸送船にのり込んだ。ああ堂々の輸送船の歌の通り、十六隻の輸送船は一列縦隊に並び一路、シンガポールに向けて南下した。途中、台湾と仏印のサイゴンに寄港し目的地に到着したのは、内地ではすでに秋の色濃い十月だった。サイゴンの埠頭では白人の捕虜がパンツ一枚で全身セメントだらけに

なつてセメントの荷上げをしていた。

陽に灼けて赤鬼のような捕虜を銃の床尾飯で殴っている兵隊があつた。シンガポールでは雲をつくような印度兵を、小男の日本兵がとび上るようにして、帯革でムチ打っているのを見た。占領軍である日本人の眼からは、現住民はまるで虫ケラのような存在であつた。

スマトラのメナドの警備隊へ到着して申告をすました私は、一ヶ小隊の兵力を率いて警備隊本部から三十軒も奥にあるカンポンへ進駐を命ぜられた。新任の私をうまく島流しにしたつもりだったが、私にとって、この平和な別天地は、まるで楽園でありそして、私はその楽園の王様だった。

隠^{いん}花^か植^{しょく}物^{ぶつ}

……悦虐絵灯籠 その四……

万 田 不 仁

長い間、待合の女中をしていた母が漸く独立して、海辺の町に小さいながら待合を開業した翌年、母は幸男をそれまで預けておいた田舎の兄から引取った。

辺鄙な農村の静かな明暮れのうちに育った幸男は、汽車の乗換駅のホームでまごまごしたり、階段で転んだり、東京で自動車に乗る段になってこわがり、人力車がいいといって早くも母の剣突を食った。

湾を一望に収められる堤防の傍の新らしい二階建の家、それが母の生活の城だった。風の吹き荒れる日には二階の屋根までも浪飛沫

があがり、窓ガラスが濡れ、雨戸を締めねばならぬこともあった。山国育ちの幸男は潮の音に暫く馴れることができず、荒天の日は殊にどうどうと堤防に打寄せる浪におののき、そぞろに田舎が懐かしくてならなかった。

酔漢の声や絃歌のひびきも、田舎出の少年の内気を解きはぐすより却って日増しに病にも似たメラニコリックな表情、物憂げな動作を見せるようになった、その原因の一端をなすらしかった。幸男は母の賑やかで、多忙な日常の陰にひっそり隠れるように勉強部屋であり寝室である四畳半に閉じ籠る。学校でも

重い田舎訛が恥ずかしく当分は孤独だった。母は毎日大抵夕光がさす前に湯に入った。

幸男と一緒に入ろうという。その度毎に彼は内心こだわった。生れて直ぐに里親の手に渡され、ついで田舎の伯父夫婦の下へ連れていかれて、そのまま母親に規しむ機会に恵まれなかった彼には、母は何かよそのおばさんのような気がした。窄い湯槽の中で母の白い裸体に触れるのが、唯恥ずかしくてならなかった。

「小さいネ、田舎ツ子の癖に骨が細い。もつと一杯食べなきゃ駄目よ、兵隊さんになれな



いから、フフフ」

背中を洗ってくれながら母は笑う。虚弱そうに見える一人っ子の体格を不甲斐なさげに眺める。幸男は母の上背のある立派な体に気圧された。その脂肪の乗った下腹が何かの拍子にぱっくり裂けて、そこからどろどろと真

赤な腸がずり落ちそうな不安に襲われたし、また石鹼をたっぷりタオルに含ませて、背中や腰をこしこし強く流されると、次第に体が押し曲げられ、遂にはタイルの上に俯せに倒されて、背中の上に母の肉置豊かな体がのしかかって来る。自分の痩せた体はそのため比

目魚みたいに押し延ばされてしまう——そんな奇妙な幻想が浮かんで、頭が熱くぼおっとなるのだった。母は小学四年生になっている彼の隅々まで洗い尽くさねば気が済まぬらしく丹念にタオルを使うので、入浴の後、彼はひどく疲れたような気がした。

体を丁寧に洗われるというより何か大きな白い魔女に玩具のように翻られ、虐げられるような感じだった。彼は幼い日に読んだ鯨の腹の中を彷徨ったピノキオのことや、うわばみに吞まれた旅人のことなどを思い出して、自分の体も母に洗われるうちに段々縮小するばかりで、ひそかな不安がもし事実になり、母の下腹がぱっくり裂けるような時には、その赤い切れ口にすうっと吸い込まれるに違いない、そんな幼児の考えのような夢想到に取付かれた。自分の体が大きくなっていくより逆に縮み小さくなっていく、益々無力になって果ては巨大なものの中に捕らえ入れられ、跡形もなく消滅してしまう過程を彼ははじめは嫌悪したが、やがてけだるい自棄的な一種の陶酔感と共に繰返し思い描くようになった頃、強者に対する弱者の心で、彼は母を恐れながらもずおずと母に甘えかけるのだった。

ひよろひよろと背の伸びそうな、臆病そうに大きい瞳の光る、坊っちゃん刈りの少年幸男の孤独は、母の許へよく話しに来る芸者の一人によって忽ち和らげられた。

春の雪がうっすら降った日の午下がりと、廊下で壁へゴムボールを投げて遊んでいると「あら、幸ちゃん、おかあさんは？」

クリーム色のコートを着た若い芸者が勝手からずかずか上がって来た。

「お詣りいった、お不動さんへ」

「ああ、そうだ、今日は四日ネ。じゃ、また後で来ます」

芸者は帰りかけた。幸男はまた壁にゴムボールを投げた。

「ひとりじゃつまないでしょ、私としない？」

廊下の端に未だ芸者は立っていた。(馴れ馴れしいやつだな) 幸男はいやだったが、微笑してもうボールを受取る構えをしている芸者の人なつこい態度に何となく釣込まれた。

「キャッチャー富奴さん」

芸者はコートを脱いだ。紫の着物が少年の目に鮮かに映る。ボールを投げ合ううち幸男と目が合う度に富奴はにっこり笑窪をつくって笑った。人見知りする彼はその美しい笑顔を持余した。富奴はぼってりした大輪の花が重たく咲き誇っているようなひとに見えた。ボールを受止めようとして真顔になると、時代物映画に現われる沢村国太郎に似た凛々しい顔付になった。

富奴は無造作に幸男の部屋に入ってきて、暫く日本少年や譚海の頁を繰って拾い読みし

ていくようになった。

「うわッ、ずいぶん講談があるわネ」

青い紗をガラスにかけた本箱の中を覗いて富奴は驚いた。そこには塙団右衛門や真田十勇士、岩見重太郎など、緑色のレザーを背に

かけた少年向きの講談本がぎっしり並んでいる。いったい体操を始め、活発なことをあまり好まない彼が講談本を愛読して、豪傑たちの武勇譚にいつ時夢中になったのは、腕力に自信のないひ弱な少年のコンプレックスの現われであったのかも知れない。

「あら、この炬燵冷たいわネ、火が消えてるんじゃない？」

「いや、今炭入れたばかりだよ」

「あらッ、一寸待ってよ、私胡坐かいてるんだから、フフフ」

富奴の柔かい指が炬燵蒲団をまくろうとする幸男の手を抑えた。幸男は固い芽がほころびるように、徐々に富奴が好きになっていった。昼間、富奴が遊びに来て、母と帳場で話込んだ挙句、時計の音にあわてて帰ってしまった。うちにやばれた夜など、美しいお座敷着姿で一寸幸男の部屋を覗いて、彼の目を見張らせることもあった。(お姫様のような……) 彼

は真実そう思った。

「幸ちゃんの顔、滝口新太郎に似てる……」

と、富奴はいった。大石主税に扮したその俳優の美少女のような顔を思い浮かべて、幸男は頬を赤らめた。

富奴に誘われて、便所の臭いのする古い映画館へいった。画面に屢々雨の降る傷んだフィルム。奴の小万の派手な立廻りがあった。

小万に扮した女優が貫禄たっぷり荒れやくざ共を斬り払って、スクリーンの中央に大腿を広げて立ちはだかった瞬間、その股間にぱらっと白い襪のはしが垂れ下がった。

はッと観客が声を吞んだ——そう幸男には感じられた。女が襪を締め込んでいる、それは彼にはどきッとなる程の刺激だった。彼はそれから後のシーンの数々を上空で見過した。大人の女の白い太腿、白い下腹、白い尻そして白い襪、それ等のイメージは奴の小万を放れて、一緒に入浴する際の母の湯に赤らんだ腹や腿や尻を生々しく醜に写し出し、そこへ白蛇のような白い襪がきしきしと纏いつくのであった。彼は自分の胸のうちの動揺を富奴にさとられぬよう態と硬い顔を映画館のくらがりの中でつくっていた。

威勢のいい相撲の触れ太鼓が三業地に鳴っ

て、大相撲の一行が巡業に來た。幸男は母と観にいった。

「葦簾の間から覗いたのよ、おかあさん、出羽嶽がネ、揉んでいるのよ、フッフ、念入りにネ」

「そりゃアそうよ、まわしをきっちり締めるためにもネ、小さく固めとくのよ」

「ハハハハ、いやアだ、おかあさん」

母は帳場の長火鉢の銅壺で一本つけて、ちびちび飲んでいる。その前で喋っている富奴も頻りに盃を受けて、桜色の顔になっている。五月雨がじくじく降り続く鬱陶しい日である。母は相撲ファンで、相撲は弱いが、美男の太郎山が最頂だった。二人は少し酒の入ったせい、幸男が傍で新聞を読んでいるのに、巡業に來た相撲取の誰彼を些か淫らな話の材料にして笑い興じた。そのうちに出羽嶽のスロモ―な取口の話になると、富奴がここにこ笑いながら幸男の手を取った。嫌がる彼を相手に取口の真似をしようというのだ。

「ハハハハ、富ちゃん、うまいネ、芸者なんかやめて女相撲になんない、ハハハハ」

屁放腰の幸男を引廻して巫山戯半分相撲の真似事をする富奴は身軽な簡単服姿だったから母が面白そうに笑うと一層調子づくようであつた。幸男は富奴が気遣いになったのではないかと疑った。

「ホラ、ホラ襖をやぶくわよ、向こうの座敷でしなさい」

「ハイ、ハイ、幸ちゃん向こうへいこう」

ダンスのように幸男を抱えて、富奴は廊下を隔てた六畳の座敷へ移る。

「やだよ、女となんか相撲取るの……」

幸男は富奴の手を振切つて勉強部屋へ逃げ込もうとするが、相手はいっかな放さない。

「だめよ、これから本場所よ、玉錦に綾昇、幸ちゃんが玉錦、フッフ瘦せ錦だネ、ハッケヨイ」

幸男のバンドに両手をかけて押して来る富奴の腹に押されて、幸男は後退するばかり。

「まア、力無しだネ、この子、押し返してごらん、富ちゃんなんか酔っぱらってるからすぐ転ぶよ」

長火鉢の前から母が声援したが、幸男の困惑をよそに富奴をけしかけているひびきが含み笑いにも感じ取れるのだった。(母さんの意地わる) 幸男は弱った。

「そらッ、綾昇得意の内掛」

富奴の弾んだ声と共にその右足が彼の左足のふくらはぎに掛かつて、こらえようもなく彼は富奴と折重なって倒れた。

「私の勝ちよ、ホラこの通り、起きられないでしょ」

彼の胸の上に富奴は丸い膝頭を乗せていった。上から見下されると女の体がずっと大きく見える。

「ハハハハ、富ちゃん今度は柔道？　あまりいじめないでネ」

そういわれて、富奴は母の方を横眼で見た。睫毛が濃くきれいな、妖しい魅惑を湛えた眼差だった。

「いいわ、幸男は弱虫だから、じきに泣くのよ。構わないからもう少し抑えてごらんない、きつと泣くから、ハハハハ」

母は冗談のように富奴にいった。母も富奴の味方で、二人してボクをいじめようとしている――幸男の胸の中に蟠まっている母をよそのおばさんのように思う気持がこの時むくむく拡がって、急に母が憎らしくなった。そしてすっかり気を許していたのに母と楽しそうに酒を飲んで、酔っぱらい女みたいになつて相撲をしかけた富奴も。彼は我武者羅に、じたばた暴れたした。

「そう、そう、幸男頑張りなさい、もうひと息、ハハハハ」

(何と馬鹿な母さんだろう) 呪いながら幸男は富奴を跳ね飛ばそうと両足で空を蹴った。富奴はそんな幸男の両手を抑えようとしながらチラチラ母の顔を窺ったが、母が相変らずにやにやしているのに勢を得たらしく、彼の胸の上の片膝をずらせると、そのまま馬乗りになり、彼の顔を両腿の間に挟み込む体勢になった。

「おかあさん、この通りよ、まだまだ幸ちゃんなんかには負けないわ、フッフ、どう? 幸ちゃん、重たいでしょ? 勘忍々々、少し巫山戯過ぎちゃった」

富奴は笑いながら長火鉢の傍へひと飛びにいった。母がまた可笑しそうに笑った。

「ああ、いやな雨、くさくさしますネ」

買物に出ていたお座敷女中のシゲが勝手の戸を開けたので、幸男は自分の部屋へ引込んだ。

——富奴のバカ! バカ女だ。口の中で何度も呪うように繰返した。帳場で母の機嫌のいい笑声がした。

幸男は試験の時以外は毎晩眠る前に講談本を読んだ。その晩も寝床に入ると本箱から一冊を取り出した。彼は目に悪いといわれても寝転んで本を読むのが好きだった。

賑やかに遊ぶ客が来たらしく、半玉の甲高い声が太鼓の音の間に聞えて来る。講談は根津甚八だった。

牢人根津甚八は、信州、上田の城下に逗留中、猿飛佐助、霧隠才蔵の両名から真田家へ仕官するように勧められる。甚八は自由な武者修業生活が捨て兼ねてウンといわない。武勇の士甚八を真田家としては空しく他国へ去らしてはならぬ。猿飛と霧隠は一計を案じる。ここに真田家に今様巴と称せられる勇婦がいる。猿飛と霧隠は甚八に提案した。宿屋の甚八の部屋で、この勇婦と甚八が力競べを組討の形でして、もしも甚八が負ければ真田家へ仕官して貰うという二人の忍術使いの提案は甚八を大笑させた。ところがいざ甚八が乗込んで来たくだんの勇婦と取組んでみると流石に女ながらも大力の持主、甚八も侮り難くなり本気になって捻じ倒そうとした時、予め隣室にひそんで気配を窺っていた猿飛と霧隠が忍術で姿を消し、甚八の部屋に忍び込むや否や勇婦を圧倒しようとする甚八の足を掬った。不意を食ってひとたまりもなく転倒した甚八の胸板へ馬乗りに跨った勇婦は両手で力一杯甚八の喉を締めあげる。う、う、ううう、甚八は手足を動かして女の体を押し除け

ようとするが、手は頭の方に回った霧隠に、足は後に回った猿飛に固く抑えつけられているから全く用をなさない。遂に甚八はしぶしぶ降参してしまう。

幸男はこの講談本では、この場面に最も心魅かれていた。既に何度も読返してその頁も何頁か知っている。彼は自分が甚八になった心算で、激しい組討の光景を想像して、その度毎に新鮮な興奮を覚えていた。甚八になった彼を大盤石のようにしっかと組敷く勇婦のイメージは、前は学校へいく道で行き会う高島華宵の描く少女に似た大柄な女学生だった。しかし、富奴と親しくなってから、その空想の組討のヒロインには必ず富奴がなった。彼は富奴の勇婦と揉み合い、捩じ合いた末に勇婦の膝下に組敷かれてしまう自分の甚八の姿を微細に頭の中に描き出し、愈々空想を逞しくするうちに、そんな女の尻に圧し拉がれている自分を同時に傍から眺める、腕く甚八の手足を制する役目の猿飛と霧隠の立場に身を置くことによって、ひとり頭の熱くなるまでに、倒錯的夢想の虜になるのである。それは本当に秘密の愉悅だった。彼はぼんやり薔薇色の照明に浮き出た幻のベッドの上で、この世のものと思えぬ妙なる音楽の漂

う中で、富奴にいつか母の見ている前で戯れにされたように馬乗り組敷かれたまま死のような深い睡りの底に沈みこんでしまいたかった。

スーツと襖が開いて、鯉と水泡をあしらった涼しげなお座敷着の裾を引いた富奴が入ってきた。

「あら、また講談読んでるのネ、よく飽きないわネ、勉強しないといけないぞ」

富奴は大きな瞳を見張って、夏蒲団の上に起き直った幸男を睨む真似をする。

「学校なんて嫌いだよ、ぼく、卒業したらすぐ働きたいんだ」

「ばかねエ、おかあさん、大学までいかせるんだって張切ってるわよ」

「有難迷惑さ……ぼく、あまりおかあさんが好きじゃないんだよ、何でも命令するばかりだから」

「罰があたるわよ、そんなこというと」

「早く働きに出て、お金を儲けたいんだ」

「お金を儲けて、どうするのよ？」

「金持になってネ、こんなちっぽけな待合ではなくって、銀月や福の家みたいな立派な待合へ上がるのサ、富ちゃんよんであげるよ」
「こらッ、ばかなこというんじゃない、幸ち

ゃん、こんなところへ遊びに来る人はネ、みんな……ばかなことを考えてるとひどい目に合わせたげる、おかあさんに代ってお仕置してやるから……」

きつい顔付になった富奴は、本当に睨みつけた。

「どんな風にサ？」

ある漠然とした期待を抱いて、幸男は媚びるように笑いながら聞いた。

「こうしてよ」

富奴はいきなり幸男の後へ廻ると、右腕を少年の頸に巻いて絞めようとした。

「悪いこと考える子は、こうして懲らしめてやるんだ。段々苦しくなるぞ、どうだ！」

富奴の腕は深く頸の下に食い入り、その豊かな胸が重たく背中を圧した。濃い酒の香と香水の匂いに包まれて、幸男はうっとりしかけた。しかし、富奴はすぐ腕を離して

「ああ、幸ちゃんなんか、相手にしてられない。これ持ってきて来てあげたのよ、大事に仕舞っというてネ、あたしが外へいってもネ」

帯の間から一葉の写真を取り出して、一閑張の机の上へ置くと、そそくさと部屋を出ていくのだった。写真は大手札型で、新舞踊を舞っている富奴の姿がきれいに撮れていた。

省掛時次郎らしい男装の凛々しい姿に幸男は富奴と一緒に見た奴の小万の映画の、あの妖しい一シーンを思い出し、胸が熱くなった。

田舎にいた頃も、そうだったが、幸男は時々しつこい便秘に悩まされた。

暑い盛りには彼は硬くこったような腹を憂鬱そうに指で押していた。

「出ないんでしょ？ やっぱり出ないのネ、浣腸してやろうか？」

割合投遣りにしているようでもやはり女特有の勘で幸男の日常を眺めている母は無造作にいった。

「浣腸が一番ですよ、お顔の色も少し悪いみたいだし、虫もいるかも知れませんよ」

シゲも傍から口を出した。幸男は浣腸だけは絶対にいやだといって、日頃何事も母のいうなりになっている従順さを忘れたように強くかぶりを振るのだった。

「そう、じゃいいわ、おなかの中に一升もお通じを溜めとくといいわ、きたない子だネ」

母は笑って無理強いはしなかった。

母は朝早く帰る客を送り出した時など、そこに寝床をとる帳場に朝刊を持込んで、三面記事や小説を読んでから、またひと睡りすることがあった。

その朝、日曜という、不思議に早々と眼が覚める幸男が玄関へ新聞を取りに出た。

「いま私が読んでるよ」

帳場から母のまだまだ睡そうな声がした。

幸男は入って行って、母の寝床の脇に胡座をかいて読売のスポーツ欄を開いた。彼はプロ野球の阪急ファンで、阪急が勝った翌日のスポーツ欄は丹念に読むのであった。

階段に足音がして、母は急いで廊下へ出ていった。客は富奴の客のようで、彼女のお気をつけて、またお近くにネという明るい声が聞えた。母は小走りに戻って来て、黙って幸男の傍に坐った。黒いユニホームの選手が滑り込んでいる新聞の写真を見ているのかと思っていると、

「幸男、浣腸してあげよう」

へんに優しい声でいった。

「えッ」

幸男は驚き、昨夜いやだって断ったじゃないかと怯え易い目に非難の色を一杯に浮かべて、母の顔を見た。

「いうこときくよ、すぐに気持よくなるから、蒲団に横になりなさい」

母の手が幸男の肩を押した。彼はその手を振り払って立ち上がろうとした。すると襖が

開いて、扇模様の浴衣を着た富奴が、通せんぼの恰好よろしく大手をひろげて立ち塞がった。

「駄目々々、おかあさんのいうことをきくものよ、迷がさない」

「富ちゃん、早く抑えちゃおう」

「いやだなア、母さんばく自分でやるよ」

「駄目よ、できやしないんだから、騒ぐとおシゲさんやねえやをおこすよ」

母は低い声で威した。雛人形の官女みたいに取澄ましたところのあるシゲや顔中にきびだらけのずんぐりした力のありそうなねえやに來られてはもっととみじめだ、彼の体から抵抗力が抜けた。彼は忽ち母の寝床の上へ富奴に押し倒された。そして富奴はそのまま有無をいわず彼の胸の上にどっかり馬乗りに降り、膝の下に彼の手を敷いた。

「ごめんネ、幸ちゃん、でも、おかあさんに頼まれたんだもの、フッフフ、おかあさん、まるで芝居で止めを刺す時みたい」

「ハハハハ、浣腸の止めよ、幸男もう観念なさい、いちじく浣腸だから簡単よ」

坐蒲団が一杯幸男の尻の下に入れられ、それから母の手が無造作に彼の足を開かせる。瞬間彼はいちじく浣腸の人肌色の器を何とも

いやらしく思い浮かべた。

「力まないでネ、富ちゃん暴れないようにぎゅッと抑えてて」

「ええ、いいわ、おかあさん」

お尻から下腹へかけて、悪寒に似た気味わるい冷たさがひろがり、幸男は富奴の膝下でぞくぞくと身震いした。その白い顔は丸窓から差す朝日影と富奴のゆもじの緋に染まったように赤らんでいた。

母の強引な浣腸の結果、幸男の便秘は直った。体中を涼しい風が吹抜けていくようで気分がよく、彼は涼み台に上がって、沖の白帆を眩しそうに眺めた。ライトブルーの湾上にゆっくり白い雲が動いている。その雲をじっと見詰めていると、その団々たる形は、二人の大柄な女に見え、更に彼女等の間に小柄な一人の少年が挟まれるように立っているかのようにも見えた。大女にいたがられていた少年、彼にはそんな風に見えるのだった。

秋になって、富奴は彼女の病身の父と弟妹たちのためにより多い借金を負い、よその土地へ住み替えていった。彼女は無意識であるうが、幸男の未熟な心の底にマゾヒズムの赤い花の種子を、充分に蒔いていたのであった。

(おわり)



△空想の城から▽

天国とその隣

九 雅 節 夫

一、
東京から急行で行っても、その旅は猶二日を余る、遠いさいはての国である。

昭和十八年秋というから「勝ってカブトの緒をしめよ」とか「撃ちてしままん」とか、喧ましく言われ出した時分のこと。その北辺の土地に「女だけの牢獄」として知る人もあった刑務所では、大部分の女囚が軍事工場に徴発されてしまったあと、女子特別鍛練所として新しい発足をしたのであった。

それは、当時の日本の憲兵政治が必要とした、恐怖と再教育の、いわばその一番下層の組織である。東条大将を批判した一新聞記者は、一兵卒として必死の前線へ連れ去られ、

時の陸軍大臣に嫌われた某工場主は、これもちまち召集されて行方知れずになった、という。みな、その蔭には憲兵組織が働いている。壮丁に対しては、そのような致命的な処置を下し得ることが出来得るが、然らば女子を懲罰するには？ 憲兵政治は勿論、在来の法務行政には満足出来ず、治安維持法を拡大解釈し、更に特別立法して、この女子特別鍛練所を設けたのであった。又将来、陸海軍將兵の数量に不足が生じた時、娘子軍の編成可能なりやのテストケースとしても重要視されていたという。

ただ今日では、一切の秘密を握る、赤松照子という、この女子特鍛の所長が終戦直後自

殺してしまった（一説に暗殺されたという）ため、すべては闇に葬り去られてしまったというのだ。事実は小説よりも奇なり、という格言を思い起して貰うならば、疑い深い読者も或いは信じてくれよう。

二

まだ秋口とはいえ、この北辺の地では夜はしんと冷えこみ、人の息も白い。

さっきまで、二号房で対抗ビンタの烈声と女囚達の悲鳴。それに混って、督励する女看守の鋭い押えつけた叱声が、夜も昼も灯りつづける明るい高い廊下にぎんぎんと反響していたが、いつの間にかそれも終ったらしい。

大阪方面のキャバレー、カフェで不良少女

狩につかまり、短期特別教育中の女囚達も、今はようやく許されて、泣き泣き寝入っているのだろう。彼女らは教育を了えた上で、全国各地の軍需工場へ徴用されるのだ。

するとそれが終るのを待っていたように、隣棟の三号房では

「点呼ノ 点呼ノ」

と、当番看守が長い廊下を歩いた。

「総員起床せよ、防空態勢で整列ノ」

たちまち、死んだように眠っていた二百人もの女囚達は、口々に呪いの言葉を呟きながらごそごそと動き出した。意地の悪い女看守達は、常夜灯のスイッチを切ってしまったので、この房のだらしない娼婦達は夜服のままワイワイ騒ぐばかり

「整列、整列」

と命ぜられるので、そのままで暗い中を手さぐりで廊下に立ちならぶと、パツといちどきに房中の電灯がともされた。

「そのざまはなんですかノ」

と、目も覚めきらぬ女囚達の前に立ったのは、主任看守の高ヒロ子という学校出の若い女である。

「五分の間に防空態勢のとれたものは一人もない。今日は、今後のみせしめのために、

各班長、責任をとって修身を受けます。他の者はその場に正座！」

十人の女囚の代表者が前に出て罰を受けるのだ。迫る寒さと恐しさで、立ったままブルブル脚を震わせている。二十人近い女看守たちは、十脚の粗末な丸い椅子を運びこんで来て、広い間隔をあけて一列に並べた。

「各自位置につけノ」

夜服で一人ずつ椅子の前に立つと、

赤松照子は赤い唇から白い歯をほころばせて、妖艶な笑みを浮べる。

「先生、明日の晩はやっぱり鞭で懲戒するんですか？」

「ああ、私は鞭が好きだからね」

「鞭より修心棒は如何？ さっき三号室で見に来ましたけど、よく利くわ。一つ叩く毎にギャアギャア泣くし、あの位利けば、どんな囚女だって甦生するわ、素晴らしいのよ」

「しかし、お前、鞭でピシリときまる音も気持ちのいいものだよ」

三

夏でも寒いこの北辺の地、しかも時は十一月、毎日零度を越える朝晩が続いている。囚人たちが何よりも楽しみにしているのは、一週にただ一度だけ、時間を限って許される入

浴だった。この日は、第二号房二百二十名の入浴日で、そして又その一週間の「清算日」

——つまり恐しい懲罰の行われる日なのだ。もう既に一週間ぶりのほのかな湯気に、肌の色を甦えらした女囚たちが、次々に浴場から裁縫室へつめかける。五十畳敷きの和室に正座して「清算」を待つのである。

鍛練所の主任女医、松本はる子はそろそろ「呼び出し」の始まるのを待って、診察の準備を初めた。

やがて、キリリとした男装の赤松照子所長と、二号房主任看守の横溝みか子が、今日の受刑者の名簿をさげて医務室へ立寄った。

「今日の懲戒は何人程です？」

と女医、

「三十五名です」

と主任看守が名簿を見て答えた。所長が、

「横溝さん、今日の受刑者をいつもの部屋へ集めて下さい」

「はあ、それでは、受刑者に浣腸を処置いたしましては、いかがでしょう」

「うむ、それだ。しかし、それには器具や薬品が必要だろう」

「いいえ、浣腸器はここにございますし」

と女医は器具戸棚から、三〇CCのガラス

女医は今日最初の洗礼を行なうため、浣腸器の嘴管を上に向けて把手を押し、混濁した石けん液を進らした。

（愛梨愛絹絹田梨竹桜田絹愛梨愛大大）（梨絹梨東大絹）
（川花川川川中花野井中川川花川塚塚）（花川花浦塚）
館

天女と小悪魔

安

堂

馨

日本舞踊のお師匠さんといえば、たいてい三十過ぎの身体にもぐっと脂肪ののったいい年増というのが相場のようなだが、姉崎美治少年の家の隣りに住んでいる、栗島美千子という花柳流のお師匠さんは、はたちを過ぎたばかりのまだうら若い絵のように美しいひとだった。十八才で名取りになり、はたちになつて舞踊指南所の看板を、それはたいへんささやかなちいさな看板を、玄関の柱にかけたのだが、時は戦争末期で、舞踊・生花とかいうような華美な風俗は影をひそめ、ちいさな看板は出している、美しいうら若い師匠は殆ど開店休業の状態であった。

美治少年はこの隣家のうつくしいひとにあげた覚えを覚えていたから、一日のうちなんとなく自分の部屋の窓越しに、または庭の垣根越しに、隣りをのぞき見ていた。部屋の窓から見る場合、トイレとその屋根続きのバスルームとが見える。夜、トイレに灯がともると、その磨硝子窓に栗島美千子の肩から上の影が写り、彼女がしゃがむと、下の矩形の掃出窓に灰白くヒップの形が透けて写るのだった。かなり遠くから、しかも窓に透ける灰白い肉の影を見るだけだが、美治少年はたいへんよくない秘密なことをしているように、呼吸をつめ、汗をに

じませて緊張するのだった。

隣家のトイレに夜分灯が点くことは、美治少年のおそろしいような悦しい秘密だった。

トイレとバスルームとの間に、庭に楓の木が一本あって左右に枝を張り出しているからそれが邪魔になって、部屋の窓からバスルームの様子はうかがえないのである。

だから美治少年は、バスルームから湯気が洩れ、その窓硝子が水蒸気でしっとり濡れるときは、わざわざ庭へ下りて垣根越しに見るのであるが、たいていの場合、頭の影が写るだけで少年は失望した。

しかし、根気よくそこに立ちつづけている

と、ときたまには窓が少しひらかれて、栗島美千子の濡れた白い肩や乳房の上部が眼に飛び込んでくる時もある。そんなとき美治少年は全身がとろけるような愉悅を感じた。

美治は美少年で、しかも頭脳・感覚が鋭い少年である。初歩的な因数分解だったら、すでに解き得るという親の自慢話も、本当のことだろうと栗島美千子思った。

「解けるの？」
と当の美治にきくと「ううん」と少年は遠慮したようにかぶりを横に振る。それが一層美治を可愛らしく映した。

殆ど毎晩のよう

にトイレの掃出窓やバスルームの窓を監視されているとは夢にも知らない美千子だったから、ひるま退屈なとき、彼女は美治少年を家に上げてよく西洋将棋のお相伴をさせた。西洋将棋は、始め美千子が手ほどきしてやっていたのだが、美治少年の上達は異様なほど早く、もういまでは強い筈の美千子もたじたじであった。



「チエスズいぶん強くなったわね。もうお姉さんもかなわないわ」

と負けて美千子はいった。

「将来、日本将棋を勉強して棋士になったらいいわ、美治ちゃん」

棋士というのが美治には分らなかった。

「待っててね、お姉さんちょっと——」

すんなりと美千子が立ち上ると、

「どこに行くのお姉さん？」

「いいところよ」

美千子はずかしそうに、そっくりのこしてトイレに入っていくと、美治少年は胸がときめき、縁側へ出てそこから矩形の掃出窓をのぞいて見たが、夕陽が当たっていて、白

い影は透けて見えはしなかった。

が、そのかわり美千子が出て来ると入れかわりにすぐ美治少年はトイレにはいって、中扉をさらに開けて踏み込んでみた。

そして美治少年は期待したとおり、その白磁の陶器に栗島美千子のあたたかいユアリの濡れた跡を見て、しびれていた。

彼がトイレから出てくると、絵のように美しいお姉さんは花模様のしとねをとって横になっ

「ごめんなさいね、美治ちゃん。なんだか急におなかが痛くなって……」

もう帰ってね、というのだが、美治少年はおなかが痛いというのはうそだと察した。なぜなら若い陸軍将校がいつのまにか家に上って来ていて、美千子の枕辺に坐り、軍服を脱ぎだしていたからである。

美治少年はひどく腹立たしい気持で、庭伝いに我家に帰ると、二階の自分の部屋に閉じ込めてカメラの修理にはげみだした。

セルフ・タイマーの付いた元来は精巧なドイツ製のカメラだが、伯父が旅行に借受けて行って器械を少し痛めてきたのである。それを少年の美治が独力で修理する。単に器用というばかりではなく、一種執拗な探求欲のあ

らわれであった。

器械にも、隣りのうつくしい生身のお姉さんに対しても。

夜のとぼりが、しだいに外を暗くしてくると、カメラの修理を続けながら、美治少年は隣家のトイレに注意を怠らなかつた。

「美治お坊っちゃま、お食事なさいませ」

そう女中が呼びにくると、彼はししぶ机をはなれ、下の食堂へ行りて行く。戦時中の貧しい食事だが、箸をとる前に祈禱し、しづかにゆっくり喰べなければならぬ。さて箸をおくと、足音をたてず一気に階段をかけあがって部屋に戻り、まっ先に窓を見た。恰度その瞬間、栗島家のトイレに明りがつき、窓に美千子の髪形が写って、その頭が沈むと、下の矩形の掃出窓に双つに割れた白い影が透けて写った。例の如く美治少年は愉悦を感じたが、次におっと息を吸ってしびれるように緊張したのは、男の——若い将校の影が折重って写って、同時に栗島美千子の鋭いふるえるような悲鳴が、はつきりと耳にとどいたからであった。

ドイツ製のカメラは精巧に出来ているだけに、一旦むりな損傷をきたすと、さすが美治

少年の知恵と器用さをもってしても、なかなか完全に修復できない。で少年はたいへん残念であったが、カメラを使ってトイレにおける栗島美千子の姿を盗み撮るといふだいそれた希望を、一時自らくじかねばならなかつた。それは本当に残念なことではあつたが、そうなれば、肉眼でカメラよりも正確に見てやろうという希望がこれに代つた。写真にとつて死ぬまで永久にかたみとして保存し得なくとも、肉眼で細密に眺め、一生頭に記憶していればいい、死ぬまで刻みつけておけばいい、と彼は考え至つたのである。

しかしこれも相当難関がある。

掃出窓を絶対気づかれぬように開けねばならない。わずか二寸も引いたら結構だが、いつも差込錠がしてあるので弱る。

(困った……)

絵のようにうつくしいそのひとと対い合つて、今日もまた、西洋将棋のお相伴をしながら、美治少年は思案にくれている。

「はい、お姉さまの勝。ぼんやりしているから美治ちゃんは負けるのよ。なにを考へてるのよ」

栗島美千子は少年の白い頬を指で突いた。そのちよつと痛い感触が美治は心地よくて、

「もっと突いて」といった。いったあとでハッとしていたが、美千子は「よし」といって美治を横から抱き締めて少年の耳を噛んだり髪の毛をつよくひっぱったりした。ひっぱるだけでは物足らないように、耳朶にしたように、髪を口で噛んだ。なまあたかいツバキで美治の髪と耳は濡れた。

「美治ちゃんたら、ほんと、憎らしいくらい可愛いわ。こうしてイジメてやる……」

美治少年は畳に押し倒され、可愛い顔のうえに、美女の腰がずしりとのっかった。

「私ったら、今日はなんだか気がクルってしまった見たい……」

栗島美千子はそういって、はげしく腰を揺さぶった。

「ううう」

あたたかいお尻に組み敷かれて、呼吸が止まって、美治少年はうめいた。ほんとうにちっ息しそうに美治少年の顔は咽のあたりから充血した。

しかし、その苦しさ、なんと甘い法悦であることだろう。

「ううう／＼ ううう／＼」

美治少年の脚は畳を強く打ち、両手が美千子の背中の髪の間をつかんだ。

「ごめんなさいね、かんにんしてね」

やがて美千子は美治少年を抱き起して詫びるのであるが、

「平気だよ、お姉さん……」

と美治少年は妖しくかわいい頬で笑った。

妖しい頬笑みは美千子にも漂って、

「わたしを好き？」

「うん」

「ありがとう。わたしも美治ちゃんが好き」

「お姉さん、どこに行くの？」

「ふふ、気になるの。おトイレよ」

こないだのように、また入れ代りに美治少年はトイレの中へはいつて、ふたたび栗島美千子のユアリンの濡れた跡を見たのであったが、そのときその小室の壁に一本の乗馬鞭がぶら下っているのが次に眼にはいつていた。それはたしかに陸軍騎兵隊の星印のいつた乗馬鞭であった。

なぜ乗馬鞭が、ここにぶらさがっているのか、それは不思議な謎のようであつた。美治少年には解け難かつたが、それでも彼は先夜この中で起つた栗島美千子のあの鋭いふるえるような悲鳴と、その鞭を、ぼんやりとはあつたが結びつけてみるふうであつた。

「暗くなつたから、もうお帰り」

美治少年がトイレを出ると、栗島美千子はやさしく肩に手をまわして、

「あさつて、またいらっしゃいね」

「明日は？ お姉さん」

「明日はだめ。お客様があるのよ」

きつとあの若い陸軍将校が来るのだ、と美治少年は直感した。そして美治少年は大変な嬉しい気持をしつつ家に帰って行つた。

栗島美千子の家のトイレの矩形の掃出窓の下に、美治少年が忍び寄つたのは、その日の晩であつた。

夕食をすましたあと、いつものように二階の部屋の窓から偵察していつて美治少年は今夜は特別うつくしいお姉さんが恋しかった。お尻の下敷きになつた感覚がなまなましく疼くからでもある。なまあたかく柔つていとお尻の感触は、一生消えないだろうと思われた。

ぱつと向うのトイレに灯がつくのと同時、美治少年は黒い魔物のように庭に下りて足音も立てず芝生を走つて、掃出窓の下に身をひそめた。淡い月の光があつた。

硝子に写る栗島美千子のほんのりとした輪郭は、淡い月の光のように薄白くてメロンのような形をしていた。

そつと窓に美治は手をかけた。

美千子が気がついていなければ、窓の差込錠は外れている筈だ。さつき美治は外して置いたのである。

やっぱり窓は動いた。

こきざみに十センチほどひらいて、美しいお姉さんの白い肌をとうとう美治少年は鼻先に見ることができた。美治少年は頭から爪先までしびれながら、蛇のような眼でつぶさに真珠色の隆起を観察した。

これが数時間前、自分の顔を押し潰してきたお尻の実体なのだ……！

うつくしい自然の芸術品を大なる感動で鑑賞していると、

「いけない子ね、美治ちゃんたらっ」

気づいていたのだ。

あつと美治少年は息をのんで青ざめた。

が、栗島美千子は頬笑んで、

「よく見たでしょう。もうしまうわよ」

立ち上って下着をたくし上げていた。

美治少年は逃げようとした。すると、

「お待ち。お縁から上っていらっしやい」

「いやです、僕帰ります」

「叱りはしないわよ」

「いやだっ」

といって美治少年は黒い魔物のように庭を飛んで、我家の二階の部屋へ帰ったのであるが、胸が苦しくどきどきしていた。

「美治ちゃんのばかあ——」

と闇の中から栗島美千子の笑う声がした。

夜中頃、その彼女が美治少年の部屋に忍び込んで来た。

びっくりしてベッドから体を起す美治少年に、

「しーっ」

といって、

「さつきはなぜ逃げたの」

さあいまから罰をうけるのよ、美治ちゃん覚悟なさいね、という栗島美千子は柔らかなあたたかく重たいお尻で美治のかわいい顔を押し潰した。

もはや自分はこの美しいひとのからだの下で窒息死するのだ、と呼吸が止まって真青になりながら美治少年は観念した。こうして死ぬことがなんともいぬ無上の法悦だった。そのとき、彼は眼がさめた。

——夢だったのだ。

夢と知っても、なんだか半ば夢のように思えなかった。栗島美千子の甘い肌の香りが部屋中に漂っているようではなかった。

「美治ちゃんのお馬鹿さん。もうおトイレの下窓はあけておいてやらないから」

翌日の午過ぎ、庭の垣根越しに栗島美千子は美治少年にその声を投げた。彼女は花壇の白菊を摘んでいる。美治少年は芝生で輪投げをしていた。少年は美千子からそういわれると苦しうに顔を赤くした。

「お姉さん、お客さんはまだ？」

「ええ、まだよ」

「いつかの軍人さんでしよう？」

「誰だっていいでしょう。美治ちゃんには関係がないことよ」

「……」

美治少年がしよんぼりすると、

「美治ちゃん」

栗島美千子は顔を薄赤くして、

「今夜もあの窓の鍵外しておくわ」

それから摘んだ白菊の花で面をかくすようにして

「夜を待ってて」

そういつて家の中へ消えて行った。

美治少年にとって、その日の夜のおとずれはたいそう待遠しいものであった。

彼はいつまでも夕陽の残る空を眺めたり、

前の道を往来する通行人を眺めたりしてじりじりしていた。

通る人に注意するのは、騎兵中尉がいつあらわれるかと見ているのだった。「夜を待って」と栗島美千子がいったのは、夜にならなければあの将校がやって来ないという意味もふくまっているようだった。

若い将校がやって来たら一体どういうことになるのだろうか。あのトイレの壁にかかっている乗馬鞭が、いったいどんな役割をするのだろうか。

好奇、不安、妬ましが美治少年の胸の中で渦巻く。

それにしても、今日はなんと長々とした夕陽だろう。美治少年は頬杖をついて赤い夕空と道を往来する人を眺めつづけた。

将校の姿はまだあらわれない。

そのうち、栗島家のバス・ルームの窓が蒸気で曇りだしたようだった。美千子の家のバスはガス沸しだから、煙はのぼらない。美治少年が一旦庭へ下りて見ると、やっぱりバス・ルームの窓は湯気でしっとり濡れてきていて、そしてその窓がちょっとひらいて栗島美千子の濡れた乳房の上部が見えたかと思うとぴしゃっと締まった。

「おほほ……」

と笑声がひびいた。

「美治ちゃん」

また窓がすこしひらいて顔が出て、

「そこからなにを見てるの？」

「……」

美治少年は返事をしなかった。

「怒ったのね？」

と栗島美千子はいう。

「……」

「やーい、怒った怒った」

いいながら窓を締めた。

美治少年は二階の部屋へ戻りながら、バス・ルームを見ていることも、美しいお姉さんが、ちゃんと知っていたことにひどく驚いてしまっていた。絵のように美しいお姉さんだけれど、やはり大人はおそろしいと感じた。

二階の窓から道を見ていても、空はまだ薄赤く照って、将校の姿は見えない。

美治少年は頬杖ついてしらすしらす居眠りしはじめた。小悪魔のような早熟の少年も、こうやって居眠りしている図は無邪気そうではんとに可愛らしい。

美治少年はまた栗島美千子の夢を見た。

それはこないだの晩、トイレの掃出窓に写

る美千子の白い影に将校の影が重なった情景の再現に他ならない、ともいえそうな夢であった。夢で、あの印象が甦ってあらわれていたのだ。鋭くふるえるような美千子の悲痛な叫びを、夢のうちに、美治少年は再度なまなましく聴いたのである。

（畜生っ……将校め……お姉さんにひどいことをしたら承知しないぞ！）

美治少年はうなされている。

「ああっ——」

という栗島美千子の悲鳴がきこえる。

（畜生っ……畜生っ）

「ああっ——許してくださいあなた——」

（将校め……畜生っ畜生っ）

「うふふ」

縁先から隣りの家の二階を見上げて美女はおかしそうに笑った。

「あの子たら、なにか寝言をいってるわ。可愛いったらありやしない」

湯上りの栗島美千子は白絹に紅い花模様のはいたあでやかな長襦袢を、帯を締めず、肩からさらっと羽織っている。

「ビジーちゃん」

と呼んだ。

お乳や太股を見せるつもりだろうか、しどけなく長襦袢は展いたままである。

「美治ちゃん——」

「？」

美治少年はハッとして眼がさめた。うなされて油汗がにじんでいる。

「どこ見てるの、ここよ」

いわれて縁先に視線を移した美治少年は、思わず息するのを忘れて、絵のようにうつくしい人の半裸の姿を見まもる。

「どうお姉さんのオッパイ？」

と栗島美千子はいたずらばく笑って、キュッと双つの乳房をつかんで突き出してみせるのであったが、ちょうどそのとき、表の道に馬蹄の音がひびいてきた。

将校が騎馬でいまやって来たのである。

マントの裾を風にふわふわひるがえして、なかなか勇ましくて、つい美治少年は見惚れるしまつであつたが、将校が鞭を持っていたことはちゃんと観察していた。

星のマークのついたあの乗馬鞭はやはりこの将校の物、と確認した気持だった。

蹄の音はちゃんと栗島美千子の耳にもきこえているはずだろうに、彼女はまた太股をさらしたまま縁先に立ち続けていて、さてとん

でもないことを美治少年にいいだしたのである。

「ねえ、美治ちゃん、大きくなったらお姉さんをお嫁に貰ってくれない？」

「将校さんが馬を下りたよ、お姉さん」

「いいのよ。それよりお嫁にしてくれる？」

返事しなきゃだめ」

「お婆ちゃんになるだろう」

美治少年は冷たいことをいった。

「まあ」

栗島美千子はにがわらいして、

「だいじょうぶ。お姉さんは天女だから、これ以上は決して年をとらないわ。いつまでも若くてこんなにみずみずしい肌をしてるわ」

「天女？」

ほんとうにこのうつくしいひとは天女なのかも知れないと、美治少年は本気に思った。大人でさえ本気に信じたくなるような栗島美千子のあでやかさである。

「おい美千子、いま着いたぞ」

門に馬をつなぎとめ、栗島家の玄関にはいった長マントの若い騎兵将校は、

「おい美千子、迎えに出て来ないか！」

とどなった。

「はい、はい唯今」

あわてて美千子が出て来た。

「なにをしていた」

「はい、いまお風呂を上ったところです」

「酒の支度は？」

「できております。お風呂になさいませ」

「ふむ。風呂を上って一杯飲んだら、たっぷり翳ってくれるぞ、その美事な体をな」

「覚悟しております。どうぞ存分になさってくださいませ……」

「鞭は？」

「おいしいけどうり、おトイレの壁に吊しておきます」

「くさりは？」

「簞笥の中にしまっています」

「よし。風呂を浴びる。湯加減をみる」

彼が風呂を上り、美千子の酌で盃を含んでいるときすでにトイレの矩形の掃出窓の下には小悪魔がひそんでいた。今夜も淡い月の光がななめに美治少年の顔を照らしている。トイレに灯がはいって、彼は緊張したが、美千子ひとりが入って来て掃出窓の鍵を外し十センチ余りひらいて、

「美治ちゃん、来てる？」

「うん」

「お嫁さんにしてくれる？」

「うん」

「あら現金ね」

と栗島美千子は笑った。

「待ってらっしゃい、もうすぐよ」

そういつて急いで出て行ったのであるが、

その美千子と将校が二人一緒に中にはいつて

来たのは、それから二十分以上もたってから

であった。美治少年は足にしびれがきそうであ

った。だがしびれは心にきた。

「ああ……」

犬のくさりで両手首と髪の毛を一つにきび

しく括られ、中腰万才の形で天井の棧に鎖で

体を引上げられた栗島美千子は、ぬめらかな

柔肌の白い背中と腰と脚とを十分に美治少年

の眼に見せながら、髪の毛の痛さに早くもう

めいていた。

「ああ……髪が抜けそう……痛い——」

その彼女の白い背中とくびれ腰をなせまわ

していた将校は、乗馬鞭を振りかぶって背中

を一撃、二撃、三撃……みるみる血筋がまだ

ら縞になって走り、栗島美千子は鋭くふるえ

る哀しい叫びを挙げながら、見栄もなく、激

痛のために身をねじっていた。

「きえーっ、ああっ、ぎえーっ」

残酷な鞭の洗礼は血汐を点々と飛ばし、美

治少年の顔にもかかった。そのため朱に染ま

った顔で美治少年は大声で、

「やめろやめろ、僕の大切なお姉さんだっ、

やめないと、こん畜生承知しないぞ！」

と思わず叫んでいた。（おわり）

〔最新版〕 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙（9×13）焼付

各組一枚一組（送料共）

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円

B 5	足の裏擦り責め	（竹野）
B 6	おへソいじめ大写真	（関谷）
B 7	剃いだバタフライ	（関谷）
B 8	貴方に捧げた裸身	（大塚）
B 9	乳房責め絶叫苦悶	（大塚）
B 10	無防備双手吊り	（絹川）
B 11	豊満臀部エビ縛り	（水本）
B 12	一糸纏わぬ股間縛	（水本）
B 13	全裸亀甲股間縛	（関谷）
B 14	足踏付け二つ折り	（大塚）
B 15	尻突出しムチ打ち	（関谷）
B 16	手錠にもたえる	（竹野）

B 17	尻突出てエビ責め	（水本）
B 18	椅子開股鼻責触手	（梨花）
B 19	息もつがせぬ猿轡	（竹野）
B 20	投げ出した全裸	（関谷）
B 21	美しき尻部の露出	（絹川）
B 22	猿ぐつわ悦虐境	（竹野）
B 23	後手柱縛り脚線美	（竹野）
B 24	強制鼻挟水吞ませ	（梨花）
B 25	苦悶にねじる裸身	（関谷）
B 26	責めに気を失って	（関谷）
B 27	さアどうでもして	（関谷）
B 28	豊麗乳房膨隆縛り	（竹野）
B 29	投げだされた女体	（竹野）
B 30	裸身をくびる麻縄	（梨花）
B 31	強烈縛りに悦ぶ	（梨花）
B 32	全裸逆エビ片脚拳	（東浦）
B 33	踏みつけマゾ境地	（東浦）

B 34	すべてをさらけて	（関谷）
B 35	ムチ打ち失神寸前	（関谷）
B 36	クリップ鼻挟み	（絹川）
B 37	台上的マゾポーズ	（大塚）
B 38	吊られゆく美体	（絹川）
B 39	拷問に無惨な美貌	（梨花）
B 40	マゾ女性の表情美	（東浦）
B 41	喰い込む股間縄	（絹川）
B 42	灸責めに悶える	（梨花）
B 43	犠牲台の人身御供	（大塚）
B 44	美肌無茶苦茶縛り	（絹川）
B 45	裸身に立つ蠟燭	（大塚）
B 46	手枷足枷大写真	（四方）
B 47	鎖に悶える足首美	（柳初）
B 48	蛇責めに柔肌栗然	（梨花）
B 49	鼻の玩弄恍惚境	（大塚）
B 50	女囚菱縄さらし	（絹川）

十三人の女死刑囚

その四（カポー篇）

佐 出 須 登

1

一九四三年秋、ドイツ軍司令部に二人の美女が捕えられてきた。五年にわたった第二次世界大戦もようやくドイツ軍に不利となり、ここポーランドのラドムにある司令部では、次第に活発となってきた抵抗運動に手を焼いていた。その一味とみられる二人が捕まったのだ。なんとかして彼女らの口を割る必要があった。

二人の美女、クロチルドとミッチイはいすに縛られ、肌という肌に山いもと辛子をまぜ

てねったものをたっぷりぬりこまれた。柔肌はみるまに赤くはれあがり、猛烈なかゆみが全身をおそった。いくら身もだえしてもかたくいましめられているので、どうにもならぬ。かゆみがこんなにひどいとは想像以上だった。悲鳴に近い叫びが二人の口からもれる。目は血走り冷汗が流れる。効果ありとみたのか、ふたつの乳房の先にもぬりつけられた。肉体には何一つ傷つけぬこの拷問はすばらしい効果をあげた。

クロチルドはむち打ちや、針せめなら相当

耐えたらう。またさっさと死刑にされるのならいさぎよく死んだことだらう。だがこの拷問には完全に参ってしまい、すべてを白状したのだった。

ミッチイの方は最後まで口を割らず、死刑に処せられることになった。まず右手のいましめをほどく。その手は殆ど反射的にのびた。死を忘れるほどかゆみはひどかったのだ。だがその望みはかなわなかった。後に刑吏が控えていて、その手をつけ根から斬りおとしたのだ。さっと血汐がとぶ。次に左手が

自由になったが、これも同じようにかきたいところをかく前にバツサリとうちおとされ。三刀目は右脚を大腿なからたたき斬った。この足が生あるものの如くヒョロヒョロと前におどりでる。四刀目で胴体と首だけになってしまったが、まだもがいているところをみると生きているらしい。

五度目の刃が高々とふりあげられ、横なぐりに一撃、ミッチイの首は天井まで高く刎ねあがり、彼女の身体にのこされていた殆どすべての血汐がどっと噴きあげた。

クロチルドはこの哀れな最期をみてふるえあがった。そしてなんとか生命を助けてくれるように願った。それにはドイツ軍に身体だけでなく心まで売り渡す必要があった。即ちドイツ軍の一員となって、今までの仲間を、同胞を敵とするのだ。心弱くもクロチルドは、これに従った。いわゆるカポーとなったのだ。

2

ナタリーはミレーヌと共に冷凍室に入れられた。二人ははじめ自分たちがどんな目にあわされるのかわからなかった。ただ同志への連絡の途中捕まったのだから、白状を強いられていることは明らかだった。

二人は急に寒くなってきたのに気附いた。まさか冷凍人間にするつもりではないでしょうね。ミレーヌがささやいた。だがけんめいにそうではないと打消そうと思っても、事実はいなめない。ガラスの小部屋の中で二人はもがいた。意地のわるいことに寒暖計までおいてあり、零下十度を示していた。

温度は尚も下がる。二人で抱き合い、身体をこすりあって暖をとろうとしてもだめ。寒さはやがて痛みとかわる。

ナタリーは狂ったように戸の方にとびつき「白状するわ、たすけて」と叫んだ。ミレーヌがあわててとめようとしたがおそかった。こうして冷凍室の中にはミレーヌ一人がのこされた。

零下三十度、四十度。もう彼女は動かなくなっていた。ブロンドの頭髮も凍りついていく。カチカチに凍った美女の死体はワイヤーでひっぱられ、ゴロゴロとこころがってきた。冷凍マグロならぬ冷凍美女は、そのまま逆吊りにされ、長く見せ物となった。

ナタリーはすべてを白状した。その結果はいうまでもなく、同志の死をまねくわけである。生命を助けられても、おめおめ帰れるわけはない。結局はカポーとなるよりほかはない。

いのだった。

クロチルドとナタリーはドイツ軍に対する忠誠のしるしとして、二人の裏切によって捕えられた数十人の女性を処刑することを命じられた。同志たちの呪いとうらみをあびながら。おそろおそろ、その頸にロープをかけ台上よりつきおとす。或はギロチンのてこを引き、大刀を首すじめかけて打ちおろす。日が経つにしたがって二人とも次第にこのことに興味をおぼえてきたのは、サディスチンとしての性質がかくされていたものらしい。

刑事たちは或る日、斬首した生首をつかってあそんでいた。破丸投げのように投げられているのはジョーンの首らしい。又長い髪をもっているブリギッテはその髪をつかって、ハンマー投げにされている。テリーの首は最もひどい目にあった。足でもって何度もけりとばされている。どうやらサッカーのつもりらしい。ようやくゴールした時には、もうふためと見られぬ有様だった。ナタリーはその首を拾うと、「これはもう使えないわ」といって、ごみすて場に投げすてた。この言動はさすがの刑事たちをもふるえあがらせた。

3

やがて二人は絞首刑や斬首ではものたりな



くなってきた。折もよし、特に重刑にされるべき女たちが捕えられてきた。
十七才の処女、ジャタリーヌが第一番である。クロチルドとナタリーで協議の結果、ハ

リツケに処することにした。特に処女であることを考慮し、脚はのばしたままでおかれた。
十字架にかけられ、じっと目をつぶって刑

をまつ清純な少女、その目の前で二本の鋭い穂先をもった槍が、チャン、チャンとうちあわされ、ぐいと手もとにひかれる。この処刑吏が自分の仲間であるクロナルドとナタリーだと知ったら、さすがのジャタリーヌも動揺はまぬかなかったらう。

まず第一の槍がクロチルドの手によって左脇腹から右の肩先めがけてくりだされ、十分に深くつきささった。ジャタリーヌの朱唇から苦悶の声がもれる。つづいてナタリーの第二の槍、右の脇腹から深々と斜め上方につき通され、どっと噴きだす血汐が彼女の下半身をそめる。三度目に先がまるい刃のついたかき槍がもちだされ、ザックリと喉に食いついていった。パツクリと大きな傷口があき、おびただしい血汐が噴出する。頸動脈を断き切ったのだ。首がしずかに前にかたむく、こうして清純な乙女ジャタリーヌは約二十分で苦しみを終ったのだ。

4

しかし、これは本部のお気にはめさなかった。あまり早く殺しすぎるというのだ。この次の女も早く死なせてしまったら、二人は許されぬという。ふるえあがった二人は次のピ

アをむかえた。ハリツケのやり直しである。

ピアは同じハリツケでもジャクリーヌとなり、足を大の字にせいっぱいにひろげて縛られた。

ナタリーが真下に立って、ぐいと突きあげる。「ワアッ」と悲鳴があがった。これは女性にとって最も惨酷な刑であった。しかも刑吏は自分の仲間なのだ。はじめはいさぎよく死のうとしていた二十才の美女ピア、今や悲鳴と共にハリツケ柱の上でのたうちまわっているが無理もないだろう。つづいて腹部を二人でかわるがわるプスリ、プスリと刺してゆく。刃は一〇センチ位しか肉体に食いこまず、しかも穂先だけのこしてポロリとはずれる様になっていた。

「お願い、早く殺して」

けんめいに哀願しても、二人は耳もかさない。こうして二人で予定の三十本を刺し終った。腹部いちめんに槍の穂先がぶらさがっているのはすばらしいながめだった。しかも、傷はいずれも浅いのでまだ生きている。最初刺しこんだ槍だけが丈夫な柄をつけていた。これを金槌でもって更に深々とうちこむ。ピアの全身が恐ろしいけいれんをおこし、三十本の穂先がばらとぬけおちてきた。やが

て体内を貫通した槍が喉のところからあらわれる。ようやく絶命はしたが三時間もかかったらうか。本部からも合格点が与えられた。二人も極めて満足だった。

ピアの首は、このあと胴体から切りはなされ、槍先にズブリと刺し貫かれて町中をねり歩いたのち、次に処刑される仲間たちの獄舎の前に梟けられた。あまりのことに親友のデビーをはじめ皆が涙をながしたという。

5

エレオノラは、大きなざるの形をしたものの中に入れられた。身体がやっと入る位の大きさだった。背をかがめ、首を前にまげておしこめられ、上からも同じざるでふたをされる。クロチルドとナタリーでこの球状になったものを、何度も何度もごろごろところがされ、なかでは、目がまわるどころではなかった。ようやくまわし終って刑場の中央におかれた時、彼女がどんな格好になっているか誰にもわからなかった。

刑はこれからだった。クロチルドが鋭い短剣をつかんで球の真上から中央めがけてズブリと突き刺した。首が胸か、それとも腹か背か、どこかはわからぬが十分に手ごたえがあり、苦痛のうめきと共に球がゆれうごいた。

クロチルドはこの球を力をいれてころがす。ごろごろころがっていくさきには、ナタリーが槍をもってかまえており、これまた見事にグサリと刺しとめた。

このようにころがしては刺し、またころがしては突くことをくりかえすうち、球は血汐のため真赤にそまり、床もまた血の海となった。まだわずかにうごめいているらしい。生きているかぎりこの刑はつづけられるのだ。

完全に動かなくなってからふたをあけてみると、エレオノラは全身蜂の巣の様に穴だらけになって死んでいた。このせまいなかではよけることも、かわすこともできぬわけである。さかさにひっくりかえすと、ドサリと死体が床にころがった。

死体を検視する。槍は彼女の腹部を刺しつらぬいていた。つまり刑の開始の時、彼女の身体は逆さになっていたわけである。そのほか、ふたつの乳房、ふくよかな臀部、たわわにのびた大腿、そのいずれにも無惨な刺し傷がみられ、ただ顔だけが無事だった。ナタリーが完全に止めをさす。即ち首をかききったわけである。

6

新しい陣地を作るためコンクリート・ミキ

サーはさかんに活動していた。そこへ数人の裸女がつれだされ、あつというまに次々と投げこまれた。どろどろのなかでけんめいにもがき、はいあがろうとしてもすぐにつきおとされ、上から尚もどんどん注ぎこまれる。哀れごとく動かなくなってしまう。間もなくミキサーから、かこいの中に注がれる。どろどろと入っていくうち、大きなかたまりがボトン、ボトンとおちた。これが美女たちの最後の姿となったのだ。

デボラは二十九才になっていたが、優雅そのものといわれている女性だった。荒らくれの刑吏たちもこれを認め、殺すには惜しいといっていた。結局ヴィーナスそっくりの身体を石膏でかため、あとあとまでのこすことに決めた。『ありがとう、光栄のいたりだわ』これがデボラの最後の言葉だった。

タイルの上にしずかに横たわる美女、クロルドとナタリーの二人が脚から石膏をぬりつけてゆく。つづいて腰から下腹とすすめられたが、デボラはただ従客と身をまかせ、何一つうらみがましいことをいかなかった。首から下がすっかり固まってしまうと、皮膚呼吸がさまたげられ、これだけでも窒息してし

まうからいそがねばならぬ。

いよいよ顔の番となったが、鼻孔にべったりつけてしまうと絶息の苦悶で顔がみにくくゆがみ、せつかくの像がだいなしになってしまふので、ゴム管を入れて呼吸がきよう様にした。これがデスマスクならぬ生前のマスクをとる時のやり方でもある。

こうして正に生けるがとき……たしかに出来上るまで生きていた……デボラの全身像は完成した。これはホールの中央にかざられかなりのかっさいを博した。

半年後、ドイツ軍敗走の時、この像は破弾が命中し、あとかたもなくふっとばされてしまったという。

7

シルビアヒロンダは地上にねかされた。罪の軽い……つまり何もしていない……ロンダが先に刑をうける。彼女の身体の上には巨大な石材がおかれてあった。これがおちてきたらどうなるのだろうか、ふるえあがる美女の上に、合図と共に轟音をたてて落下してくる。見守る死刑仲間が、いっせいに悲鳴をあげたが、この音をきかなかったのは彼女ただ一人だった。五十キロたらずの小柄な身体の上

に、幅一メートル、長さ二・五メートル、厚さ五十センチ、重量五トンの石材がおちたのだからひとたまりもない。石材は大地に十センチもめりこみ、そのすきまから血汐がにじみでている。哀れな最期だった。

一方シルビアの方は、一枚の板が上にのせられ、裸身をおおったのは、せめてもの幸いだった。しかし彼女は一気に潰されるのでなく、徐々に殺されるのだ。クロルドとナタリーの二人が重さ二十キロ位の石材をはこんできて足の方にのせる。板から首だけが見えていたが、その顔がちょっとゆがんだ。続いてもう一箇。背の下に三角のギザギザの石が一ついれられているので、苦痛はかなりひどかった。十箇で板はひと通りおおわれた。合計二百キロといえば、かなりの重さである。息が苦しい、肋骨がミシミシ音をたてる。背骨も砕けそう。それにかまわず二段目がゆっくり積まれていく。杉なりにするので九箇になるわけ。苦しみを長びかせるため足の方を多くされたが、それでも胸が圧迫され顔色が完全に血の気を失っている。背骨にヒビが入り下半身がマヒしたらしい。間もなくにおい音をたてて下腿がくだけ、

大腿骨もポッキリ折れ、肉が裂けて血が流れまわりににじみでる。腰骨がメリメリとくだけ、同時に肋骨がポキポキと折れ、口からゴボツと血汐がふきでた。石材の山がぐらりとゆれ、大地にびったりとくっつく。勿論この間にあったシルビアの肉体は、紙のようにぺちゃんこになったのだ。ナタリーがはみでた首をつかんで、ぐいとひとひねりすると、赤い長い髪をもった彼女の首はかんたんにネジ切れてしまった。そのまま石材の上にのせ晒しものとする。

8

つづいて行われたのは爆破の刑だった。クラウデアはほかの十五人と共に一列に並んで前方に歩くように命じられた。前には地雷が埋められている。彼女たちは自分たちの身体でもって、この地雷原の清掃をされるのだ。火柱と共に女体は次々と宙をとび、ばらばらになってしまふ。それでも歩かねばならぬ。すぐに死ぬるだけ幸せだった。無事に着いたのは十六人中七人だけ、今度は方角を変えてつづける。二度目には三人にへり、三度目にはこったのは彼女一人となった。あたりには首や四肢が散乱している。クラウデアは自分の目の前に地雷をみつけた。『どうせ許され

ぬのだ』彼女は思いきって力づよくふんづけた。次の瞬間彼女は真二つになって消えてしまった。それこそ電光の様な早さで、首が右半身と左半身のどちら側になったかもわからなかった。

サンドラたちは火薬のたるに首だけだしておしこめられた。係がスイッチを入れると、轟音と共に一人ずつ、こっぴみじんになっていく。誰の番かわからぬので恐怖はひどかった。上半身がひきちぎれ、五十米も高く宙をとぶ。とみるまにぐんぐんおちてくる。マリサの首らしいのが見えたが、たちまち大地にたたきつけられて粉々になってしまふ。

フランソアーズの番がきた。彼女はいすに脚を大きくひろげ、手を後にまわして縛られた。誰かと思ってみてみるとクロチルドだった。息がとまるほど驚いた。しかもナタリーがひろげた脚の間に爆薬をおいたので二度びっくり、その先には五メートルほどの導火線がついている。

『さあ、死ぬのよ』『どんな気がするの』これが恐るべき変り方をしたクロチルドとナタリーの友に対する言葉だった。悪魔に魂を売り渡したとは思えない。

クロチルドが平然と導火線に火をつけた。二分でもえつきる。しゅうしゅうという音をきき、導火線のもえる臭をかきながらフランソアーズはけんめいに身もだえした。火は次第に彼女の所へ、あと一メートル。もうひろげた脚の間に入りこんだ。冷笑しながら二人が傍をはなれる。先端がチラリチラリと蛇のようにおどり、火の粉がとぶ。あと十センチ煙がすうっともぐりこみ、つづいて逆にどつと火焰をふきだす。同時にワアッという絶望の叫び声……これが哀れな彼女のこの世で最後の光景であり、この世にのこした最後の声だった。次の瞬間爆発音と共に彼女の肉体はみじんに砕け四散してしまった。こうして、彼女もまた何一つのこさず消えてしまった。この粉碎される瞬間は高速度撮影でとられ、首と二本の脚がふつとぶところが画面にのこった。

9

アンは細いスチールベルトを腹部にはめられた。二人が前にたつ。『お気の毒だけど、これでしめつけられて、ふたつになるのよ』『どんな顔をして死ぬか、早くみたいわ』これがその言葉である。だがどんなにくやしいと思ってもどうすることもできない。モータ

「が動きだすと、まきしめたベルトは次第に歯車の力でせまくなってきた。ちょうど脛の高さ、じりじりと苦痛がせまってくる。」

冷たい、固いベルトは白くて柔かい肉体に喰いこみ、皮ふと肉を裂き骨を断ち切り、最後に彼女の身体を両断するまでしめつけるのだろう。もう身うごきできず、ただ悲鳴をあげるだけ、下半身の循環がとまり冷く感ずる。その感覚も次第に失なわれていく。

クロチルド、ナタリーの二人は哀れなアンの鼻を、乳房を、そして脛をいじりまわす。アンの目から無念の涙がこぼれおちる。このベルトに刃がついていたらもう死んでいたろう。胴体はもう想像もつかぬほどしめつけられ、肉や骨がめりめりいっている。意識も次第に失なわれていく。

「ああ、もう死ぬわ」
「さよならね」

悪魔の様な二人の美女が叫ぶ。そしてギャッ、とあがる恐ろしい悲鳴。しまるだけしまりきったスチールベルトは、遂にアンの美しい肉体を完全に胴体から断ち切ってしまったのだ。皮膚が裂けただけでなく、一気に肉も骨も内臓も、何もかもスッパリとちぎれてしまった。ここに信じられぬ程大量の血汐

が噴出し、彼女の胴体がつくりと前方にころがりおちた。血しぶきをあびながら手を打って喜ぶクロチルドとナタリー。こうしてアンは「ふたつ」になってしまった。例の如くクロチルドが上半身から首を刎ねて止めとした。

10

キムは二十三才の透きとおる様な身体をもったブロードの美女だった。彼女には百打ちの刑が宣告された。死刑ではない、最後まで耐えぬけば釈放されるのだ。例の二人がむちを手にあらわれ彼女を逆吊りにする。

第一のむちは背にじだされた。早くも皮肉が破れ血汐がにじみだす。つづいて腰、腹、胸、さらにひろげた脚の間とたたかれる。悲鳴をあげて泣きわめいてもだめ、尚もかまわず打ちつづけられた。二十、三十と。

六十打目で気を失ってしまったが、許されるはずはなく、ひきづりおろして水をぶっかけ、息をふきかえしてから同じことをくりかえす。哀れ二度まで気絶したが、はっきり意識をとりもどすまでは次のむちは加えられない。

それでもとうとう九十五打まで数えることができた。あと五つだけ、どうやら生命だけ

は助かるらしい。全身血にまみれながらキムはほっと息をつき次のむちをまった。

しかしここでむちは檻の棒となり、打ち手もクロチルドとナタリーから本物の刑吏とかわった。九十六打目ははげしく背にうちおろされた。「ギャッ」と叫ぶ美女。背骨も折れんばかりの一撃だった。九十七打目は脚のつけ根に……「ぐっ」と声もれる。彼女にもやっと本気で殺すつもりだというのがわかった。

九十八打目は美しい腹部にはげしい打撃、かすかにうめいただけで絶息した。前方に首がかつくりとたれる。もう息をふきかえすことはないだろう。しかも九十九打目は胸部を狙い、肋骨をかんたんにたたき砕いてしまった。口から「ゴボツ」と血汐が噴きだした。

キムは全身から血を噴きだしながら床に横たわった。最後の打撃は首すじへ。頸骨がにぶい音をたてて折れてしまう。わずかに生命の灯がのこっていたとしても、これで万事休した。クロチルドが死体に向けより何かしている……。

11

この様に女囚たちは、次々とカポールの手によって殺されていった。しかし戦局はドイツ



軍に不利となり、敗戦となれば戦犯として問われるのは明らかである。早急に残り全部を処分する必要があった。

生き残った十数人を、舟にのせ海につれだす。ここでその脚に砲弾を一つずつ結びつけ次々と海に放りこんだ。メリーもその一人である。青い波間に白い裸身がちらりとしたか

に見えたが、そのまま真一文字に海底深く沈んでゆく。すみきった海はかなりの深さまでその姿をみとめることができた。

舟が岸についてみると、意外なことに一人がまだのこっていた。デビーである。彼女はこうして最後の死刑執行をうけることになった。

デビーは大きなガラス箱に入れられた。
「さあ、死ぬ時が来たわ。せいぜい苦しみなさいね、みているから」

クロチルドの言葉が終ると上から水が滴りおちてきた。このなか一杯になれば溺死するしかけである。腰から腹へと次第に水位があがる。恐怖にふるえる美女。それをたのし

そうにみつめている二人。

水は乳房を越し頸に達する。だが滴下する水は急激に少なくなった。やはりすぐは殺さず苦しみを長くするためだろう。「こんなことなら、重しをつけて海に沈められた方がよかった」

デビーは後悔したがもうおそい。水は口までやってきた、鼻ももうすぐだ。彼女は背のびしたが、ほんのわずか高くなっただけ、両脚をガラスの壁につけてささえ上にのぼる。水量は尚もましていく、もう二時間は経ったろう。頭の上は格子になっておりこれ以上はあ

がらない。とうとう水は鼻孔に達する。顔を上に向けて、わずかにのこる空間で呼吸する。ポタポタと滴りおちる水。デビーはガブガブと水をのんだ。苦しいのだろうか、それとも、少しでも水をへらそうというのか、あゝ鼻もすっぱりとかくれる。もう最後か、ブクブクと泡が鼻からのぼる。

デビーのかわいい顔が苦悶のためゆがんでいる。必死の力で格子のすきまから鼻をつきだしたが……。

「苦しそうね。楽にしてあげるわ」

クロチルドはこういうと、その鼻をつまんだ。どっとあがるかっさいの声。デビーの身体からすべての力がぬけ、しずかに箱の底へ沈んだ。ぐんなりとうなだれた身体、これで死刑は終了した。約三十分このまま漬けてから引きあげ晒しものとした。

12

一九四五年春、ドイツの敗北は数日のうちにせまっていた。数千の女性を処刑した刑場はすでにあとかたもなく片付けられ、アルコール漬になっていた多くの生首も、どこかに処分されている。ただどうして良いかわからぬのはカポー達の仕末だった。

ナタリーはこのままドイツ軍に身をゆだね

るより生き残った女囚になりすまそうと考えた。これは確かに名案だった。彼女がカポーであることを知るものは、すべて処刑されているのだから。

五月、ドイツは降伏し、連合軍が入ってくる。ナタリーは首尾よく、幸運にも助けられた犠牲者”になりすましたかに見えた。しかし彼女は計算違いをしていた。他のカポーの存在である。戦犯として捕えられた彼女らはナタリーも、その仲間だったことを証言したのだ。

裁判が始った。ドイツ人看守に対して割に寛大だった法廷も、自らの同胞を売り、しかもその処刑にまでたずさわったものに対しては許さなかった。ナタリーらはすべて死刑を宣告された。

それでも裁判にかけられたものは、まだ幸運だった。うらみに燃えた群衆はただ単に身をまかせただけのかよわい女性に対してモリオンチに処し、全身の毛をそりおとして追放したり、乳房をえぐりとりたりすることが行なわれた。ましてカポーに対しては恐ろしいなぶり殺しが加えられたのである。

死刑の判決をうけた哀れなカポー達は次々と絞首台の露と消えていった。その最後の番

にあたったのはナタリーだった。

ナタリーの死はみじめだった。必死に抵抗しつつ十三階段をのぼらせられる。へたへたとくずれてしまうのを、膝の下に手をかけて抱きあげ、尚も首をふつてもがくのにロープをひっかけてつきおとした。だがうまく絞まらない。三十分、四十分。やっと一時間後に動かなくなったので引きおろしたが、足が床についたとたんそのショックで息をふきかえず。勿論許されず再び十三階段をひきずりあげたが、このとき悲惨なことに、はらわたがはみだしてしまった。恐ろしい力で後手に縛ったつなをちぎって、ロープをはずそうと喉をかきむしり血を流す。すさまじい有様だった。

「ボタン」という音と共に、ナタリーの姿はとうとう踏板の前から消えた。この時、とうていこの世のものと思えぬ程の悲鳴があがった。今度は完全に絞まったらしい、だが尚もジタバタともがいている。こうして更に三十六分。通算して一時間三十六分を要してナタリーの絞首刑は終了した。平均十二分半、最高十九分という従来の記録を大きく破ったわけ。しかも彼女の両眼はうらみにもえるが如

く、どうしてもふさがらなかったという。

13

一方クロチルドは、ドイツ軍と共にその本国まで逃げようとしたが、天運はこれを許さずとうとう捕えられた。しかしその時はすでにナタリー以下の処刑もすんでおり、彼女の犯行を証言するものは今度こそ一人もいなかった。

クロチルドは勿論否認した。その結果拷問が加えられることになった。

彼女は四肢をひろげて床にねかせられ、直腸に高圧浣腸が施された。はじめに大腸がついて腹腔の大部分を占める小腸が次第に水でみたされる。それに従って下腹部がみるみるせりだしてきた。苦悶は次第にはげしくなってくる。やがて水は胃にも侵入してゆく。胃から食道を通して口へ、遂に肛門から注がれる水は口から噴水の様にふきだした。胃や腸の内容もことごとくおしだされ、呼吸も殆どできずもがき苦しんだ。それでも依然と

して首をふって自白をこぼんでいる。拷問で殺してしまふことはさすがにきつられ、絶命寸前で中止された。しかもこの拷問をうけること三度、遂に自白しないとあつては釈放するよりほかはなかった。クロチルドは法廷より出された。しかし外では群衆がまちかまえていて、この悪鬼のような女を処刑しようとしていた。彼女は驚いて逃げだしたが、たちまち捕えられてしまった。

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

新発足 懸賞△告白、手記、体験▽原稿募集

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、真実の裏付のあるものが大切だと思えます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙を御使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

町はずれまでずるずると引きづられ、いよいよらみの刃はまず下腹をたて、横十字にたちわった。どっと噴きだす血汐、悲鳴が高くなる。なぶり殺しだ。クロチルドはこんな目にあう位なら絞首刑になればよかったと後悔したがもうおそい。悲鳴が絶え、首が胴体から斬りおとされたのは、ずっとこのことだった。

クロチルドの生首はもう蒼ざめている。今やそれは槍の穂先につきさされ、行列の先頭を進んでゆく。そのあとを二人が二本の脚をつかんでむきだしの胴体を引きずってゆく。その身体は文字通り寸断されていた。最後の一人は、血まみれの内臓を高くさしあげている。地獄から来た女は、こうしてその故郷へ帰っていった。

(終)

(次回「その五」は御前試合の巻)

「妖異不死身娘」

滝沢史郎

○地獄政

「……お浪。出が近けえぜ。早えとこ仕度をしねえかい！」

赤鬼の扮装を済ませた地獄政が、冷酷な声でうながした。

鏡の前に坐っている女——お浪は力なくうなずいて顔を造り始めた。

「やい！ もっとこう、テキパキとできねえのかい！ 今日小屋は大入りだ。ありゃあみんな、おめえを見物しに来ているんだ。精々氣を入れてつとめねえと承知しねえぞ」

地獄政は、そこまでいってふと思ひ直したように語調を変えた。

「尤も、厭なら厭でいいんだ。おめえの人氣は、生地その儘で哀れっぱく見えるところに有るんだからなあ……」

赤鬼に造っている地獄政の顔が薄気味悪く笑った。

首から下は全身に赤い縫いぐるみを着込んで、虎の皮の褌まで付けている地獄政は、この小屋の親方である。

暑さの盛りに、全く御苦労という他はない扮装の地獄政だが、彼は今、有卦に入っているのだ。暑さなど欲にくらべれば物の数ではないし、第一、この役をやる者は他にはいない。

旧幕時代から「地獄見世物」を打ち続けている男で、本名を倉田政吉という。至極まともな名前だが、仲間うちでは地獄政で通っているのだ。

地獄政の奴、一体どこからあんな女を手に入れやがったのだ——と仲間は口惜しがっている。

お浪の「芸」を呼び物とするようになってから、地獄政の見世物

は何処の土地へ行っても必ず大当りを取るようになったのである。

東京の東両国へ戻って来たのは二年ぶりであり、今日は小屋掛けしてからまだ三日目だが、果然圧倒的な人気を博している。

(全く、この女あ大した拾い物だったぜ。金のなる木を持ったようなものだ……)

地獄政は改めてそう思い、お浪の全身を眺め廻す。

亡者の衣裳を身に付けているお浪——二十五才の女盛りの白い肌は、それだけでも見物人を喜ばすに充分なものだった。その衣裳とというのがまた、小屋の内の薄暗い灯りでも、素肌が透けて見えそうな薄物である。

見物達が喜ばば喜ぶほど、お浪は辛い。自分ほど因果な身の上の女が他に有ろうか、と思う。

然し、死ぬことも出来ず、涙も涸れ、地獄政から逃がれることもならないお浪は、今日もまた、赤鬼の手で小突かれながら、見物人の前へ引き出されて行く身なのである。

地獄政は薄汚れた細引を用意して、お浪の背後に立ち、鏡の中の白い顔を覗んだ。

「今日は、どうなんだ？ 素直に縛らせるのか？ それとも……」

お浪は、切なそうに臉を伏せる。

「また駄々をこねて暴れる気か？」

諦めているのだろう。お浪は自分の両腕を背後へ回し、両手首を交叉させるのだった。

地獄政は馴れ切った手付きで、無抵抗の女体に縄を打ち始める。

縛られながら、女の白い指先は微かに震えていた。

「いつも……こう素直だと……世話はねえんだが……てめえという

女は……」

地獄政はお浪の胸へ掛けた縄目を緊めながら、そんなことをいつていた。

「厭だといっても、許してくれるお人じやなし……」

顔も綺麗だが、声も美しい女である。それが、罪人のようにうなだれて縛を受けるのだ。

「親方、出ですよ」

知らせを受けた地獄政は、小道具の金棒を片手に持ち、縄尻を手荒く引いた。

「さあ商売だ。おい、早く立たねえか！」

お浪は力無く立ち上った。

これから先は、実際の行動がその儘で彼等の芸となるのだった。

○ 黒縄地獄

八大地獄の恐ろしい光景を見せる——という趣向の見世物小屋である。

八大地獄とは、すなわち炎熱地獄、極熱地獄、叫喚地獄、大叫喚地獄、無間地獄、衆合地獄、等活地獄、黒縄地獄——の八つをいうが、中には毒々しい絵だけを飾って間に合わせている部分もある。

責苦を受けている亡者共の多くは人形だが、五人の女達が人形の間に混って余り巧くもない演技を見せている。その五人が東になっても、お浪一人の芸には到底かなわない。

「やい、女！ キリキリ歩め！」

地獄政がお浪を小突きながら針の山の蔭から姿を表わすと、百人近く入場している見物人達が、待ち兼ねたようにその方へ集まって

しまうのだった。

ザン切り頭の男達の中には、毎日のようにお浪だけを見に来る者も少なからず混っているのである。見物人は大部分が男だが、恐いもの見たさで入って来る女も少しはいた。

「やいやい赤鬼。その女は何処で責めるんだ？」

青鬼に扮した男が聞くと、

「おう。この女はな、黒縄地獄へ落としてやれとの閻魔王様のおい付けだ」

赤鬼の地獄政が大声で答える。

お浪は深々とうな垂れているのだが、それでも、この両国中の女芸人の誰よりも美貌だという評判が決して出鱈目ではないことを、見物人達は認め得た。

「ようよう！ 地獄の看板娘！」

「地獄小町！」

「顔を上げて、女っぷりのいいところを見せてくんねえ！」

様々な声が飛ぶ。

「さあ、御見物の皆様方がお待ち兼ねだ。とっとと歩きやがれ！」

地獄政は金棒でお浪を小突いて進ませ、果ては足を上げて黒縄地獄の中へと蹴込むのであった。

「世話を焼かせやがって！」

小声で呟いたのは、セリフ以外の言葉だからだ。縛られる時はおとなしかったお浪だが、引き出されるのは、やはり辛らかったのである。針の山の蔭、見物達には見えない場所で、お浪はしたたか頬を打たれたのだ。

「さあさあ御見物の皆様方。これなる女めは世にも罪深い身の上。」

浮世で犯した罪の酬いの恐ろしさは、これこの通りだ。ひとたび地獄へ落ちれば未来永劫、終ることなき責苦を受け続けるという……」
青鬼が一種独特の節まわしで口上を述べると、その後を赤鬼が続けて、

「まず手始めとして、ここもと御覧に入れまするは、恐ろしいおそろしい黒縄地獄の責苦とござあい。黒い縄の地獄と書いて、こくじようぢごくだ。さあさあ只今よりこの女めをあれなる柱へ縛り付けるが、地獄の赤鬼、青鬼、牛頭、馬頭めずの獄卒共も、年がら年中、亡者を責め折檻してばかりいるので、少々倦きがきたところだ。皆様方の中で、御用とお急ぎのない物好きなお方があるならば、今から一つ、女を責める手伝いをして貰いたい。何事も話の種、これほどの別嬪を責めることなどは、そう滅多にあるものじゃない。さあ、男は度胸、女は愛嬌、坊主は説教……遠慮をしては損となる」

口上が終わらないうちに、名乗りをあげた客が二人あった。見物人に加虐を手伝わせる——この小屋の人気の秘密は、そんなところにもあるのだ。

軽業、水芸、蛇娘、熊娘、ろくろく首、人魚女、河童男、達磨男やれつけ——等々、この両国に見世物の数は多いが、地獄政が他のどの小屋よりも高い木戸銭を取り、然も大当りに当たっている理由は、お浪の『芸』の異妖なことで、それを見せる為の演出が極めて刺激的なこと——というところにあったのである。

○ グルグル巻き

「さあさあ、もう他にはいないかな？」

赤鬼の地獄政はしきりと誘ったが、残りの見物人達は曖昧な笑い

を浮かべて尻込みするばかりである。

加虐の協力を申し出たのは二人連れの職人風の男であり彼等は柵をこえて黒縄地獄の中へ入って行った。

「お前様方は、力はお有りかな？」

地獄政が、そう訊くと、

「大有りだ」

「俺達、二人とも力自慢じや滅多にひけはとらねえ」

幾分照れながらも、自信有りげに答えるのだった。

「ほう。それで今日は試しに来なすったか」

「凶星。実をいやあそうなんだ。噂の通りかどうか、俺達二人がかりで力一杯やってみるが……構わねえかい？」

「もとより、看板にいつわりなし」

地獄政は見得を切ってみせ再び口上の口調となった。

「奇特な御仁が現われた。こ



のお二人は、只今から積まれる功得によって来世は疑いもなく極楽行きじや」

見物人の間で笑声が起った。

地獄政は真っ黒に染めた縄の束を二人に与えて、お浪を指さす。

「では、あの亡者めを逃がさぬよう、身動きもできぬように、柱へ括り付けて貰うとしよう」

金棒を振りながら地獄政は身振りたっぷりにお浪を追い立て、柱の前へ引き据えた。

「さあ、遠慮はいらない。自分の女房を折檻するつもりで、手加減なしに縛り付けるがいい」

「よし来た！」

「一丁……やってみるか」

二人は柱の方へ歩みより、お浪を見下ろして、まるで申し合わせたように、ゴクリと生唾をのみ込んだ。今までに見た女の誰よりもこの痛々しい姿のお浪は美しく思えたのである——。二人の男は次第に、不埒な作業に熱中して行った。協力してグルグル巻きにしようとする。亡者の白衣の上に黒縄の線が増え、それが容赦なく締め上げられ、柔軟な体に犂々と喰い込む。

「うッ、ううッ……ああ！」

髪を振り乱し、身悶えるお浪の呻き声は、演技ではなく、実際の苦痛に喘いでいるのだと思えない。

その蒼白い美貌は凄艶という形容をその儘に、見物人達の眼をことごとく釘付けにする。

縄を巻き尽した二人は、更に力をこめてギリギリと緊め上げる。明らかに、異様な興奮にとりつかれた者の表情が、それぞれの顔にはあった。

ようやく縛り終った二人——氣候のせいとばかりとはいえない汗をしきりと拭って、一息入れた。

「さあ、亡者めはもはや身動きもできない哀れな姿となったが、ここまでは序の口。これからが見所だ。話の種に、しっかりと見届けで戴こう……」

いわれるまでもない。見物達は晒し者のような姿とされたお浪を見つめて、殆ど声もなく、次の展開を待つのであった。

「では、お二人……」

地獄政は、更にもう一条の黒い縄を用意し、二人に与える。

「この縄で亡者めの首を絞めて貰おう。力の出し惜しみなどをしては、かえって功得にならない。よろしいか……」

「俺達が力を入れ過ぎて、本当にくびり殺しちまったら、どうなるんだ……」

職人の一人が、さすがに不安を感じて聞き返した。

「亡者というものは、すでに一度は死んだ人間だ。二度と再び死ぬことはない。地獄へ落ちたからには、どんなに責められても亡者は必ず息をふき返し、また新しい責苦を受けるのだ。それが永久に続いて終わることがない。これすなわち地獄の恐ろしさだ。余計な心

配はしないで、さあ、絞めたり絞めたり！」

二人は暫く顔を見合わせたが、自信たっぷりな口上にけしかけられて意を決し、お浪の首へ一卷き、黒い縄の中央のあたりを使ってからませた。

「本当に大丈夫なのかな？」

なおもためらって一人が呟いた時、うなだれていたお浪が顔を上げた。

「……本気で、緊めて下さいまし。わたしを死なせてくれるなら、お礼を申します」

その黒い眸には何やらすがりつくような哀願の色があった。

○ 首 の 縄

お浪は、静かに臉を閉ざした。

長い睫毛の美しさには高貴な気品のようなものさえ漂っており、このような無慙な芸を見せる女のものとしては、およそ似つかわしくない、という感じがあった。

衆人環視の中で、刑場の女囚でも受けぬ程の残酷な縄目にかかりその上、更に白い首筋へ地獄の縄まで巻き付けられたその姿は、浅間しさの限りという他はないのだが、その浅間しさからは、名状しがたいまでの妖しい美が醸し出されていることも、また事実であった。

「口ほどにもないお人達だな。どれ、赤鬼と青鬼が亡者の首の絞め方を手ほどきしよう」

地獄政はそういって、片方の職人の後ろから黒い縄を掴んだ。

反対側へは青鬼が行き、同様に縄の端を掴む。

「それ、引いたり引いたり！ もっと力を入れるのだ。そうそう……」

見物人達は、身を乗り出してお浪の首筋を見守った。

女の首が絞められて行く光景など、通常の間人は見る機会を持たない。然し、今、種も仕掛けもない絞首が彼等の目の前で、実験に行なわれつつあるのだ――。

縄は容赦なく女の白い首を締めつけて行く。

「ううっ、く……くうふっ……」

悲鳴や呻吟とは別な、圧迫される咽喉の内部から洩れる音がした。

「ひいーッ！」

堪え兼ねて恐怖の叫びを上げたのは、見物人の中にいた女の方であつた。

お浪の美貌は苦悶に歪み、黒髪は蛇の群れのように乱れ、のた打つ――。

縄を握る四人のうち、最も力を入れて引く者は赤鬼の地獄政であつた。青鬼の方は、その力に対して踏みとどまるのが精一杯という様子であり、それ以上の力はいれていない。

「く、く……く、くう……」

咽喉の音が弱まって行くと共に、女の顔に変化が起つた。

蒼白かった顔色は薄く紅を刷いたように染まり、苦悶に代って恍惚に似た表情が現われてくる。

縄目のかかっている腰から下の部分が、けいれんのような動きを示し、正坐の形が少し崩れ、太腿の白さが衣裳の前を割って露わとなつた。

地獄政は、なおも力を抜かずに絞め続ける。ピクリ――と、女の後手の白い十指が柱を搔くような動きを示した。

顔の紅みが退いて行き、死相のようなものが次第に色濃くなる――と見る間に、断末魔の時が来たのか、縛られていない部分がヒク、ヒクヒク……と、泣きじゃくるように微かな躍動を起こした。束の間の時を経た後、ガックリと首が前へ垂れて、女の体は一切の動きを失つた――。

戦慄と緊張が小屋中を支配し、空気さえ凍るかと思われた時――地獄政は漸く縄を離した。

○ 不死身娘

「……し、死んだ。その女、死んでおるぞ」

かすれた声で呟く者があつた。

「本当に……死んじゃったんですかい？」

「私は医者だ。……そうだ、これは大変なことになったぞ！」
良い身なりをした中年の男が、我に返ったように叫んで、柵を乗り越えた。

お浪に駆け寄って死相を検し、脈の有無を調べる――。

「し、死んでいる！ 何ということをしたのだ！ 本当に殺してしまつたぞ！」

医者は顔を上げ、地獄政へ鋭い視線を向けた。

「ほう。お前さん……医者かね？」

「いかにもそうだ」

「お見立てに間違いはあるまいね？」

「ないとも。まさに死んでおる！」

「これは有難い」

「何をいうか！」

憤激しかかる医者を抑えて、地獄政は悠然と喋りはじめた。

「御見物衆が驚くのも無理はない。この女は今のところ、確かに死んでいる。種も仕掛けもなく、本当に絞め殺したのだ。だが……間もなく独りで生き返る。だから名付けて不死身娘だ。この不死身娘は、殺されても人並みには死ねない体を持つ女だ。つまりは地獄の亡者と同じこと。世にも因果な身の上だ。さて……息を吹き返すまでの間は、この赤鬼めが地獄の話を語って進ぜよう。そもそも地獄というものは……」

つなぎの口上が始まったが、それに耳を傾ける者は皆無といってよかった。

見物人達は皆、喰い入るような視線でお浪の死体を凝視し続けており、その場を離れる者などは一人もいなかった。

通常、絞殺死体というものが醜怪であることを、見物人達は知っている。覚悟の上の首つり自殺にしても、舌がだらりと口の外へ垂れていたり、苦悶の際に排泄された汚物が流れ出ていたりするものだ——という知識を持っている。

然し、お浪の死体には、些かもそういう点が認められないのである。いやむしろ、お浪は美しく絞められ、美しく死んだのだった。

呻吟し、苦悶する姿の中にも、妖しい美しさがあった。それは

『魅力』といい得る種類のものであることは確かだった。

「……ところで御見物の衆。当代の画人の中で、地獄の絵を描いてはまずこの人の右に出る者はない、といわれる御仁がいるが、御存知かな？」

地獄政は、お浪の様子を観察しながら口上を続けている。

「これすなわち余人にあらず、河鍋曉斎先生だ。曉斎先生は天保二年、下総国は古河の生まれで、七才にして歌川国芳の門に入り、後には狩野洞白について絵を学ばれたが……」

もとより、この地獄政が画壇の消息に詳しい訳ではない。商売上の必要から仕入れた知識を暗誦しているだけのことだ。

「この曉斎先生描くところの地獄絵図の見事さというものは……」

そこまで喋った時、お浪の体に変化が起った。まず、動きはじめたのは縄目の間の乳房であった。押し潰された双つの不自然な隆起が、微かに息ずき始めた。

「さあさあ、とくと御覧じろ。お医者から死んだと見立てられたこの女が、只今、生き返ろうとするところだ。地獄の亡者は責苦を受け直すために、こうして何度でも息を吹き返す……」

不思議な生命力——という他はない。お浪は徐々に呼吸を取り戻して行ったのである。

「そうら、そらそら、生き返った。今のところは夢うつつで、女めはウットリとしているが、亡者に横着はさせないのが赤鬼の役目だ。気付けた代りに鞭で叩いて御覧に入れよう」

地獄政は真っ黒な皮鞭を用意してお浪の前に仁王立ちとなった。

鞭を振り上げた瞬間、その眼が扮装にふさわしい戦慄的な笑いを浮かべたようであった。

「そうれ！」

ピシリ!!

第一撃が、女の太腿で高鳴った。

「ああ……」

悲鳴と同時に、黒髪が躍った。

まことに無残——甦えりを速めるために鞭を使うのだ。

「ひでえことをしやがる……」

「全くだ。牛や馬じやあるめえし」

ピシッ——第二撃が胸を襲った。

「可哀想に……」

「いい女がなあ」

見物人の怨嗟は承知の上の地獄政だった。

彼はなおも赤鬼らしい憎々しさを表わしながら兇惡な鞭を振り上げた——。

○ 非道な着想

明治六年の夏——。

こうして地獄政の見世物は東京中の評判となり、人気は日に日にうなぎ上りとなって行ったのである。

要するにこれは、超人的な生命力を見せる芸なのであった。

この時代の見世物には、大別して四通りの分類があった。

第一は「おっぴらき」と呼ばれて、文字通り種も仕掛けもなく、超人的な体力や技術で演ずるもの。次に「親の因果が子にむくい——」という口上が使われる「因果もの」。第三に「十戒」と称する地獄極楽のカラクリ人形。第四に「六尺余りの大イタチ」などと称して、実は六尺余の板に血を塗っておいたりする「珍物（ちんぶつ）」等である。

地獄政の小屋は「十戒」の背景を使って見せる「おっぴらき」という訳になる。

然し、彼は「おっぴらき」であることを徹底して力説立証するものではなかった。それをしては余りにも無慙感がありすぎて「非道」と思われようし、興行を続けて行く上において不安がある。

尤も、地獄政はお浪の生命力の不思議さについて、ほぼ完全に近い自信を持っていた。

彼がお浪を手に入れたのは、官軍が江戸に入城し、江戸が東京と改称された年、すなわち慶応四年のことであった。

その年の九月に改元となり、年号も明治と変った頃の或る夜——彼は、首を括って死んでいる娘を発見した。

美しい娘であり、その美しさが少しも損なわれていない死体であった。

地獄政——という通り名にふさわしい種類の、常人には考えられぬ誘惑を彼は覚えた。死体に魅せられたのである。

だが奇蹟が起った。確かに死んでいた筈の美しい娘は、俄かに息を吹き返したのだ。

政は驚愕したが、世の中にはそういう事柄もあると知ってはいたので、驚きが恐怖に変わるようなことはなかった。

政は、その娘を自分の女にしてしまった。

品物のように扱い、奴隷のように従わせるうち——政は、この女の蘇生が決して偶然のみによるものではなかったことを知り得た。

或る時、折檻の度が過ぎて女を死に到らしめた地獄政が、二度目の不思議を見たのであった。

つまり、女は再び蘇生をしたのだ。

以来、地獄政は女を今までとは別な意味で馴らし始めた。

二度あることなら三度目もあるだろう。三度あることは、何度で

もあるように仕込んでやろう——という非道な着想を得たのであり且つ、それは成功した。

維新前は只の月並みな地獄見世物師だった政吉が、現在、迫力ある新趣向で人気を集めているのは、その女、すなわちお浪という不思議な素材にめぐり合った為に他ならない。

○ 哀しみの美肌

夜——お浪は、自分の首筋と両手首を揉みほぐすことが必要だった。白い肌に刻み付けられた痛々しい縄痕は、縄を解かれた後ではひどく目立つ。元通りの肌に戻しておかないと翌日の「演出効果」にさしつかえる——というのが地獄政の考え方であり、いわばそれはお浪にとって哀しい日課のようなものであった。

(痛めつけられる為に、毎日、こうして……)

お浪は鏡の中の、自分の首筋を眺めて吐息を洩らした。

女が肌の手入れをするのは、美を守りたいからである。然し、お浪の場合は、しいたげられる為にのみ、それをしなければならぬ。さいなまれる為の準備としてのみ、美を保たなければならないのである。

浅間しい芸を見せた後、小屋が閉ってからは、政吉の慰み物としての夜が待っている。

政吉は思いの儘に、お浪をさいなみ、なぶり、もてあそぶ。

「所有」されて以来、いつまでたっても、この男の欲望の激しさは冷えることが無かった。

他に女が出来た時ですら、それは変りがなかった。

変ったのは、むしろお浪の方である。

「けだもの!!」

と烈しい言葉で罵り、呪っていた。

「うふっ、……こいつ、初めて妬きやがった」

政吉は卑しく笑って、お浪の抵抗を封じたものだ。

その言葉はお浪自身よりも先に、お浪の怒りの正体を指摘するものだった。

お浪は顔色が蒼ざめるまでに、愧じた。

まさしく、お浪はけだものに対して嫉妬していたのである。いつの間にか、自分の体の中にもけだものの血が混ざってしまったのだと、お浪は絶望的に自覚した。

嫉妬というものは、理窟抜きに表われる。

殊に女の嫉妬は——すくなくともお浪の嫉妬は甚だ非条理な形で表われていた。

政吉に対して、憎悪以外の感情は持っていない筈だった。それなのに嫉妬をした。

嫉妬は愛情を前提として起るものの筈である。そして、憎悪と愛情とは、正反対の感情であるべき筈だった。

自分を人間としては扱わない男。さいなみ抜いて平然としている冷血動物。——そんな相手にさえ嫉妬をする女の心身の底知れぬ悲しさを、お浪は只、身も細るまでに愧じる他はなかったのである。

こういう明け暮れで日を送っているお浪の健康が、些かも損われる気配さえみせず、むしろ男の眼を惹く要素を増して行きつつあるのは、一体どうしたことなのか——。

妖しいまでの生命力、という他はないのであろう。

(わたしは、地獄に似合う女……ああっ!)

堪え切れずに、震える二つの掌が顔を掩った時、政吉が近寄って来た。

「お浪。支度をしろ。ひいきの旦那がおめえを招んでいなさるんだ……」

○ いいなづけ

「お招きにあずかりまして……」

三つ指をついて、お浪はしとやかに挨拶をした——。

本所相生町、北豎河岸の料亭「喜久川」の二階である。

「待ち兼ねていた。まあ、入ってくれ」

客は風采のいい官員ふうの男であった。

「お酌ぎいたしましょう……」

お浪は伏眼になって、こういう席での型通りに酒をすすめる。

どうせ、只のひいきとして招んのではなからう——とお浪は思

う。厭がるのを地獄政は脅し半分に連れて来たのである。

「評判につられて、今日、私も初めて見に行ったが……随分と奇妙な芸だな」

「お羞かしゅうございます……」

「世が世ならば、旗本の娘の浪路さんが、あんな生業なりわいで身を立てて

いるとは、全く夢にも気付かねことだった……」

ハッとして、お浪は顔を上げ、相手を直視した。この顔から眼鏡

と口髭を除けば——

「あ、あなたは……」

「そう。粕谷弁之助だ」

男は眼鏡をはずしてみせ、微かに笑った。

「浪路さんが生きていたとは知らなかった。官軍に斬られた、という噂があったからな。あれから、もう六年になるか……」

お浪の表情は凍り付いたようになり、次の瞬間、身をひるがえして逃がれようとした。

「待ちなさい！」

男の手が、素早く袂を掴んでいた。

「本来ならば良人となっていた筈の私だ。何も逃げるには及ばない」

「お離し、下さいまし！」

「いや。もう二度とは離したくない」

お浪は首が折れるほどにうな垂れて、羞恥に身ぶるいするばかりであった。

「お父上は彰義隊に加わって、上野で討死をなされたそうだが……」

「は、はい……」

「母者はどうされた？」

「官軍に捕われて行った儘……」

「やはり、噂の通りか。恐らく、もはや御存命ではあるまい。何でも、小栗上野介の一味という嫌疑をかけられたとの由だが、何故またそのような……」

「母は、小栗様とは遠い縁続きに当たり、その上、甲賀者の家に生まれた人でしたから」

お浪は涙を浮かべ、絶句してしまふ。

江戸幕府最後の勘定奉行、小栗上野介の一族が官軍の手により刑

死を遂げた事件は、いまだ世人の記憶に生々しい。新政府に対する

叛逆を企った——という理由からだったが、これは官軍側の陰謀に

よる事実無根のデッチ上げであつた。

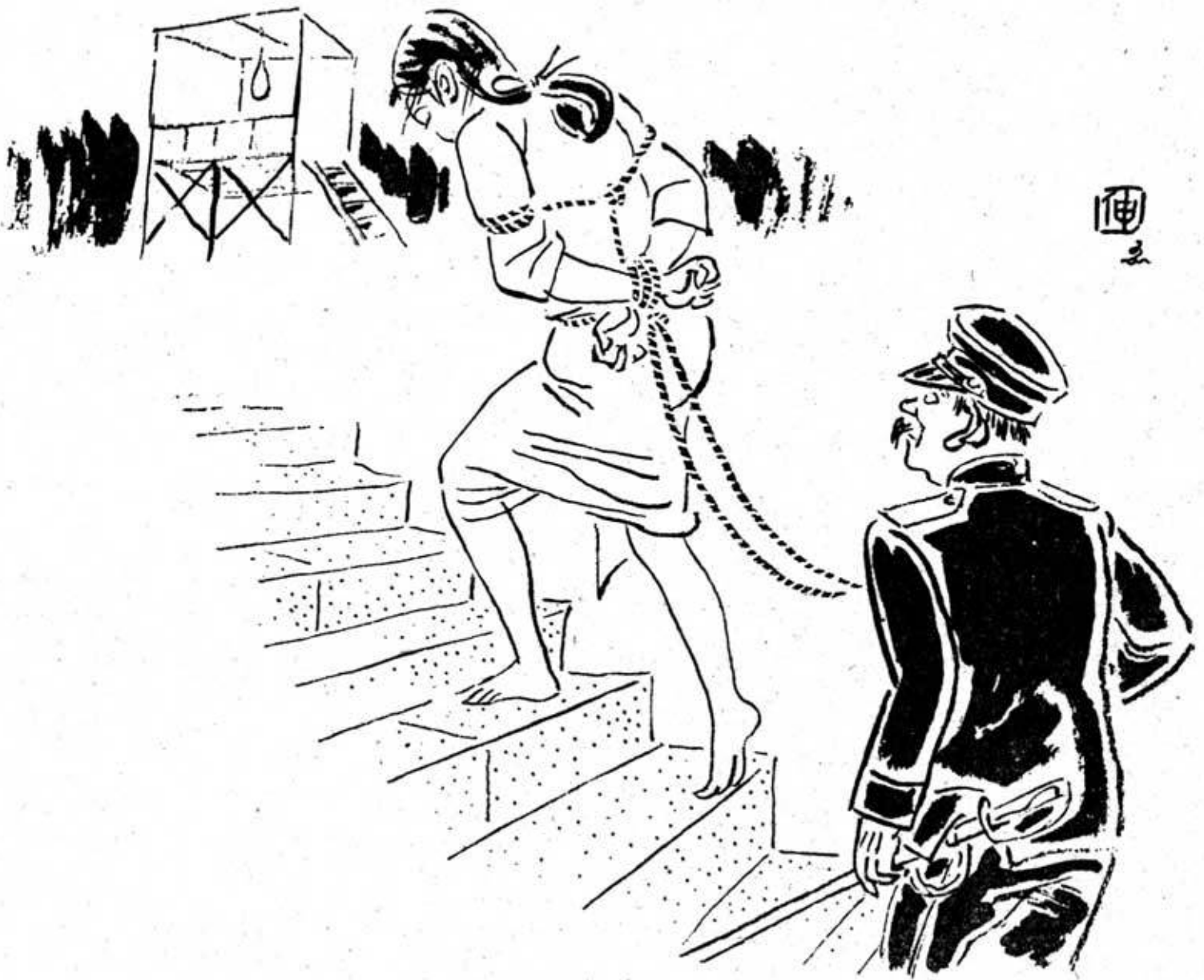
官軍は同時に、小栗上野介の埋蔵金に就いても取調べを行なつた。彼等が江戸城に入つた時、御金蔵に鏝一文の金さえも残っていないかつたことから、小栗が隠匿したのだらう、と思われたのである。

お浪——旗本の娘、浪路の母が突然に捕縛され曳き立てられて行つたのは、そんな時であつた。

「なるほど……浪路さんは甲賀者の血筋を引いていたのか。不死身娘の芸の秘密は、そのあたりから出てくるのかも知れないな」

弁之助は無神経にいう。

今、お浪は自分の浅間しい芸のことを、昔の許婚者だったこの男からいわれたいとは、決して思わない。「私が江戸におれば、むざ



むざあんたの家をそんな目には遇わさなかつたらうに……」
「あなたは、あれから……」
「うむ。駿府へは行つたものの、良いことは少しも無かつた……」

弁之助は腕組みをして、しばし、追憶にふけるのであつた。

徳川家の正統、幼年の田安亀之助（徳川家達）が単に七十万石の大名格に落ちて、駿河の国は府中に退転となつたのが慶応三年の秋のことであつた。

弁之助の家もその時、幼君に従つて駿河へ移つて行つたのである。騒乱の時代でありこの二人の親が定めた婚約も、自然解消の形となつてしまつた。

「私は江戸へ舞い戻り、新政府の役人となつたが……今にして想ふことは、人間、万事につけて巧く立廻らねば損だ

ということだな」

臆面もなくいい切って、不意に、弁之助はお浪を手元へ引き寄せたのであった――。

○ 罅られる

「あつ、何を、何をなされます！」

「まあ、いいではないか」

強い力がお浪を抱きすくめ、酒臭い息が荒い呼吸をくり返す。

「御無体な！」

「昔の約束通り、夫婦になるのだ」

腕を背中へ捻じ上げられて、お浪は苦痛に喘いだ。ふりほどくことが出来ない。

男はその儘で立ち上り、女を追いつ立てる。次の間に、夜具の用意がされていた。

「人を、呼びます！」

「無駄なことだ。素直にせぬか」

男の手が、お浪の帯を解き、着物を剥ぎ取りにかかった。

お浪の抵抗は虚しかった。動頭が屈辱と変り、更にそれが憤りとなって心身が震える。

弁之助は夜具の間に腕を差し込み、細引を取り出した。そんな物までが用意されてあったのである。

「あッ、何を！」

「お前を縛るのだよ。何も羞ずかしがることはない。毎日、こうして……縛られ……馴れている筈……これ、静かにせんか！」

両手首を背中で組み合わされ、縄を巻きつけられた瞬間、お浪は

絶望的に眼を閉ざした。

「ふふふ……おとなしくなったな。お前は体に縄を掛けられることが、好きなのだろう。男からこのように扱われることが嬉しいのだろうか……。政吉は、そういつていたぞ」

「これが、士族のなさることですか！」

「士族が昔のいいなずけに惚れ直しては、おかしいのかな？」

「恥を、お知りなさいまし！」

「恥？ これは驚いた。お前の口から恥などという言葉を聞くとは意外だ。尤も、何と罵られても一向に構わん。女を手籠めにするのに、恥などを考えていては邪魔になるばかりだからな」

弁之助はいかにも満足そうな手付きで、妙にゆっくりと縄の余りを白い肌に巻き、締め上げて行く。

「もしあなたが、本心からわたくしをお求めならば、何故このように手荒な……」

「好きなようにしているまでだ。俺は旗本の娘の浪路が欲しいのではない。不死身娘のお浪に惚れたのだ」

「わたしには……良人があります」

「何があるうと構わん。あの男には大枚の金を払ってある。つまりお前は売られたのだよ。だから余計な義理立ては無用。貞女ぶることではないのだ。今後また、買いに来るぞ」

一切の自由を奪われたお浪の体の中で、冷い憎悪が蒼い焰となって燃え上った。

「俺の女房は固苦しいばかりで、詰らん女だな。然も、それが上司の娘だ。お前のような面白さが少しもない。だが、出世栄達の為には気に喰わん女でも後生大事と奉っておかなくてはならんのだ……」

判るか？」

この男は、昔からこういう正体を秘めていたのだろうか。それを今、表わしただけのことなのか――。

お浪は汚ない物でも眺めるような眸の色で男の顔を見守った。

最初、相手を弁之助と知った時、羞恥と同時に淡い期待を心に描いた。泥沼から救い上げてくれるのか、と思った。

全くの逆であったのだ。昔の身分を承知の上で――いや、むしろそれを拍車として用いてまでも翻ろうとする男なのだ。

恥多い身を、その上、更にこんな男からも辱められるくらいなら――、

(死んでやる！ 舌を噛み切って……)

お浪は、そう考えた。

○ 邪悪な腕

だが、お浪のその考えは、すでに遅かった。

弁之助の暴虐の方が、先手を打っていたのである。

いきなり、お浪は首を締められたのだ。強い力で巻きつけられたものは、自分の扱帯であった。

「うっ、うっ……く、く……」

亡者としての蒼い化粧ではなく、普通の女としての薄化粧をして来たお浪の顔は、見る見るうちに充血し、紅潮して行った。

「ど、どうだ！ これでもか！」

狂った者のように喘いで、弁之助は遮二無二絞め上げる。

お浪の感覚は、苦痛から恍惚へと変って行った。骨の髄までとろけるような恍惚感の中で、お浪は風に吹かれた真綿のように、宙を

舞い始めた。

舞っているものは、お浪の体なのか、それとも魂であったらうか――。やがてそれは、白い雲の中へと迷い込んで行く。

その雲の間から、一つの顔が幻影となって現われ、お浪に迫ってくる。

「素直に俺のいうことをきけば、母親は返してやる……」

錦布れ――浪路に襲いかかって来た官軍の男――その顔が、今度は真上から卑しい眼で見下ろす。

血！ 血の赤さが眼の前一杯に拡ろがる。

鮮血が四方へ飛び散って、卑しい顔が断末魔となる。

血塗られた浪路の懐剣が――叫んでいる。

「死ね！ 死ね！ 死んでしまおうがいい！」

不吉な形をした樹が、枝が招いている。

「お前も死ぬのだ……ここで死ぬのだ」

浪路が首を吊る――。踏み台が倒れた。苦痛が恍惚へと変って行く。宙を舞い始める――。

男の顔が見下ろしている。地獄政の邪悪な顔が「不思議な女だ」と呟やいている。

「不思議な女だ……」

と男は呟いた。その男の顔は地獄政ではなしに、弁之助のものであった。

うっすらと瞼を開いたお浪が、それに気付いた。

「……殺して！ わたしを殺して下さい！」

お浪は、かすれた声となっていた。

「何をいう。死にたければ、自分で死ぬことだ。だが……お前は所詮、自害など出来る女ではないらしい」

「……」

「この俺が元は旗本の倅であつたのと同じに、お前も余り旗本の娘らしいとはいえなかったではないか。天晴れ旗本の娘であるならば官軍の男を突き殺した後、何故その場で自分の咽喉を突かなかったのだ？ 庭の木で、首を吊ったりしたのは何故だ？ 政吉の女にされ、恥さらしな芸を見せながら生きてきたのは、どうしてだ？ つまり、お前は刃物で自分を突くことの出来ない臆病な女だったのだらう。まさに、徳川の旗本も地に堕ちたものだ。つまり……お前と俺とは、案外に似た者同志だった、という訳だ」

地獄政からいろいろと聞き出したのだらう。弁之助は言葉でもお浪を責めさいなみ、得意そうであつた。

お浪の頬は、硬直した。

「どうだ？ 凶星だらうが……」

弁之助は片頬に皮肉な笑いを浮かべる。

「フッフ、フッフ……」

おぞましい笑顔を洩らしながら、弁之助は蒼ざめた女に顔を近づけた。

○ 女囚と教誨師

「……それで、そなたは男の舌を噛み切ってしまったのじやな？」

「はい……」

「生涯に、二人の男を殺してしまったか……」

「わたしは、罪深い女でございます……」

「ふむ……」

真宗大谷派、越前仰明寺の僧、対岳は、暫し暗然として瞑目する。

市ヶ谷監獄の裏手左側——うっ蒼たる杉林の中に、新しく建てられた教誨室の中である。

対岳は日本で最初の教誨師であり、彼が自から志願し、刑部省の許可を取って死刑囚の教誨に先鞭をつけたことから、この以後、日本の教誨事業にたずさわる僧は、大部分が真宗の僧で占められるようになった。

尤も、明治の初年には、教誨僧とも教誨室とも、いわれはしなかった。

この市ヶ谷監獄につながれている死刑囚達は「阿弥陀堂で引導を渡される」というふうにい表わしている。

今朝——美貌の女囚お浪の処刑が行なわれる、ということとは、囚人独特の鋭敏な感覚や巧みな連絡方法によって、この獄内の囚人全部に知れ渡り、異様な動揺が陰惨な建物全体に立ちこめているのである。

その中で只一人——意外な程の平静を保っている者は、他ならぬ首の座へ曳かれて行くお浪自身であつた。

不思議な程、静かな顔色である。少しも取乱してはいない。

対岳には、その理由が判つたようであつた。

「そなたは……刑死を望み、願うているのか」

ズバリと、斬り込むように問いかけてみると、果たせるかな、お浪の表情には明らかな反応が表われた。

弁之助を殺害した後、官憲に捕われたお浪は、見えすいた虚偽の

申し立てをして、なかなか罪に服そうとはしなかった。拷問にかけられてようやく白状をしたのである。

見苦しいまでに往生際の良くなかったこの女囚が、実際の死に直面した今、これほど静かな、澄んだ眸をみせているのは何故か。それはつまり、悪あがきを故意にしてみせ、裁判官から同情されるような結果を避け、憎まれて死刑の宣告を下だされるように仕向けたのではなからうかと、対岳は考えてみたのである。

お浪の白状には、いろいろと嘘が多かったようであり、然もそれは、自分の立場をわざわざ悪くしようと企った嘘——と、対岳には思えた。

お浪は、それを肯定するかのようだった。

「今の首斬り役、山田様はなかなかのお腕前と聞いております。一思いに斬られてしまえば、わたくしのような罪深い女でも、迷うことなく往生を遂げられるかと存じます……」

お浪は、八代目山田浅右衛門吉亮のことをいっているのである。

明治四年に小塚ヶ原の刑場で夜嵐お絹を斬首した際の吉亮の腕の冴えは、今でもまだ世人の記憶に鮮明である。その後、小塚ヶ原や鈴ヶ森の公開刑場は間もなく廃され、処刑は新らしく建てられたこの監獄の内で行なわれるようになり、浅右衛門吉亮の仕事もこの刑場に限られることとなったのである。

「それは、もとよりのことじや。親鸞上人のお言葉に、いわく、善人なおもて往生す。いわんや悪人に於いておや……とな」

対岳は「歎異抄」の中の一節を引用して教誨の言葉を続けたが、その口調には何故か、常とは違う乱れがあった——。

○ 首の座へ

阿弥陀堂の出口には数人の獄吏が待っていた。

素足で土の上に降り立ったお浪は、獄衣の衿元を正してから、静かに両手を背後へ廻すのであった。

「うむ。神妙だ……」

捕縄を提げていた一人が大きく頷いて、お浪に本縄を打った。

（浅間しく縄で括られるのも、今日が最後なのだ……）

と瞬間、お浪はそんなことを考えた。

対岳が、手にした数珠をお浪の首へ掛けてやる。次に、獄吏が眼隠しをつける。

「歩け……」

縄尻を取る獄吏が命じた。

他の獄吏はお浪を囲むようにして歩き、その後からは対岳が読経をしながら進む。

お浪の歩調は、しっかりしていた。

豪胆な男の死罪人でも、普通に歩ける者は稀である。生への執着から狂ったように泣き叫び、手取り足取りされて、運ばれて行くような囚人も少くないのだ。

獄吏達は皆、意外そうにお浪を見守った。

然し——お浪の冷静さは、すぐに破られる時が来た。

「もし……この階段は、何でしょうか？ 御仕置き場へ行くのに、階段を上るのですか？」

「そうだ……」

お浪の足は停まってしまった。

「わたくしは、磔にかけられるのでしょうか」

「いや、ハリツケとは違う。磔刑は廃止となったのだ……」

俄かに不安そうな様子となったお浪は、激しく首を振った。眼隠しの布がはずれた。

「あっ、これは……」

お浪がそこに見た物は、英国式の絞首台であった。今年から使われるようになったのであり、木の香もまだ新らしい。

「これは、何です！」

「絞首台というものだ。さあ、素直に上れ。御仏にすがり、覚悟をきめれば少しも恐いことはないぞ……」

「い、厭です！ 厭です、こんな！」

非痛な声となった。

「わたしは、こんな所では死ねません。どうか、どうか一思いに首を斬って下さい!!」

さっきまでのお浪とは別人のようになった。

追い上げられまいとして、烈しく抵抗する。胸の上で数珠が躍った。

「お願いです！ 後生だから、こんな……」

「ええ、面倒だ。止むを得ん、足を縛って担ぎ上げるのだ」

一人が舌打ちして、そう指図をした。

最後の瞬間——ギリギリのどたん場に臨んでから俄かに取乱す囚人というものは、時々あることだった。

獄吏達は、そういう場合の処置にも馴れている。手早くお浪の足首を括り、十五段の階段を担ぎ上げたのである。

台の中央で絞縄を首に巻き付けられても、お浪はなお叫んでいた。

「やめて下さい！ お慈悲ですから、どうか刀で斬って下さい！」
ガタン——と不気味な音がして、お浪の足下の板が開らき、四角い穴があいた。

その中でお浪の体は宙吊りとなり、グルグルと回転した。

縛り合わされた両手と両足の先が、宙を掻いて虚しく躍動していた——。

○ 針の山

それから約一カ月の後——お浪は再び両国の見世物小屋へ戻り、以前と同じ芸を見せ始めた。

絞首台から解き降ろされた、お浪は、やはり蘇生をしたのである——。

この頃は、絞首が済んだ後に甦えった死刑囚を解き放すことが行なわれていたのである。まことに奇妙な話だが、まぎれもない事実であり、こういう例は他にも幾つかあった。

そう無暗矢鱈と蘇生する筈はなからう——というのは現代人の考え方なのであり、当時新政府の不備な法律では、死刑囚が蘇生する可能性は多分にあったのだ。

当時の絞首刑の方法は——

およそ絞刑を行ふには、先づ両手を背に縛し、紙にて面を掩ひ、曳いて絞架に登らせ、踏板上に立たしめ、次に両足を縛し、次に絞縄を首領に施し、その咽喉に当らしめ、縄を穿つところの鑄鑢を項後に及ぼし、これを緊縮す。

次に機車の柄を挽けば、踏板忽ち開落して、囚身（地を離るるおよそ一尺）空に懸る。およそ三分時、死相を検して解き下す。

という定めによって執行されていた。即ち三分後には解き下ろしていたのである。

ところが、死刑囚の中には三分ぐらいでは死なない者もいる。例えば明治二十年に市ヶ谷監獄で絞首刑を受けたピストル強盗清水定吉などという男は、絶命までに三十分もかかった記録がある。

三分ぐらいでは死なない根強い生命力を持つ人間は、勘なからず存在するだろうし、またそういう人間が死刑囚となることもある。

明治五年の十一月二十八日に、そういう例が四国の松山で出た。

当時は石鉄県という県名だった松山の租税課出張所に、田中藤作という農夫が放火をし、その罪で絞首刑に処せられたのだが、この男が蘇生をしたのである。

石鉄県では早速、中央へ指示を仰いだ。それに対する司法省からの回答は――

明治六年指令

スデニ絞罪処刑後蘇生ス、マタ論ズベキナシ。直チニ本籍ニ編入スベシ。検使無罪。

というものであった。この指令が先例となって、この後しばらくの間は、蘇生死刑囚が大手を振って娑婆へ舞い戻れる時代が続いたのである。

一方この頃、斬首刑は依然として残っており、その廃止は明治十五年正月に到って漸く行なわれたのだから、奇妙といえは奇妙、不公平といえは不公平な話だ。

つまりは絞首と斬首の二本立てだったのであり、絞首された為に命拾いをした者は、日本各地に三人や五人ではなかったらしい。

不死身娘のお浪は、即ちその中の一人である。お浪が解き放され

た日、監獄の門の外に待っていた者は地獄政であった。

「芸が身を助ける、てえのはこのことだあな。まず、めでてえ話だ」と政は有頂天であった。

お浪は小屋へ連れ戻され、元通りの芸を見せることを強いられた。小屋は割れるような大入りが続いた。大評判となった。

政は笑いがとまらないというふうであった。

然し――両国へ戻ってから十日目に、お浪の生命は終ってしまっただのである。

その日、赤鬼の地獄政に縄尻を取られて見物人達の前へ姿を現わしたお浪は、不意に針の山へ駆け下り、真物の鉄で造った巨大な針が密生している辺りを目がけて身を躍らせたのである。

地獄絵図その儘の、見るも無残な自殺死体を沢山の眼にさらしてみせたお浪は、多分、自分を刑したつもりであったのだろう。

見物人の最前列には、粕谷弁之助の妻の凍ったような顔があった。弁之助の妻は、毎日、必ずお浪を見に来ていたのである。呪っている眼であった。

お浪は無論、それに気付いていた。裁判が行なわれた際に、二人は顔を合わせていたのだ。

十日の間、お浪は機会を待ち続けていたのかも知れない。その日は、縄尻を持つ地獄政に油断があったのだ。

金の成る木を失った地獄政は、その後、急速に凋落し、数年後に狂い死のような死に方をした。

「俺が悪かった！ 勘忍してくれ！」

などと口走っていたことから、地獄政はお浪の怨霊に取り憑かれて死んだのだ――という噂が立った。

(終)

【マニヤ通信】

私の『マゾ日記』

遠藤百合子

あくなき責めに憧れてどうすることも出来ない私は、もし自分が梨花さんになったとしたら、きっと、こんな日記を書くだろうと、想像して、『マゾ日記』を書いてみました。

自分が梨花さんになってみたい、と常日頃から願っている私が、夢に描いた空想のマゾ日記です。あくまでも私の空想の産物であることをお断りしておきます。

私が梨花悠紀子さんになることができたらしきとこんな日記が書かれるでしょう。

×月〇日（金）

今日から思いきって南のアルサロ「美鈴」

のホステスとして、会社が終ってから行くことにする。

華やかなフシイキの楽屋裏は殺風景で、気味が悪いくらい急で狭い階段を、人相の良くない男が上ったり下りたりしている。事務所のセンスのある人達と比べると、何んだか恐いみたい。

お店に出た。好きな赤のサテンのチャイナドレス、特に身体のアクセントをつけるように仕立てて頂いた甲斐あって、自分ながらステキだと思う。

コルセットでぐっと腰を絞ったので、マス

ターが「ホホウ」といったげな顔付で、眼が一瞬であっただけで、確かに感情が現われていた。でも、マスターは店の子には、ダブーだって誰かが言ってたわ。

テーブルに呼んで頂いた。四、五人連れでワアワアとくだらないことをしゃべりあっているが、私の興味ある話題には、入らない。客の中で一人だけ、三十才ぐらいの方、時々私の表情をじっと見ている。

帰ってトイレで顔を直して、出てくると、「ジュリー」と指名、「ええ？」とけげんな顔付でいると、「オイ、君、今日からジュリ

「だろ」とマスターにいわれて、「ああ、はい！」と返事をする。

でも、誰かしら？ 今日始めてなのに。一番隅っこのテーブルで、黒い色眼鏡の男、どこかで見たことのある顔のようにも思えるけれど、覚えがない。

「ゴシメイ頂いて有難う」と傍に坐ると、ポリーに注文しといて、「君にチョット」と眼鏡をはずす。

なんだ、さっきのお客さん。「君が気に入ったので、すぐ引き返えしたんだ。始めてのお勤めだってね、大変だろう。今日はカンバンまで、僕は君を口説くよ」と言う。でも嬉しかった。私にとっては始めての御指名なんですもの。

とうとう、次の日曜お逢いする約束成立。

あの方心理学者かしら。話の中に責とか鼻とか、巧みに織りまぜて、その言葉の度に、私はドキッとするのが判るのかしら。いい写真見せたげるといっていた、楽しみだわ、日曜日。

○月×日（日）

Tさんとお逢いする。Sホテルでお食事、おいしかった。部屋を借りて休もうと、窓から淀川の景色が見える部屋へ通される。

一度に生活が、がらりと変って、こんな閑静なお部屋で、毎夜プレイが、と、うっとり眺めていると、Tさんが、「気にいった？」「ええ、とっても素敵、Tさんって、いろいろのこと知ってるのね」

Tさんは、それに答えず、「ハイ、これ例の……」とフォトの入った袋を渡してバスに入っていった。

期待にふるえて取り出すと、ヌード写真のいろいろのポーズ。なんだか物足りない。Tさんも世の常の男、つまらない人——と、次の袋を見ようとせずにはテーブルに投げ出したとき、中の一枚が僅かに端がのぞいた。ドキリと私の視線が止った。

縄がうつっている。

私はわななく手で袋をとり上げる。ああ、心の高鳴りを押さえることができない。

高手小手に縛られた女性が、豊満な臀部を盛り上げて、その白い肌にしなやかな一条の鞭が垂れている。

次のフォトは乳房をX型に縛りつけ、縄が肌に喰い込んでいる。猿ぐつわをされた女性が苦悶の眼差しで加虐する人の足元にひれ伏している。

肌の白い女が、黒光りのする縄で股間縛りにされ、髪の手を引き寄せられて、上を向いた鼻腔が美しく、歓びの表情と苦悶の表情を一つに現わしていたのを、私はまばたくのも忘れジーンと身を引き締めて、我を忘れる境地になっていた。

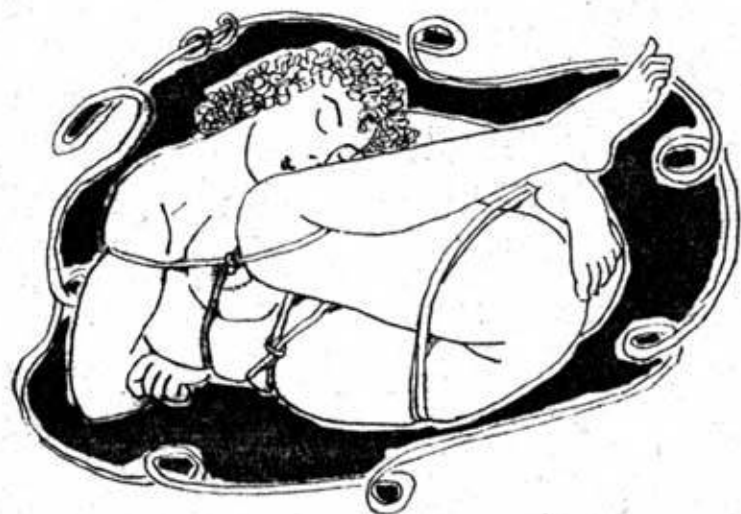
「どう」とボンと肩を叩かれて気がついてみると、Tさんがジイッと私を見つめる。

Tさんの顔が、まともに見られない。恥かしい「イヤ」見つめないで、とバスに走ってドアをボタンとしめた。

ネオン風呂に入り目をつむって想像した。次々とプレイのアイディアを。決心して部屋に入ると、Tさんは、一人でビールを飲んで居られた。

「ごめんなさい」とグラスにつぐ。しばらくは飲むことに専念して、だまっていた。Tさんが「どうしたの？」私があまり黙っているの、私はナゾをかけ「ねえ、このポーズだったかしらと」ブラジャーだけでTさんに背中を見せて後に手を廻した。

無言でギョッと両手が掴まれた。いつ用意したのか、真田紐が私の自由を奪っていた。「縛られる」「縛られる」私の目がうるむ被虐者のあの気持。不安、期待に胸がドキン、ド



キンとはずむ。締められた縄は胸に一巻き二巻き、首に縄がまといつき、後手がしぼり上げられる。「アー可哀想な悠紀子ノ 罪の子、悠紀子ノ お前は罰せられて女囚に」鏡を見ると、泣き出しそうに縛られている私……。

この日は、これでお別れしました。疲れたわ。でも、次はすぐプレイをしようとお約束してベーズを交わしただけ。Tさんって紳士ノ

○月○日(日)

あの日から指折り数えて、一週間目がきました。仕事が手につかなく困りました。もう

アルサロ
へも行く
気がしな
いので止
めていま
した。毎
夜々々、
血が騒い
で眠れな
い日が多
かったの
でした。
Tさん

約束通りすぐSホテルに、エジプトの「ドレイ」女という想定でカメラを用意して頂いたので、私が丹念に自分でこしらえた皮の首輪腕輪足枷を見て戴いた。

「フームー君がこれを」とTさん、ジロジロと眺める。「イヤ恥しい」私がバスルームで装着して出て来ると、Tさん「ウワー素敵ノ傑作が出来るよ」とシャッターをパチリパチリ。腕輪を後手に重ねて大きなホックで止めると、もう仲々外れない。足枷はそろえて鍵ホックでつなぐ様にしてあり、首輪には環がいくつもつけてあり、鎖をつけて股間にアルミホイルを重ねた小さい三角型を当て、後で腰枷につなぎ環の所に通し引きしほると「貞操帯」の代用になるのです。今日はTさんの力でグイグイと締めて戴き、鏡にうつすと鎖が肌にめりこんだ様に締め、なんともいえない気分になります。

乳房には黒い真中を空けた黒皮の胸当てをつけ、後をバンドでギリギリと締めて戴きました。ペコンと弾力性のある乳房がとび出す様になんともいえません。首の環に鎖をつけられてTさんの足元に正座しました。するとTさんは、今までの優しさはどこかへ、私のアゴをスリッパの先でグイッと持ち上げ「ドレ

イ「リカ」、お前を奴隷3号にする」といって私の額にたんねんに黒いマジックで大きく3と書くのです。そして鏡の前に引きずる様にはわして連れて行き、「見ろ、ドレイ3号」と髪の毛を引き、アゴを持ち上げるのです。そしてぐっと背をそらして膝で支えて、その儘じっとしてろというのです。

がっくりと首が垂れそうになると、鼻をギョツとつまんで引き起します。足がしびれて乳房が圧迫されて全身がますます引き締められます。「ウーウ」と苦悶の表情が出ると、素早くシャッターがパチリパチリ、汗がタラタラと流れる程で終わった時はホッとしました。

色々なポーズ。でも私には、短い時間でしただ。最後にバスルームに歩かされました。よちよち十糎ずつの前進、シャワーの前でイキナリ頭から水が。「ああ許してッ」と逃げようとしても歩けません。ようやく逃れると頭から冷水をざぶりと浴びせられて「サア、どちらにする」といわれ、しかたなく又シャワーの下で正座しました。

シャッターは絶えまなく切られました。ようやく、装具を外して頂いてバスにつかった時、なんともいえない疲労感でした。ああ、私はTさんの虜になったわ、とつくづく思い

知らされました。

○月○日(水)

今日、この間の写真頂きました。

なんともいいようのないうれしさ。Tさんにお礼を言っている、まだ写真に夢中でした。次の日をお約束、キットキッドね。

○月○日(日)

日本式旅館で和服で出かけました。

Tさんに逢うと「和服もいいね」といって下さった。恋人以上、何もかも知り合うっていい事。

階段に「磔」にされた時、太股を縄が通る時、その感触が期待を呼び起してくるのが嬉しい様な悲しい様な、縄があまりゆるいので物足りない。「Tさん、力ないのねっ」とわざと馬鹿にした様にいった。

顔色がチョッと引き締った様に思った。もう「痛くない?」とはいわなかった。

グイグイと二の腕、手首、足首、膝、股、胴、胸と土の字という様な形になった。戸袋はしめてあるので、もし開けられたら、どうだろうか。

肌がプクプクと肉が絞られて、アクセントがついている。縄の痕が三日位取れないかも知れない。とぼうーとなりかける。Tさんは

三面鏡を前に立てた。乳房がビクンと上を向いて、その上を又一筋縄が、乳房のふくらみが二つに割られ、青い静脈が浮き出ている。と、縄と縄に肌がかまれて思わず「痛ッ」と声が出る。がー知らぬ顔をして憎らしい。くくり終えて、どっかとあぐらをかいて、左手で髪の毛を鷲掴みにして、煙草のけむりをフーと一杯鼻腔に吹き込まれた。

「ゴホンゴホン」と咳入り涙を流す私に、なおもフーッとけむりが襲って来る。涙と鼻汁と咳で顔がみにくくゆがむ。「どう「リカ」責められるって、並大抵じゃないだろう。よすかい」とからかうの。恨めしそうにニラムと「フフフ、キレイな顔が、ドレドレ」といって、タオルでキレイに拭ってくれて鼻までチンとかんでくれて優しいことをする。

と、喜んでいると、いきなり飛び出た乳房に足をかけて、縄を縦にグイグイ絞る様に締めつける。ああ乳房がつぶれる。痛みにフーとなる。今度は首の附根に足をかけて顔が曲る程に押しつけて、胸の縄をもう一巻し、一杯ギュッと引く。「ウーム、ウーッ」吐息がとぎれとぎれ、のどがしまるようになる。

夢心地と痛みと入りまじっていたが、キーンとつつ張る様に身体を伸して痛みをこらえ

ると、フーッと奈落に吸いこまれるような気持ちになって、それっきり。

気がつくとなんかトンにねかされていた。グッタリとした疲労感、相変らず気持ちがいい。帰る時「これっ」とナイロンに私のパンティ?「捨てて」とおねしよをした子供の様に蚊のなく様な声で急に恥しくなって走り出した。サヨナラ、涙が出る。なんの涙? わたしにも判らない。日記をつけていながら又想い出して涙がポトリ、嬉し泣き、飲びの涙。悲しいサガの涙

○月○日

羽衣にて今度は私がお願いして、私のアイデアで、その代りあとは御自由にと、用意し



た囚衣三号の黒エリをつけて逆吊り。でも駄目、素人考えね、腕が痛いばかりで縄を沢山かけると責めの感じがこわれて。

次に駿河問、これは小説に載っていたのを真似してみる。これも関節がミシミシとなり折れそうで手足が痛くてとても、Tさんに「疲れたわ」と徒労に終ってぐったりとへたりこんで甘えた。

Tさんは「だろうと思ってね、今日はいいいアイディアさ」と私を坐らせておいてセロテープで鼻腔の中へ貼りつけて額に吊り上げて仰向けておいて口を開けた所、パチリパチリと接写。「変なのを取るのね」っていうと「フッフ」と含み笑い。又ライトを明るくして鼻腔の中を見られる様にのぞいて中指で突き上げて穴を中心にパチリパチリ、次に鼻を上からつまんだり、後から持ち上げる様つまんで口を開けた所をパチリ。煙草を突込んで火をつけたりドライヤーで鼻の穴を變形さしました。

最後に「少し痛いよ」といって高手小手に縛っておいて、勿論足も縛って、ポケットから腕にはめるリングを取り出してパチンと開けて鼻の障子にネジで締めつけてグイと持ち上げます。余り痛くなく持ち上ります。鴨居

に縄を通して、その環につないで、グイグイ吊り上げます。「ああ、ああ」声を出そうにも、のどがあまり仰向いてつまって、唾をのむとガクンとなるのです。そして爪先で立つて精一杯の所で固定されました。

時が経つにつれて、足元がグラグラ口からはよだれが流れ胸へ垂れ、鼻から薄い水の様な液が出て来ます。そして肩がだるくドウキが激しくなります。おろしてと声を出そうにも合図しようにも判りません。Tさんはと上の鏡で見ると、天井の鏡に鼻の真中に環を通された女が苦悶して冷汗をかいてもがいている。私だ。奇妙な顔。吊り上げられ鼻柱はへしゃげ鼻腔は長く伸び切って、横を見るとTさんが誰かを招いている。恥しい、こんな姿を、ベレー帽の男が入って来て、テーブルを真正面にすえデッサンしました。止めてと目で合図するがTさんは絵を見ている。と絵かきさんはTさんに「表情が弱い。君、いいだろう」といきなり腰のバンドを外しスカートをずり落して私をパンティ一枚にしてしまった。

口を開けて「アアアア」という許り。ピュッピュッと素振りをくれて冷たい感触が腹に巻いて先がパリッとした鋭い音をたてた。「ヒエッ」と伸び上がると、グルリと廻る。「イタッ」という声が「アアッ」と出て肩の骨がガクッとなる。

続いて背中がピシッ。「アアア」乳房をベルトの先がなせた時、ジインと血が逆流する痛みと共に体が硬直した様になり、涙がホロリ。「許して、止めて、もっと強く打って、許して」と哀願する気持と入り乱れて混濁した表情が生ずる。ベルトを投げ出した絵かきさんは、懸命にカンバスに向って描き出した。漸く許されて縄を解かれた時は、もうグツグツとなりとなっていたが、もう一度あの興奮がほしい様な気持になったのは不思議でした。

Tさんが、あとから友人でね、変ってるんだ。偶然に逢ってね、ふだんはいい奴なんだが、時々ああいう境地になるんだ。僕は君が死ぬんじゃないかと思った。すごい表情だったものね、それだけに奴もいい絵を書いてくれるだろう。一枚貰ってあげるよ、と言って慰めてくれました。

○月○日（火）

写真と絵を頂く。私がこれ？、私は信じられない位でした。表情を見事に描いた画。あの人きつと立派な絵かきさん。



「長篇SM小説」

宇宙のどこかで

佐 治 麻 造

△或る混血老婦人の話▽

或る混血老婦人の話 (一)

「私」が末だ生れて居なかった泰平洋戦争の頃の話を想い起し乍ら独房の床の上で寝返りを打った私は、昔の人達はずい分と苦勞したんだなあと考えて居ますと、白樺荘に逗留した客の中で泰平洋戦争のために悲運にもてあそばれた混血老婦人の事を思い出しました。「私はね、あの戦争がつくづく恨めしいよ。本当に悲しい目に会わされたんだから……」

若い頃はさぞ美しかったろうと思われる其の老婦人の栗色の髪に混じる白髪や恰好の良い鼻や唇、そして木立の線に映えて濃い董色から漆黒に変わる大きな眼や、其の豊かな臉などを眼に浮べて居ますと、独房の鉄格子扉が開いて手錠を片手に持った婦人看守が「私」に顎をしゃくっていいました。

「出て来るんだよ。運動させてやるからね」

婦人看守に後手錠を嵌められた「私」は、鋏で打ち込まれた足を引き摺り乍ら中庭に連れて行かれました。そこでは二十名程の男女

の未決囚達が後手錠を陽にきらめかせ乍ら輪になって、高い鉄柵の内側を婦人看守の笛と号令に従ってぐるぐる回って歩いて居ます。其の頃は刑事裁判も、昔とは大分違って来て居て、裁判で刑が確定しない間は無罪として取扱うべきだとする思想が相当強く打ち出されて居ました。

破廉恥罪容疑の刑事被告人でも煉瓦色の腿引上衣の囚衣を着せて貰い、昔の未決囚が嵌められ放しだった第三種手錠足錠はもとより腰枷、首環等も滅多に使用される事はなくなって居る様でした。非破廉恥罪容疑の被告達は本人の意思で私服を着る事が出来るのは勿論です。昔は検事側よりの要請ならびに知らず、被告側からの嘆願では、非破廉恥罪の場合ですら、余程のつてと努力即ち金力がない限りは受理される事はなく、まして破廉恥罪の者にとっては空文に等しかった控訴院への上訴も此頃には余程緩和されて居ました。但し刑の確定した者に対する扱いは、昔と寸分違わないのです。

足錠を嵌められて居るのは『私』だけです。輪の内側を唯一人で鎖を鳴らしてうつむいて回りましたが、何だか自分一人だけが特別に虐げられて居る様な気持ちでした。

「こんなけだものみたいな扱いはもう嫌だわ」

黒いドレスを着た娘さんが、そういつて輪から離れ、鉄柵に顔を寄せて後手錠の両腕をゆすり藁草履の素足で口惜しそうに足踏みました。

「規則よ。おとなしくしなさい」

婦人看守が近寄って娘さんの腕を掴んで列に入れようとしてましたが、身もだえして反抗しますので、キツとなった婦人看守の平手打が娘さんの両頬に激しく鳴りました。

「ウッ、い、いたいじゃないの、又撲ったわね。どうするか覚えて居るがいいわ」

彼女は悪たいを吐き作ら、それでも洩々再び輪の中に入って回り初めたのでした。

『私』は懸命になって白樺荘の奥様の姿を輪の中に探しましたが見当らず、がっかりしてしまいました。再び独房にぶち込まれた私はあの綺麗で上品な混血老婦人の事を想い続けるのでした……。

彼女の名はエヴァ・ローレンス。合州国人の商人を父とし、此の国の女性を母とする混血で泰平洋を臨むロス市で合州国市民として生れた。混血児特有の端正な美貌としなやかな姿態を持ったエヴァは、事業に成功した父と貞淑な母の許で一人娘として幸多く成人した。由緒ある女子大学を卒業した彼女は、母の母国の桜咲く国を、東洋文学の研究を兼ねて訪れた。一年の予定が半年延び二年となつたがエヴァは此の国に立ち去り難い執着を覚えるに至った。もっとも数多くの友人の中に心惹かれる青年を見出したのが、其の理由の殆んどであったのだが……。

彼は放送関係にたずさわる前途有望な青年、エヴァと彼は夏の箱根に秋の大和路に、寸暇をさいて楽しい語らいを続けた。娘の長逗留を案じた母が泰平洋を越えてやって来て三人で楽しく過した三ヵ月の後、あの泰平洋戦争の火蓋が切って落されたのだった。エヴァと其の母は敵国人として直ちに逮捕された。服装を整える間も碌に与えられず、身の回りの品すらも携帯を許されないで、エヴァと其の母は片手同士を手錠で繋ぎ合わされ、住みなれたホテルから曳かれた。豊かな生活に慣れた彼女達には収容所の生活は身にこたえて辛かった。半年の後、エヴァの母は交換船に乗って夫の許に帰って

行ったがエヴァは残された。一般市民の被抑留者は、高齢者から送還されるのだ。エヴァ達は毎日毎日工場で労働させられた。MOMPEとかいう衣服はエヴァにとっては囚衣の様に思えたし、手錠で二人宛繋ぎ合わされて、毎日、収容所から四キロの街中を歩いて往復する屈辱に彼女は薔薇色の頬を染めて涙ぐむのだった。

冬夏ぶっ通しのお仕着せをキチンと着て、其の上焼付炉の作業に酷暑の一日の労役を漸く済ませたエヴァ達四十名程の女性の被抑留者の群は、疲労と空腹によるめき乍ら工場の中庭に今日も二列に整列した。全員四十才以下の白人系女性である。二名の婦人監視員が手錠を束ねて持って、彼女達を二人宛繋いで行った。モンペ姿の女子工員達が其の有様を面白そうに眺めて通った。

「十六号と三十三号は列外に出て!!」

言葉の分る十六号のエヴァはいわれた通りにして三十三号がそれにならった。看守を勤めた事がある監視員の一人が冷笑を浮べてエヴァ達に近寄った。

「十六号。お前は言葉がペラペラなので役に立つと思ってさ、少しお慈悲をかけてやったら、すぐにつけ上って怠けるのね」

今日、余り暑いので作業の手を休めて額の汗を拭って居たのを見付けられて居たのだ。

「三十三号。お前は許可なしに用便をし、その上に水を盗み飲みしたね」

見付けられた時に、其の場で跪まずいて赦しを乞うたエヴァ達二人は、それでもう済んだことばかり考えて居たのだが、そんな事で赦される筈はなかった。

「私の亭主はね、応召して命を的に戦ってるんだよ。お前達に怠け

られたりなめられたりしては申訳ないよ。二人共気をつけ!!」

監視員の婦人は永いことかかってエヴァ達を小突き回して意地悪く姿勢を直させた後、猛烈な往復ビンタを加えた。エヴァが撲られて居る間、三十三号は唇の血の氣を失ってわなないて居たが、エヴァの顔がはれ上る程撲り終えた婦人監視員が自分の前に笑い乍ら立つとガバと地面に四っ這いになって泣き乍ら赦しを乞うのだった。

「フッフ、何いってるんだかチンプンカンプンで分りゃしない。さっさとお立ちよ」

金髪を掴んで引き起され、ずるずると立たされた三十三号の両頬にビンタの音が小気味よいばかりの音を立て、三十三号はヒューヒューと泣き叫んだ。

「よし。ビンタは此の位で赦してやるわ。二人共両手を出して」

有無をいわず両手に手錠を嵌められたエヴァは口惜しさに血が逆流する思いであった。

「胸に番号つけたり、両手に手錠嵌めたり、まるで囚人じゃないの!!」

抗議の言葉をエヴァはやっと押えた。何をいった所で今は所詮無駄なのだ。三十三号と腰を捕縄で繋ぎ合わされ乍らエヴァは強く唇を噛みしめた。其の翌朝、工場へ曳かれる時、エヴァ達二人は又も両手錠を固く嵌められた。

「あら、今日もですか?」

「ああ、当分はね。不服かい?」

それから一週間程の後、手錠の痛さに顔をしかめ乍ら収容所の門を出た有棘鉄線の所でエヴァはいとしい男が自転車で乗りつけたのを見た。エヴァの叫び声に彼もエヴァを認めて駆け寄って来た。腰

縄で押えられた手錠の両手をもだえるエヴァの姿に彼は一瞬怒りの表情を婦人監視員に向け、そして押問答を初めた。将校待遇の軍属の制服を着て革長靴をはいた彼の言葉に負けた婦人監視員は、忌々しそうにエヴァの縛しめを解くと他の被抑留者達を急き立てて連れ去って行った。

「どうしてたの？ 何の便りもないもんだから、私もう……」

抱きつき度い衝動をこらえてエヴァはいった。

「君も苦労したなあ。辛いかい？」

エヴァの手錠の痕を撫で乍ら彼はいった。

「開戦三日前から缶詰にされてね。開戦と同時に南方に派遣されたんだよ。二週間前に帰って来たんだ。大本営の情報局勤務さ」

エヴァは嬉し涙が溢れる双眼でひとと男の顔を見詰めて、其の言葉は殆んど耳には入らなかった。彼はエヴァの肩をそっと抱いて収容所の中に歩いて行った。

「中に入ろう。守衛の奴が妙な眼で見てるよ」

彼の身分証明書を見てパツと敬礼した守衛は、エヴァの左胸の豊かなふくらみを驚嘆みにする様にして其の番号布を確認し、さげすむ様に其の手を離しざまにエヴァの胸を小突き、そして頭の方から足の先迄ジロリと一べつをくれるのだった。

「エヴァ。君もこんな所に入れられて毎日工場で労役じゃ堪らないだろう？ 君に出来るいい仕事をもって来たんだ」

彼は、屈辱に涙ぐんで居るエヴァの長いまつげをいとしげに見やり乍らいった。

「ともかく収容所長に面会しなくちゃ」

或る混血老婦人の話 (二)

エヴァは急に激しく嘔り上げた。久しく化粧した事もない陽に灼けた顔、泥と油と汗で汚れた不恰好な囚衣のモンペは長い脚のふくらはぎ迄しかなく所々繕ろう術もなく破れて居た。サイズの合わない白いズック靴は泥色にすり切れ爪先の破れ目から素足の爪がのぞいて居た。

「どうしたんだい？ 急に泣き出したりして」

顔を掩うて二、三步離れ、背を向けたエヴァに、彼は身分証明書をしまい乍らそういつて肩に手を掛けた。

「ここから出して上げるんだよ。お腹は？」

「喰べる物は充分呉れてるのよ。粗末なものだけど。そんな事より、私こんな恰好で恥かしいわ。私の体、汗臭いでしょ、手もこんなに荒れてしまつて……」

エヴァは髪をかき上げ撫でつけて、上目使いに彼をちらと見やりそして長いまつげを伏せた。豊かな上瞼のふくらみの上には土ぼこりがついて居たし髪を撫でた掌は砂でざらざらした。

「ヘア・ブラシも十人で一個しかないのよ。それもすり切れて……。早く故国に帰り度いわ」

「可哀想に。ひどい目に会わされてるんだなあ。故国へ帰して上げる事は僕にゃ出来ないけど、ここから出して上げて、もう少しましな暮しをさせて上げれると思うよ」

売春婦等を収容して居た婦人矯正院を流用した其の抑留者収容所には、若い男女合わせて二百名近くが収容されて居た。門から構内の広い庭を横切つて建物の入口迄、高い有刺鉄線の柵が設けられ、

被抑留者を男女別に区分して居る。建物の入口に近い所に二個の鉄檻が柵の両側に一個宛接近しておいてあった。

「あの二人は夫婦なのよ。女の方はキャロルっていうの」

檻の傍らを通り乍らエヴァは眉をひそめていった。向う側の檻には一人の若い男が、そしてこちら側の檻の中には一人の若い女性がうずくまって低く呻き合っている。体を折り曲げて漸く入れる程度の檻の中の彼等は、二尺角位の厚い木の首枷を掛けられて、長い脚を苦しうに折り曲げ後手錠の両腕を切なげにもだえて居る。

「あの人達はね、一昨日の夕方、作業からの帰りに柵越しに会ったのよ。私達の群と男の人達の群が帰りにカチ合った訳なの。お互いにもう夢中になってしまつて気が狂った様に柵に走り寄ったわ、キャロルと繋がれてた娘さんが不意を喰つてしまつて手錠の痛さに悲鳴をあげて……」

檻の中のキャロルは通り過ぎるエヴァと彼に微かに顔を上げて唇を弱々しく動かして聞き取れぬ声で何かいった。

「それで二人共すぐ服を剥かれて体中に鞭を受けて、そしてあんなに風に向き合つて檻に入れられたのよ。ほんの少しのお水しか与えられてない様だわ。苦しうねえ。明日の夕方迄あやうって放つかれて、そして又鞭打たれてから漸く赦されるんだって……」

「君はまさか鞭打たれたりした事はないんだらう？」

「ええ、そりゃ私達は罪人や奴隷じゃないんですもの。余程のことがなければね。けどビンタはしょつ中よ。それに正坐させられるのはこたえるわ」

真白いブラウスの襟にバッジをつけ、紺のスカートをぴったりとはいて濃紺の制帽を黒髪の上にピンで留めてうんと傾けて載せ、腰

の黒革バンドの右腰に手錠の革サックを吊った婦人看守が、建物の入口の低い石段の所でエヴァ達と出会い、げんそうに二人を見比べてすれ違った。身を固くして立ちすくんだエヴァはホツとし乍ら「事務室は右に曲つて突き当りよ。真直ぐ行くと私達の監房だわ」薄暗い廊下の彼方に冷たい鉄格子の扉が鈍く光つて居て、其の向う側から低い呻き声が交錯して微かに聞えて来た。

「女同士で愛し合った二人の女が懲罰されてるのよ。昨夜、夜更けに見付けられて二人共引き摺り出されて窄衣っていうのかしら、それで緊め上げられて苦しんでるの。出稼ぎに来てたダンサーらしいわ、不潔ねえ」

二人が事務室に入つて彼が書類を示して何かいうと、婦人係員が彼を奥の所長室に案内した。

「十六号は、そこでお待ち!!」

カウンターの外に小突き出されたエヴァが、彼の後姿を見詰めて居ると、給仕の小娘が手錠をカチャカチャいわせて手にぶら下げて前に立った。

「手をお出し」

精一杯の威厳を示して意地悪そうな眼で見上げる小娘へ、両手を差出し乍らエヴァは

「逃げはしませんよ、そんなにしなくても……」

流暢なエヴァの言葉に小娘は少し驚き乍ら、エヴァの両手首に手錠を鳴らした。

「逃げれるとは誰も思つてないわ。こうされるのが、あんたの分際なのよ、馬鹿だね」

平手打を両頬に受けたエヴァは口惜し涙をこらえてうなだれて立

ちつくした。

暫くして所長室に連れて行かれたエヴァは椅子も与えられず、所長の婦人の鋭い眼にジロリと睨まれて立ちすくんだ。婦人矯正院長だった其の所長は、物理療法も効かない程のひどい近眼と見えて珍らしく眼鏡を掛けて、色白い長い其の頬を冷たく歪ませ彼の方に顎をしゃくってエヴァに声を掛けた。

「此の方は軍情報局の放送担当の軍属よ。お前に連合軍向きの放送員をやらせたいんだって、どうお？」

彼も微笑を浮べて口を添えた。

「やって呉れるに決ってるね？ 声といい教養といい打ってつけだと僕は思うよ」

「どんな事を放送するんですの？」

エヴァの反問に彼は一瞬とまどった様だった。首を振る扇風機の風に乱れた髪を掻き上げるエヴァの両手の手錠がカチャリと音を立てた。

「決ってるじゃないの!! 敵の兵隊の志気をくじけさせる様な事をしゃべるのよ、お前の其のいい咽喉でうんと悩ませておやりよ」

婦人所長はそういつて煙草をくわえると低く笑った。

「そうなの……」

エヴァの心は千々に乱れた。此の收容所から出られる上に、いとしい男を喜ばせる事が出来るのだ。そうしたいのは山々だったが彼女は合州国市民としての自覚と誇りと、そして忠誠心とを持って居た。

「だった私は合州国市民ですもの、そんな……」

「そうですとも!! 強制は決してしませんよ」

所長はせせら笑って紫煙を吹き上げ、手をのばして扇風機の風がエヴァの方へは行かない様にし、回転椅子をきしませて男の方に体を向け眼を眼鏡の奥で細めた。一人の男の看守が拳手の礼と共に入って来て直立して所長に

「一二〇号と一四八号の息が細くなりましたが……」

「ああ、喧嘩した二人の男ね？ 末だ一昼夜も経たないんだろ？」

毛唐は案外だらしないのねえ。仕方ないから少し窄衣ゆるめておやり。そして足裏に鏝を当てて、悲鳴を出す様になったら構うことないから又緊め上げてやるのよ。いい？」

「ハッ」

看守が出て行くのを待ちかねて彼は椅子から立ち上ってエヴァに近寄った。二つ返事で承知して呉れるものと思ひ込んで居た彼は、エヴァの拒絶に会って鼻白んでかきどく。

「南方に行つてた間も君の事は片時も忘れたことはないんだよ。帰つて来て此の企画が立てられた時、真先に君にやつて貰おうと決めたんだ。少しでも君に楽をさせたいと思つて……」

婦人所長は苦々しげに咳払いをし、エヴァの背後に立った婦人看守はエヴァの肩から彼の手を払いのけ、そして風で床に散った書類を拾い上げ乍らエヴァのふくらはぎをピシヤリと平手で打った。

「膝が離れてるよ。ちゃんと気をつけの姿勢をお取り!! 手は仕方ないけど」

彼は、まずい事を口走ったと後悔し乍ら椅子に戻って頭を抱えた。

「次郎さん、お気持は嬉しいわ。けど、よく考えさせてね。私達の祖国が別々だつて事、本当に悲しいわ」

エヴァの声は微かにうるんだ。

「では、十六号は作業に行きなさい。あなた御苦労だけど連れて行ってやってよ」

「ハイ」

婦人看守はエヴァの右肘を邪けんに掴んで室外に引き摺り出し、次郎は力なく立上って戦闘帽を取り上げたのだった。

或る混血老婦人の話 (三)

翌々日の朝、エヴァは一人残された。二列に並んで出て行く女囚達が、監房区画を仕切る鉄扉の所で、或いは情けなさそうに或いは忌々しそうに差出す片手と片手を、女囚達の肩迄しかかない婦人看守が順々に手錠で繋ぎ合わせて行く。

「何度いったら分るの!! 手の甲を上に向けて出すのよ」

言葉がよく分らない女囚の頬が激しく打たれ、一きわ大きな金属の響きと共に彼女の右手首に鋼鉄の環が喰い入り、彼女は左手で頬を押えて顔をそむけて唇を噛んだ。

ガランとした監房区画に独り残されたエヴァはやがて地下に引立てられ有無をいわず囚衣を剥がれて全身を鞭打たれた。魂切る悲鳴をコンクリートの壁にこだましてエヴァは不当な懲罰を遂切れ途切れに詰じったが、婦人看守の答は態度が悪いの一点張りだった。コンクリートの床にしがみついて全身を波打たせるエヴァの髪の毛が掴まれて引き起され、ねじ上げられた両手に固く後手錠が嵌められた。更に鎖帷が締められる。腰を鉄鎖が強く締めつけ、前側についた二条の鉄鎖が左右の鼠蹊部にそれぞれ沿うて後ろへと回り真下の長方形の環で一つになって、更に其の角環についた一本の鎖

が上方に引き締められて腰鎖の後ろ中央部にカチリと結合された。

生れて初めての革鞭を全身に受けて息も絶え絶えのエヴァは、素肌にギョツと締め上げられて喰い込む鎖帷の冷たさと痛さ、そして其の部分の彎曲に合わせて作られた角環の切ない程の圧迫感と屈辱感とに暫し鞭の痛みも忘れて身をもんで喘いだ。

「此の位締め上げておけば、ウエストがスマートになるわ。フ、フ、さ、こっちにおいで」

後手錠を鎖で首に吊り上げられたエヴァは、コンクリートで固めたトーチカのような暗房に蹴り込まれた。二重の鉄扉が音高く閉められると、直径一米半高さ一米ちよっとの半球状の房内は一条の光も射さぬ真の闇となってしまう。切なさとし心細さ、そして全身の素肌に残る鞭の痛みにままたらぬ体を動かすと、肩が頭がそして膝頭や足先がコンクリートの固さに当たった。中心に向って僅かに傾斜した床はジメジメと湿って糞尿の臭気が房内に立ちこめて居た。つのる恐怖と息苦しさのエヴァは絶叫して身もだえし、房の狭さを思い知らされた。何故急にこの様な扱いを受けたのか、其の理由はエヴァにはもう分って居た。対連合軍向けの放送を強制する手段なのだ。しかし又、此の責苦には次郎は全く関係して居ないという事もエヴァには女性の本能で分って居た。勃然とこみ上げる怒りに燃えてエヴァは頑張った。日に一回、水と握り飯を投げ入れる度に婦人看守はいうのだった。

「苦しそうですね。楽になり度ければ、いう事をききなさいな」

「いうことって、何ですの?」

エヴァが唇を噛み乍ら白ばくけると

「そういえば分るってさ。分らないなら、仕方ないわね。フ、フ、

フ、ああ、臭いこと」

暗黒の中で、首の鎖に咽喉を詰らし乍ら鼻先で床を探って水を啜り、麦の握り飯をかじり、そして垂れ流した自分の糞尿にまみれてエヴァは頑張り通した。根負けした当局は五日の後、エヴァを引き出して今度は搦め手から責めた。検討の結果。エヴァ程の適格者は他に居ない事を認めた当局は執拗であった。両国語に堪能な点はさておいても、其のセクシーな甘い声は得難いものだったのだ。

鎖錠を解かれ身の始末をしたエヴァは囚衣をつけて所長室に曳かれた。両眼は数秒間と開いては居れなかったし、股は一步毎にすれて飛上がる程痛んだが、冷酷な婦人看守は、手前錠に結んだ捕縄を容赦なく引張ってエヴァを曳き摺った。膝で歩いて突き入れられ、室内の床に倒れたエヴァに婦人看守は直立不動を命じて靴先で頭を蹴った。

「まあ、いいじゃないの。立てないのなら坐ったままでいいわ」

婦人所長は今日は馬鹿に寛大だった。

「坐れたかえ？ ああ手錠も外しておやり。そんな体じゃ、手向いも出来る気ずかいはないだろう」

エヴァは手錠を外された両手の指先で痛む両眼を押えた。

「エヴァ。苦しかったかい？ けどよく頑張ったわね。感心してるのよ。ま、お前が嫌なら嫌でいいわ。候補者は他に多勢あるんだから……」

所長はゆっくり椅子から離れてエヴァの前に立った。室内には男の気配もして居たが、それが次郎ではない事はエヴァには分って居た。

「ところでね、エヴァ。いや十六号。お前はスパイをやっていたの

ね。逮捕した憲兵の方が見えてるのよ」

「スパイ？……」

エヴァはぼんやりと聞き返した。

「そうよ。お前、開戦前にあちこちを旅行してたわね。証拠が上ってるのよ。可哀想だけど監獄行きね。監獄じゃここみたいな生ぬるいことじゃ済ませて貰えないよ。まずくすると銃殺されるかも知れないわ。」

監獄、銃殺と聞いてエヴァの心はぐらついた。所詮かばって呉れる者は誰一人居ないのだ。重屏禁の責苦に堪え抜いたエヴァの背筋を冷たいものが走った。心身共に弱り果てて判断力も絶え入り勝ちのエヴァに最後の切札が叩きつけられる。

「そうそう、それから、お前と一緒に旅行して回ってた男ね、島津次郎とかいうんだっけ。あの男もスパイやってた訳だろう。これはもう銃殺は間違いないわ」

最後の糸がエヴァの心の中で切れた。

「お、おっしゃる通りに致します。お願いですから、あの人をスパイだなんて!! 私達身に覚えのないことですわ、そんなこと……」

「フ、フ、フ、おっしゃる通りにするって、何をすのさ？」

「放、放送します。一生懸命やりますから、助けて下さいまし、お願い!!」

婦人所長の両脚にすがりつく様にして哀願するエヴァを眺めて室内の人々はニンマリとしたが、エヴァには分らなかつた。

「そう。そんなにいうんなら、ともかく、報告だけはしといたげるわ。あ、そうそう、これに署名しなさい。承諾書よ」

突きつけられた紙片がデスクの端に置かれにじり寄ったエヴァは

ペンを握ったが手が動かない。

「どうしたの？嫌ならいいのよ。その書類がなけりゃ上申しようがないじゃないの？」

重々しい男の靴音がエヴァの背後に近寄って彼女の左手がねじ上げられガチッと手錠が鳴った。

「あっ、サインします。サインします。しようと思っんですけど手が動かないんですの」

「ふん!! 懸命さが足りないからよ。仕方ないわね。じゃこれに少し練習しなさい」

左手に嵌められてぶら下ったままの手錠の重さを手首に感じ乍らエヴァは与えられた紙に一生懸命ペンを動かした。

「もういいだろ。早くサインして」

内容も確に見ないでサインし終えたエヴァは虚脱した様に崩折れた。冒頭に刷られた就業承諾書という文字だけが辛うじて判読出来たが、此の時サインした此の書類があとになって彼女の上にあの様に重くのしかかろうとは、思いも寄らない事であった。日常の漢字位はなんとか読めたエヴァであったが、一字宛考え乍ら読む等という事は、其の時の状況では不可能なことだった。

或る混血老婦人の話 四

嬉しげに迎えた来た島津次郎に伴われてエヴァは久し振りに監視のない自由な空気を味わい乍ら嘗て逗留して居たホテルに行った。

ホテルは軍の情報機関が徴用して居たが、彼女の所有物は保管されて居た。

「お久し振りですわね。ずい分おやせになって!!」

顔なじみの年配のメイドに声を掛けられたエヴァは涙ぐんだ。

「お荷物はこれだけでございます。お母上様がお帰りになる時整理なさいまして、御自分の物も殆んど残して行かれた様ですわ」

母の心ずかいと其の香りを荷物に感じ取ってエヴァは頬を濡らした。全身に残る鞭痕のおぞましさと痛さに時々呻きつつも、エヴァは心ゆく迄入浴を楽しんだ。使いなれた品々を用いて髪や肌の手入れをし、そして化粧をすまして居ると心が弾む様だった。両腕は動かすと時々鈍く痛んだが、ドレスに身を包むとそれも吹きんでしまう様に思えた。

「この室が君の室だよ。三、四日ゆっくり静養していいんだよ」

次郎はエヴァを見てまぶしそうにするのだった。収容所で受けた理不尽な扱いや強制に就いて、エヴァは次郎に訴えたのであったが其の類稀れな甘い声に聞き惚れる次郎は、エヴァが承諾して呉れた事を唯喜んで、うっとりとその眼をのぞき込むだけだった。

旬日を出ずして、とろかす様なエヴァのセクシイ・ボイスが電波に乗って泰平洋を駆けめぐる様になった。

「連合軍の皆様、ごきげん如何? 今日皆様方の故国のお便りをお伝え致します。ニューアーク市におきましては、婦女子に対する暴行事件が急激に増加して来て居ります……」

「本日ラパールにお出掛けになった皆様。お友達を多勢失われて真にお気の毒です。又のおいでをお待ち致して居ります。お友達の方々と天国で会わせて差上げたいと、旋風戦闘機隊がお待ち申上げて居ります……」

連合軍将兵達はジャプー・ローズの声を毎日待ち焦がれる様になった。彼女の声が将兵の士気を挫いたかどうかは疑問であったが、

たとえ一時にもせよ、其の故国を妻子を恋慕せる念を起させたのは事実であった。

「今日は皆様のお国の古い歌を唄って差上げましょう。お顔を見れなくて残念です。私は今、キラキラ光る長い裾のドレスを着て居ますが、少し暑いのでドレスの裂け目から時々腿を出させて頂いてます。いとしの皆様方よ、私のハミングを聞き乍らしばしお眠りになつては如何?……」

人々の手前もあって、当局は最初の間は次郎とエヴァを引き離そうとしたが、放送効果の上で段ちがいの差を生ずる事を認めてからは、次郎とエヴァの会う瀬は黙認された。半ば公然といふ男と同様に近い生活を送るエヴァの声には一段とうるおいと深みが出来て、連合軍将兵の間での人気は益々上昇した。エヴァの放送を聴く事を禁止した部隊もあちこちに出来た事を探知した当局はほくそ笑んだが、それでもエヴァに時々お灸をすえることは忘れなかった。

「エヴァ。お前の今日の放送はなっていないじゃないの!! いい間違いはするし、声は荒れてるし……。つけ上ると駄目よ。」

今日もエヴァが最も苦手とする婦人放送員首席の前で油を絞られた。昨日、次郎と些細な事でいい争いをした報いはてき面だった。

「申し訳ございません。今後注意致します」

「フン。此の前もそういつてたわね。今日は骨身に沁みる様にして上げます。手を出さない」

婦人放送員首席はデスクの抽出から取出した手錠をエヴァの両手に嵌めた。

「今日はホテルに帰ることは許しません。そうして、その隅で壁に向いて正坐しなさい。今夜の勤務時間迄続けるのよ。復誦して」

「ハ、ハイ。エヴァ・ローレンスは、手錠を嵌めて頂いて、今夜の勤務時間迄正坐して、反省させて頂きます。ありがとうございます」

しかし、エヴァの体に罰が加えられる事は、そうはなかった。それよりも次郎との会う瀬をせかれる方が多かったし、特にいという男を戦地へ送るといつて脅かされるのがエヴァにとっては最もこたえる事だった。しかし何だかだといつても、被抑留者収容所での暮しに比べれば天国の様なものだったし、エヴァが落度なく懸命につとめて居る限り、彼と彼女は戦争をよそに楽しい語らいを続けて行けたのだった。

終戦が近づいて、エヴァの声も其の内容の空虚さに次第に張りを失って行った。次郎も遂に本土防衛部隊に編入され、エヴァの担当する放送も毎日行われなくなった。そして彼女が其の孤独に堪え切れなくなった頃戦いは終わった。エヴァはあちこち破壊されたホテルの一室で、破れたガラス窓から吹き込む風が暗幕をばたつかせて居る暑い或る日の午さがり、ベッドに腰かけて終戦のラジオを聞いて大きな溜息をついた。喜びとそして漠とした不安が全身を包み、エヴァは永いこと身じろぎもせず坐り続けて居たのだった。

或る混血老婦人の話 (五)

占領軍によつ情報関係者達の取調べが開始された。放送員であつたエヴァも軍令部に出頭させられた。ジャプー・ローズとして名を知られたエヴァは合州国市民でもあるし又女性なので非常に寛大な取扱ひを受けた。他の連中は容赦なく留置されてきびしい調べを受けて居たが、エヴァは五日間に亘る取調べの間にも手錠一つ嵌めら

れる事もなく毎日ホテルに帰ることを許されたのだった。

エヴァに対する取調べは情報局の機構に関するもので、ついで抑留所に於ける取扱いについても詳しく訊ねられた。合州国市民であるエヴァがジャプーの戦時情報活動に従事した事に関しては殆んど問題にもされず、却って其の苦勞をねぎらわれて取調べは終わったのであった。被抑留者達は続々とそれぞれの母国に帰って行ったが、エヴァは帰らなかった。いとしい男に会いたかったのだ。そして其の島津次郎の消息は全く分らなかった。

終戦後既に半年を過ぎ、エヴァは独り淋しくクリスマスを送り正月を過ぎた。混血児のエヴァは終戦時には何一つ貰いそこねて放り出されてしまったのだし、物価は日々に高くなったが合州国の両親からの送金によって彼は物質的には豊かであった。占領軍専用の店を利用する事も出来た。しかしエヴァは淋しかった。言い寄る占領軍将校は降る様だったし、故国の両親からは帰国を促す便りが引きもきらなかったが彼女はそれに耐えた。彼次郎に対する思慕の情は日ましにつのりこそすれ薄れることはなかったのだ。知り合った司令部の将校達にも頼んで調べて貰ったのは勿論だったが生死すら不明だった。都内にあった次郎の邸宅も戦災で焼かれ、彼の両親や兄妹達の行方も分らなかった。愁いに沈んだエヴァは化粧すら忘れてホテルの一室に閉じてもって涙に頬を濡らす日々が多くなった。

早春の曇った或る日であった。室のラジオが暗いニュースを伝えて居た。

「占領軍法廷に於て絞首刑を宣告された居たB級戦犯達の処刑が明後八日午前八時H公園に於て公開執行される旨、本日司令部より発表されました。受刑者達は何れも捕虜虐待のかどに問われたもので

男子四名、女子二名。其の氏名は次の通りであります……」

エヴァは眉をくもらせてラジオを切った。

「今月中待つて見て分らなかったら、ひと先ず両親の許に帰ろう」悲しい決心をしてエヴァはベッドからゆっくり立ち上った。手続を頼んで来なければならぬのだ。しかし其の時ドアがノックされた。そしてそこには見すばらしい復員兵姿の次郎が立って居たのであった。

本土防衛の北端の部隊に編入された次郎は終戦時の混乱時に残務整理要員として最後迄残され、そして上官達の罪迄も被せられて官品横領、統制経済違反の容疑で逮捕され、そのまま北界道の拘留所に拘留されて居たのだった。漸く不起訴に決って釈放された彼はまっしぐらに飛んで来て、そして期待通りにエヴァを見出して涙を流して驚喜した。

次郎は日ならずして慣れた古巣の職場に帰った。ささやかな結婚式を挙げた彼等はやがで郊外に小じんまりとした愛の巣を営なみ初めた。戦争の傷痕を徐々に癒しながらも世間は混乱し、不幸な人々は巷に満ちて居たが、彼と彼女は幸福そのものだった。夏が過ぎ秋が来、そしてその年も暮れエヴァは身ごもった。

或る混血老婦人の話 (六)

終戦後既に四年余の月日が流れた。愛児も健やかに成長してよちよち歩きの愛らしい盛りであった。愛娘の一家に会いに訪れて居たエヴァの両親の帰国を送って空港からの自動車の中で、膝の上の愛児の寝顔を見下ろし、ハンドルを握る良人の横顔を見やうとエヴァの胸は喜びに溢れる様だった。戦災で家族を失った次郎は、エヴァ

の両親のすすめによって合州国に移住することを承知したのだ。なかなか同意しなかった次郎も、先刻空港のロビーで遂に合州国行きを承諾したのだ。両親からの連絡があり次第、エヴァ達は一家揃って合州国に渡り、新しい職場との折衝がつけば、そのまま住みついてもいい、と次郎が云ったのだった。

「向うへ行ってしまうば、こっちのものだわ。腕によりをかけて何が何でも勤めさせてしまうから……」

そう考え乍らエヴァは胸ふくませて男の啣えた煙草にマッチをすってやった。

しかしエヴァの喜びが無残に打ちくだかれる日がやって来た。いや、喜びだけではなくエヴァの人生そのものをも奪ってしまう日が来たのだった。両親が去って約一カ月経経った或る日、次郎が持ち帰った一冊の本が其の前ぶれであった。

「エヴァ。お前のことをいろいろと書いてあるよ。気を悪くせずに読んでごらん」

本の題は『泰平洋深紅に染まる時』著者は従軍記者であったハロルド・リッジウェイ。二年程前に合州国で出版され、未だ邦訳は出て居ない戦記物であった。ジャプー・ローズの甘い声が如何に連合軍将兵のホームシックを煽り立てたかを暴露的に書き立て、特に謀略面に関する章に於ては、エヴァが如何に卑劣なたくらみによってジャプー軍部の放送員になり終うせる事が出来たかを、悪意と中傷に満ちた文章で述べて居た。エヴァが現在旧敵国人の男性と結婚して終戦後一度も帰国して居ない事実をも巧みに利用して、彼女が自ら進んで売国奴的な行動を行ったかの様な印象を読者に与えても居た。

「私の事、ずい分あちこちに書いてるわね」
パラパラと拾い読みして居たエヴァは、やがて顔色を変えて読み耽り、そして口惜しさに胸を熱くした。

「ひどいわ。まるで嘘よ。見て来たみたいに書いてるけど殆んど作り事よ」

エヴァの行為は国家に対する反逆罪を構成すると述べ、そしてそれを追及しないのは司令部の一部の将校が彼女の色香に迷ったためであるというくだりを読んで彼女は全身を震わせて怒り悲しんだ。しかし乍ら、放送員としてマイクに向って居た頃を振り返ってエヴァは少し後めたかった。最初のうちは心にかかって居た罪悪感も、愛人次郎との会う瀬の度に薄らいで、やがては自分達の束の間の享楽のために戦地の連合軍将兵の心を惑わせようと懸命の努力を払う様になったではないか。其の反省が、反逆罪という活字の文句と共に彼女の背筋を硬張らせた。

「けれど、もう取調べもとうに済んでるんだし、その事は心配しないでもいいわ」

彼女は自分の心にいい聞かせて背筋をゆるめたが、そうではなかったのだ。終戦直後の占領軍による取調べは、合州国市民に対するものとしては正規のものではなかったし、此の本の出版を契機として共財主義圏との最初の小競合も相俟って、合州国々民特に国粹主義者や年配の婦人達の間でジャプー・ローズを非難追求する声が高まって来て居たのだ。殆んど家に引きこもって居るエヴァはうかつにもその事は知らなかったが次郎は知って居た。そしてエヴァの母国に行く事を決めたのも半ばはそれを憂えての事であった。

エヴァの両親も、その様な声を耳にはして居たが、彼等が属して

居る社会層では全く問題にされて居なかったし合州国は広いのだった。しかし次郎には危険が感じられて居た。結婚と同時にエヴァの国籍を苦勞して変えはしたが、占領されて居る国の国籍等は頼むに足りないのだ。講和条約の締結を望む気持が次郎には人一倍強かったのも当然であった。

「このハロルド・リッジウェイって人は私に何か恨みでもあるのかしら？」

リッジウェイという珍しい姓は、エヴァには微かに記憶があった。

「ああ、そうだわ!!」

キャロル・リッジウェイだ。あの忌わしい收容所生活の時、同じ監房で寝起きし、同じ手錠で繋ぎ合わされて、とぼとぼ並んで歩いた事もあったあの女だ。そしてエヴァは更にすべてを思い出した。終戦後、独り淋しくホテルで暮して居た時、無理に引張り出されたパーティで紹介された新聞記者の名は確かハロルド・リッジウェイだった。

「私にデイトを申し込んで来たけど、あっさり断わってやったっけ。顔も今から考えるとキャロルに似てたわ、兄妹だったのね。キャロルにいろいろとあることないこと聞かされたに違いないわ」

そうなのだ、エヴァは知らなかったが、彼女が收容所を離れた後で、残った女性達の間ではやかみと羨ましさで噂が輪に輪をかけて、遂にはエヴァは稀代の妖婦の様にいわれてしまつて居たのである。

其夜は不安と怒りと興奮でエヴァは寝られなかった。其のエヴァを次郎はやさしく慰めはげまして呉れるのだった。

「それでも合州国に帰るのかい？」

「帰るわ。私何も恥かしい事なんかして居ないわ。あの時は仕方なかったんですもの……」

エヴァは眉を上げてきっぱりといった。

それから、エヴァは短波放送のダイアルをあちこち回す様になったし英字新聞にも丹念に眼を通し又合州国の新聞も取り寄せて読む様になった。強い事をいっても矢張り氣に掛るのだ。

「私、氣を付けてるんだけど、私の事はさっぱり出ないじゃないの？」

「そうだね。近頃は下火になった様だね」

次郎も頷ぎました。

「一部の連中が騒いでるだけよ。もう騒ぎ疲れたんだわ」

更に一カ月が経って、ロス市の両親から待ちこがれて居た便りが着いた。出発の日も略々決まり、次郎も休暇を取る手筈やいろいろの手続きに忙殺され初めた。

其の朝も、良人を送り出してエヴァは居間に坐つて何かと準備に心忙しかつた。女奴隷の由美がコーヒーを運んで来た。統制が解けると同時に買い入れた債務奴隷で、おとなしくまめに働くので情けをかけてやつて居た。

「お前も飲んだらどう？」

「ハイ。ありがとうございます」

「台所の片付けは済んだの？ 悲しそうな顔してるけど、どうしたの。元氣をお出しよ。何やかやと忙しいんだから。出発迄あと三週間なのよ」

「ハイ。すみません。けれど、お別れしなくちゃならないと思うと

悲しくて……」

「そうね。連れて行けないのよ。けど、とてもよく働いて呉れたわね。感謝してるのよ」

「そんなおっしゃられると益々悲しくなりますわ。私、奴隷は初めてなんですけど、こんなにやさしくして頂けるとは夢にも思いませんでした。未だ三年近く勤めなきゃいけないんですけど……、今度はどんな所へ行くのかと思いますと……」

「あら、実はね、もっとあとで言おうと思ってたんだけど、お前は解放して上げるつもりよ。自由の身にして上げるわ」

由美の顔に驚喜の色が浮んだ。

「ほ、ほんとでしようか!!」

「ほんとよ。戦争さえなければ、お前も立派な若奥様で暮せたものをねえ」

「ありがとうございます。身を粉にして働いてお金を溜めて良人の買主の方に頼んで見ます。御恩は決して忘れません」

由美は肩からむき出しの両手を合わせてエヴァを拝んだ。その時電話のベルが鳴り、立上って受話器を耳に当てた由美が困惑していた。

「奥様。外国の方からですの。私よく分りません」

代ってエヴァが出ると、それは占領軍司令部のハーマン大佐からであった。

「相変らずの声だね、うっとりするよ。所でちょっと来てくれないか? 何、大した事じゃないらしいんだが、戦史係の方で何か訊きたい事もあるんだらう。二時頃でいいよ。グッバイ」

起き出して来た愛児を抱き上げて頬ずりすると、微かに兆した不

安感もどこかに消えて行った。ひるが過ぎて暫くすると由美が現われた。

一端に鉄の足環が、もう一方の端には小さな錠が付いて居る長い鎖を自ら持った由美は、小さな錠が付いて居る方を自分の腰に一巻きした。着古した木綿の色褪せたワンピースの上からギュッと締め、腰の右側で錠をカチッと鳴らす。腰を一巻きした鎖は腰の右側から右太腿の外側に沿うで垂れた。垂れた端の鉄環を屈んで拾った由美はエヴァによく見える様にし乍ら自分の右足首にガチャリと嵌める。由美が身を起すと鉄鎖が右脚の外側でゆるやかに揺れて微かに鳴った。

「御苦労さん。私これからちょっと外出するからね。坊やおひるねしてるわ」

エヴァは女奴隷の手錠を外してやり乍らいった。

「足鎖は私が帰る迄つけとくわ。辛抱おし」

鍵束を革のキホルダーに滑らせて納い込み、それをハンドバッグに投げ入れてエヴァはいった。薄青色の紗の様なナイロンを透して黒と深紅の生地が柄がすけて見える夢幻的な豪華なドレスを着てなし、あでやかに化粧したエヴァをまぶしように、そして微かに希望を混えて見上げた女奴隷はすぐに眼を伏せてこっくりと頷いた。「五時迄には帰って来るからね。メニューは台所の黒板に書いていたから、下ごしらえをしないとよ」

「ハイ」

しかし、エヴァは再び此の家には帰っては来なかったのだった。

(未完)



九・十・十一・十二月号の

魅力ある責めの感想

柴 島 令 子

昭和三十八年、奇譚クラブ九月号に載りました、柴島令子です。詳しく申しますと、七月号で、「かそけき願い」九月号で、「五、六、七、八月号の魅力ある責めの感想」を、発表致しました柴島令子です。

今回は、九月号から、私の感想を述べる事に致します。九月号をめくりますと、先ず、驚ろかれる事でしょう。「夢幻の中のトルソ」で、絹川文代嬢の咽喉から腹部までの、グラビヤ。絹川嬢の、首、胸、腹、とロープで、厳しく縛ってあります。私はそれ以上の驚き、目が、吸付られました。絹川嬢のお臍と、乳首です。

次に、「浴槽の女神」梨花悠紀子嬢です。

パンティ一枚で、後ろ手にロープで固く強く縛られ、ロープは梨花嬢の可愛いお乳を、潰している。そして水をかぶせられている（上の方）、浴槽の中に入り、ある一点を睨んでいる。確かに魅力はありました。然し、私は梨花嬢に猿轡を噛ましてはしなかった。そうすると、もっと味が出ていたかも知れません。「脚下の黒髪」大塚啓子嬢。さすがに迫力がありました。あの大塚嬢の顔と腹の上の足、そして、ロープが股間に通してある処は、お見逃しなく。私をこの二点から放してくれませんでした。

「引廻しのワンカット」東浦ひかる嬢。髪の乱れ、猿轡、縄の掛けかた、パンティ

お腹、お臍。お臍の下に足がある、あれが、プラスで、猿轡を噛まされているが、東浦嬢の、吐息が聞えそうでした。

「顔と足の悦虐表情」の関谷富佐子嬢は、人妻と言われるとおり、身体、脚、乳房、そしてあまり細くないウエスト。美貌と言う程の事はないのですが、何ととっても、縄を掛けると、あの顔が、とってもいい事です。

何処か、松尾和子に似ています。「憂囚のまなざし」これが梨花嬢かと思う程変っておりました。私は、この様に着衣縛りは好きで毎日拝見する、それも、私が、梨花嬢を責めている積りで。

「椅子の下の悦虐」この梨花嬢は、又、格別

の味で、下の二枚の方がよかった。

「疑惑のおのき」絹川嬢は、恐怖は似合わない。絹川嬢は、いじめる女であり、脚を使つて、もっと残酷に、いじめて、初めて、絹川嬢の魅力が出るのではないのでしょうか。

巻頭口絵では、四馬孝先生の、傑作責画、「クリップの惨酷」

十月号。遠藤百合子嬢が新しく登場して、十月号の誌上を賑わしている。然しやはり、新人モデルでは、まだ味が出ない。弱点があり、奇クのグラビヤを新人が飾るのは、まだまだ。遠藤百合子嬢は、若いし、これからが楽しみであります。

「引き廻される乙女」梨花嬢は、今までになかった味が出て、うれしかった。題名通り、引廻される乙女の味を梨花嬢が美事に、あらわしていましたには、感激致しました。

「脱がされた青い囚衣」の上の方、梨花嬢の横顔がとてよく、腕のロープの結び、乳房特に、ロープが、梨花嬢の腕に喰い込んでいるのが、よく、凄絶の美です。

「鼻を足には踏みにじる」絹川嬢、このように、いじめられるのを見てると、たまらなくなる。これが絹川嬢の本当の姿であり、もっとも、いじめてもらいたいと、限りなく、求める私達は、実現を絶えず、欲しているものであります。

「雁字搦目の陶醉境」

さて、これが絹川嬢のいいところで、あの顔と、いい、乳房といい、膝小僧といい、何処を見ても、いいところばかりで、とってもよく出ています。「許して」と叫ぶ、絹川嬢の言葉が聞こえそうです。

「縄目にあえぐ美貌のモデル」

大塚嬢の、このグラビヤ、四点を使って、一つの物語を書いて見ました。

大塚嬢は、婦人警官で、スリを現行犯で捕え車で本庁へ向う途中、逆になり、スリ仲間の為、監禁されてしまう。そして、スリ仲間達によって、大塚嬢は、着衣をとられ、パンティ一枚で、雁字搦目に縛られ、男達によって、折檻される。

「煙草責めの構想」

片膝立てで、縛られ、背後から男によって煙草を無理矢理吸わされ、むせる梨花嬢の表情、煙草を吸い込む時の顔の表情がよく、特に、煙草を鼻の穴へもって行ったのがよかった。

「逆さ吊りの第一歩」梨花嬢。

両膝を曲げ、斜めに吊られ、痛さと苦しさ顔に歪める梨花嬢、素晴らしいの一語につきます。

巻頭口絵では、滝れい子先生の「ボートの中のいけにえ」がよかった。

十一月号。

「荒縄の下にあえぐ、荒縄のとげに、もだえ

る四態」大塚啓子嬢。

ザラザラの荒縄の対比と、大塚嬢の若い肌とが似合い、奇妙ななまめかしさと、はなやかさをかもし出して、女体責の凄絶さがあらわれている。自由は奪われ、あの表情がよく、凄く迫力があります。

「片足吊りと吊りの序曲」

思いきり開いた絹川嬢の脚、一方は吊られて美事な脚線を披露してくれている。緊縛されて横倒しの絹川嬢だが、特に顔を見ると、微笑している。私達、本誌愛読者へ挑戦しているようです。

「ゴムの猿轡とハイヒール」(ゴムとゴム紐)

「猿轡表情四態」大塚啓子嬢。

これは驚きました、大塚嬢がこれ程魅力のあるグラビヤを飾ってくれたとは。なにも話す事はなく、素晴らしいの一語につきまします。

新モデルの素描。「小手はじめ」荒井マリ子嬢。これは、初めから縛られ、マリ子嬢の顔が私達に挨拶している。

「いや、いや、いや」五月亜紀子嬢。

マリ子嬢とは違い、五月嬢は第二の館典子嬢として、私は期待します。これからが楽しみです。

巻頭口絵では四馬孝先生の「可愛い牝馬」がよかった。

十二月号。

「荒縄と黒革フンドシ」大塚啓子嬢。



荒縄が大塚嬢の乳房上下に回わり、大塚嬢は陶醉状態、あの顔の表情がよかった。然し近頃、大塚嬢さんは可愛いがられています。まだまだ、これから期待出来ます。

「高手小手。強烈な小手しぼり」梨花悠紀子嬢、黒い幕と白い梨花嬢の肌がマッチして、その上、真新しいロープで、本当に強烈に両手を背中へ回わし縛ってある。上段の梨花嬢の横顔と、その口に、噛んでいる布、黒い幕に白い乳房、「猿ぐつわ」(二種)これはまったく申し分なく、梨花嬢の目がよかった。

自分の足を睨む目に魅力がありました。

「乳房自慢豊満しぼり」桜井葉子嬢。

桜井嬢の、私が初めて接する魅力のあるポーズです。左の方が特に印象的でした。只縛りでなく、欲を申せば巨大な乳房を、縄だけでなく小道具を使用して、責めて見たら桜井嬢の持味が生きましよう。

「水滴責め」新井マリ子嬢。

十一月号では、荒井となっていました。

新人で、この新井嬢程魅力のある女性は一才ありません。この人なら、梨花嬢と絹川嬢

と比較しても負けません。「凝視と放心の点景」「両足棒縛り」「黒い触手」どれを拝見しても魅力があり、迫力と、恐怖が感じられました。中でも、「両足棒縛り」は上出来でした。可愛い顔、白い肌、その表情といい、新井嬢は、まったく可愛いペットです。もっともっと、強烈に責めて、本誌を飾って下さい。

巻頭口絵では「輸送函の女」四馬孝先生の作品がよかった。

読者体験記

恋人同志のSMプレイ

甘木笑夫

私は四年来、本誌を愛読致して居りますがこの本誌によって自分の性向が何か判然と示唆された今日、その希い叶ってある女性とプレイを行う機会を得ました。

大体、男性も女性も一〇〇%のマゾ、或はサドと云う事はありません、私自身マゾではあるが時によりサドに転身し、又私の相手の女性もマゾは全然ない訳でなく、たまたまサドに気が乗らない時など私は思い切つて彼女をいじめつくしてしまいます。

今まで過去数回は単に人目を忍んで着ている洋服のままでプレイを行って居りました。と云つてもお互いに絶対的なサド、マゾでなく、両方を兼ねたものをもち合せている為格闘の形をとり、その時の自分の気分が、どちらに傾くか、傾いた方の立場をとる訳なのです。ほとんど彼女がサドの、そして私がマゾの立場を取っていました。しかし今夏、八月の二十日頃でしたか、二人で大洗海岸へドライブに行った時、まる一夜、プレイに興ずる機会を得た二人は夜の更けるのも忘れ、互いの気持を充分満足させたのでした。

八月の二十日と云えば、海岸はもうほとんどシーズン・オフで砂浜に立つ貸しボート屋の姿もまばらで、又立っている者も暇をもて

余しているような顔をしていました。二人は彼女の親戚の家へやっかいになったのですが、その日は皆、水戸の方へ出て行って二日許り帰って来ない一日なのでした。昼間、泳ぎ疲れた二人はゴロゴロと寝ころんでいましたが、私が向きを変えた時、右の手が丁度彼女のおでこに当たり、私は慌てて手を引こめましたが一瞬の差で彼女の両の手がその右手を捉え、彼女の方へ引っぱられました。懸命に左手を振って引き戻そうとしたのですが、それは彼女の思うツボ……。彼女は引く反動を利用してクルリとこちらへ向つて一八〇度の転回で背を私の胸に当て、取った右手を右脇下から抱え込んで捻じ上げました。その時の痛さたるや、とにかくその右腕は彼女の身体で畳に押しつけられ、肘から先が引っ張られ、捻じられ……。私は痛さをこらえる為懸命にもがき、そしてあいている左手で、普段着のワンピースの彼女の胸を絞め上げたり、或いはふさふさした髪の毛を引っ張ったり、この時は夢中で引っ張りましたが、いつもなら髪の毛の方に気を取られる彼女が仔細かまわず、私のそんな仕草の都度に捉えた右手をギュッ、ギュッ、と捻じ上げるのでこちらもたまらずその度に手を離してしまい

ます。その内、少々休んだ恰好でそのままの状態から今度は一気に逆転せんと目論み、対策を練り初めた途端、彼女は満身の力をこめて、私の右手を捻り上げました。「イタイッ」と声を上げ、彼女を掴もうとした左手はこれ又畳の上へ押し戻されてしまいました。この瞬間が私には分らなかったのですが、後で彼女に聞いた話によると前もって身構え、取っていた手を捻じると同時に、素早く身体をずらし左足のひざで捻じ上げた右手を押さえ、私の胸板に跨るようにして右の手足で浮いた左手を押しつけたそうです。それを聞いた私は、今更ながら彼女の素早さに感嘆したのですが、やはり女子高校時代バスケットボールの選手をしていた身の柔軟さがもたらしたものだと思いました。

胸板に大きな身体を乗せられ、両手を踏みつけられた私を彼女は思う儘……。私の顔のいたるところ、目、鼻、頬、耳、をつまみ、ひっぱり、ひっぱたき、はては髪の毛を掴んでゴシゴシ畳にこすりつけたり、その上、どうだ降参か? はないもんです。無抵抗の私を見て、彼女はワンピースをたくし上げ、その両太股で私の顔を挟んだのですが、その途端、つと立ち上り

「今晚はこの家に誰もいないわ、ゆっくりと一晚遊びましょうよ」と云う彼女の言葉にうなずき、ゆっくり、それもようやく身体を起しました。それを待ち構えていたかのように私に近づいて

「面白い考えがあるわ、いい、私の云う通りなさいね、これから二人共水着姿でプロレスをやりましょう。ここでは部屋にあるものが散らかってまづいから、浜辺で……おもてへ出て、もし人に見られたらまづいから、そうね、水着の上に服を着ていけばわかりつこないわ、そりや砂浜でやってちゃすぐ見つかるからあすこで……」

まづいにきまっています。大体、大洗海岸という所は水が冷く、慣れない私共には夜泳など出来るところではないのですから夜、水着などで出れば何をするかと怪しまれる事でしょうし……そして彼女の云った「あすこ」であるところに出掛けました。ここは彼女の親戚が経営している海岸食堂でヨシズ張りなのですが、脱衣所もあり、三十畳位は板の間でゴザが敷いてあります。広さは丁度良いし……。

二人はボタンをはずすのもどかしげに服を脱ぎ水着姿になって相對しました。ここで

は東京の自分の部屋でやるように何時人が帰って来るか等、余計な心配もせず派手に斗えるので、プロレスと同様のルールとする事にしたのです……が、五尺四寸、十六貫五百の彼女が普段よりはるかに大きく見えたのも、その時は近く身構えたせいだったのでしょうか。

ガツと激しく組み合った刹那、私の身体は前に少しくつんのめった。その途端、彼女の膝が私の胸を強打し、勝負はこの時決したかのようでした。今までも、彼女がサド気の強い時、いきなり利き腕をねじ上げられて押倒されての儘、馬乗りになられたりするのでしたが、マゾ気の時等、仲々気乗りせず、その内私が彼女の背に跨ったりしているのです。

この日も彼女はサド気が強かったと見えいきなり激しい攻撃に出て来たのです。胸を強打され、一瞬ひるむところ首に腕をまきつけ非常によく腰の利いた首投げ……。私の身体は大きく宙に弧を描いてドッシン。倒れた私の身体を無理に起しては又それは見事な腰投げ。再三、再四、床に叩きつけられた私は五回目で意識もうろうとして来たのですが、彼女は全然攻撃の手をゆるめません。

仰向けに倒れている私の首を太股に挟みこ

んで、ヤーッ、ヤーッと低い声をかけてのヘッド・ロック。如何にもスポーツ・ウーマンらしき彼女の太股は確かに肉のしまった素肌ヨシズのスキ間からもれくる月の光に輝やき、私の目に焼きつくようにとび込んできます。勝負あったと見るや彼女は私をフォールにかかり、自分で「ワン、ツー、スリー、フォー」と勘定。無抵抗のまま仰向けにのびている私の上に立ちはだかり、腰に手をあてがったまま「どーお、もう一勝負やる？」といひます。徹底的な首投げ、腰投げでいささか参っていた私はしばらく目をつむってから氣をとり直し、無言のうちに起き上ろうとしたが、大の字に開いた両手が動きません。今まで踏みつけられていたとも思えない手かと、その方を見ますと、何と彼女は三寸位の高いハイヒールをはいているではありませんか。私の両手首共その土踏まずの間に入っていて踏まれているとは感じなかったのです。「ウフフ」と含み笑いをもらした彼女はゆっくりと私の首の付近に腰を下し「さあ、動けるものなら動いてごらんなさいよ」と勝利者の言葉を吐き出しました。これには少々カチンと来て、なんでもない事なのですが首のところに大きなお尻がある事も私の虫が怒った

のでしょう。夢中で身体を左右に振り、彼女との斗いを再開しました。しかし流石に彼女もサディスティン。今まで首の真上でとまっていた腰をぐっと沈め、腰掛けると同時に私の両腕を押さえていた両足を引き、太股で顔を挟むと全体重をかけ、前かがみになったので小生の顔は完全に彼女の重圧を受けるに至ったのです。

口も鼻も彼女の水着でふさがれた私は腰のバネを利かし、思い切り両足をバタつかせ、漸くの事で彼女の重圧を抜けたのです。素早く立ち上った二人は低く身構えると相手の出方を見るかのようにじりじり左へ左へと廻ります。やがて根気負けした私は、三寸位のハイヒールをはいている彼女の弱点、少々足の方が弱いだろう事に目をつけ、頭を下げ彼女目掛けて突進、この作戦が見事頭に当り（これはシャレではありません）私の低く下げた頭は彼女のおなかの付近にドスンと鈍い音を立ててぶつかりました。この奇襲作戦に彼女はフラフラと後に二、三步下がってドシンと尻もちをついたのです。しかしその後作戦をうっかり立てておかなかった為に一瞬まごついたのですが、先手先手！と心の中で叫びながらがむしゃらに飛び込んだので

した。しかし敵もさるもの、それを待ち受けていたかのようにハイヒールをはいた足を振り上げた為、見事ハイヒールは私の腹部に深く食い込み、そのまま宙を切って彼女の頭の上方へと巴投げ一パツ。受身を使って起き上がる寸前までいった私ですが腹部の痛みにこらえ切れず、又ひっくり返ったところへ激しく彼女が襲いかかってからは寝技の応酬。一生懸命私はヘッドロックをかけんとする彼女の足をふりほどき体勢を入れ変えたまではよかったのですが逆に下になった彼女に右腕を捻じられ、ひるむすきに胴絞め、しかし気力充実した私も絞められたまま起き上り、巻きついている両の足を掬ったのですが胴から足を離されて失敗、起き上ったところをもう一度頭から突進しました。だが対等に斗かったのもこれまで、私の突進を右に体を変え足掛けつんのめって隅の柱まで転がった私を追いかけ、腹の上にハイヒールで踏みにじり、苦しみもかく私の手を取って引き起こし、背後から廻って首絞め、ふりほどかんとするところを身を引いて仰向けに引き倒し、後向きで馬乗り、この素早い攻撃には私も手の施しようがなく、一息入れて最後の力をふり絞って両足を振り上げ、彼女の首を挟みにかかりまし

たが、うまくかわされ、逆に足を取られて海老固めの体勢に入られてしまいました。

真剣になった時は未だ負ける気はしなかったのですが、普段の優位から湧いてくる自信と云うものは恐ろしく、彼女自身びっくりしたそうなのです。ここまで来れば彼女の思うまま、意のままに海老固めでしばらく私を責めて置き、やがて私の体をかえし逆海老固めに入られてしまったのです。

身長五尺四寸、体重十五貫の私とでは体重に差があるだけで、その程度のハンディキャップは丁度よいと考えていたのですが、やはり気力の充実度らしきものが彼女に対して劣っていたように思われました。

この晩は海岸を引き揚げ家へ戻ってもこのプレイは続けられ、私は十分にマゾの境地に達し、又彼女はサディズムが如何なるものの真髓みたいなものを知ったようです。

我々二人は徹底したサド女性、マゾ男ではなく、お互いの内に秘められた両性向を充たす甘いプレイヤーなのです。これから二人は続けるでしょう。思い切ったプレイの出来るところを探して……。その時は又、お報らせ致す事にします。

(おわり)

少年の回想

三村敏夫



『浴槽に立った清らかな少年の裸像は、理性と欲望の闘いに苦悩する僕を、遂に泥沼へおとし入れてしまったのです』

花田道夫Ⅱ仮名Ⅱは、去年夜間大学を卒業しO工務店に就職している青年である。この青年が語る、妖しい魅力を持った物語は、私の過去の体験と全く同一の驚くべき真実が秘められていた。以下文中僕とあるのは彼、花田道夫の事である。

三村さん、お呼びだてしまして済みません

でした。来て頂けないかと案じていましたのに、ええ僕はもう、午後五時から休みなんです。あすは日曜ですのでゆっくりして行つて下さい。

僕が、写真と違つてずうっと美青年だって？ 恥しい

です。三村さんもお写真はずい分老けてうつりますね。今日は是非聞いて頂きたいお話があったんですが、お逢いして見ると、途端に何もいえない様な気がします。例のあの事ですって？ えーそうなんです。僕の過去の体験した真実の告白を貴方に聞いて頂きたいのです。

僕は、母という人を知りません。父も僕が十五才の時、ふとした病気であっけなく他界してしまいました。中学三年になっていた僕

は、幸い物質的に恵まれていたので叔父の家から中学、新制高校と卒業して、O工務店が親類先になるので、昼間ここで働き乍ら夜、大学の門をくぐっていました。その間、少年から、青年期の初めのあの禁断の実を知った時の想出から、ただ夢にえがくだけで、全くこの世界など想像したこともなかったのですが、同性の若々しい姿に心引かれる様になつて、それも年少の過渡期にある十五、六才の同性だけにでした。ええ、確かに僕は、自分の過渡期の肉体を同年輩の同性と比べて見たかったのです。

体操の時間、腋毛のすでに生えている級友の肉体を観察したり、直立の時足を支える為に級友の足首を持ったその級友のパンツを通して眼を見はって観察しました。相撲のあった時も、あのかたいゴツゴツした襦をしめ合う度に、それとなく女性的な感じのする級友等に視線を寄せてしまっていたのです。

高校を卒業して、ここで働く様になったある日、現場へセメントを送って帰ります。学校へ行く時間でもあるので急ぎ乍ら。辞典を求めにT書店へ参りました。ふと店頭で見つけた。某雑誌に変わった会員募集広告が出ていたのです。僕はハッと、すぐそれに気づきま

した。

その会員になった僕は全く昨日の自分と今日の自分とは天地の差でした。沢山のホモセクシュアリティに苦しむ未知の友を、会誌に発見した僕の胸の中は、どんなだったでしょう。三村さんならきつとわかって頂けることでしょう。然し、期待に反して失望したのは会員で僕の理想とする少年がいなかった事です。もっとも無理かも知れません。二十一才になった僕でさえ、入会するのをずい分ためらったのですから。

その頃から僕もナルチシズムの傾向を帯びて行くより仕方ありませんでした。でも間もなく、或る、Kという、年輩の方から書信をもらって文通し始めました。その人にかつて感じなかった父性に対する愛情というものが湧いて来ました。いえ、肉体的な愛情を感じなくても、精神的に、少年を愛する以外に何もなかった僕を引きつけていく人でした。落着いた物腰から驚くべき博識、そして真面目なその人の性格は父のない僕にとって、なくてはならぬ存在の様に思えて来たのです。生れて始めて、その人より、男性のヌード写真を見せてもらったのです。恥しい話ですが僕にとっては非常な感激でした。少年の清ら

かな裸像を画面一ぱいに観察した僕は頼んで五枚ばかり、もらって帰りました。

それから一通の見知らぬ人の便りに同封してあった男性ヌード写真を見た僕は、Kさんが紹介してくれた写真の作者と知ったのは書面を読んでからです。ええ、三村さんがいておられる人です。三村さんはその人とまだお会いになっておられないのですか。

僕は感激のあまりに、とうとうその人とお逢いしました。学校へ夜行っても何だかその事ばかり気がかりで落着けませんでした。中学、高校とお世話になっていた叔父の家から出てO工務店で住み込んでいますが、郵便物等はすべて局止めですから、誰も僕の奇怪な行動に気づくものはおりません。

一年、一年半といつかたって、集めた写真が実に百数十枚になっていました。そして前にお手紙でお聞かせした様なにがい経験を味ったのです。ええ、そうです、今更そんな事お知らせしなくても知っておられますでしょう。折角苦心して集めた資料を、表面だてすることの出来ないのを幸いに持ち去って行ってしまったのですから。もっとも、僕もつい手紙一本で信頼してしまっただのが不可なかったんです。こんな事はいうだけ、尚、野暮だ

といわれるから止しましょう。

恥かしい事を申しついでにいますが、僕も実は、叔父の家の息子、従弟なんです。名前が次郎というんです。一人あった兄に死なれた彼に僕は、彼の兄と同級生であった為よく彼の家を訪れました。然し彼は、全然僕の様な傾向はありません。いわば一方的に僕は次郎に愛情を抱いていました。彼はきっと兄の様な気持から慕っていたに違いありません。叔父は洋菓子の職人ですが、相当の収入もある家庭で借家を十数軒持っています。

僕の家は昔、貿易商をしていた関係から広い宅地など所有していましたが、それを整理すると決して生活には支障の来た様な事もありませんでした。恵まれた生活に人から見えても、夜毎におおいかぶさってくる恐怖苦しさ淋しさ、学校で勉強している時は、さほど感じなくても、夜おそい寝室には、憂うつな空気が満ちているのです。

日曜の夜とか、店の休みに、よくその次郎のところへ遊びに行ったり、又次郎も来たりしました。朗かな次郎にうち変り、消極的な僕はよい対照をなしていました。現在この話でも何かしら、ふれるものにふれたいと思いつつ、どうしても出て来ないのです。或る日

次郎が来た時、偶然に三島由紀夫の『仮面の告白』を机上で発見されてしまいました。高校二年生の彼は、好奇の眼でしばらく読んでいました。そして、ついうっかりと頁の中程にはさみ込んでいた、少年のヌード写真を見られてしまったのです。然し、彼は驚きの眼を見張り乍ら、じっとその写真を食入る様に見つていました。

「道っちゃん、変ったものもってるね」

次郎は僕を「みっちゃん」と呼んでいました。興味ありげに見ていた次郎は、「まだ持っているんだったら見せて」と、いつて僕の顔を見てニヤリと笑いました。少年らしい八重歯にえくぼの出来る次郎に乞われて、僕は十数枚のヌード写真を見せてしまいました。次郎は一枚々々、何か驚きと感歎の声を発して見終ると、僕の顔をじっと見つめ乍ら、「みっちゃんは、どうして、こんな写真持っているの？」

「そりゃ、こんなの、どこにもないさ。友人といつても先輩が道楽に作っているんだ」

といい乍ら何気なく振舞っていました。

「今日はおそいから泊ってゆく」といい出したので強して帰すわけにもゆかず、同じ床につきました。あの夜の事は僕にとって一生忘

れる事の出来ない想出になりました。

美しい容貌の次郎の肉体はそれにもましてまるで真珠の様に、美しかったのです。五尺六寸、十七貫という見事な次郎の肉体は、五尺三寸、十五貫しかない僕と比べて、この上もない魅力でした。惜しげもなくぬぎ去られたズボンとシャツ、パンツ一枚になった次郎は笑い乍ら、蒲団の中へ足をすべり込ませて来ました。眼をつむって横を向いて、烈しい理性と欲望に葛藤する体を冷静にと努力しているのも知らずか、突然、次郎はこういいました。

「みっちゃん、あのね、女って知っているの？ ほら、僕はよく知らないけど、青線とか行って遊んだことある？」僕はどんなに驚いでしょう、突嗟の答えはあまりにもチグハグでした。「うんあるよ、けど僕学校へ行って帰るとおそいだろ、そんなのどころじゃないさ、でも、童貞じゃない」

何という惨じめな答え方でしょう。

そんな事があってから、今度は僕の方から所用を兼ねて次郎のもとを訪れました。高校三年になったばかりの彼は、三カ月前の事などもう忘れた様子をして、愛想よく迎えてくれました。ちょうどその日もおそくなって帰

り支度をし乍ら、彼の部屋で新しいヌード写真を見せると、それをくれないかとの申出に次郎に与えたのです。でも、本当になんでもない様な顔をして机上の志賀直哉の『暗夜行路』という文庫本にはさみ込みました。

それからというものは、夜毎に次郎恋しさのあまり苦しみなやみぬきました。一週間ばかりしてから、次郎の学校の帰りを駅で待って話しかけて見たが一言もいわず帰ってしまいました。その時の気持、それから手紙に書いて彼の本心を聞こうとしました。「次郎ちゃん、何故此の頃は、来ないんだ、それに此の間もだまって何もいってくれなかったね。写真なんか見せたので僕を軽べつしているのと違うか、次郎ちゃんを初めて裸にして見た時は僕は、どんなにうれしかったか、ついあの時もうそをいってしまった。僕は女なんか知らない。まだ童貞だ。僕が二度目に君を訪ねた時、拒否した君はどんな気持であつたんだ。写真は僕はもう手許にはない。全部処分してしまった。新しい僕として次郎ちゃんとの前様につき合ってもらいたいと思う。どうか返事を手紙にて送って下さい」なんて馬鹿なんでしょう、心ならずも僕はこういう、いつわりの書信を次郎に託したの

です。次郎から折返し、返事が参りました。「人格者として、兄さんと思って信頼していた僕には、ほんとうに意外な、みっちゃんの実行動でした。僕は軽べつしたくなる様な気持ちで一ぱいでした。ああいう、みっちゃんの精神状態をうたがったのです。でも、今ここにお手紙を見て以前の兄さんにかえられた事をよろこんでいます」

勿論、前の様に朗かな次郎にかえりましたが、僕は日一日と自分の生活に自信が持たなくなつてゆくのです。

そんな事があつてから、ヌード写真を作っている人から、美少年を世話しようとの通知を受けました。

ずい分迷つた僕は意を決して約束の日、待ち合わせる場所に行きました。

高校一年生ぐらいの少年でしたが、愛くるしい瞳をクルクルさせ乍らついて来ました。以前に写真にて、そりゃ勿論、ヌード写真ですから、彼を知っていましたので、すぐわかりました。正月三日の休日でした。有名なT公園を散歩して、映画を観ようと思ったのですが、どの映画館も満員で、僕の発言で初風呂を浴びにM温泉へ行きました。ずい分遠く着いた時は二人ともクタクタにつかれていま

した。満員の盛況だったM温泉は都会の真中と違つてさすが男女連れのお客ばかりでした。

半時間程待つて、案内された浴室は、ちょうど二人きりでゆっくり入れる家族風呂でした。少年は奥村正一という名前でしたが、奥村少年は、非常におとなしい性格か、あまり物をいわない子でした。背は僕より少し低いぐらいですが、可愛い顔をしていました。恥かしそうに後を向いて服をぬいでいる様子をじつと見守っていました。でも裸にならなくては入浴出来ませんから、無言のまま二人ともパンツの紐をといっていました。

タオルを下げた二人は浴槽に静かに足を入れました。澄み切つた湯槽は格別の感じでした。

奥村少年は一足先に洗場へ出ました。僕はそうつと後から彼の背中を流しますと、吃驚した顔を紅潮させて「いいんです、僕一人で洗いますから」といい乍ら体をするりと交わしてしまいました。そして前向きになった時これ以上恥かしくていえません。え？ 話してくれとおっしゃるんですか、でもとてもいえませんから、日記がここにあります。見て下さい。

正月三日

M温泉の印象

前略——注、花田青年の話の続きより——、吃驚して僕の顔を見た奥村少年は、僕が恥しいの、と問うとうなずいた。前向きなつた彼はモジモジし乍ら、石鹸をことの外沢山つけて胸の辺りをこすつていた。洗って上げようという「でも……」といい出す。洗い終つて、湯の中にすくつと立ち上つた奥村少年の清らかな裸像は、理性と欲望の斗いに苦吟する僕を、ついに泥沼へおとし入れてしまつた。

——後略——

読み終つた私は、青年花田道夫の情熱にもゆる視線を烈しく感受していた。そして彼の部屋、O工務店の片隅に相對した私と彼は必熱的に手を握り合つていた。蚊に喰われ乍ら語り合つた夏の夜はこうして更けていった。

後記——最近になつて偶然花田青年と会つた私は、その後の事を尋ねると、奥村少年は音信不通で、次郎の家へは忙しいので、あまり行っていない。某会も止めて此の秋、結婚する決心をしているといつていた。今までと違つた男らしさを感じたのは其の時だった。

花

と

蛇

(第八回)

団 鬼 六

(毒牙は迫る)

田代は、柔軟な乳白色の肌を持つ静子夫人を背負い、川田は弾力に富む、ピチピチした肌の京子を背負っている。

互に褌を腰にしめられるという屈羞の姿で静子夫人と京子は、彼等の寝室へ運ばれて行くのだ。それも、鬼畜に等しい男の背に担がれて――。

先程、京子に救い出された地獄のように恐ろしい田代の寝室へ、静子夫人は田代におぶわれて逆もどりである。京子をおぶった川田

も、田代のあとについて部屋へ入って来る。

田代の部屋は、八畳と六畳の二つに襖の一つをへだてて分けられてあり、その一つを川田は借りて、京子をおもちやしうというハラだった。

銀子や朱美などズベ公の一団が酔った勢で川田の部屋へなだれ込んで来る。

「これからの事はいくらなんでも、てめえ達に見物させるわけにはいかねえ。階下へ行って早く寝ろ」

川田が苦り切った顔をしていうと、
「何もそう邪慳にしなさんな。ちつとばかり

花嫁さんに敬意を表しに来ただけさ」

銀子は、ふらふらする足を踏みしめるようにして、そういい、朱美と二人で、川田の背におぶさっている京子を降ろすと、床の間を背にさせて、京子を無理やりに坐らせ、用意して来た縄をつかつて、京子をあぐら縛りする。

京子は、一切の望みを捨てたように、固く眼を閉じ、唇を噛みしめていた。

「お床の支度は、あたい達がしてあげるよ。葉桜団の勤労奉仕ってわけさ」

ズベ公達は、押入れを開け、夜具を持ち出

して来ると、京子の前にわざとらしくそれを敷き始める。

夜具の端に並べられた二つの枕。京子はちらっとそれを見ると、ハッとしたように、朱に染んだ顔を横に伏せるのだった。

「ふふふ、たっぷり可愛がってもらうがいいさ」

銀子と朱美は、あぐら縛りにされ、夜具を眼の前に羞恥に身を悶みつつけている京子の両側に坐りこみ、煙草をふかし始める。

「本当に良く似合うじゃないか。ピンクの禪が」

朱美は、うなだれている京子の顔に煙草の煙を吐きかけていった。

川田は、棚からウイスキーびんをとり、チビチビやりながら、ズベ公達にいたぶられている京子の消えるような羞恥の姿を楽しんで眺めている。

森田組の屈強な男達に対して唐手を使って戦い、あと一歩で静子夫人救出に成功するところまでこぎつけた京子であったが、どたん



ばで逆転、森田組の手中に捕われの身となり死ぬより辛い責めにあった身を、今は、川田の毒牙の前にさらしているのである。

そんな哀れな京子であるが、ズベ公達は、それでもなおあきたらぬかのようにピンクの禪をはかされた姿の京子をあぐら縛りにし、その形のいい乳房を指ではじいたり、肉のしまった太腿をつねりあげたりして、なぶりつつけているのだ。間者にもぐりこまれたという事がよほど腹立たしかったのだろう。

川田は、ウイスキーのびんをかかえて、田代や森田のいる部屋へ入って見た。

「なんでい、驚くじゃねえか。人の部屋へ入

るときはノックぐらいするもんだ」

森田は、先程突然、侵入して来た京子にこっぴどくのされたショックが残っているらしく、襖が開くと、ギョッとしたように立上った。

「へっへへ、どうもすいません。ちょっと、様子をうかがいに来たわけで——」

川田は、ニヤニヤしながら、部屋の中を見廻すと、静子夫人は、床の間の柱の根に縛りつけられている。夫人の横に縁なし眼鏡をかけた田代が寄り添うように坐って、いやらしく笑いながら、夫人の耳もとで何かしきりにいっている。

静子夫人は、その度、美しい顔に朱を浮かべ、嫌々と首を振っているのだ。

「社長がじっくり遠山夫人を口説いていなさるんだ。

ああいう風にして、口説くのが社長の趣味なんだよ」

森田は、川田にそういって肩をすくめるようにして笑う。

「さあ、社長、もう口説はそのぐらいにしてそろそろ

本番にかかろうじやありませんか。お床の方が冷えてしまいますぜ」

森田がたまりかねたように田代にいった。

川田もつづいて、静子夫人の顔をのぞくようにしている。

「ふふふ、奥さんの禪姿は、全くいくら見ても見あきがしねえぜ。ちょっと、顔をあげて、にっこり笑ってみなよ」

静子夫人は、涙にうるんだ美しい切長の瞳をあげると、憎悪の極に達したように歯を噛みならしながら、川田を見た。

「川田さん、貴方は私にあのような事までしておきながら、京子さんまで手をつけようというの。貴方は人間の皮をかぶったけだものだわ！」

夫人ははじき出すように、そっくり肩を震わせて嗚咽する。

川田は鼻に小じわを寄せてせせら笑った。

「ふん。やきもちを焼いてやがらあ。そのかわり今夜は、色の道の大家が二人がかりで骨身にこたえるまで楽しませてやろうとおっしゃるんじゃないか。ぶつぶつ文句をいいなさんな」

そして、川田は、田代と森田に、

「じゃ、旦那方、今夜は一つ、こってりと貴

めあげて今のような生意気な口のきけねえようにしてやって下せえ」

という、田代も嬉しそうに、

「勿論だ。さっき、痛めつけられた礼をたっぷり体に返してやるつもりさ。今まで優しく口説いてみたが、この奥さん、なかなかうんとおっしゃらない。やっぱり、無理やりに治療で楽しませて欲しいようなんだ」

「へっへ、だが、あまりいじめすぎて、そのきれいな肌に、傷をつけねえよう頼みますぜ。商売ものなんですからね」

川田は、顔をくずしてそっくり、自分の部屋へ戻る。

京子は、ズベ公達の手で面白半分に変化粧をほどこされていた。あぐら縛りにされている京子の背後へまわった銀子は、うしろから京子の弾力のある二つの乳房を揉みあげるようにして乳液をぬりたくっているのである。

「川田の兄さんに嫌われないよう、ちゃんと身だしなみを整えるってわけさ」

銀子は、そっくり、次に京子の首筋のあたりに香水をふりかけ出すのだ。

「あたいは、鼻毛を抜いてやろうよ。その高慢ちきな鼻の穴掃除をしてやろうってんだ」

朱美は、京子の前へ廻り、小腰をかがめる

と、ポケットから、小さい毛抜きを取り出した。

京子は首を激しく振って朱美の手をさけようとしたが、そうはさせじとズベ公達が京子の顔を押さえこむ。一人が京子の鼻をつまみあげ、一人が鼻の穴を指でこじ開けた。

それ一本、それ二本、と朱美は、キャッキヤッ笑いながら毛抜きを使って京子の鼻毛を抜き始めるのだった。

悶えれば悶えるほど鼻毛を抜き取られる痛覚が激しく、京子は遂に力を抜き、ズベ公達の手に自分の鼻を任せた形になってしまふ。

「そーら、きれいになったよ」

朱美は、ハンケチを出して、京子の鼻穴をふき、次に鼻をハンケチでつつんで、

「さあ、チーンして」

ズベ公達は、しつこく京子の鼻をなぶりつづけ、こよりを作って、その先を京子の鼻穴にさしこみ、くすぐって、くしやみを無理やりさせ、笑い合うのだった。

「もうそれぐらいにしねえか。明日という日もあるじゃねえか」

川田が、女達の執拗さにいささかうんざりしている。

「ちょっと、川田の兄さん。面白い話がある

んだよ」

銀子が川田を、わざわざ廊下まで呼び出した。

「話って、何でえ」

川田が聞くと、銀子はポケットから一枚の写真をとり出した。

「京子のハンドバッグの底から出て来たんだよ」

それは、どこかの遊園地で写したもののらしく、和服姿の京子と女子高校生らしいセーラ服姿の少女が並び、幸福そうに笑っている。

「この女学生、きっと京子の妹だよ」

「なるほどな。似ているところがある。なかなか可愛い子じゃねえか。それで、何だってんだ」

「誘拐しようと思うんだよ」

「何だと——」

川田は、あきれ返った顔をして、銀子をまじまじと見つめた。

「この制服は、夕霧女子高校のものさ。姉さんの京子が急病か何かになったといって、あたいが学校へ、この娘を迎えに行く。校門のところには森田組の兄さん達が車で待機している。こんな調子で、案外うまくいくと思うんだよ」

「全く、おめえの考える事は、女とは思えねえな」

川田は舌を巻いた。

銀子は、京子の妹も姉と一緒に色々な芸当を教えこみ、葉桜団と森田組の秘密ショウの持駒にするのだというのだった。

「だが、女学生の誘拐はむづかしかねえか。俺は少しヤバイと思うな」

「まあ、私に任しておきな。明日中にはきっと京子の妹を誘拐してみせるから」

川田は、その件に関しては銀子達に一任する事にした。

「妹がここへ連れて来られたとなると、京子の奴、びっくりするだろうな」

「ふふふ、それまで、京子には内緒だよ。それはとにかく、今夜は京子の奴をうんと泣かせてやっておくれ。あの女にぶたれた肩先がまだヒリヒリ痛むんだよ」

(新鮮な生贄)

その翌日の午過ぎ、田代の家の前に大型車が止る。

地味なスーツを着、しかめつらしい眼鏡をかけた女がドアを開けて出て来たが、それは変装した銀子であった。

「ここなのですよ。さ、どうぞ」

銀子にいわれて、車から出て来たのは、十七、八のセーラー服を着た美少女である。白露を受けて育った野菊のように純朴で新鮮な美しさを持つ女子高校生である。

彼女は美津子といい、野島京子の実の妹なのだ。姉が交通事故で倒れ、今、あるところで治療を受けていると学校へかけこんで来た見知らぬ女に聞かされ、早引してかけつけて来たのである。わざわざ自家用車を校門にまで乗りつけて、姉の事故を知らせてくれた見知らぬ女(つまり銀子)を美津子は、親切な金持の令嬢と思いこんでいた。

「すみません。お手数をかけました」

美津子は、車の運転手(つまり森田組の乾分)に厚く礼をのべ、急いで銀子のあとにつづく。

大きな門柱にとりつけてあるベルを銀子が押すと、無気味な音を軋ませて、頑丈な扉が開く。中から二、三人の森田組のやくざ達が出て来て、芝居気たっぷりに、

「お嬢さん、お帰りなさいまし」

などと銀子にいい、美津子に対しては、「お姉さんは大したお怪我じゃありません。心配いりませんよ」

と、いったりして、二人が内に入ると、急いで門戸を閉ざし、門をかけてしまふのだった。

「やれやれ、芝居をするのは楽しいね。肩がこっちゃったよ」

門がしまると同時に銀子は、調子を自分に戻し、やくざ達にいう。

「はくい顔してるぜ。可憐な乙女ってのは、こういうスケのことをいうんだろな」

男達のがらりと変った野卑な言葉と態度に美津子はギョツとして足を止める。

「姉さんは、姉さんはどこののです！」

何か仕組まれた罠の中に自分が入ったのだと美津子の顔から血の気がひく。

「あなたのお姉さんは、ちゃんとこの家にいるわよ。おとなしくしていりや逢わせてあげるわ」

銀子は煙草を出して口にしながらいう。

「貴方がたは一体、どういう人達ですの」

美津子は、おろおろして近ずいて来る男達を見る。

「文句はいいから、とっとと歩きな！」

男の一人が、美津子の背をどんと突いた。

魂を宙に飛ばしたような表情で、美津子は男達に背を小突かれながら玄関に入り、靴を脱

いで上へあがった。

廊下の向こうの方から、葉桜団のズベ公連が、ばらばらと走って来る。

「へえー、これが京子の妹かい。ずいぶんと可愛いじゃないの」

ズベ公連は、しきりにチューインガムをかみながら、生きた心地のない美津子の顔をのぞくように見るのだった。

「年も十八、番茶も出ばなつてとこさ。まだ何にも知らない初心な娘なんだから、あまり一度に怖がらすんじゃないよ」

銀子は女達にそういい、美津子の震える肩に手をかけて押して行く。

廊下を二つばかり曲がった突き当りの部屋へ美津子は押しこまれた。そこは、物置に使われていたらしい五坪の部屋であったが、美津子を監禁するためにあらかじめ森田組の男達の手で整理されていて、中央の床の上に角材が一本打ちこまれ、その下に一束の麻縄が積み重ねてあった。

「さあ、お嬢さん、靴はこっちへ預っておきましょう」

銀子は、そういつて美津子の手にある赤い靴をとりあげた。

「お姉さんに、お姉さんに逢わせて下さい」

美津子は、血の気のない硬化した顔をあげて銀子や朱美にいう。

「おとなしくしていりや、逢わせてあげるわよ。さあ、お手々をうしろへ廻して」

朱美は立木の下の麻縄をとって、美津子の肩を突いた。

「何をするのです。一体、貴方達はこの私を――」

どうする気なのです、が恐怖にのどがつまって声にならない美津子であった。

「文句はいいから、手をうしろへ廻しな！」

森田組のチンピラ達が近ずいて来て、美津子の両腕を強引に背後へねじ曲げた。

「さ、縄だ」

「あいよ」

朱美から麻縄を受取った男達は、なれた手つきで、美津子を後手に縛りはじめる。

「助けて！ 誰か、誰か助けて！」

美津子は、やくざの手の中で必死に身を揉んだが、驚の手にかかった小雀同然だった。

セーラー服姿の可憐な乙女の胸には二巻、

三巻どす黒い非情な麻縄がかけられ、嚴重に後手に縛りあげられてしまったのだ。

そのまま美津子は立木を背負った形で縛りつけられてしまふ。男達は、そんな美津子の

足もとにしやがみ、更に麻縄ののこりを使つて、彼女の黒い靴下に覆われているスラリとした足を揃えて立木に縛りつけるのだった。美津子は、自由のきかぬ体を必死によじつて、泣いたり、わめいたりする。

「いいかげんにおし！」

朱美がイライラして、美津子に近ずくと横面をいきなり引っぱらいた。

「手荒な事をするんじゃないよ。川田の兄さんの科白じやないが、商売ものは大事に取扱かわなくちやね」

銀子は朱美を制していった。

「じゃ、お嬢さん。可哀そうだけど、しばらくここにそうしていてね。夜になったら、お姉さんにきつと逢わせてあげるからね」

銀子は、そう美津子にいい、ズベ公ややくざ達に目くばせをして部屋を出て行く。

廊下へ出た銀子達が部屋のドアを閉め、鍵をかけると、美津子のすすり泣く声が一きわ激しく聞こえてくるのだった。

(悪魔の笑い)

川田は、二階の洋間の一室につくられてあるホーム酒場で田代や森田と一緒にウイスキーをくみかわしていた。

ノックの音。入って来たのは、銀子と朱美である。

「銀子。成功したそうだな。どうでい、京子の妹てえのは」

川田は、ウイスキーで真赤になった顔をなげながら、えびす顔をつくつていう。

「お人形のように可愛い子だよ。あまり純情過ぎるんで商売ものにするのが、ちつとばかり可哀そうだよ」

「へへへ、柄にもねえ事いいやがる」

川田は田代や森田の顔を見ながら笑った。

「それより、どうだったんだよ。京子の方は——？」

銀子は川田の酌を受けてウイスキーを一口に飲むとニヤリと顔をくずしていった。

「へっへへ、ずいぶんと手間どったが、京子姐さん、立派な女におなりなすったよ」

川田は、あごのへんをいやらしくなぜなら、ニヤニヤしてそういうのだった。

田代も森田も、静子夫人を充分楽しませたんだという。

田代もえびす顔で、煙草に火をつけながら「あんまり俺達が可愛がりすぎたんで、遠山夫人、今日のあけ方、白眼を向いて気絶なすったよ。だが、あんなすばらしい体の女とい

うのも珍らしいな、親分」

森田も、満足げに何度もうなずいている。

「そうなの。あたかも胸がスーッとしたよ」

銀子は、煙草に火をつけながら笑った。

「じゃ、今日は葉桜団が可愛がってやる番だね、朱美」

銀子は、朱美のグラスにウイスキーを注いでやりながらいう。

「おめえ達も、ずいぶんと執念深えな」

川田が笑つていうと朱美は、腕をまくって川田の前へ附根の青あざを見せていうのだった。

「兄さん。これを見てごらんよ。京子の奴に唐手で打たれたところだよ。この痛みの恨みを返すにや、ちよっとやそっとじや気分が晴れるもんかい。責めて責めて責め抜いてやるんだ」

朱美は残忍な光を眼に浮かべていうのだった。京子一人を責めるだけでは、あきたらず朱美と銀子は、京子の妹の美津子まで誘拐したのだろう。

「奥さんの方は、しばらく休ませて、京子の方を地下へしよっぱいてきなよ。朱美」

銀子がいうと、朱美は、あいよ、と調子よくグラスを置いて立上った。

「一体、どういう風に京子を責める気かね」
朱美が、外へ出て行くと、田代がニヤニヤしながら銀子に聞く。

「今のところは、全部朱美に任してあるんですよ。もう少ししたら、見物に行ってみましょうよ。社長」

銀子は、ただ顔をくずしてそういうだけだった。

その時わっしよい、わっしよいとズベ公達の賑やかなカケ声。おやと田代も森田も顔を見合わせて、ドアを開け廊下へ出て見る。

二階の階段を数人のズベ公達が、腰にピンク色の褌一枚というあられもない京子を、胴上げる時のように担ぎあげて降りて来るのだ。鬼畜に等しい川田に操を奪われ、身も心も疲れ切ったような京子は、高手小手に縛りあげられている身を完全にズベ公達に任してしまったような形である。

ズベ公達は、そんな京子のスラリとした両肢をキャッキャツ騒ぎながら、お祭り騒ぎで担ぎあげているのだが、やがて彼女達は左右に分かれるように隊列を組み出したので、京子の両肢はズベ公の肩の上で大きく左右へ割り開かれていく。

「あ——、嫌よ、嫌、離して！」

京子は女達の肩の上で身悶え出した。股間に厳しく喰いこんでいる褌が張りさけるようになる。

川田も森田も、それを見ると声を立てて笑い合うのだった。

やがて、京子がズベ公に担がれて地獄の下室へ運ばれて行ったのを見とどけると、川田が銀子にいった。

「京子の妹ってのを見ようじゃねえか。ずいぶんとハクイ娘らしいな」

「物置に押しこんであるよ。じゃ社長も親分も、ちょっと、顔見せにおいでになって下さい」

(遂に美津子も)

部屋の中央に立てられた一本の角材に、立縛りにされていた可憐なセーラー服姿の美津子は、田代や森田達が入って来ると、一瞬ギクと体を震わせたが、すぐに必死になって哀願し始めた。

「お願いです。縄を解いて下さい。ここから出して下さい」

川田は、そんな美津子をしげしげと見て、「なるほど、こいつは掘出物だ。あの鉄火娘に、こんな純情そうな妹がいるとは思わなか

ったな」

と、いうと森田も顔中しわだらけにして田代にいった。

「社長、これで静子夫人に桂子、京子に美津子という看板スターが揃った事になるじゃありませんか。いよいよ仕事が忙しくなりそうですね」

田代は葉巻をくゆらせながら、何度もうなずき、美津子の恐怖にひきつった顔を楽しんでいる。

「どうして私をこんな目に合わすのです。一体貴方達は何なのです！」

美津子は、必死な眼で周囲に立つ男達に向っていった。何か叫んでいないと恐ろしさのために気が遠くなりそうなのである。

「あんたのお姉さんが、とんでもねえことをして、俺達の顔に泥をぬってくれたんだよ。姉さんの方は、昨日から罪の償いをしているんだが、どうも一人じゃ荷が重すぎるようなんだ。だから、妹のあんたにも、おいで願ったというわけなんだ」

川田は、美津子の顔をのぞきこむようにしていった。

「姉さんは悪い人じゃありません！貴方達に罪のない姉さんをいじめる権利はないわ！」



美津子のはじき返すようにいう。

「京子の妹だけあって、なかなか気性は強いらしいな。女学生とは思えねえぜ」

川田は、苦笑して、

「ちょっと、その可愛い口をふさいでやろうか」

いきなり、美津子の自由のきかぬ肩に手を

かけ、口を近ずけようとした。

「な、なにをするの！」

美津子は、狂ったように身悶えし、激しく首を振って、川田の突き出すようにして来た唇をさけた。川田は強引に美津子の顔を両手ではさみ込むようにして口を押しつけようとする。

突然、悲鳴をあげて、川田は美津子の傍から飛び離れた。川田の口から血がしったり落ちていた。

「どうしたんだい。唇を噛まれたのかい！」

銀子があわてて川田のもとへかけ寄った。

「唇を噛み切りやがった。畜生」

川田は、ハンカチを出して、しきりに唇の血をふいている。美津子の唇にも川田の血がついている。美津子は激しく肩で息をしながら、美しい眼をつり上げて川田を睨んでいるのだ。「舌をやられたら、大変だ

ったじゃないか。こんな小娘のために命を落したら、お笑い草だよ」

銀子は、そういうながら川田の唇に薬をつけてやり、次に美津子に向って、

「小娘だと思って、おだやかにやりやつけ上がりやがって、もう手加減はしないよ」

そういつて、ドアを開け、向い側の部屋で花札バクチをしていた森田組のちんぴらやぐざを呼び入れた。

のっそり入って来たのは、少年院を脱走してきて、この森田組に入ったといういずれも十八、九の札つきの不良少年ばかりである。

竹田、石山、堀川というその三人のチンピラは角材に立縛りにされている美少女を見ると、ちよつと照れたように顔を赤らめた。

銀子はふとそれに気づくと、くすぐったそうに笑っている。

「このお嬢さんはね、年はおなた達と同じ十八なんだけど、学校では成績は一番、しかもこれだけの美人、いうなれば月とスッポン、声一つかけてももらえぬ、あなた達にとって高嶺の花だよ」

三人のチンピラは、眼をパチパチさせて、銀子のいう事を聞いている。

「だけど、あなた達が森田組のためにしっか

り働いてくれりや、この美しいお嬢さんを花嫁にすることだって出来るんだよ」

銀子にそういわれると、三人のチンピラ達は、顔を見合わせて、そわそわし始めた。

「姐さん、なぐり込みなら俺が真先にやりますぜ」

などと腕力に自信のある竹田が一步踏み出すようにして銀子にいった。

銀子も川田も笑い出す。

「まあ、それもいいけどさ。今日はもっといい仕事さ。ここにいるお嬢さん、今、川田兄貴に大変失礼な事をしなすったんで、これからお詫びして頂くんだけれど、それには、まず裸になってもらわなきゃならない。どうだい。ぞくぞくする仕事だろ。この美しいお嬢さんを素っ裸にするんだよ」

それを聞いた三人のチンピラは、小踊りするように喜んで、ズカズカと美津子の傍に近寄って来る。

美津子の方は、美しい顔から一瞬血の色がひき、狂ったように自由を奪われた身を悶えさせる。

銀子は、そんな美津子の前へ立って、意地悪そうに口を歪めていった。

「可愛そうだけど、生まれたまんまの姿にな

って頂くわ。貴女のお姉さんだって、素っ裸で今頃地下室でヒイヒイ油汗を流しているのよ。裸になったら、川田兄さんに心から謝って、地下室へ行き、お姉さんと久しぶりの御対面というわけね」

と笑うと、川田も調子を合わせ、

「姉妹、地下室で素っ裸同志で対面というわけか」

と腹をゆすって笑う。

チンピラ達は、泣き叫ぶ美津子にうじ虫のようによりたかり、一人が美津子の紺のスカートの裾を両手で持って思い切り上へまくし上げた。

「やめて！ 嫌！」

美津子は息もつまるばかりの屈辱に絶叫する。スカートがまくられたため、黒い靴下に覆われたスラリとした両肢の附根のあたりまで露出し、赤い靴下止めが見ている男達の眼にしみるように映ずる。

銀子は、田代や森田達に、

「じゃ、この場合は、この連中に任して、地下室へ行ってみましょう。朱美がどんな風に京子を責めているか見物しようじゃありませんか」

といい、次に銀子はチンピラ達にいった。

「いいかい。裸にしたら、しっかり縄で縛りあげておくんだよ。そして脱がせた衣類は全部地下室へ持って来ておくれ」

銀子は、地下室で責められている京子に美津子のセーラー服などを見せて、驚かしてやるうという着想にホクホクしている。

「俺達の許しなしに、その娘に手をつけるんじゃねえぞ。わかったな。眼の保養だけはさしてやるが——」

森田がチンピラ達につけ加えてどなった。

銀子や川田達四人が部屋から出て行くと、チンピラ達は一層勢いついたように美津子に襲いかかった。

紺のスカートのホックは外されて、それは引張られるままスルスルと足もとへ落ち、一人が赤い靴下止めを外して皮でもむくように靴下を脱がした。

美津子は、逆上したように身をもみ、

「お願いです！ 助けて、助けて下さい。

嫌！ 裸になるのは嫌！」

「裸になるのは嫌だろうけど、命令だから仕方がないさ」

男達は笑い合いながら、手は休めようとしなかった。

(つづく)

「浣腸」に関するアンケート

浣腸 憧 憬 度

原



了 吉

編集長様

どうか浣腸についての記事をもっと豊富にして下さい。それについて小生の意見も参考にして下されば幸いです。

一、画又は写真

浣腸そのものの行為ずばりを載せて下さいと申しても無理だと思いますが、色々の浣腸器を女の人がいじっている姿などのせて下さい。又、十八、十九世紀頃のオランダやフランスの版面に、病床に横たわる美しい婦人、浣腸器を手によっ

てゆく医者を組合わせた、別に露出的ではないものに、浣腸マニヤにはたまらない画があります。

あのようなものを近代的なアトモスフェヤーの中で、美しい洋装の令嬢と医師との組合せで描いたり、写真にしたりして下さい。

二、医療としての浣腸にまつわる若い女性の羞恥を主題にした小説を御願います。必ずしも風俗に反する程、露出的描写を必要とはいいたしません。

三、文学、絵画、映画、芝居、寄席などで「浣腸」ということが出て来た場合をコレクションするため、一般読者にコレクションや通報を求めて下さい。

四、最後に一番可能性のあることとして、一般読者に継続的に次のような体験を募集して下さい。といっても、直ちに「体験記を求む」としたって、一般には書く暇も術もないですから、書式を作って募集し、毎月それを載せて下さい。

例えば次のような項目では如何ですか？

△姓名△不要、△性別△男、女

△年齢△何才、△職業△何々

1、浣腸を受けた時の体験

(いつ。どこで。だれに。どんな病気で。ど

の様な浣腸器で。どんな体位で。自分はそのとき、どんな態度をとったか、又は感じたかその他出来るだけ詳しく。」

2、人が浣腸を受けるのを見た体験

(右と同じ項目)

3、人に浣腸を施した体験

(右と同じ項目)

4、浣腸を主題とした空想又は夢の内容

(以上)

さて、それでは小生の場合について早速に書いてみましょう。

(性別、男) (四〇才) (職業、官吏)

一、浣腸を受けた時の体験

一昨年、旅行中名古屋の宿で急に腹痛で医者を訪ねて呼びました。診察の後「浣腸した方がよい」といって「後で看護婦をよこします」といって帰りました。夕方、二七、八才の一寸美しい顔に剣のある背の高い看護婦が、黒いカバンをもって来て「浣腸に参りました」といわれた時には何とも気ままりが悪いというよりも、今は痛みも注射でおさまった後なので、昂奮みたいなものを感じ、看護婦がカバンから浣腸器(一〇〇CCの大型の硝子のリスリン浣腸でした)を出して準備する間、私は美しい看護婦の顔が意地悪のよう

な、又羞いの様な不思議な表情の影をただよわすのを見逃しませんでした。

「嫌だな、浣腸なんか」というと

「まあ、そんなことおっしゃってはいけませんわ」とどこもない笑いをうかべ、という言葉が何か喉につかえる様でした。

「それでは、むこうを向いて頂いて……お尻をこちらに……こちらに出す様にして下さいませ……」といいかにも具合悪そうにうわづ

ていました。私はその様子で、この看護婦が何か「浣腸に無関心でない」ことを知って昂奮を感じました。浣腸器をもってにじり寄る看護婦の腿から腰のあたりの白衣に包まれた丸々とたくましく引きしまった様子を見て私は又申しました。

「嫌だな、浣腸なんて、綺麗な看護婦さんじや……」

「……」

「看護婦さんだって、浣腸されたら嫌がらない？」

「まあ……」

そして美しい彼女の耳に朱がさしました。

二、ほんとうに浣腸するところを見たわけでありませんが、浣腸の行なわれる寸前まで同

室してひどく昂奮したことがあります。

二八才のバーの女性で、背の高い成熟した美しい、洋装のよく似合う人でした。私の行きつけのバーで、その日も沢山ウイスキーを飲まれましたが、急に「胃が痛い」といいだしたので。もう十二時近かったので私が彼女のアパートまで送りしました。室に寝かせて、何か薬をさがしましたが適当なものがないので、近くの医師に電話して、一時近く、やっと来てくれました。

その時は多少痛みも止まっていたのですが、医師は診察して「浣腸をしましょう」と申しました。彼女は勿論「嫌だ」「恥かしい」と駄々をこねましたが、とうとう私も一緒に説得して殆ど無理に浣腸することになりました。彼女は枕に顔を埋めてしまい、私が顔をのぞきこんで「一寸お尻を出すだけだですよすぐむよ」と申しますと、

「嫌、きまり悪い……」といって頬から耳まで真赤に血が上る様子はとてもなまめかしいものでした。彼女は、スーツだけ脱ぎシュミーズで横になっていましたが、まだ靴下を着けたままでうつ伏せになっていてシュミーズの下で豊満な臀部が高くつき出して見えしました。医者が五〇CCのグリセリン浣腸器にリ

スリンを吸上げ、嘴管を高くかざして見たとき、その透明な嘴管の先に丸く輝くリスリンの滴と共に、このガラスの管が差込まれる瞬間が目に見える様でした。しかし見て居るわけにも行かないので、私は心をそこに残して廊下に出ました。

浣腸が終り、医者が帰ったあとで私は彼女のそばに坐り、もう楽になってすっかり羞恥に上気した彼女の顔の上にかがみこみ

「どうだった？」と聞くと、

「いや、いや……」と、すねてみせる彼女の仕草が大変魅力的でした。

三、女の人を浣腸した経験は妻よりほかありません。結婚して二年目、「お腹が痛い」という妻の、嫌がるのを無理に押さえつけて浣腸しました。リスリン浣腸でしたが、ひどく恥かしかって暴れるのを無理に、それこそ格闘するみたいにして浣腸しました。

その後、時折、浣腸しようといいますが「いや」とはいいますが、それ程、いやでもないらしく、ゆっくり何度も温湯で浣腸していると、耐えられない様に身悶える様子は満更でもないようでした。

四、美しい二三、四のお嬢さん、又は二七、

○浣腸関連フォト○

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ)

強制 空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かく)

百 C C の浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸 責の極

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かむ)

浣腸 シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(れち)

強制 浣腸 三態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器 浣

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かふ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸 器と女

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(るい)

八の人妻が、出来れば洋装で、軽い病気で内科の診察を受けに来る。急に予期していないのに浣腸するといわれ、羞恥と狼狽で真赤になり、断り、嫌がるのに無理に説得されて浣腸される光景を空想します。浣腸でも多量の液を注入するとか、苦しめるとか異常なものには全く興味はありません。

付記一、

東京在住の浣腸愛好者が何人か居られる様子、愛好者だけで文通したいものと思えます。或は毎月、日をきめてどこかでお目にかかれぬものでしょうか。お互いに「何の何某」でなく「一人の人間」であるに過ぎません。赤裸々なお付き合いが出来るとしよう。関さん、佐藤さん、久里須さん、如何ですか、私のコレクション等お見せしたいものです。

付記二、

浣腸体験のアンケートは先ず編集室に居られる方々でも、手近かな方から集めてドンドン発表して下さい。雑誌の購読者層がドンドン拡がると思います。私の様に人を縛ったり叩いたり、苦しめたり、切腹したりする殺伐なことは大嫌いな人間も居ることを御承知下さい。



私の告白の断章

△女主人の脚▽

天 泥 盛 英

(前置き)

全く真実の告白というものは、むづかしいものです。私は、他人の迷惑にならない限りで、本誌の愛読者の皆さんに、私の告白をきいて頂きたいと思います。私の性癖は、この国では、少々珍しいかも知れません。しかし、フェティシズムとマゾヒズムの西欧においての最も典型的な形であると思います。一読して可哀そうな者と思われる向はどうか、此の傾向に深入りしないで下さい。これは、面白い、と思われた方は、貴方の性愛の生活

の一部に応用してみして下さい。そうして、性的偏向を持った者として、最上の愉悦を得て下さい。私は私の傾向を、破壊的な方向へ向う危険性のあるものとは思っておりません。

—○—

エディット・ピアフの唄うシャンソンで、「パリの恋人達」というのがあります。大変に軽快な唄ですが、其の一節に「パリの恋人達はお互の顔に恋するのです」というところがあります。顔は、特に女の人の顔は、美しく、魅力溢れる様であってほしいものです。けれど、顔の美しい魅力も、私にとって

は、若しそのひとが、嫌な形の脚を持っていたら、無意味になってしまうのです。小さい時から私は、女のひとの脚が気になるのです。性的にどうか、こうとかいう前に、私は嫌な形の脚をした女のひとを毛嫌いしたのです。中学の頃でした。大変に映画の嫌いな父が、ふと何を思ったのか、日劇へ映画を見に連れていってくれました。その時見たのはたしか「テスト・パイロット」という飛行機映画でしたが、その中に出て来た女優の脚の線の、筆にも尽し難い美しさに私は夢中になってしまいました。「白人は脚がきれいだ、

それに顔だっけきれいな人が多い。よく、僕は白人の女をお嫁さんに貰おう」と、決心したものでした。今でも、古いファッション雑誌などを見ると判るのですが、その頃の女の人なんて、外人にしても決してそんなに美しい線を持つては居なかったらしいのですが、その時は、一途にそう決めてしまったのでした。

私は、その頃、漸く春の目覚めを覚える様になって居ました。そのため、この白人女の脚に対する憧れは、無意識に性欲と結びついてしまいました。同じ頃、私は雑誌（たしか「新少年」でした。）の画報で、珍らしい写真を見ました。その写真には一頭のライオンが坐っており、その前に向い合って、白人の女性が立っています。女は左手に白い紙を巻いたものを持って、ライオンの鼻先で見せびらかせている様子でした。猛獣調教師の養成所の卒業式のスナップでした。女性は何論、調教用の白いシャツを腕まくりして、下半身は男性同様、乗馬服を着ていました。不思議なこと、私は此の写真を見て何か或る印象を強く受けました。併し、このときは別にその印象が、後で発展して、私の特異な性感にまで形作られるとも思いませんでした。暫ら

くたった或る日、私は親類の家から借りてきた「家なき子」を読んでいますと、浮浪児達のボスが子供達を使って商売をして居る件りへきました。商いの少なかった子供達は、少なかっただけ鞭で打たれるのでした。打つのは、意地の悪い少年の一人でした。更に読んでゆくと、中でも一番よく苛められる少年が主人公と一緒に逃亡を企んで、血盟を誓うところで、「若し、僕が悪い事をしたり、僕の新らしい主人である君のいう事をきかなかったら、僕の身体の何処をでも打って頂戴。ただ、頭だけは打たないでね。何時も打たれて軟かくなってしまうんだもの」という一節がありました。此の二つの場面は私に始めて性的な昂奮を覚えさせました。

勿論、現在の私の性癖から考えると、この場面は、同性によって加縛される事を求めているので、随分違うのですが、とにかく、その時は、他の人に、自分を鞭で打ってくれる様に頼むことだけで昂奮したのでした。同じ日に、再び新少年の一節、「猛虎は大尉に近づいてきた。大尉は、もうだめだと思っただけが、虎は大人しく近付いてきて、犬の様にかがまって、大尉の乗馬靴を舐めるのだった」

という南洋一郎の作をよんで、再び前と同じ様な昂奮を感じました。私が「乗馬靴」という言葉に始めて強い印象をうけたのは、此の時でした。

こうして、私の心の中に、マゾヒズムと靴フェティシズムの形成が、徐々に行われてゆきました。私の女性に対する欲望に、最初に決定的な指向を与えたのは、「アングルトルムの物語」の中の一部でした。ストウ夫人の書いた、奴隷制反対の基石となったこの小説は私に現代の奴隷制への敬慕を育成せしめたものでした。いう事をきかない娘を奴隷制度反対論者である、或る夫人が預って、温情によって、教育しようと試みるのですが、土人娘は鞭で打って貰わなければ、何にもしないと頑張ります。夫人は仕方なく鞭を振うのでしたが、その間中、娘は泣き叫ぶのでした。私はこういう場面の裏に、明瞭に映され出ている白人女性の残忍性を掴み取ったのでした。

最初の脚線美の時に話した私の幼い決心は、ここでも現われてきて「白人女性によって、苛められる事」と「性感」とが合致しました。その上「乗馬靴」と「動物化」という二つの固定観念は早くも移動して、「白人女性」は乗馬服を着ていなければならなくなり

ましたし「動物化」の場合も、自然に「馬」に化するという観念が出来上りました。此の頃の事でした。廿八年四月号に掲載された、「乗馬服と長靴と鞭」という一文の中で、報告した出来事が起ったのは。あの一文も、固有名詞以外は全部本当にあった事です。併し私に取って、残念な事は「相手の女性の死」も事実だという事です。こうした幾つかの体験の中に私達の国は戦争に敗れました。キエルケゴオルやヤスパースの「死に至る病」という人生観や、サルトルの実存主義解説が、熱狂的に観迎され、哲学はワイマール共和国の時代と同じく、詩的な昂奮をもって語られました。私も、人並に、焼跡を最初の恋人と散策し、薄暗い廃址の中で、接吻を交した事もありました。

「私達は伝統を持って居る」フーバーの標準化運動の示す、画一主義と実用優先の思想は必らず、此の国では挫折するという信念の下に、私は、日本国民の感性上の第二の故郷であるラテン民族の国家群へ目をつけたのでした。東洋の言葉と異り、フランスは国破れても且つフランスは存在し、フランス人も又存在していました。敗戦という詩的要素の多い状態を、何度か味ったフランスは文壇哲学界

挙って新らしい人生観を提供して居ました。私の「音楽」に対する烈しい欲求が起ったのもこの頃でした。今でも、私の魂の部分は、飽迄も、音楽によって充滿しているのです。殊に、頽唐の作品を書いた、グスタフ・マラー、リヒアルト・シュトラウス、クロード・ドビュッシー、ガブリエル・フォーレ等の人々は今でも、私の精神作業の重大な指針です。私が、くどくどと私の性愛と一見無関係に見える事を述べ立てるのは、これ等の諸体験が、一時潜在した私のマゾヒズムとフェティシズムとを、再現に当って、非常に巧妙に複雑に浄化してくれたからなのです。

私達はジャン・ジャック・ルッソオが露出癖と被鞭打愛好とを持って居た事を熟知しています。而も、彼の性癖は彼の偉大な業績に与って力あったばかりか、むしろ彼の思想の不可欠な要素の一つでさえあるのです。彼の場合、前述のマゾヒズム体系に属する性向は人為的な規範の極限をつくし、然る後に反転して、プリミティブな方向へと直進し、化成したといえましょう。その様にこれ等の体験は私の性愛の傾向を固定したばかりか、マゾヒスティクな連合ともいえる性格を作り上げたのでした。「奇矯」は必らずしも優越を示

しはしないが、真の「グロテスク」は美の一部門であります。オスカ・ワイルド然り、アンリ・ルウソオ然り、ヴィクトル・ユウゴオの初期然り、近くは、北原白秋の初期然りであります。私は、全ゆる機会を捉えて、自らの性癖を奇矯からグロテスクへと昇華させようと思っています。

戦後、私に再びマゾヒズムとフェティシズムとを感じさせ始めた最初の原因となったものは、米映画「海賊バクラーダ」でした。これは本当に偶然の機会でありまして、親友の一人に海洋映画狂が居り、時間つぶしに無理矢理連れ込まれたものでした。モーリン・オハラ演ずる姫君が水夫に化けて乗込んでいる男の主演俳優が氣に触る事をいったからといって、船長を呼びつけて、三十回の鞭打刑に処する場面が、私に、何か忘れて居たものを呼び起したのでした。

次いで、正月映画として見た、ジェーン・ラッセルとポップ・ホープの「腰抜け二挺拳銃」で、ラッセルの勇ましいカウボーイ姿に益々昂進を感じました。それから、西部劇の悉くに目を通し、女の乗馬を見る事を目的とする様になりました。その頃の映画で、印象に残っているものには「カナダ平原」「彼

女は「二挺拳銃」等があります。私の乗馬服の女性（殊に白人）に関するフェティシズムは益々、熾烈になってゆきました。此の頃起った変化は、当初、硬い革の黒い男性用の乗馬靴をはいた女性が、唯一の対象であつたにも拘らず、軟かい革の長靴やカウボーイ用の長靴に対しても、それ等が、一寸でも女性に関連があるならば、極度の昂奮を感じる様になつたこと。それから、今迄は男性用の乗馬服を女性がつけている事が必須であつたのに、女性が女性用の乗馬服をつけているだけでもよくなったこと、つまり、西部劇等で見るとスカートに革の長靴をはいた女性に対しても性感を感じる様になつたこと等でした。

女性用の乗馬服といつても、英国の国技とまでいわれる狐狩り用の乗馬服や、欧州古来の長い裾をひく女性用の乗馬服については未だ性感を感じるに至って居なかつたのです。この変化は私自身、心理分析を試みればよくわかる事です。当初は想像的要素が少かつたために現実に見る事の出来やすい男性用乗馬服を女性が借り着しているのを見て始めて、昂奮したのです。つまり、女性が男性的に振舞う事が「暴力」の観念と常に唯一無二に結合していたわけです。それが段々と多角的、

且つ深刻になってくると、想像力に頼る事がむしろ多くなり、且つ経験上から、女性本来の執拗な残忍性を明確に把握したため、女性が女性用の乗馬服（それも、ズボンでなくとも）を着ている方がむしろ、被虐感が多いという事になってきたわけです。

沼正三氏のいわれる様に、鞭が「家具」の一つであつた時代は早くも過ぎ去つてしまいました。その為「鞭」を家具として、又は生活必需品として用い得る女性は、社会的な体面を考慮に入れるならば、乗馬をする女性か又は、サーカス等の女調教師位でありましょう。この事は、このため、他の動物になるよりも、「馬」になりたい、女性に跨つて貰つて、気の済む様に仕込んで貰いたいと希む者が比較的に相手の女性を得られるという事を連想させるのです。私にとって、最も幸な事は、西欧の女性の多くが乗馬をする事です。この場合、こういう事も考えてよいでしょう。つまり、女性は乗馬の際に、外見上、自らを少しでも美しく見せたいという女の本能に従つて、少しでも、身に合った、美しい乗馬服を着ようとする事。女性用乗馬靴が多少であっても、ハイヒールになつて居る事等は、このよき現われでありましょう。次に、鞭

等も、女性が生来男より、力も弱く、身体も小さい為、華奢に作られています。処が、一方、馬にとってはどうでしょう。女性が、馬に乗つて、快感を味わいたいという漠然たる期待を持った時、第一に考える事は、馬を疾走させる事でありましょう。乗杉貴代子さんの「ダイアナ夫人」をよんだ方は、随所に無意識の中に、この心理が働いた好い実例を見られるでしょう。疾走させたいと乗手が考えた時に、反射的に起る動作は、拍車をつけた靴の踵で、力一杯馬の腹を蹴る事です。それでも効かない時は鞭を当てる事です。この動作が何故、マゾヒストに喜ばれるかの根本的な理由は、女性が加虐を当然の事として、自らの欲望の達成の為に無防備の相手に、拷問具にも匹敵する特殊の用具を使用する事、そうして、拍車の如きは靴の踵についているという事でしよう。しかも一応馬を走らせ得たとしても、体力つきて馬が速度を落した時乗手である女性は、一片の同情をも示さないのが通常です。彼女は更に鞭を鳴らし、（自分の力が弱くて、馬に対して充分な指示を与えていないかと危惧して）力一杯の烈しい拍車を与えるのです。この様な出来事は、通常今の瞬間でも起っているのです。人は、それ

偏執雜記

臍窩とその周辺

須藤 律夫

臍の垢溜めたるまんま嫁に行き

昭和六年四月、大阪滑稽新聞社発行の「奇

抜全集」を見ていたら、冒頭のような川柳が載っていた。この外にも同誌にはお臍を読み込んだ川柳が仲々に多く、数えてみたら十指に余る賑やかさであった。

扱、話は一寸お古いが昨年一月初旬の事である。詳しくは十日、午前七時五十分からの東京放送、私はこの「電子頭脳が答えます」を毎朝聴いているのだが、愉快な問題が思い

を指して「残忍」とは呼ばないかも知れませんが。併し、私のいう様に、想像的な要素を加えて、「馬」と「男」をおき代えてみた時、女性の残忍性というより、残虐行為は、極度に、美化された（と私は思うのです）形で、実行されているのではないのでしょうか。

こういう風に考えるとき、私は乗馬服をつけた女性、殊に、女性用の乗馬服をつけ、高

い踵の乗馬長靴をはいて、手に鞭を持った女性を見ると、性的昂奮を感じ、身体に触れたとき、屈従感をさえ感じるのです。斯くして、私の靴フェティシズムの第一段階が始まったわけです。併し、この頃、私に更にフェティシズムと、マゾヒズムに固定的な変化を与えたのはモウリン・オハラ演ずる「剣豪ダルタニアン」でした。膝にまで達する、軟

かい革の長靴をはいた彼女の姿は「バラクーダ」以上の感銘を私に与えました。同様に、追っかけて上映されたモウリン・オハラの「すべての旗に背いて」も又、服装上の性的昂奮において、優位を占めるものでした。それにジェーン・ラッセルの「腰抜け二挺拳銃の息子」も又、私のフェティシズムを満足させたものでした。



がけずスピーカーから流れ出した。声の出演はお馴染み、三国一朗と久里千春、以下その日私の耳底に録音された儘を再生してみよう。先づ久里千春の、例によって速射砲のような早言葉で、

『今日の問題はえーと、昔からよくいわれていますが、お臍の中の黒いものを取ると、お腹の痛くなるのはなぜですかと、こういう質問です』

『解りました、お臍のゴミを取るとお腹の痛

くなるのはなぜかというんですね、では早速電子頭脳さんに訊いてみましょう』

——これに対して電子頭脳の答え——

『お臍の胡麻を取ると皮膚の薄いところを刺激する事になるのでお腹が痛くなります。それにお臍のところは色々な神経が集中しているのなるべくそっとして置いて下さい』続いて『おやおや久里ちゃん、電子頭脳がまだ何かいってますよ。えーと何んだって？　そおそお、百聞は一見にしかず、まづ久里ちゃん覚悟はいいですか？』

『6……』

■筆者には奇声を発してはにかむ千春の顔が、瞬間眼に浮ぶようだった。

ところで人の顔形が違うようにお臍の形も千差万別である事は何人も異論のないところだが、同じ踊り子のお臍にしても、見る人のアングルの相違で色々に変化する。殊に舞台で踊っている時など、ある時はお臍の穴が開き、またある時は反り身になると穴が

浅くなり、反対に前屈みになると臍窩は愈々深い影を宿したりする。

数年前の事、毎日新聞の地方版だけに、この臍窩の計量について詳しいデータの載った事があるが、実際に穴の深さやひだの状態、間口というか臍輪の大きさ等、実測してみない事には写真などでは適確なところは解らない。

筆者の友人で医者（産婦人科）でもあるA氏は、この婦人の臍についてかなり熱心な研究を続けていた事があった。（現在も猶続けているかも知れぬのだが、久しく会わないので）彼の説によると臍窩の深さは、満腹時と空腹時とは共に違うし、従って朝と晩とは矢張り若干の相違があるという。

また彼の計量した中での逸物は、臍輪の直径二センチ半、深さは実に五センチもあったというから、その偉大な事は寧ろ驚嘆に値しよう。お臍の深さが五センチといえば二寸近く、人差指なら第二関節を越え、もし子指なら根元までも入って仕舞う。これについて想い出されるのは昨年の暮、熱海で催された忘年会での事だ。その日はちょうど新宿のSという大衆キャバレーの従業員慰労会も兼ね、筆者も招かれて同席していた。宴半ばにかく

し芸が始まると、突如立ち上ったグラマー女性
性の一人が、そのまま楽屋に飛び込み、出て
来た時には完全にビキニ・スタイルである。
持って出た太筆に墨をたっぷり含ませる、い
きなりお臍の穴に刺し込み、畳に敷いた白紙
の上に「賀正」の二字を書いた。満場の拍手
を浴びた事は勿論であるが、筆者には何か被
虐趣味も感ぜられる一幕であった。後で聞い
た事だが、彼女は喜多村万里子といい、歳は
二十三歳、元ストリッパーだったとか、グラ
マー振りも領けるところである。

また、元横綱吉葉山の息子さんが小さい
時、お父さんのお臍の穴にゆで卵を入れたり
出したりして遊んだという、ほほ笑ましいユ
ーモラスな逸話も伝わっている。

大きなお臍で想い出すのは、英国の映画界
が近來の傑作として宣伝している、グラマー
スター、イボンヌ・ロメインの事である。彼
女のボーイッシュなマスクと豊かな肉体美と
は多くのファンを持っているが、稍縦長の太
きなお臍もまた蠱惑的である。彼女はこれを
売りものにしているらしいが、もっと奥行が
増し、彫りの深さがあったなら、その魅力は
倍加される事であろう。

一方キーストンの共同通信によれば、この

夏のヨーロッパのレジャー・ファッションが
この程ウィーンで紹介されたというが、その
代表的なものは肩までかかる大きなむぎわら
帽と、可愛いお臍を出すのが特徴だという。
掲載されていた写真の、ビキニスタイルの美
女のお臍は、しかし一寸小さく浅く、まるで
蛭を貼りつけたようで淋しかった。

これは筆者の偏見かも知れないが、ヨーロ
ッパ人には男女共、こうした蛭型のお臍が多
いのではないか、何んだか日本婦人のお臍が
一番美しいように思われてならない。

もっとも日本婦人でも稀には腹壁の脂肪が
極端に落ちて、残くて薄墨色の、触るとザラ
ザラとしたお臍にお眼にかかる事がある。蛭
型でもこれは淡水に住む真蛭であろう。また
人によっては黒光りのしたすべすべの、滑ら
かな小さなお臍もある、これはさしずめ海水
に住むやまと蛭といったところか。

ところで海のこちらの日本の話。昨年の水
着モードは「レイ・ルック」と「ネービー・
カット」が話題を呼んでいる。前者はハワイ
のレイにヒントを得たもの、後者はネービー
(臍)の部分のカットしたものだが、ビキニ
スタイルを少し上品にした、鑑賞用の水着と

思えば間違いない。

何事によらず気の早い映画界での事、三月
のある日、東京、池袋Sデパートの屋上で今
夏水着のファッション・ショウが行われた。
ネービー・カットの水着スタイルは大映の江
波杏子、折悪しく春雨の煙る薄ら寒い日だっ
たので、彼女も流石に音を挙げたらしい。

「寒いわ、何んだかお臍のところが空いてい
て、……風邪をひくみたい……」

「いいじゃないか、別に出臍じゃないんだか
ら、もっと堂々とお臍を見せろよ」

「ネービー・カットって……お腹が冷えちゃ
うわね」——といったような会話のやりとり
もあったらしい。因に江波杏子のお臍はいわ
ゆる桃の実型、貝で例えたら小さな蛤型でも
あろうか、恥しそうにひだが窪んでいるとこ
ろなど誠にお淑やかである。

女優さんの臍の悩みをもう一つ――。

東和映画の招きで近く来日する、ダニー・
サバルは今年二十才の小妖星、仏映画「パリ
ジェンヌ」にも出演していると聞くが、彼女
はお臍の黒子を変え気になっているという。と
もあれ臍の周辺どの辺に黒子があるのか、筆
者手にとって見た訳でないので何ともいえな
いが。もしその黒子が臍中深く、穴の中心に

あれば、相学上これを「含珠」といい、稀に見る吉相といわれている。

読者の中、この吉相を調べてみようという方は、まずお臍の掃除をしてからにした方がよい、でないと黒い胡麻を黒子と間違えてしまふからである。人によっては穴の深く窪んだ中年婦人など、お臍の奥を覗くのに苦勞する事であろう。こんな時は先の円いピンセットで開くと簡単である。

さて、お臍の穴は開いたとして、奥の胡麻は簡単にとれない。何しろ「割箸でお臍の胡麻が取れたら、飛んでる小鳥も獲れる」といわれる位である。矢張りオリブ油で浸し、柔らかくなったところでピンセットを使うのが一番であろう。但しゴマを根こそぎ取りつくすと、お臍はしらじらとしてのっぺらぼうの感じとなり、見た眼には余り美しくないと思うが如何？

事の序でに「人間の蒂落ち」ともいわれているゴマの筋にも注目してみよう。もしシワが中心から放射線状に伸びていけば、大過なく全人生を送る平凡型、左右何れかに偏っていれば相応の破乱曲折を免れない。(必ずしも悪い面ばかりとは限らないが)もし旋毛と同じように渦巻型であれば將に時を争う可し

風雲児の素質充分といわれている。

最近読んだある易占の本に、仰向けに寝てお臍の穴に水を注ぎ、その量が盃二杯に満ちる者は、立身栄達の相とあったが、前記横綱が大仏様でもなければ一寸無理な話かも知れない。古今の相書押しなべて臍の深さと、濁さとを尊重しているが、日劇、ミルク・ホール(おっと、ミュージック・ホールの間違い。しかしオッパイが沢山出るから大した違いはない)の島淳子など、筆者は毎月見る度に美しい臍窩への郷愁を感じる。

最近出版された「夜と昼」創刊号の巻末に乳房愛撫器と並んで「お臍愛撫器」というのが二種類程、図解入りで載っていた。概略を説明すると、臍穴にすっぽり入るような細い針金で網んだ籠のようなもの、これを臍の中に入れ、筆先などで愛撫するのだそうである。これは使う者の臍型に合わせて作らぬと勿論上手く行かないが、快い刺激を与えるかどうか筆者には一寸疑問なのだが。尤もある被縛マニアのホステス(三十歳、肥満型、中背)は、「お臍の穴にぴったりと入るこぶたんを作り、その綱で腹部を強く縛られると最高だわ」といつていたが。

話を戻そう。大仏様で想い出したが奈良の

三笠温泉には、「大仏の臍なべ」というのがある。最近できた新若草旅館で供しているのだが、野菜と豆腐にメリケン粉をかけ、大仏のお臍のようなものを型どり、フライで揚げた精進料理である。この外雷おこし(浅草)臍まんじゅう(奥多摩)臍パン(東京)等々お臍を型どった食べ物とは全国的に数多い事であろう。本誌の多数読者の中、もしお気付きの向きは是非ご教示いただきたい。花より団子とか、話が食い気に落ちたところで擱筆しよう。

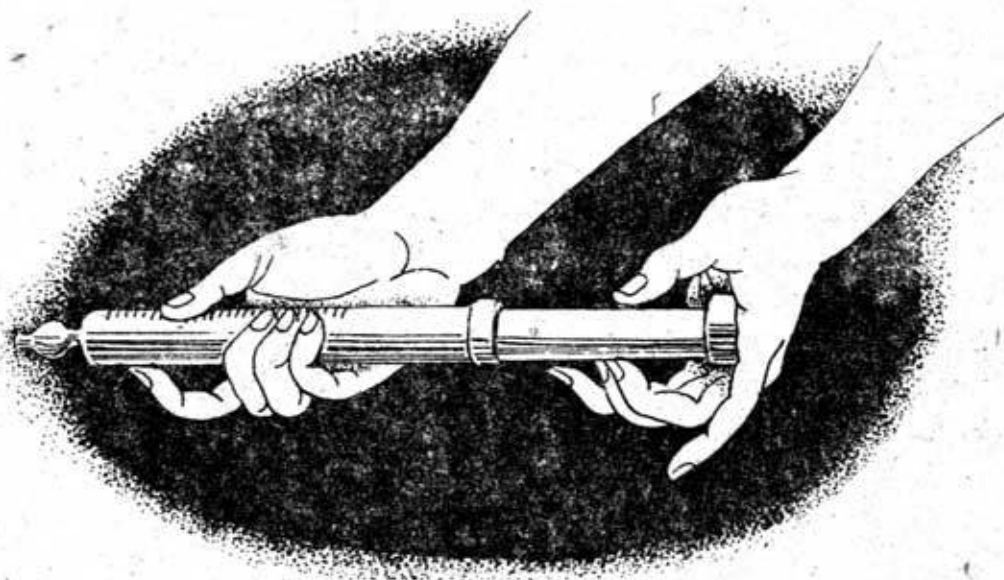
——おわり——

○本誌の御購読について○

本誌の発行についてのお問合せが最近数多く参っておりますが、本誌は今後共毎月確実に発行いたします。但し、書店に対する配本が円滑を欠きますから、是非直接御注文下さるようお願い申し上げます。本誌は毎月二十五日に発売いたしておりますが、予約お申込み下されば、二十日頃に厳重包装の上、急送いたします。尚、予約お申込みの方には、随時目録、KK通信などを発送させていただきます。局留の方は、二十五日頃局へお受取りにおいで下さい。

浣腸という絆に結ばれた 『私とあなた』

小 泉 尚 子



「僕は自分でできるから——」

と、あなたは、はにかんでおっしゃる。

けれど私も「そうですか」と引下がる訳には行きません。今朝の回診のあと

「富野さんはとてもがんこな便秘だから、濃い石けん液一〇〇〇cc浣腸して下さい。できるだけがまんさせてね……」

と婦長さんからの強い指示でした。

それに私には久し振りの若い方への浣腸です。興味もありました。正直にいいますと、私の心の奥にひそんでいる悪魔が動き始めてある種の期待でワクワクしていたのです。

その頃はまだあなたになじんではい wasn't でした。病棟の担当が変わったばかりで、以前に度々顔を合わせてはいたものの、一度も口さえきいたことがありませんでした。

でも不思議に印象には残っていたのです。

蒐集品の郵便切手アルバムを大切そうにかかえて他の病室を訪れて行く姿や、ある美しい女患者さんと仲睦まじく、いつまでも語りあっていらした姿が、なぜか頭に残っていました。あなたは、たしかに女性の心を惹きつける魅力的な雰囲気を持っていらしかったようです。

ほかにも時々あなたに近づこうとしている

女患者さんを見かけたものでした。あなたはそういう女性達にあまり関心をお示しにならないようでしたが、一人だけ十六、七の愛らしい少女を妹のようにいつくしんでいらした事だけはありありと覚えています。

私はまだ二十になったばかりで、恋の経験もなかったし、これはと思う人にも巡り合っていないませんでした。そのせいか、そういうあなたの姿に、いつのまにか関心をひかれていたのかもしれない。

私があなたの係になった時、ちらと胸をかすめた喜びがあったことを隠すわけにはいきませんでした。

あなたも私を他の看護婦さんに対すると違った目で迎えて下さいました。それを私も敏感に感じとりました。

でも二人きりで親しく口をきくのは、これが始めてなのです。よりによって浣腸という仕事から始まるというのは、変な縁でしたけど

「サナトリウム生活では、どうしても便秘がちになるのですわ」

と私は申しました。

「下剤や浣腸はどうしても必要なですよ、皆さん」

「僕は……いやだなア、自分でイチジクを買って来て処置したいけど」

とおっしゃるあなたが、しばしば年上の看護婦さんに浣腸されていらしたことは、私も知っていました。私があまり若すぎるし、それにはじめてだから、あなたはためらっていらしたのでしょう。

「今日のは少し強いんですよ。ご自分では無理です」と、私はきっぱりいいながら、ベッドのかたわらに準備をすすめました。

この病棟では数少ない個室の一つで、窓の外は夏の日光があふれていますが、二階だし入口のドアをしめれば、だれに覗かれることもない密室と同じです。

「恥かしいなあ」

本当にホホを少し赤らめていらっしゃるあなたは、お年に似合わずウブな感じでした。

「いいわ、あなたは向うむきに寝ていらっしゃい。私が全部してあげますから」

と私はいいました。

あなたはもう観念したらしく、おとなしく横におなりになりました。

掛けてあった毛布を下半身だけ上にまくりました。薄地のパジャマから上半身の肌の色やパンツの線が透けて見えていました。

私はかたわらにすべて準備し終りますと、無言でああなたの腰のゴムに指をかけました。パンツのそれと一緒に下に引きおろす時、あなたは一寸腰を上げました。そしてスルスルともものつけ根まで脱げてしまいました。

男性らしい固く引締ったおしりが丸々と目の前にあらわれました。エネマシートをそつとその下に差し込みました。私はなぜか職業的になりきれない目で、そのあたりを眺めました。

「もう少し、上の足を前へ折って下さるかしら……」

あなたはおとなしく、お尻をつき出してやりよくしてくれました。

注入もワザとゆっくりとしました。恐らく一リットルのイルリガートルが空になるまでには五、六分もかかったでしょう。あなたも、それが不自然であることに気づかれたことでしょう。でも、それが私とあなたの間に無言のうちに気持の通じあった瞬間だったのです。

全部注入の終わらない中にあなたはお尻をもじもじはじめました。無理ありません。

二〇グラムの薬用石けんを溶かすはずの浣腸液に五〇グラムも入れてしまったのです。

よく溶けないでこずんでいた位ですから……。

私は脱脂綿を当てて、しっかりと押えながら時計を見つめました。あなたは苦しいのをじっと耐えていらっしやいました。私でさえイライラする程時間のたつのが遅く感ぜられました。しかしその時なんともいえない一種の勝利感に似た気持。苦痛にあえぐ男性が私の許可一つでその苦痛が増大され、また解放される。これがサジスチックな喜びというものでしょうか。

やっと十分が過ぎ、私が便器を差し上げると、あなたはその上にはねおきてかがみこみました。つづいて激しい音。私は一、二歩遠のきましたけれど、あなたの姿から目を離しませんでした。あなたは両腕に顔を埋めるようにして、排泄をつづけていらっしやいました。

私はいつもにこやかに、あの女性と話していらっしやるあなたの姿を思い比べてみながら（もう私を嫉妬させようとしても、嫉妬しで上げないわ）と、そんな事を考えていました。

「くさいでしょう？」

とあなたは突然おっしやいました。

羞恥を含んだ、そして弁解がましい口調で

した。

「ええ、とても——」

私はわざと正直に答えました。あなたは耐えられないように身をちぢめました。私は少し気の毒になって

「でも、私達なれていきますから、平気よ」

といました。

その日から、あなたは私を見ると、ためらうような、そのくせ何か話しかけたいような素振をお見せになりました。私もついあわい微笑を浮かべて、あなたを見るようになりました。

二度目の浣腸の時は、あなたは大変すなおでした。最初の日から五日もたっていたでしようか。あなたはやはり、恥らうようにながらも、自分でおしりを出して横におなりでした。

注入しはじめると振向いて好奇心な目で真白い液の入ったイルリガートルと私の顔を見くらべておられました。私も何とはなしに楽しい気分でした。

また数日後の三度目も、その後の四度目も五度目も同じでした。

けれどだんだん私達は親しみを増して浣腸しながら話をしたり、あなたの後始末したあ

とで、ベッドに並んで腰をかけて、しゃべりあったりするようになりました。

あなたは礼儀正しく、細心の注意の行き届いた話し振りをなさいました。

切手蒐集という趣味の世界を知ったのも、あなたのおかげです。私が関心をもって見るとあなたは沢山の知識を傾けて私にその世界のことを教えて下さいました。

そんなある日、あなたはとうとう私に、こんな質問をなさいました。

「僕の勘では、あなたは浣腸ということに、単なる仕事以上に興味をお持ちじゃないかな。大変失礼かも知れないけど」

私はドキッと心の中で動揺しました。

「いいえ。でも、そうかもしれません。相手によつては……」

と正直に答えました。きっと鏡で見たら顔が真赤になっていたかもしれせん。

「たとえば……」

「若い男の人だと、ちょっと面白いわ。女の人でも、つんとすました方や、きれいな方だと気持がちがつてくるわね」

「僕に対しては？」

「あら、おわかりのくせに」

あとは笑いにまぎらせてしまいました。

そんな事が重なって、私達はだんだん理解しあい親しさを増して行きました。あなたは、私の職業上の秘密をいろいろお聞きになりました。私は困ったと思いつつも話してあげました。他には決して洩らさないという約束で。

たとえば、若い患者さんの体のことや、浣腸するときの場面などです。

時には

「あなた自身はどうなの。便秘しないの？」などと正面からお尋ねになることもありました。さすがの私も

「あら、そんな事知りません」

といいまぎらわせてしまいましたけど、それ程の仲になったあなたが、やはりあの女の人や、かわいい少女と親しくしていられっしやるのを見ると、私も冷静ではいられませんでした。

私を復讐者のようにしてしまったのは、あのよく晴れた午後のことでした。

あなたとあの方とは花壇のかたわらのベンチで肩をつけあうように並んで手をとりあっていました。きつと手相でも見てあげていらしたのでしょうか、私は窓から覗き見ていてお二人の間の友情以上の空気がただよって

ると感じとったのです。それに、その時の彼女はとても幸福そうで、美しく見えました。

あの方は私より年下で、美容師見習とかでした。気だても、たくさんの女の患者さんの中に比べるものがない程、やさしく上品でした。それまで私は、あの方が映画スターにでもなればいいのに、と大変な好意をいたしていたのです。

けれど胸の底からむらむらと怒りのようなものがこみ上げてきました。私はつい、ある事を決心してしまいました。それによってあの方を私の膝下に屈することができると思いました。

ある日、とうとう私は、あの子を処置室に呼び入れました。彼女は私にとっても従順でした。こちらのいうことは素なおに聞いて模範的な患者さんでした。

彼女を診察用ベッドに腰をかけさせて、私はこう切り出しました。

「先生からの命令なの。あなたは便秘なさっているじゃない？」

彼女はそれを聞くと、たちまち顔を真赤にしてしまいました。

「ええ。よくわかりますのね」

私は前もってカルテによって調べてありま

した。でも知らぬ振りをして

「様子でわかるのです。もしそうだったら、浣腸しなければ、いけません」

「まあ、今ですか？」

という声は少し震えていました。

「ええ、私が」

「どうしても？」

「ええ」

私は冷たくいい放って、器具をわざと見せびらかすようにしながら、グリセリンを吸上げました。勝ちほこったような気分でした。羞恥にふるえながらも、彼女は従順にパンティを下し自分でお尻を出しました。

ベッドの固い黒ゴムの上に白い下半身をうつぶせに横たえて……。

その丸く、小さく、引締ったおしりは何て美しく、可愛らしかった事でしよう。

私は思いやりのない仕草で五〇ccのグリセリンを注入しました。その時、あなたに見える証拠に何かと思い、急いでイチジクを一つ追加しました。彼女は少々変だと思った様ですがだまっていました。

三分、五分とたつにつれ彼女の美しい顔に汗を一ぱいかいて

「まだですか」

と蚊が泣くような声で聞きます。私は勝誇ったように、「もう五分」「もう三分」とサジスチックな気分を満喫いたしました。

そして私の許しが出ると恥も外聞もなく私の差出した便器に排泄しました。

私はその便を臭いのをがまんしながら太い試験管になるべく形の残ったまま入れました。

そしてその日のあなたの流腸の時間に持って行ったのです。

「今日、アキ子さんを流腸したのよ」

といいますと、あなたは驚いて私を見つめました。好奇心と、もう一つ複雑な気持のまじった目で。

「くわしいお話を、お聞きになりたい？」

「うん」

そこで私はすっかり見たままをお話ししました。あなたはお顔を紅潮させて聞いていらっしゃいました。

私は二つの証拠品もお見せしました。あなたはグロテスクなものをつまった試験管を手にとって、しげしげとごらんになり、

「臭い、臭い」

とその悪臭に眉をひそめました。私はこれでよかったと思いました。

けれどイチジクの空をごらんになると、それをいとしそうに眺めたり鼻の所へ持って行ったたりしながら

「これが、あなたの使ったものなら、僕は自分にもう一度使ってみたいんだがなあ」

とおっしゃったのは、あなたのウソ。本当はそれをすぐにご使用なさりたかったからです。私はまた嫉妬を感じました。

「私のだったら、本当に？」

と私は我しらず、いってしまいました。

「ええ、ぜひ、そうしてみたい」

私はうなずいて、そのイチジクの空を取り返しました。そしてもう一つ持って来ると

「私の方を見ないお約束して」

と頼んでカーテンのかげにかくれました。

身づくろいしてあなたのそばへ行った私は

自分でも解る位手がふるえていました。

そんな事があって、あなたはだんだん露骨に私を――流腸したいというようになりまし

た。いろんな遠まわしないい方でしたけど、

つきつめてみれば、私の流腸したい、ということでした。私はうれしかったのです。でも

現実にそうしてあげる決心はつきませんでした。いつかはそうなると思いがち。

あなたは私がだめだと知ると、あの少女を

流腸して……というような事おっしゃいました。

しかし、それを実現する事は至難です。結局私がこの前にあの子に流腸するところをあなたはカーテンのすき間から覗かせるといふことでああなたは承知しました。

やり方は前の時と同じように口実を作り先生のご命令という事で結局承知させました。

彼は最後まであなたに見られていることは知りませんでしたので、苦痛に顔をしかめながら長い十分をこらえた挙句、排泄し出て行きました。

こうした生活がつづくうちに、まもなくあなたの退院なさる日が来たのです。

あなたは私に

「このままお別れする気になれません。時々いいから会って下さい」

とおっしゃいました。

もちろん私だって、そうでした。あなたがいらっしやなくなつてからの生活を考えると、味気ない淋しい気持になるのです。

それで、近いうちに退院のお祝いに、あなたのお家を訪ねるお約束をしたのです。

涙の出るような淋しい一週間が過ぎて――

日曜日にあなたのお宅へ伺いました。

広いお庭の向うに静かな離れがあつて、そこがあなたお一人の住まいでした。

喜んで迎えて下さったあなたは、もうすっかり健康におなりになって活気に満ちていらつしました。

「いつも白衣姿ばかり見ていたあなたが、そんなツープースを着ていると別人みたいですよ。それに全くかわいらしいお嬢さんという気がする」

とあなたはおっしゃりました。

「患者さんの時は、私の赤ちゃんのようだったあなたが、急にこわいお兄様のような気がしますわ」

と私はいいました。

本当に、お互いに別人に会った時のような印象でした。

私はこの広いお家に、他の人の気配がないのを不思議に思つて、その事をお尋ねしました。すると、

「いやあ、わざとそうしたんです。あなたと二人きりでゆっくりしたかったから。皆、夕方まで帰りません」

というお返事でした。

それから病院の人々のうわさ話や世間話が長い間つづいて――。前のように親しみをとり戻したころ

「実はあれ以来、また便秘がつづいて」とあなたは苦笑なさいました。

「じゃあ、浣腸して上げましょうか？」

とついでに聞いてしまいました。

「ええぜひお願いします」

ということになって、私達は奥の寝室に行きました。

驚いたことに、そこにはすでに浣腸の器具が一切そろっていたのです。大小のイルリガートル、数種類のガラス浣腸器、エネマシリンジ、こけし人形を入れるガラスのケースには各種の軽便浣腸がズラリ、恐らく病院でもこれだけのものは揃っていないでしょう。あなたは浣腸マニヤだったのです。そして今日の便秘のお話だつて計画的だったのですね。

でも、私もあなたとお逢いしてから（殊によつてそれ以前からかも知れませんが）、浣腸の魅力にとりつかれてしまっていました。それで、逃げ出す気にもなれませんでした。それ以上に何んだか楽しい期待に胸がワクワクしてきました。

ベッドのかわりに、うすいマットレスが一枚、たたみの上に敷いてあつて、白いシーツが目にしみました。

「じゃ、ご用意なさつて」

私はいつもの通りの事務的な仕草で準備をはじめました。すると、

「今日は普通の仕方ではつまらない。ゆっくり楽しもうよ」

と、あなたはおっしゃいます。

「楽しむって？」

不思議そうに聞きますと、

「今日は、あなたも浣腸されるんです。私に――」

私はおどろいて体を固くしました。あまり思いがけなかった事だけに、何んて答えていいのかもわかりませんでした。

「いいじゃないか。もうお互いに解っているはずだ。僕たちは他の事は望まない。浣腸だけなんだ」

「でも……私……」

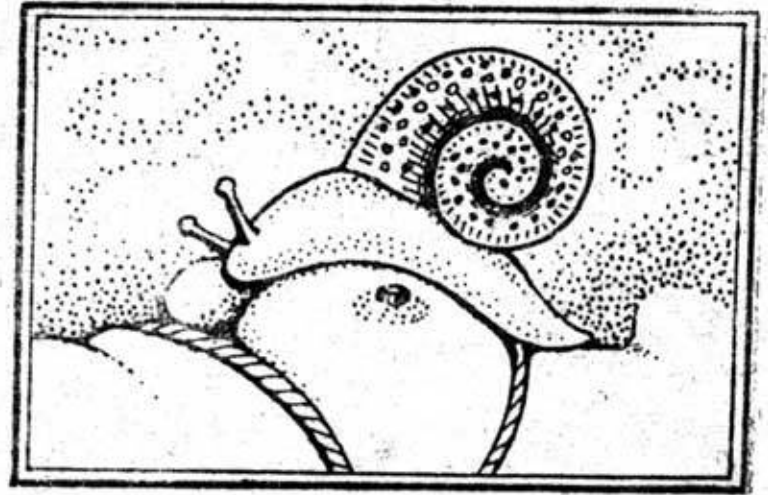
ためらう私を尻目に、あなたはスックとお立ちになり、用意してあつたガラス製の浣腸器を持って私のそばに近よりました。私はもう抵抗する力さえ出ませんでした。なすがままに冷たい液が体の中にしみわたっていきます。目をつぶつてそのムードにひたっていました。

三年前、看護学院で浣腸のお勉強だといって友達同志浣腸した時のことなど思い出されました。やがて激しい便意が襲つてきて、もうとても苦しい。

「ねえお願い、もう、おトイレへ行かせて」

もうどうすることもできません。やっと手を離され、与えられた便器に跨がなければなりませんでした。

（おわり）



女相撲小説

山中での娘相撲

岡 平 吉 夫

「やっぱり大鵬の強さは絶対ね、佐田乃山も豊山もまだまだね」

幸子は興奮からさめやらぬ面持ちで蔵前の国技館を出た。この幸子を知ってから美枝もすっかり相撲ファンとなって本場所にも相撲部屋にも出かけるようになった。

「男っていいわね、裸になって思い切り相撲をとれるなんて、胸がスカッとするわ」

「貴女もそう思う。相撲とってみたい？」

幸子が急に熱っぽい眼差を向け、立ち止まったので美枝はギョッとしたものの

「女は駄目よ」

「何故？」

「だって女の相撲なんてグロテスよ」

「女相撲って実際にあるのよ」

「知っている。でも素人じゃあないもの、第一力が入らないわ」

「やってみるのよ、女だからって何も相撲を取っていけない理屈はないわ、誰もみていなければ自分の思うことは何んでもしたいわ」

「……」

美枝も頷いた。何か自分もそんな誘惑にかけられる。そのまま二人はある幻想を追いながら裏道に出た。

「ねえ、美枝さん、今度の日曜日、千葉県佐倉の方へハイキングしてみない？」

「佐倉？」

「ええ、二時間もあれば行けるの、私のお友達も月一度は出かけるのよ、気候もいいし、気持がいいわよ」

「そうね、行ってもいいわ」

日曜日、美枝は約束の時間に京成電駅にて幸子を待ち、そのまま佐倉まで急行に乗った。秋の日ざしは、都会と異ってすがすがしい。

この辺は東京の近くにありながら未だ農村

特有のよさを感じさせる清らかさがあり、美枝はここに来たことをよかったと思った。

田舎道をさそわれるがままに歩きながら、ひやかな空気を一杯に吸った。

幸子は駅を降りてから意外に押し黙ったまま、一本道を足早く歩き続ける。

「幸子さん、別にあてがあるわけじゃあなしもつとゆっくり歩きましょう。田舎道の風情を味わうのよ」

幸子は別の事を考えているのか、熱ばい表情を無理にほころばせながら

「あのね、これから二十分位かかるかしら、お寺があるの、そこでお友達と落ちあうことになっているのよ」

「あら」

「ご免なさい。貴女にいい忘れたのよ、でもね、女の友達だから心配要らないわ」

「そんなこといわなかったじゃあないの、どうして？」

「ご免、ご免、気のいい友達なの、二人より四人の方が面白いでしょう。気を悪くしないで」

美枝は不満だった。別に隠すこともないことだし、今日の幸子は妙に空々しいところがある。

「いやだわ、わたし帰る」

と駄々をこねてみた。幸子は驚いて哀願するように弁解に努めながらも

「貴女、誰にもいっちゃあいやよ、約束してね、本当よ」

と念を押しながら語りはじめたことによると、幸子はやはり相撲ファンとして知りあつた和江、広子があつたが半年程前、この佐倉の町はずれにある竜順寺という寺を紹介された。

この寺の住職は千葉市に大きな寺を持ち竜順寺は年一度祭礼のある時に限り出張するという空寺、村有林のある小山の中腹の一角に眠るようにたたずみ、祭礼以外は全く人の訪れもない荒れ寺である。

住職の遠縁に当る年長の和江がこれに眼を付け秘密の場所、即ち、広子と相撲を取る絶好の場所となり月一度、ここを訪れ思う存分取組む次第となった。

それにさそわれるともなく、幸子に加わり今では三人が裸相撲に打ち興ずることになった。

意外のことにびっくりした美枝は「わたしはいやよ、誰もみていないからってそんな真似は出来ないわ」

「いいのよ、貴女は仲間に入れない。でも、わたし達の取組をみて頂戴、それだけでいいわ、それに貴女に秘密を打ちあけた以上、このまま帰すわけにはいかないわ」

幸子はキツとした表情でせまった。美枝もそうはいったものの、同性の相撲に全く興味が無いわけではない。観念したように後に続いて歩き出す。

自分が取るわけではないといいきかせながらも体中がほてってくるのは、どうしようもない。

やがて細道に折れ、それから道らしい道のない中をかきわけるようにして山道をたどって小さな寺の前に着く。

そこには二人の女性がパンをかじりながら休んでいた。

一人は二十五、六になろうか、五尺位の小がらな体つきであり髪はアップにしている。眼つきがややきついが色の白い日本画的美人いま一人は二十前であろうか、これもやせぎすの小がらの体、ややくずれた感じはするが洗練された雰囲気を持ちツーピースの服装からは何んの変りもみえない。

美枝の予期した感じとは全く違って、そこからは相撲などを連想させる余地は見出し得

ない。

むしろ、幸子や自分のどちらかといえば筋肉質的体格、それに女としてはやや大がらであるだけに相撲好きといわれれば納得のいける体臭を持っているのではなからうか。

紹介が終りやや緊張した不自然な沈黙が流れたが、それを破るように幸子が、

「ねえ、美枝さんにはあの話はしたわ、大丈夫、貴女達だけで始めてくれない、わたし達は一と息付くわ」

と合図した。二人は頷くと同じようなバツグを手にして寺の裏側に姿を消した。

美枝はおも苦しいものから逃れたような気持ちと同時にこの山中での静寂が妙に異常なものとして臉をさす。おそらく女の相撲というような奇妙な出来事を想像しなければ小鳥のさえずりも、のぞかな音として耳にしたに違いない。

「美枝さん、あの和江さんね、奥さんなのよあの方がリーダー格ね。このことを始めてから私達もすっかり病みつきになってしまったの」

「……」

美枝は黙って気をしずめにかかった。

「すばらしいのよ、裸になってぶつかり合う

なんて、女にもそんな本能があるんじゃないかしら、世間が女はしとやかなものと決めるのが間違いよ。自然の気持を表わすことはいいことのようにも思えるわ、だってダンスや映画みるよりよっぽど健康的。ねえ美枝さん」

「まあね、でも、わたしはお仲間入りはご免よ」

と一本くぎを打つ。

「いい、いいわ、でも、貴女には判らないのよ。まわしを締め込んだ緊迫感、勝負ということ以外何も考えない。集中的緊張感というのかしら、すばらしい競技だと思うわ、一度やってごらんになれば、その魅力にとりつかれることよ」

「そんなことないわ、わたしはいや、いやよ絶対」

美枝は幸子の言葉を無視するように夢中になって弁当のサンドイッチをほぼほった。がやはりあの二人が今頃どんなことをしているのだろうか。女と禪、女と相撲、動悸が激しく波打つ。暫くして

「さあ、見るだけみてごらんさい」

と幸子は立ちあがった。

「貴女、見つからないかしら」

「大丈夫、今までだって一度も人は登って来なかったわ。でもね、万一のことを考えて納屋の中ですることに決めてあるの」

美枝は足が慄えた。カツとなる胸を押さえ寺の裏側にあるうらぶれた納屋に足をふみ入れた。

窓のない納屋は昼なお暗く、くずれ落ちた板間から薄陽がさすだけであって、視野がきかず、それに手入れがないだけにカビくさいにおいが鼻を付く。

「あっ」

と美枝は固睡をのんだ。馴れた眼にくつきり二つの裸体が浮んでくる。あの本場所と同じような黒のまわしだけを付けてた和江と広子が立っていた。

先程までのやさしい眼差しは少しもなく、その瞳はきつと光っている。

美枝はその場に坐り込むように腰をおとした。動悸は益々高鳴りはく息が振えるのを抑えることが出来ない。

幸子は後向きになると、手早く服を脱ぎすて、同じような黒のまわしを股間にあてる。

和江は黙ってそれに近付き締め込みを手伝う様子である。

美枝は眼を閉じた。おそろしいような、そ

れでいて湧き出る興奮が甘味のようにも感じられるのである。

低いバタ、バタという音、それは四股を踏む音に違いない。眼を開いた美枝の面前には幸子と広子が相對して四股を踏んでいる。

片隅からは腕ぐみしたまま和江がこれに鋭い視線を向けている。

蹲踞のかまえ、腰をおとして次に仕切りに入る。両脚が開かれ落した腰の後側からはち切れるような幸子の臀部が美枝の眼の直線に浮ぶ。

「ヤァ」

という低い気合いとともに二つの女体がぶつかり合った。体格のまさっている幸子がグツと相手のまわしを引き付けたようであるが広子は顔面真赤にして左足を外掛けにかけ体を合わせた。

遊びではない。真剣な迫力が納屋全体にただよって激斗する。みるみるうちに滑らかな背中が湧き出す汗に光って、白い肌は紅潮する。

呼吸が荒らく激しく、腹部が波打っている様子が美枝の全身に雷光のように伝わってきた。

美枝自身もう自分が相撲をとっている錯覚

をおぼえたのである。

外掛けをはずした幸子は逆に足を飛ばしてひねるように横倒しに勝負を付けた。

広子が退るや否や、和江が幸子に飛び付いた。小がらの和江とは思ったものの見事に膨らんだ乳房と引きしまった筋肉の美しさに美枝は固睡をのんだ。それから和江―幸子、幸子―広子、広子―和江と入れ代わり立ち代り取組んだ。ものの三十分も過ぎたであろうか。

三人は汗と泥まみれになった身体をはらいもせずその場に腰を落して一と息付いたのである。

「ねえ、貴女、おやりなさい」

荒らい息使いのまま和江が命令的な口調で美枝に向っていった。

「そう、美枝さん新しい相手がほしい」

激突のさめやらぬ幸子も勧めにかかった。美枝はその場の空気に慣れていた。それに幸子を除いては体格においても決してひけをとらないことが勇気付けとなった。

特にあの和江という人、抱き付きたいようなそれでいて思い切りいため付けたいような衝動が湧く、そして進んで仲間入りしたい意欲が起ったものの、幸子から出された新しい

まわしをみた時、既に計画的にたくらんだことを考えると率直にはなれなかった。

しかし、渡されたまわしを手にしてみて、その感触がひややかに骨身にしみわたって、一時も早く腰に付けてみたいという大変な欲望にかりたてられたのである。

いわれるままに裸となり幸子と和江のなすままにまわしがめられた。

美枝はもっときつくしめ込まれることを願った。今まで味ったことのない異常な快感を感じとったからである。

「美枝さん、四股を踏むのよ力一杯」

と幸子にさそわれるまま四股らしいものを踏んでみると、素足から泥のにおいがしみわたる。生あたたかい風が皮膚にふれ緊張感の中に夢みるような心境を味ったのである。

「美枝さん、わたしと取組みましょう」

幸子がさそった。二人はそのまま仕切ることもなく四つに組み、そこを和江が

「さあ」

といって水入後の相撲のように背をたたいた。一瞬、美枝は力を入れた。幸子もぐっと腰を落して力を入れたことを感じる。

美枝は無我夢中でまわしを引き付けようと全力をそそいだ。同性とはいえじかに肌と肌

が振れ合うということははじめての経験であり、興奮の中からも心よい刺戟となって全身をふるわせた。

そこを幸子が腰を落しながらつりあげ円の書かれた外へつり出した。

「もう一度」

幸子の合図に今度は美枝も大胆に両股を開き取組んだ。美枝は力一杯つりあげた。幸子は足をバタつかせながら美枝の勝ちを譲った恰好である。

「ねえ、貴女、馴れたでしょう。今度は私がお相手本格的に仕切りからはじめましょう」と和江がいう。美枝も領いた。大体の様子もわかり力一杯相撲をとってみたいという欲望に変わっていた。相撲をとる幻想を抱いたこともないではなかったが、現実として裸身の自分に自から酔い、肌と肌のふれ合う感触、股間にくい入る刺戟が堪まらない喜びとして感じたのである。

相対して和江が大胆な四股を踏む、小がらながら大きなはち切れるような乳房が四股をふむ度びにブルブルとふるえている。

もう美枝には恥かしさとか、ためらいはない。彼女に習って大きく四股を踏む。

仕切りに入り和江の上向きの視線に眼を合

わせると、彼女の斗志を感じ取った。

幸子、広子が両脇から固唾をのんで凝視している。美枝は体重身長ともまさっている体に自信と斗志が湧くことを知った。

美枝は進んで突込んだ。ガチッと二つの女体がぶつかった瞬間、ジンと胸を打たれたいたさをおぼえ息がつまる。その時既に和江は双差しとなって内股をかけ「アッ」というま

もなく重ね餅に倒されていた。

美枝はその素早さに驚くというよりは背中一杯泥まみれとなり、上からは和江に押された乳房がいたく暫く茫然として立ち上ることができない。が次の瞬間、彼女の頭をおそったものは苦もなく倒された口惜しさ、自分よりずっと小がらな和江に敗れた腹立たしさが湧き起ったのである。

読者通信に寄せて

「深夜の独白」

堀 夏彦

喧ましいような秋の虫の声―午前二時。健やかな妻の寝いき。疲れ切った私なのだが、どうしても眠れない。今更高校生じみた台詞だが、やはり淋しい。心のどこかが空虚で底の知れない孤独の淵に引き入れられる。

私のこの孤独をこれから暇つぶしにたどってみたら、落付けるかも知れない――。私はやはり自分をノーマルな人間だとは思えない。少くとも、夜の私はたえずあの「妄執」のとりこになり、ありとあらゆる

狂想が跳梁する。妻も子もあり表面平和で健全な家庭の主人公である私とその偏執のために夜毎苦しむということ――、何か満たされないものがあるからだ。そう、確かに一種の欲求不満だ。

会社においては、敏腕家として自他共に許し、年齢的に異例の昇進をして得意の筈なのだ。部下達にもしたわれ、物わりのいい、親分はだの課長として畏敬されている私。――

昼間会社で仕事でことさら事務的に働か

「わかったわ、今度は負けない」

美枝はキツとなって唇をかんだ。

「その意気よ、力一杯かかってね」

美枝は全身に斗志をみなぎらせながら前みつを狙って突込んだ。

しかし、和江は息を殺して美枝の前みつを取っていた。さすが慣れた勘というか体勢を崩さず腰を引きながら大きく両股を開き防戦に入る。白い肌は真赤に染まり皮下脂肪がブルブルと震動するが、一步も後退しない。

美枝は呼吸を整え力一杯前みつを引き付けるとズルズルとまわしが腹上にのびた。体重に劣る和江はギリッギリと腰が浮く。

堪えかねたように再び和江は内股をかけてきたが大した威力はない。却ってその隙をみて美枝は懸命になって円の外へ突き出した。

美枝はへとへとに疲れた。しかし、その疲れは心よい疲れであった。

勝つという優越感、征服感というか肉体的感触とは異った喜び、かつて一度も味ったことのない晴ればれしい楽しさを知ったのである。

広子とも取組んだ。彼女にも負けることはなかった。大胆に投げつけた時の誇らしげな気持はたまらない魅力となって彼女自身の全身をおおうのである。

せている若い娘たち、時に甘えられて可愛いと思っても、親が子をあやす余裕をみせている私が、夜はまた一層妄想の領域を拡げていく。

若い新鮮な体を清らかな顔を、思いきり苦痛でゆがませ、夏彦というクリスマーマニヤの責めに泣いて許しを乞ういじらしい姿。しかし現実の私は、温和で行動的なそして磊落な課長さんでなければならぬ。やはり私の苦しみの最大の原因は、この人格の二重性にあるらしい。偽善者ぶっている訳ではないのだが、二重人格といわれても弁解できない。——そこからインテリじみた自責が生れ、自己嫌悪が私を苦しめるのだ。これが私の弱さなのだ。しかし、絶対この弱さを他人に見せてはならない。というところに私の矛盾があり、衝動が見える。十年以上の夫婦生活の中で妻にも、これだけは覗かれまいと必死に自分の殻の中に閉じこもってきた私。人は莫迦というかも知れない。しかし、どうしても私はこの性癖を、私を知っている人達に見られたくない。

戦中派というジェネレーションの悲哀か？

大分悲壮な話になってきたが、別に私は大して悲しくはないし、苦しみの中に自分だけの愉しさを味わっていることも本当な

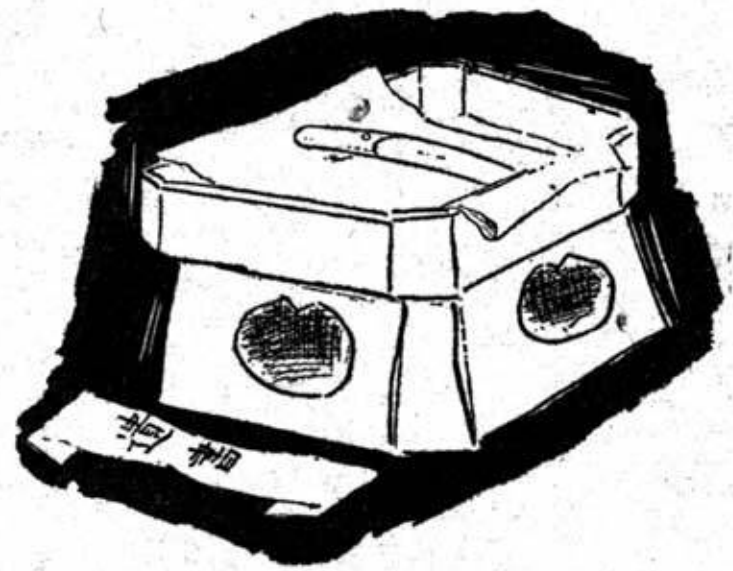
のだ。

ただ、この退屈な夜中に、このことについてだけは語り明かせる相手がない淋しさにいろいろ考えてみたという訳、枕元にはここ四カ月ばかりの奇クをひそかに書いて、読者サロンをよみ返している。勇敢な人が大勢いますな。同好のマニヤにプレイ？をさそいかけています。正直に言って羨ましいな。特に若い女性の中にも相当仲間がいるのは嬉しいね。この日本中のどこかで、この仲間たちは、太らかに楽しんでいと思うと心豊かだ。

子供の頃、そして青年時代「妄執」のような体験をかなり数多くもっている私だがこれからの人生で恐らくそんな女性にめぐり合うことはあるまい。なぜなら、積極的に私から働きかける気持がない——といったら嘘になるかも知れないが、色々な社会的な束縛が容易には私を自由にしてくれないからだ。

若い人は私のように姑息にならず、さらにドライに楽しむがいいと思う。お互に理解し合いさえすれば他人に迷惑のかかることではなく、自分の体力と相談してやればいい。おっともう午前四時。

いつのまにか年寄りの説教じみたことになってしまったのでやめよう。妻の目ざめるまでに奇クを書斎の奥へしまわねば——



女体切腹

殉^{じゅん} 難^{なん} 抄^{しょう}

中 康 弘 通

序

今を去る十あまり八とせのそのかみ、国歩の艱難を極めたるとき、一口の剣に身みずからを伏したる乙女ら少なからずといふ。その幾人かは先つ年田谷敬生ぬし記させ給ひて世に伝はれり。爾来また幾星霜を経とも、乙女らの純烈はいよいよ胸に迫る。ここにまた腰折れそくばくをものし、紙面を塞ぐことを許させ給へとこそ。

なほ借問せんと欲す、今日かの乙女らと年ごろを同じうする人人、以て如何となすや。いくそたび読み返しつつ思ひ深し
国に殉ふ乙女らのこと

云ひ送り語り伝へて後の世に
この純烈を知らしめざらめや

(1)

脇差を机上に屠腹の刻待てる
乙女のころ潔しま哀し
連合軍街に迫りしたまゆらに
脇差の鞘乙女は払ふ
声呑みてわれと刃を腹に刺し
乙女はいのち死にゆかむとす
腕弱く切り進まねば呻きつつ
あくまで乙女腹を割きゆく
臍ました心ゆくまで切りし
とどめ早く乞へり真乙女

敗戦と悟る忽ち屠腹せし
乙女三浦と姓のみ伝ふ

(2)

あねいもと声交しつつ腹切りぬ
満洲の野に陽の落つる
うら若き姉も妹も腹切りて
永遠に還らず口惜しいたまし
日の本の乙女と云へどこの娘らは
腹切る手ぶりいつ覚えけむ
戦に敗れし為とならむより
腹切るべしと覚悟しにけむ
今ははや腹切るほかに途なしと
乙女らはやおら肌ぬぎにけむ
後の世に例しなからむ姉いもと
腹十文字にかき切りて果つ

(3)

真乙女の肌見ゆるまで抗がへど
細き腕の術なかりけむ
姉上よ今ぞ死なめと悲叫せし
少女は力尽き果てにけむ
真乙女のいざやと叫び振りかぶる
刃は直ちわれと腹刺す
立ちながら腹切る姉におくれじと
妹もまた腹深く刺す
ひとすじに乙女ら腹を断つ悲叫

異郷の杜に銚しにけめ

(4)

うかららの命に代へて腹切れと
強ひられし乙女涙を流す

一としきり泣きゐし乙女顔挙げて
腹切らむと云ふ潔しはかなし

やがてして覚悟定まり真乙女は
腹切らむとぞ清々と云ふ

思ひ決め屠腹の場(には)に坐りしが
さすが乙女の刃は震ふ

幾たびか狂ひし手もと定まりて
乙女は腹に深く刃を立つ

腹まろく力こもると見ゆるとき
乙女の右手の刃ひらめく

呻きつつ臍の真したを切りしとき
乙女の血汐ふきやまずけり

強ひられて腹切る無念右手にこめ
わた手ぐりけむ十八乙女

(5)

天の原ふりさけ見れどはるかなり
雲いくへふるさと遠し行き疲れ

処女は腹を切らむと希ふ
望郷の思ひ切なく杜かげに

処女は腹をかき切りにけり
一とすじに腹切りしのち二の大刀は

鳩尾深し余りに深し

思ひ切り腹断ちゆけど女ゆゑ
十文字腹なしとげがたし

臍したへ切り下ぐる刃も半ばにて
処女は命死にゆきにけり

(6)

敗れたる国の行く末祈らむと
靖国の妻は腹切りにけり

うら若き人妻なれば紋服に
身を正しけりつつしみ深し

いさぎよく双肌脱ぎし若妻は
懐剣の鞘すがすがし

寛ろげしわれとわが腹いまし切る
若妻の瞳に映れるは何

息とどめ構えし刃したたかに
腹に刺しけり女ながらに

一と息に臍のま下をかき切りて
腕(かいな)は哀れ腹をまさぐる

敗戦の無念はここに極まると
手ぐりし腸(わた)を膝に流せり

思ふままわれとわが腹切りしのち
刃先は深く心の臓刺す

(7)

祖母(おほはは)に腹切る手ぶり習ひき
と 乙女は告ぐるはなじろみつ

すがやかに一と生終へゆく乙女ゆゑ

脱げば双肌珠の如しも
脇腹に刃ぞ深く立てにける

乙女は声を呑みて耐えゐき
ひとすじに臍の真下を割きたれば

乙女の血汐清く噴き出づ
たゆみなく腹をふかぶか切りしのち

乙女は乞へりご介錯をと
鬼神(おにがみ)も泣かむ乙女は潔きよ

(8)

国敗るすなはち屠腹せし少女
美雪の遺書をその友が寄す

日の本の女なりせば腹切りて
身を果つるよりすべなしと書く

家人(いへびと)の寝静まれるを聞きす
まし 乙女は独り腹切らむとす

父母のいますところと黄泉を見て
腹切る刃少女は執りき

亡き母のかたみの刃右手に持ち
腹なづるとき少女泣かじか

一とすじは浅かりにきと二文字に
腹切る乙女ためらひもなし

腹切りて少女は命果ててゐき
体(たい)まだぬくき夜の明けきはを

教師の記録

摩

耶

馨

第一章 教師の仮面

午後四時の下校を告げるベルが校内に鳴り響くと、先刻まで女子学生の喧騒な話声の充満した、広大な幾棟の二階建校舎も、次第に静寂になり、淡い落日の光線が、緑の芝生と調和的色彩の赤レンガ屋根を一段と美しく鮮かに浮びたさせる。

瀬戸内海沿岸の一都市に、四十数年の歴史を誇るS女学院は、私立ではあるが中等部と高等部を併設する市内随一のブルジョワ学校として、その特異性を發揮していた。

生徒の大部分は生活程度上層部に属する裕福な家庭の子女であり、比較的自由で派手な服装は、官、公立の女学生にとって憧憬的存在であり、羨望の的となっているのである。

事実、S女学院の生徒には、上流家庭という生活環境のしからしむる上品さと優美さを秘めた、いわゆるお嬢さんタイプが多く、教室の醸し出す雰囲気は、まさに百花咲き乱れる乙女の花園と形容しても、別に虚言ではないであろう。

緑川雅彦はS女学院の、生物学担当教師である。

彼の学歴は一風変わっていて、K大学の医学部に籍を置いたにもかかわらず、どうした心境の変化か三年程で中退、S大学の英文科聴講生として一年を費し、財産のあることから気ままな生活を過していたのを、S女学院長が講師という名目で招聘したのであるが、若き青年教師の出現は当然の事のように、女生徒の注目を集め、人気の焦点となったのである。秀麗という程の容貌ではないが、長身で面長な顔の澄んだ瞳は、異性を恍惚とさせる魅力を含み、無雑作な油気のない頭髮は額に前髪を垂らし、学生タイプの抜けきらぬ初

々しさが、生徒達に親密感を与えるのであった。

しかし、これはあくまでも彼の意識せるポーズに他ならないのであって、彼の内心には外面とは凡そ異った淫虐な血が流れていたのである。

人間には多少の差異こそあれ、誰しも二重人格性、すなわち表面と裏面は潜在し併合するものであるが、彼こそは三重、四重もの人格者であり、仮面を脱げば熱狂的なサディストなのである。彼のサディズムは、鞭打等による直接的な肉体的苦痛を与えたい、というのではなく、女性を侮蔑的に圧迫したり、厭がる目に遇わせようという、婦女汚辱の傾向の強い倒錯的サディズム、すなわち、不潔なもので汚してやろうという衝動とか、耐えられない程の羞恥感を与え、そうした時の、女性の屈辱感とか死ぬ程の羞恥溢れる態度表情という反応を観察することに、強烈な歓喜と満足感を覚えるので、そうした秘められたるサディズムを、教職にありながら、いや教師という立場を利用して公然と行って来たのである。

第二章 レントゲン室の愉しみ

彼は理科(生物)の他に衛生関係を担当していたが、この事は彼の性癖を公然化する最上の武器だったのである。

毎年一回、女学院では定期的な身体検査とレントゲン撮影を学校衛生法により施行するのであるが、レントゲン技師の資格ある彼は検査という名目にかくれて、処女の乳房を耽視する事ができるのであった。

医務室において惜気もなく露出された上半身の処女群像の中にあっても、彼は依然として教師の仮面を捨てないものであるが、上半身の脱衣を済ませ、順番を待つ間、処女の羞恥からシユミーズで胸部を覆い蔭しているものの、若き緑川先生の前に乳房をさらけ出さねばならないという羞恥が、赧らめた顔の表情のみならず、全身に溢れ、息をひそめるようにして両腕を乳房の前で交ささせている姿態に、彼は全くうっとりとしてしまうのであった。しかしそのうした心的変化は少しも面に出さず、いかに



も事務的な無関心さを粧い、「次の人」という合図と共に、オドオドとシユミーズを取って撮影機前に胸部をさらけ出す女生徒の一挙一投足にも細心なる神経と視覚を働かせ、眸の位置を正すために、必要以上に胸を張らせたり腕を広げさせたりして撮影するのであるが、中学一年から高等科三年までの全生徒の汚れなき乳房は、厭でも彼の目にさらされる

のである。

親にも見せた事のないであろう思春期の乳房、十三、四才から、十八、九才に亘る数百人の乳房は、容貌が一人一人異なる如く、ふくらみ具合、乳首の色、乳量の大きさ、デリケートな線、肌の色等々が全部異っており、上流家庭令嬢という先入観と、それにふさわしい顔が、余計彼の性癖を刺激するのである。いや正確に表現するなら、乳房そのものより若き男の教師に見られることを意識してオズオズと下着を脱ぐ処女の姿態に、一種の嗜虐感を味うのである。彼の愉しみは乳房だけに留まらなかった。それは、童顔の消え失せぬ、スベスベした白い肌と可憐な乳房とは凡そ不調和な、黒々とした腋毛である。

セーラ服の、純心さと清楚感を象徴せるその下の肉体は、そうした外見的な事象とは無関係に、成熟活動を進めているのである。

第三章 性教育

最近はこの学校でも性教育は教科の一つとして重要視され施行されるようになったが進取的なS女学院では他より早く性教育をとり上げ、そのカリキュラム作成は彼と数人の女教師（いずれも四十代の教師）とによって

行われ、各学年に準じた性教育を実施していた。

日本における月経初潮年令は、十五才が最も多く、次いで十四、十六の順というのが学者達の一一致した標準平均年令である。十五才というと中学二年生、事実、中学三年生においては全部初潮経験者なのである。そこで、中学一年の一学期には、月経の予備知識と月経帯製作が家庭科授業と協力してなされることとが、性教育カリキュラムに規定され、性教育指導は彼の学歴が買われて、若い男性教師にもかかわらず、指導する事になったのである。この事は彼にとって、願ってもない幸運であったのである。

月経の講義をする時、大部分の生徒は顔を赤らめ（平然として聴いている生徒は、發育不全の生徒で、全く月経が何であるかを知らない生徒である。中学一年でも、来潮のあった者は各級に三割程度はいるので、大部分の生徒は、多少の知識があり、高校一、二年の級において月経の説明をする時など、全生徒が真赤になって、顔も上げられないような状態を示すのである）未知に対する好奇心と嫌悪感を露骨に現わす生徒の、そうした表情を見ると、彼は殊更生硬な表現を用いるのであ

った。

家庭科の被服の授業をさいて、月経帯製作を行う女生徒の表情は、更に複雑ビミョウでサラシのT字帯を厭でも月に一度は、当てがわねばならない女の刑罰を思う時、彼は無邪気そうな生徒の顔と月経帯を比較し、いいよりのないサジスチックな快感に身ぶるいするのである。

高校二年の級に、彼は性教育調査資料という名目で、月経調査を行った事がある。

初潮年令、季節、持続日数、月経周期、身体的変化、月経を知った動機、教えられたのは何によるか等々の細目に亘り、無記名記入をさせたが、生徒は流石に口をきかず、記入上に関しても質問あるかの問に対して一人の質問者もなく、隣席の人にかくれるようにしながら、各人の秘密を記入して行く状態を、彼は内心微笑をもって眺めたのである。無記名とはいえ、調査用紙を集めるのは最後尾の生徒が後から順に前向けに集めてくるのであるから、組の順さえわかっていれば誰が記入したかすぐ判明するのである。その調査用紙は一括して委員会に提出せねばならないので彼はど苦勞にも二百数十枚に及ぶその調査事項を、余った別の用紙に写し、氏名を記入し

て自宅（下宿）に保存し、生徒の顔を浮かべながら、その貴重な資料を読み耽けるのであった。そのうち彼は一枚の用紙に視線が集中し離す事ができなかった。

西条美枝子 十七才四カ月 父会社重役

初潮年令 十四才二カ月 初潮季節 春

初潮の印象、恥づかしく暗い惨じめな気持ちになったが、それが女になったしるしだと思ふと、泣きたい中にもかすかな誇りがあつた。

初潮時の手当法、お母様に恐る恐るお話ししたら、用意してあつた月経帯を下さり処置して下さつた。

月経の知識をどこから得たか

お友達や、婦人雑誌で

月経周期

二度目の月経があつたのは、三カ月目位その年一年程は不規則、現在では28日

月経時の苦痛について

二日間程軽い苦痛、これは精神的なものかも知れない

月経と感情

月経前から月経中にかけて気がいらいる。女に生れた後悔の念強くなる。

他の生徒のも大同小異な記事なのに、なぜ

西条美枝子のにのみ心が奪われたのであろうか。彼女が美しかったからである。学院一といつてよいであろう。雪をあざむくばかりの肌とつぶらな瞳、ノールな鼻と——いや、彼女の容貌についての描写は止そう。（私はここで、文学的才能のないことを許していただかねばならない。なぜって、美枝子をそのまま完全に、私の筆で読者に説明する事が不可能であるから。諸者はここで、各人の好みに合つた容貌を想像してほしい。ただし、どこまでも可憐さの残っている美枝子のイメージを忘れないで）

あの、レントゲン検査の時、どの生徒より西条美枝子の身体は素晴らしいものであつたのを（それと、人一倍恥づかしがりのことも）彼は忘れないばかりか、彼女の如く美しい女性を思ふ存分汚辱してみたいという心が、彼女を一目見た時から萌芽していたのである。

可愛いくとりすました彼女も、人間である以上排泄行為は当然に行われるのである。そう思い、彼女のトイレにおける姿態とか、彼女の体内から排泄される不浄物を見たら、美しい彼女のものだけに、どんなに自分の気持は充たされる事であらうか、いや、自分の見ている前で、彼女に排泄行為をさせたら、彼

女は羞恥のあまり気絶するであらうか——等の妄想が潮の如く去来するのである。

第四章 月経帯（一）

学生時代

美枝子汚辱の願望が彼の心全部を捉えた素因は、必ずしも月経調査記事のせいばかりではなかった。既に中学生時代より彼は、強烈なる月経（月経帯）マニヤだったのである。

小学六年の時、彼は隣家の栄子の家へしばしば遊びに行っていた。栄子は当時、女学校の二年生であつた。

ある日の午後、例のように栄子を訪れた彼は、栄子が留守だったにもかかわらず上がりこみ、栄子の本棚から本を取り出して読んでいた。留守の時は、彼は一時間も二時間も栄子の部屋で本を読むのが習慣になつており、庭に面した栄子の部屋へは、彼の家の垣根を越せば目と鼻の間で、隣という親近さが彼のこうした行為を見逃し、そうした彼に栄子の母は、感心な雅ちゃんですと、といつてはお菓子をくれるのであつた。本棚の下には、二つの抽出しがあつた。彼はそれを開けたのである。手紙の類、アルバム、そうした中のブリキ製の美しい箱が彼の視線を捉えた。英語が書かれ、蓋には外国の女の顔が書かれて

ある。何んだらう、という好奇心が彼にその蓋を開けさせたのであったが、出て来たものはまだ一度も見たことのない品物であった。

三角形の頂点と頂点とを反対に合わせたような型の布の裏側には、薄いゴム膜が張られてあって、ボタンがついており、その他に、それよりはずっと小さいゴム張りの布が入っていたのである。彼がそれを広げた時、外から帰った栄子が入って来て、彼の両手に広げられたものをみるなり、「まあ、雅ちゃんたら、そんなもの出して、厭な子ね」真赤になりながらあわてて、それを取り返すと、夢中で片ずけてしまったのであるが、彼は栄子の驚きとあわてた状態に接し、判からぬながらも、秘密な物、という印象を受けたのである。そして、それが何であるか訊けないままに退去したのであるが、その箱だけは決して忘れなかった。それと似た箱を発見したのはそれから数日後、姉の机からである。しかしそれは栄子とは違った型、ズロースのようなもので、内股の部分に矢張りゴムの膜がついており、まるめられたガーゼと脱脂綿が入っていたのである。その時彼は反射的に、トイレの中にあつた血のにじんだ脱脂綿を想い出していた。脱脂綿と、ゴム膜つきのズロー

スとの関係。学校に行っても、その事ばかりが頭を占めていた。

姉は、机の抽出しにあつたズロースはほとんど着けていない。一体、どういう時着けるのであろうか。それから後、彼はフトした機会に婦人雑誌で、姉のズロースそっくりの絵の書かれた頁を見た。そしてゴムの部分には脱脂綿を当てることが図示され、宣伝文句には、跳んでもはねても絶対大丈夫、むれず汚れず、新案特許二重露出防止月経帯、女学生用メリヤスズロース型A号、B号、替ゴム云々、そして、半ズボンを着けた女の人が、軽快にテニスをしている絵が書かれてあつた。彼のこの時、姉の机の抽出しのズロースと、栄子の小箱の中味を、月経に結合させたのである。が、月経の何んであるかを知らない彼は、辞書を索いて月経の事を調べ、また婦人雑誌の附録等から知識を得たのである。

彼の月経に関する興味は、年と共に深くなつていった。中学生になつた彼は、自分と同年齢の、まだ断髪の子供らしい女の子の顔を見る度び、こんな可愛らしい顔をしていてもやはり月経があるのだろうか、そしてその時は、厭でも月経帯をしなければならぬのだろうか。トイレに行く時はどうするのか、歩

きにくくはないのだろうか、想像力を発展させるのである。

中学三年の夏、彼は栄子の妹を好きになつた。栄子はすでに女学校五年（旧制度の）今では彼と遊んでくれないからである。栄子の妹、秋子は彼の一級下、女学校二年である。彼は秋子が黒いズロースを着けているのをスカートの下から盗見みた時、今までは白いズロースなのに可笑しいと思った。そして、これは月経に関係のあることなのだと直感した。黒なら汚れやすすくないからである。

× × ×

彼の性癖は増々度を加えて行つた。高校時代、月経帯の広告や、薬局に行つて月経帯の箱を見ただけで、彼の心臓の鼓動は早くなるのである。雑誌、新聞の月経帯広告記事のコレクション。因みに、月経帯広告記事をあげてみよう。

アメリカでは、80%までメラニーズ生地 of 生理帯を使います。伸縮が自由でお肌に合ひ暑さムレがしないからです。それだけでなく、薄着でもソレと気付かない素晴らしいスタイルと美をつくります。日本でもほとんどの人が今までのものからこれに替えています。

バスに飛び乗って下さい。

粗相しません、飛んでも跳ねても、またいつでも平気です。月経帯から婦人衛生によいラッキーの生理帯に前進しています。初潮の方は是非！

「使う身になって研究しています。メイゾンバンドはあらゆる角度より検討、在来品の欠陥を改良したニュースタイルで、特に衛生と耐久の点に意を注いでいます。」

A号（普及型）純綿、極上キャラコ製、前後ボタン取外し自在、腰部は広巾ゴムを片側ボタン付けとしてあります。

B号（ズロース式）胴廻りピッタリするダブルゴム式、前開きボタン付、取外し自在。この外、シーズンバンド、サロンバンド、スミレバンド等、十指以上の月経帯広告記事をコレクションしている。もし、女性がこの記事を読んだら、どんな気持ちになるのだろうか。買いに行くのに恥づかしくないのか。

ある時等、薬局前の本屋に半日もいて、薬局に入る人が何をかうのか見守ったことさえあったが、その時は、不幸？にも月経帯を買った人はいなかったのである。

第五章 月経帯（二）

美枝子の汚辱

さて、月経調査から美枝子汚辱の願望を計

画した彼は、美枝子の月経日を待った。この事は、体操を休むから判るのである。

書き忘れたが、彼が医学部を中退したのはもし卒業して医者になった場合、女に対して不感症になる事を恐れたからである。毎日女の体を診察していたら、女に対する興味は消失し、彼の最大の快楽はなくなるであろうから。それはさて置き、彼は体操の出席表を調べた。月経で休む者には、欠席の×のかわりに、△印をする事になっている。美枝子は、三週間前に△印である。美枝子の月経調査から周期は判かる。あと一週間程で今度の月経をみるわけである。

その日、美枝子は心なしか元気がなく見えた。顔や咽喉部が腫れぼったいようである。二日後、彼は美枝子に、帰りに下宿に寄るように命じた。幾度も遊びに見えている美枝子は、彼のたくらむコンタンを知るよしもなく訪れたのである。コーヒーを喫みながら、取止めのない雑話の後、彼は座をはずした。その時、机の上に、月経調査の統計表を忘れなく出して置いたのである。別に中座する必要のない彼は、ドアを閉めると、足音をたて、途中からぬき足で再びドアのところにもどりカギ穴から部屋の中を覗いた。最初美枝子

は、そのままの姿勢をくずさないでいたが、何気なく机の上の紙に目をとめると、熱心に読み始めた頃合いを測り、彼はその場で足音をたてるとドアを開けた。瞬間美枝子は驚きあわてて元の位置に座ったが、月経調査表が彼女に与えた刺激を、彼は即座に知る事ができたのであるが知らぬ氣に、

「女と男と、どちらがよいと思う」こんな質問をした。美枝子は微笑を浮かべていたが、

「男がいいと思います」すかさず彼は、

「どうして？」美枝子の返答はなかった。

「どうしてだか当ててみようか、それはね」彼は美枝子の耳に口を近づけると、囁くように「男には月経がないから」

美枝子の顔はみるまに朱くなっていた。レントゲン室で上半身裸体になった時より以上である。無理もないであろう。彼女は月経中なのだから。

第六章 月経帯（三）

学校備品としての月経帯

学院では、初潮を突然みた生徒のためや、用意の忘れた生徒のために、一ダース程の月経帯は医務室に常備して置き、借出しを行っている。借りた生徒は、後で洗って返却すればよいのであった。

日曜日、日直だった彼は一日学校におらねばならなかった。その日は、二日続いた休日だったので、学校には彼の他に先生は誰もいなかった。

中学二年の枝川絹代は、日曜日であるのに学院でピアノの練習をしていた。秋に行われる文化祭のためにである。

彼は音楽室から流れるメロディーに耳を傾けながら調べものをしていた。美枝子汚辱から二週間程後のことである。突然ピアノが止んだ。枝川は帰ったのであろうと調べものに熱中していた彼は、フト職員室前の廊下に入

の影を見、席を立てて廊下を出ると、ピアノを弾いていた枝川が、蒼白な顔で、泣きたいのをこらえるようにして立っており、彼の姿をみると、「先生、私いや、死んでしまう」というなりしがみついていたのである。彼は一瞬ためらい、枝川の脚元を見て一切を了解した。初潮を見たのである。

「馬鹿だね、何んでもないじゃないか、衛生の時間に、お話聞いたらう、心配しなくてもいいよ、さあ、先生が手当をしてあげよう」肩に手を掛けると、後から押すようにして医務室に連れて行き念のためカギをかけた。

彼は早速戸棚から真新しい月経帯と一包みの脱脂綿を取りだすと、要領よく脱脂綿をちぎって月経帯のゴムの部分に当てた。

二日後、洗った月経帯を枝川から受取ると返却せず、下宿に持ち帰った彼はそれを広げた。ゴムの冷たい感触と奇妙な型。両側の布の部分に黒ずんだしみを見出した。ゴムの嗅いと妖しい連想……。彼は鏡の前でその月経帯を穿いてみた。そうした姿を見る事によるシビレルような快感。それ以後、彼は不意の月経で借りて行った月経帯が返却される度に自宅で広げ、プレイを楽しむのであった。

緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

大好評ノ注文殺到売切れ近し

臨時増刊 写真と絵画 文献 特集号

目下発売中 直接お申込を 定価一部五〇〇円 (送共) 略号 (文献)

◎サド、マゾ、フェチ、女斗美、女体切腹、女相撲、浣腸、とあらゆる趣向を網羅した本誌臨時増刊号の決定版。今後二度と再び集録出来ない特殊文献を掲載いたしました。売切れますと、補充がつかまへん故、今すぐ直接発行所まで御注文下さい。着金次第折り返えし急送いたします。

〔第一グラビヤ〕 (十六頁)
自己愛の女神を写す……………塚本鉄三、構成
「私の乳房を見て」……………長野 良子
露出癖の充足……………長野 良子
後手縛りのワンカット……………大塚 啓子
転ったエビ縛りの女体……………大塚 啓子
新井マリさんと共に……………由岐敏夫・構成

棒責め愉悦……………新井マリ子
ムチ打たれる肌……………新井マリ子
サテンの責衣緊縛……………東浦ひかる
顔なぶり、踏みつけ……………大塚 啓子
押しつぶし、足逆取り……………大塚 啓子
餅肌はくびれて……………東浦ひかる
柱縛り首繩……………梨花悠紀子
海老責二態……………梨花悠紀子
黒いアンネパンティ……………遠藤百合子
〔巻頭口絵〕 (オフセット八頁)
△絵物語△白ターパンの女……………四馬孝・画
第一図章△捕獲……………第五図章△美容△
第二図章△飼育命令……………第六図章△洗腸△
第三図章△調教……………第七図章△矯正△
第四図章△訓練……………第八図章△仕上げ△

〔第二オフセット〕

(八頁)

女体切腹、城主の姫君切腹……………四馬孝・画
女相撲、御前相撲……………雪崎京人提供
マゾ画、犬になった男の告白より……………
マゾ画、谷崎潤一郎「富美子の足」の幻想、
女相撲「海辺にて」グラマの対戦……………雪崎
女体切腹「侍女の奮戦」……………四馬孝・画

〔第二グラビヤ〕

(十六頁)

五月亜紀子さんの場合……………由岐敏夫・構成
軽い拒否と羞らい……………五月亜紀子
美しい諦観のポーズ……………五月亜紀子
恐怖と怨嗟のまなざし……………五月亜紀子
鼻責「鼻孔測定」……………大塚 啓子
緊縛俯瞰姿……………大塚 啓子
憧れの優美ポーズ……………長野 良子
両手吊りの構成……………新井マリ子
ズベ公天使(トカゲグループ)……………由岐 敏夫

1、「みんな剥いじまいな」
2、「その顔をめちやくちやにしてやる」
3、「それだけは止めておきなさい」
4、「トカゲ団の掟をよく覚えておきな」
投げ出した脚線美……………絹川 文代
悶悦ポーズ二題……………絹川 文代
嚴重な本縄掛け……………梨花悠紀子

〔写真版アルバム〕

(十六頁)

裸女斗争場面……………絹川・大塚
浣腸部屋の悦楽ムード……………大塚 啓子
浣腸器を握って……………大塚 啓子
縄にくびれた柔肌鑑賞……………大塚 啓子
女やくざ一本刀姿……………大塚 啓子
女ネズミ小僧次郎吉……………大塚 啓子

高手小手二ツ折り……………

松本アサ子

エビ縛り二種類……………松本アサ子
血紅使用女体切腹連続フォト……………大塚 啓子
サジスチン宮井美佐子の近影……………宮井美佐子
縛り過程の構成……………大塚 啓子
鼻責めシーンの点綴……………絹川 文代

〔本文・解説〕

(三十二頁)

新人撮影行、五月亜紀子さんの場合……………由岐、
絵物語「白ターバン」の女……………辻村 隆
新しいモデルを写す……………由岐 敏夫
(告白) 宮井美佐子の略歴……………宮井美佐子
(告白) モデルとしての私……………大塚 啓子
自己愛の女神、長野良子撮影記……………塚本 鉄三

〔第三グラビヤ〕

(十六頁)

台所のめしうど……………新井マリ子
飼育のヴァリエーション……………新井マリ子
椅子に呻めく……………新井マリ子
長襦袢と腰巻……………遠藤百合子
豊満への擦過……………遠藤百合子
美しい小鳩の緊縛……………長野 良子
ポリウム自慢絵模様……………長野 良子
床柱縛りに耐える表情……………大塚 啓子
煙草一服の鑑賞……………大塚 啓子
組上の鯉と料理の仕方……………五月亜紀子
二ツ折り縛り……………大塚 啓子
鼻料理と鼻掃除……………大塚 啓子
上からと横からと……………梨花悠紀子

〔第一オフセット写真〕

(十六頁)

神さまへの人身御供……………絹川 文代
腕と脚の双曲線……………梨花悠紀子
足首の縄を解く……………大塚 啓子

緊縛女体モザイク模様……………

愛川 悦子

光と影の表と裏……………梨花悠紀子
縄に狙われたポーズ……………梨花悠紀子
女相撲「四ツに組む」……………A氏提供
女相撲「吊り合い」……………A氏提供
爪切りと白足袋……………浜 千代子
高手小手腰縄……………梨花悠紀子
底園の塑像……………絹川 文代

〔第四グラビヤ〕

(十六頁)

女奴隷の飼育効果……………新井マリ子
ゴム衣着用中……………梨花悠紀子
バンド着用後手縛り……………東浦ひかる
荒縄さらしと折檻場……………梨花悠紀子
下着の散乱する中にて……………新井マリ子
用意周到なる馴致……………新井マリ子
白刃に狙われた柔肌……………大塚 啓子
浣腸器の恐怖と幻想……………梨花悠紀子
くさり、くさり、くさり……………長野 良子
団子鼻をいためる……………長野 良子

〔第二オフセット〕

(十六頁)

美しい乳房……………長野 良子
愛らしき羞らい……………長野 良子
仰角のいたずら……………長野 良子
顛倒した瞬間の表情……………大塚 啓子
森の中のニフ……………絹川 文代
緊迫の演技(斬られる女)……………愛川 悦子
ヘッドロックと首絞め……………春日・愛川
S Mの魅力プレイ……………三木・浜本
前手縛りと後手縛り……………梨花悠紀子
黒フンドシと白フンドシ……………大塚 啓子
M フォト陳列——長靴にもだゆ。鉄鎖と手枷
の下で。凌辱される男ドレイ。煙草とローソ
クで……………絹川 文代
愉悦ポーズ二景……………絹川 文代

代理部分護品一覽

○妊婦女体資料の部○

臨月腹ヌード	大手札二枚一組 略号「りく」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りく」	三〇〇円
臨月腹アップ	大手札二枚一組 略号「りと」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りと」	三〇〇円
臨月妊婦の全身	大手札二枚一組 略号「りせ」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りせ」	三〇〇円
臨月腹の側面	大手札三枚一組 略号「りそ」	四〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りそ」	四〇〇円
臨月腹の背面	大手札二枚一組 略号「りも」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りも」	三〇〇円
臨月垂れ腹	大手札三枚一組 略号「りみ」	四〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りみ」	四〇〇円
妊婦ヌード	大手札三枚一組 略号「やま」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「やま」	三〇〇円
妊婦しぼり	大手札三枚一組 略号「やむ」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「やむ」	三〇〇円
臨月妊婦三態	大手札三枚一組 略号「よむ」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「よむ」	三〇〇円
産み月のお腹	大手札三枚一組 略号「よま」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「よま」	三〇〇円
動物的な腹部	大手札三枚一組 略号「よま」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「よま」	三〇〇円

○女体緊縛資料の部○

安原さゆり	略号「よみ」	四〇〇円
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 略号「には」	四〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「には」	四〇〇円
妊娠八カ月の緊縛	大手札三枚一組 略号「にあ」	四〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にあ」	四〇〇円
妊娠五カ月の緊縛	大手札三枚一組 略号「にこ」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にこ」	三〇〇円
妊娠前裸縛り	大手札三枚一組 略号「まさ」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「まさ」	三〇〇円
妊娠初期の緊縛	大手札三枚一組 略号「ぬろ」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「ぬろ」	三〇〇円
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 略号「にふ」	四〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にふ」	四〇〇円
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 略号「にと」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にと」	三〇〇円
分娩後縛り	大手札三枚一組 略号「につ」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「につ」	三〇〇円
分娩後股間縛り	大手札三枚一組 略号「にて」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にて」	三〇〇円
全裸緊縛姿態	大手札四枚一組 略号「ゆり」	四〇〇円
遠藤百合子	大手札四枚一組 略号「ゆり」	四〇〇円
鼻をいたぶる	大手札三枚一組 略号「ゆは」	三〇〇円
遠藤百合子	大手札三枚一組 略号「ゆは」	三〇〇円

鼻の穴責め	大手札三枚一組 略号「なく」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「なく」	三〇〇円
鼻なぶり	大手札三枚一組 略号「ない」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「ない」	三〇〇円
鼻責めの陶酔	大手札三枚一組 略号「なは」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「なは」	三〇〇円
苦悶の裸身	大手札四枚一組 略号「くせ」	四〇〇円
関谷富佐子	大手札四枚一組 略号「くせ」	四〇〇円
裸身の晒し	大手札三枚一組 略号「わあ」	三〇〇円
関谷富佐子	大手札三枚一組 略号「わあ」	三〇〇円
全裸股間縛り	大手札四枚一組 略号「せら」	四〇〇円
関谷富佐子	大手札四枚一組 略号「せら」	四〇〇円
強烈エビ責め	大手札三枚一組 略号「えり」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「えり」	三〇〇円
蒲団に悶ゆ	大手札三枚一組 略号「なき」	三〇〇円
関谷富佐子	大手札三枚一組 略号「なき」	三〇〇円
悦虐の果て	大手札三枚一組 略号「なみ」	三〇〇円
関谷富佐子	大手札三枚一組 略号「なみ」	三〇〇円
椅子エビ責め	大手札三枚一組 略号「おき」	三〇〇円
東浦ひかる	大手札三枚一組 略号「おき」	三〇〇円
六尺縛り	大手札三枚一組 略号「ろは」	三〇〇円
東浦ひかる	大手札三枚一組 略号「ろは」	三〇〇円
弓吊り責め	大手札二枚一組 略号「つき」	二五〇円
梨花悠紀子	大手札二枚一組 略号「つき」	二五〇円

手足宙吊り	大手札三枚一組 略号「つた」	三〇〇円
梨花悠紀子	大手札三枚一組 略号「つた」	三〇〇円
オムツの股間縛り	大手札四枚一組 略号「むく」	四〇〇円
東浦ひかる	大手札四枚一組 略号「むく」	四〇〇円
強烈責め、被虐の果	大手札五枚一組 略号「りお」	五〇〇円
梨花悠紀子	大手札五枚一組 略号「りお」	五〇〇円
乳房いじめ	大手札二枚一組 略号「とお」	二五〇円
大塚 啓子	大手札二枚一組 略号「とお」	二五〇円
激痛ノ逆エビ責め	大手札四枚一組 略号「きえ」	四〇〇円
大塚 啓子	大手札四枚一組 略号「きえ」	四〇〇円
美貌の裸身に縄目	大手札三枚一組 略号「きん」	三〇〇円
絹川 文代	大手札三枚一組 略号「きん」	三〇〇円
腰元吊り責め	大手札二枚一組 略号「こり」	二五〇円
村井知可子	大手札二枚一組 略号「こり」	二五〇円
腰元間諜の拷問	大手札四枚一組 略号「こく」	四〇〇円
村井知可子	大手札四枚一組 略号「こく」	四〇〇円
強烈エビ縛り	大手札三枚一組 略号「もい」	三〇〇円
関谷富佐子	大手札三枚一組 略号「もい」	三〇〇円
乳房責めの苦悶	大手札二枚一組 略号「もろ」	二〇〇円
関谷富佐子	大手札二枚一組 略号「もろ」	二〇〇円
全裸ムチ打ち	大手札四枚一組 略号「もた」	四〇〇円
関谷富佐子	大手札四枚一組 略号「もた」	四〇〇円
強打に泣く裸身	大手札四枚一組 略号「むち」	四〇〇円
関谷富佐子	大手札四枚一組 略号「むち」	四〇〇円

狙われた和装の娘 大手札十二枚一組 略号「ねい」 愛川悦子 略号「ねい」	強烈エビ責め 大手札三枚一組 略号「えひ」 水本茂美 略号「えひ」	ゴム衣緊縛 大手札三枚一組 略号「みす」 水本茂美 略号「みす」	バンド開股 大手札三枚一組 略号「はこ」 東浦ひかる 略号「はこ」	バンド責め 大手札五枚一組 略号「はん」 東浦ひかる 略号「はん」	夫人の表情 大手札三枚一組 略号「せや」 関谷富佐子 略号「せや」	後手吊り足挙縛り 大手札五枚一組 略号「うら」 東浦ひかる 略号「うら」	二つ折りエビ責め 大手札五枚一組 略号「うり」 東浦ひかる 略号「うり」	足挙げ椅子責め 大手札五枚一組 略号「うる」 東浦ひかる 略号「うる」	吊り打ち 大手札三枚一組 略号「やり」 関谷富佐子 略号「やり」	股間縛法悦境 大手札三枚一組 略号「ぬこ」 絹川文代 略号「ぬこ」	踊り子緊縛 大手札三枚一組 略号「りこ」 絹川文代 略号「りこ」
責め衣 大手札三枚一組 略号「せめ」 大塚啓子 略号「せめ」	猪吊り 大手札三枚一組 略号「いの」 梨花悠紀子 略号「いの」	足挙開股責 大手札三枚一組 略号「あけ」 梨花悠紀子 略号「あけ」	緊縛女体撮影風景 大手札四枚一組 略号「むら」 大塚啓子 略号「むら」	○フエチ資料の部○	白晒六尺裋 大手札四枚一組 略号「しろ」 遠藤百合子 略号「しろ」	白晒六尺裋 大手札四枚一組 略号「くま」 遠藤百合子 略号「くま」	黒裋の女 大手札三枚一組 略号「くう」 遠藤百合子 略号「くう」	黒裋の女 大手札三枚一組 略号「すい」 遠藤百合子 略号「すい」	相撲裋を締め込む 大手札四枚一組 略号「ふい」 細川アヤ子 略号「ふい」	変形六尺裋 大手札三枚一組 略号「ふは」 細川アヤ子 略号「ふは」	六尺裋開股 大手札三枚一組 略号「ふは」 細川アヤ子 略号「ふは」
六尺フンドシ 大手札五枚一組 略号「ろい」 東浦ひかる 略号「ろい」	六尺裋の女性像 大手札四枚一組 略号「くろ」 関谷富佐子 略号「くろ」	レインコートの拘束 大手札四枚一組 略号「いろ」 大塚啓子 略号「いろ」	ゴムフエチ 大手札四枚一組 略号「こま」 梨花悠紀子 略号「こま」	バンドを脱ぐ女 大手札三枚一組 略号「ゆお」 遠藤百合子 略号「ゆお」	月経帯縛り 大手札三枚一組 略号「すま」 大塚啓子 略号「すま」	相撲裋着用 大手札十一枚一組 略号「とひ」 東浦ひかる 略号「とひ」	股に喰い込む黒フンドシ 大手札三枚一組 略号「とひ」 東浦ひかる 略号「とひ」	股を開いた黒フンドシ 大手札三枚一組 略号「はと」 東浦ひかる 略号「はと」	バンド晒し 大手札三枚一組 略号「はと」 東浦ひかる 略号「はと」	バンド足挙げ 大手札三枚一組 略号「はと」 東浦ひかる 略号「はと」	バンド見せ 大手札三枚一組 略号「はみ」 東浦ひかる 略号「はみ」
白フンドシ 大手札四枚一組 略号「ふん」 大塚啓子 略号「ふん」	黒フンドシ 大手札四枚一組 略号「くふ」 大塚啓子 略号「くふ」	ゴムぐるみ人形 大手札四枚一組 略号「こみ」 東浦ひかる 略号「こみ」	ゴム包みの束縛 大手札四枚一組 略号「こは」 東浦ひかる 略号「こは」	ゴムと女体アップ 大手札四枚一組 略号「こあ」 東浦ひかる 略号「こあ」	パリスバンド前開き 大手札三枚一組 略号「おい」 東浦ひかる 略号「おい」	パリスバンド縛り 大手札三枚一組 略号「おか」 東浦ひかる 略号「おか」	携帯用白バンド 大手札三枚一組 略号「おた」 東浦ひかる 略号「おた」	サカエ軽便型バンド 大手札三枚一組 略号「おし」 東浦ひかる 略号「おし」	パリスSSSバンド 大手札三枚一組 略号「おこ」 東浦ひかる 略号「おこ」	パピアバンド 大手札三枚一組 略号「おし」 東浦ひかる 略号「おし」	サカエバンド 大手札三枚一組 略号「おえ」 東浦ひかる 略号「おえ」

【本誌在庫旧号総目次】

昭和三十六年三月号

(定価一五〇円)

△巻頭口絵▽美と幻想の構図▽ビール瓶と洗面器▽長いゴム管と流腸器▽電気鋸を扱う男▽妖婦と可憐な娘▽ジャジャ馬令嬢の夢▽素晴しい荷物▽女の方が惨忍だ▽戦慄の触手か? ○拳銃を持つ女○マゾ画廊▽グラマー・ハイティーン▽お嬢さん師範代▽書生ッぽ人間馬▽継子いじめ○サド・マゾ絵画館○猟奇館の歓迎パーティ○少年受難シリーズ「某国憲兵の取調を受ける日本少年」

△色刷巻頭口絵▽芳汗採取用蒸し上げ袋(四馬孝画)

△口絵▽〇滝れい子「煙草責」画集▽長煙管▽葉巻▽巻煙草▽マドロス・パイプ○南村俊平傑作集▽

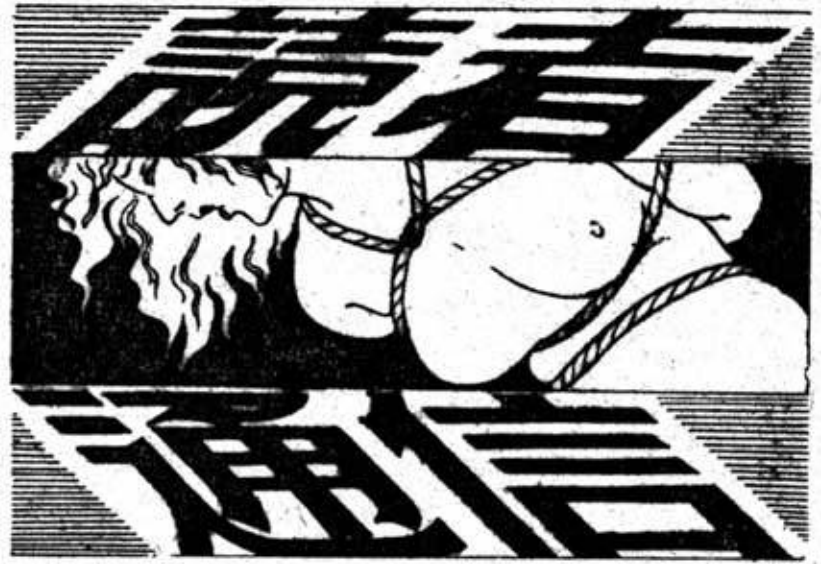
△目次裏▽川柳責風景七態(滝れい子・画)

蜂と蝶▽人喰猿▽鏡の間の脂汗
 △グラビヤ▽甘美と清潔の構成▽
 捧げられたもの(大塚啓子)▽シ
 ャッター以前(絹川文代)▽ある
 瞬間(四方清美)▽苦痛(四方清
 美)▽高貴の転落(梨花悠紀子)
 △地底の白鳥(梨花悠紀子)▽競
 売の対象(梨花悠紀子)▽美しき
 結末(梨花悠紀子)▽吊り準備完
 了(絹川文代)▽私を責めて下さ
 い(東浦ひかる)▽翻られる顔(前
 本抄子)○白刃「切腹擬態ポーズ」
 (大塚啓子) 妄想の映像(マゾフ
 オト)○期待(加茂良子)○チャ
 ンスの把握(絹川文代)○疼痛の
 階段(梨花悠紀子)○その表情で
 暫し待ち給え(梨花悠紀子)○変
 り身(杉江美津子)○放置されて
 (大塚啓子)

△本文▽新アブ街散歩「氾濫の中
 での孤高性」(市川国彦) わたしを
 責めて下さい(辻村隆) 古川裕子
 への手紙(吾妻新) 麻生保氏の生
 活と意見(麻生保) 公開通信「サ
 ド女性」の弁(秋葉マリ) 戦国無残
 記(塔婆十郎) 女形時代の想い出
 (阪東秀美) 同性を押え込んで(三
 隅千恵子) 新稿、ある夢想家の手
 帖から(沼正三) 私の意見「正常
 と異常」(赤松美夫) 続・夢三夜
 (牧高志) グンタイ・はだか・ふ
 んどし(内田武男) バンド・マニ
 ヤのために(片桐唯夫) 宇宙のど
 こかで(佐治麻造) 体験レポート「私
 の切腹プレイのすべて」(山田久
 仁子) 狩猟者(佐渡槐) 奇譚三十
 九夜物語(辻村隆) クリスマスマ
 ニヤの日記から(北沢操) 女囚哀
 歎(山下昇) 蒼い廃墟「ユニオン
 家具会社」(氷見竜也) ママと竜
 太郎と私(柴崎黎子) マゾヒズム
 天国(田沼醜男) 悪魔の日(黒岩
 鉄矢) 女性化志望者の呟き(古井
 直也) 追想「伊藤晴雨」その生涯
 と作品(大塚清夫)

△奇クサロン▽伊藤晴雨氏を偲
 ぶ○非(ニセ) 風流夢譚○異境に
 ありて○「日本愛媛会」結成提案
 について○灸責愉悦○人生は悪魔
 的である○少年受難シリーズ「御
 小姓仕置所」○見世物小屋の感傷
 ○女囚と少年囚○今日の神様は生
 神様○女体謎謎集○悦虐コント
 「可愛い若奥様よ幸に」○被虐
 少年時代の郷愁○「読者通信」に
 現れた読者の性向分類○流腸憧憬
 ○アブチックポエム
 昭和三十六年六月号
 (定価一五〇円)
 △巻頭色刷口絵▽美女力士の激突
 (雪崎京人・提供)
 △目次裏▽川柳当世風俗選(佐保
 忍・作、滝れい子・画)
 △口絵▽四馬孝貴画集▽一本足
 の案山子▽硝子製流腸器▽水槽の
 生物▽不気味な毒虫▽新妻入浴○
 マゾヒスチック画廊(滝れい子・
 画)▽従姉と中学生(馬乗り跨が
 り)○切腹画「従軍看護婦の最期
 (滝れい子・画)
 △グラビヤ・フォト▽艶容と清
 美の造形▽諦観(大塚啓子)▽影
 法師(東浦ひかる)▽装飾(絹川
 文代)▽流腸器の用途(四方清美)
 △猪吊り(梨花悠紀子)▽黒髪乱舞
 (大塚啓子)▽高手小手(梨花悠
 紀子)▽床にうごめく(大塚啓子)
 △清と美(梨花悠紀子)▽白く輝
 くもの(東浦ひかる)▽光と影(絹
 川文代)▽悶え(前本抄子)○首
 縄連続ポーズ▽婉姿嬌々(梨花悠
 紀子)○マゾフオト「妄想の昇華」
 ○女体切腹擬態ポーズ「屠腹」(大
 塚啓子)○滑車吊り(梨花悠紀子)
 ○目下飼育中(東浦ひかる)
 △色頁絵物語▽「サドメ随行記」
 (楯啓・作、杉原虹児・画)
 △色頁▽「緊縛フォト撮影の実際」
 (塚本鉄三)
 △奇クサロン▽同好者会合の提
 唱○マゾ短歌「女王様のうたえ
 る」○告白「毛糸の誘惑」○真昼
 の幻想○戯れに歌える○奴隷密売

団○女性化した男性の肉体○映画
 に現れた男性責シーン○文芸作品
 に於ける「切腹」の描写について
 ○サドコント「羽衣の天女」○女
 のアイディア「奇妙な磔縛り」○流
 腸と尻打ち○或る女装ポーズから
 ○少年受難シリーズ「烙印」馬化
 狂通信○白いイヤリングに黒い猿
 轡○襦袢フェチ通信○トクホン利
 用の猿轡○ハイティーンの陳列○
 私の自縛写真
 △本文▽奇ク随想(中谷正夫) 奇
 態体験小説「正」(正宗五郎) 白
 い山道(栗瀬長) 女装遍歴(伊佐
 正幸) 男性緊縛模様(梶孫一) 奇
 譚三十九夜物語(辻村隆) ファン
 タジヤ・マゾヒスティカ(山本節
 夫) 狩猟者(佐渡槐) 我が憧れる
 もの(藤森一成) 私は犬のように
 歩く(とやまかつひこ) 白足袋の
 こと(木ノ下明美) ある夢想家の
 手帖から(沼正三) 美少年緊縛の
 夢「畏」(佐渡健児) たそがれ(瀬
 川良三) マゾヒズム天国(田沼醜
 男) 特製家具NO.303(氷見竜
 也) 宇宙のどこかで(佐治麻造) 切
 腹についての考察(折伏下男) 表情
 と動き(宮口孝夫) 臍窩清掃論(須
 藤律夫) 小間使いのうた(近藤一)
 ハイキング残酷記(水田真紀子)
 △在庫有りお申込を乞う▽



私は今年一月号より奇譚クラブを愛読しております。私は町より一キロばかり離れた所で農業兼養鶏を営んでおる二十八才の男性です。もちろん妻はおります。昼間は家業に追われております。夜食がすみ、フロに入りや々と自分の時間になるのが九時であります。それから十時までの一時間。毎日読書をするの一番の楽しみにしております。貴誌も五月号迄は町の書店で販売していましたが、

どうした事かその後書店に出ません。その中、家業がいそがしくなり、書店へ買いにゆく暇もなくなってしまうました。五月号まで今日では又読みなおしております。又、フォートの分譲品に興味を持つようになりましてので、代理部分譲品目録を御送り下さい。早速注文致します。(岡山八馬淵進)

伊東恵子様、38年12月号読者通信で貴女様の通信文を拝見して感激し、早速通信した次第です。私は数年前より奇クの愛読者です。最近自分でも是非真剣なプレーをしてみたいと念願しておりますが、経験がなく又相手になって下さるM女性のさかし様もないので、困っております。貴女様の御希望に、そして私の希望にピッタリ合うのではないかと思います。是非一度お目にかかって話合ってみたいと思っております。私は神戸の或る有名会社に勤めるサラリーマン(30才)です。まじめな気持と二人だけの秘密にすることだけは絶対に自信があります。御連絡頂けますれば車も持っておりますから、どこへでも伺います。連絡先は編集部へお問合せ下さい。

わせ下さい。神様が私達を逢せて下さることを、そしてたのしい真剣なプレーが出来ます事を祈ります。(神戸市八中谷善行)

貴社益々御隆盛の事と存じます。陳者、貴誌を拝読致しましてから、はや十数年になります。創刊時よりの愛読者の一人でした。この間社名も変りましたが、今に至るまで、延々と灯を燃やしつづけてきた努力には敬意を表する次第です。最近何かと世相もうるさくなってきましたが、幸い私の購入している書店では、今後共取扱いますとの事で安心して居るわけですが、正直な話、ここ数年は本誌の往年の覇気がみられません。勿論公刊誌の性質上、時代の流れには逆らえませんが、それにしても物足りなさを人一倍感じる次第です。妻の相手もノーマル故にピンとこず、同好の志もおらずというところ。最近雄山閣の「拷問刑罰史」購読しましたが、キリシタン関係のこの種の文献を探しています。何かよい本がありましたら、お知らせ下さい。幸いす。貴誌は以前にやはり予約者に「KK通信」を本誌共々送っていただきましたが、今もそれを一号よ

り持っています。最近も発行されている由、出来れば最近のを、あただけで結構ですから、わけて戴ければ幸いです。甚だ虫のよい願いで恐縮ですが如何でしょうか。私は三十三才の男子で高校生の時からSです。岡山にも同好の方がいられましたなら、連絡して下さい。さすればうれしいのですが。ファン集いとか、催でもあれば、京、大阪へでも参りますから、そのような時は、お知らせ願えば幸いです。勝手なことばかり書きましたが、今後共よろしくお願い致します。乱筆にて悪しからずお許し下さい。(岡山市八桐原純一)

編集部のみなさん、お元気ですか。先月書きました通信文は、あまりにも乱雑であった為、面白半分と誤解されたものと思います。しかし、あれは私の真の願いですから、機会がありましたら載せて下さい。今月は十一月号の感想をいろいろと、書かせていただきます。初めにグラビヤからですが、大塚啓子さんの一人舞台の感がありました。「荒縄の1」は髪を切った大塚さんの表情が非常に新鮮で十一月最上のものでしょう。少し欲をいえば土間の方がよかった

でしょう。それに禪よりもパンティの方が……。『片足吊り』はおいしい作品です。絹川さんは歯をみせない方がよいと思います。私を魅了するあの独特の表情をして、片足を吊られて正面を向いていてほしかった。遠藤百合子さんは、大塚さんに劣らぬ身体をしておられます。第二の大塚さんとして教育されるよう次作を期待します。「屈従と」はあまりにもマンネリ化です。口絵では「このあと」がよかったと思います。ほんとに今月の大塚さんは素晴らしい。演技力が非常に充実しましたね。「ゴム」には、ただの苦痛の表情だけでなく、ゴムの酔っているようです。梨花さんの「海老縛り」は下段の足を開けた方がよいですね。東浦さんをあれだけしか縛らないでローソクを肩にのせているだけなんてさびしい気持がします。東浦さんだったら、椅子の上に背中を下にして逆エビに手足を椅子の脚に縛りつけお臍、乳房にローソク（火のついた）を立てるくらいのグラビヤ写真が出来るように望んでいます。それから、外人女性を日本調に縄で縛ったら面白く思えます。「花と蛇」面白く読ませていただきます。静子夫人を梨花さん

んに、京子を絹川文代さんにやつてもらって、二人共演させてはいかがですか。（兵庫県津名郡八沼洋一▽）

初めてお便り差し上げます。益々、内容の充実してまいります奇譚クラブに人知れぬ喜びと、楽しみを愛します、二十二歳の小生です。貴誌のサド、マゾ的な内容、又他のプレイ的内容には小生の経験を豊にしてくれます。そのおかげでプレイに対する、アイデアが楽しみの中で数多く浮び上って来ますが、筆弱の小生には、なかなか思う様に書けません。ナメクジ競技とか、奴隷大会とか、枷大会の発表、さらに演出大会、新サドマゾ（肉体精神責め、男女、一対三の対抗演技会）的な数々のアイデアが浮び上って来ます。しかし、プレイ内容において、小生は血を見る様な残酷なプレイよりも実感が湧かないかも知れませんが人工的に血を流す様なプレイが小生のプレイ構成です。言い換えれば、プレイ中は畜生になってもプレイ後は、女体としての又男体としての美しさ、優雅さになるのが全プレイの正統行動の様に思われます。この様な全てのプレイをま

とめて、総合演出プレイを、小生は研究して見たいと思っております。小生、奇譚クラブを愛読してから……興味自身（本位）から、自分の心の底からわいて来る、本心の様なものが小生を引き寄せ、あさはかな研究ですが、やっております。それでもし、研究なさっている。先輩諸君の方や、奇巧の内容を興味深く見ている、異性の方々、いっしょうけんめい文章の練習をしますから、文通や、交歓、プレイを研究しませんか、又交際が出来れば、どんなに倅でしょう。又、東京都内でこの様なグループがあれば互いの社会的立場や秘密が絶対に厳守される様であれば真面目な小生は研究してみたいと思っております。では、皆さんのたよりを待っております。（都内／＼高山生▽）

山辺まゆみ様十二月号で貴女様の「続・風の町から」を拝読し強く感動致しました。私は貴女様を女王様として私をいじめていただきたく思いペンを取りましたが、私は二十二才ですが内気で何んだか恐いようでもあります、無限に広がる欲望が何んの制限もなしにかつと燃えて来たのです。私は

女性の下着、特に、パンティに非常に興味があります。自分では（パンティーマニヤ）と少し（マゾ）の自覚を持っています。学生時代、アパートの裏口にある洗たく場からパンティを失敬した。盗む事は悪いのですが、私の自尊心はその時だけ投げつけてしまった。まさか「汚れたパンティを下さい」なんて言えるでしょうか？まして私は女性には内気で男友達と陽気になるのですが、まゆみ女王様、私を奴隷にして下さい。命令には一切したがいます。私はいつもこんな空想をしています。（この間私は素晴らしい体験した）まゆみ女王様に「バカ、なめるのよ女王の足の指の間をお前の舌でそうじしろ」とか「馬におなり」とか、つぶれた罰に顔の上にヒップ（パンティ）だった）で鼻と口とが、さるぐつわ。そして汚れたパンティを私の口の中に押し込むこと十分、唾液でグシャグシャになった私を見て「水が飲みたいのね……」「ごほうびに女王様のお水を飲ませてあげるワ、フッフ……」私は初めて夢からさめてしまった。本当に残念だが……空想に耽ってひたすら実現しよう

と……。このような盲目的に書きましたが一日だけでも実際に奉仕できれば幸いです。私も会社勤めをしている身、又両親といっしょに住んでいます。もちろん秘密は守りお互いのプライバシーは厳守致します。勝手ながら御返事は誌上にて通信下さい。自分というのは変ですが私は不謹慎ではないと確信いたしております。ではこの空想が実現して「どんな味」の答えがイエスである事を……。 (東京八赤木一)

○ 新年号の女斗彦様、前川様の通信、それから他二三の同好の方々の通信拝見いたしました。同好の方々が増えてくるのが毎号の通信欄をみる楽しみです。前川様の通信によりますと、新作を投稿された由、誌上に出る日を楽しみにしています。お便りによれば、血みどろの裸女の屍をあしらってあるとのこと。もちろんふんどし一つのものでしょうね。そうであれば最高の贈りものとなりましょう。前作は前川様御自身でグロ味タップリと卑下しておられますが、どうしてどうしてマニアにとっては、全くすばらしいものでした。雪崎氏の女相撲図絵で毎号毎号楽しみにし

ています。一度、日本髪の女のそれをお願いしたく思っています。これは私のみならず女斗彦様とて同じ望みでしょう。十月号の女斗彦様の「美女血斗阿修羅」のイメージも嬉しいものです。東西を代表する美女のふんどし一つの素っ裸での果し合いは何度考えても素晴らしい無惨美、惨酷美、鮮血美を醸し出して余りあります。是非このイメージの絵画化を切望します。女斗彦氏の切望される「大奥裸女血斗図絵」も是非実現して欲しいものです。代理部分譲品だった「おく5」の如きものでなく、ふんどし一つの裸女達の、死屍累々、屍山血河の修羅場の烏かん図の如きものを望んでいます。新年号の森田様の「斬られる女と腰巻」は中屋敷様の「女が斬られる時」と並んで、楽しいよみものです。着衣の女が斬られる生から死かへの瞬間の美は私とても同様に美しいものと思っています。裾を乱して赤い腰巻をちらつかせ、又は、はでに乱して果てる女の図は又、結構な無惨美です。これをふんどし一つの女の場合にとってみても同様です。赤いふんどし一本の裸の乙女が血しぶきと共にのけぞり、地上でもだえて、ふんどし

裸女血紅切腹

大寫し連続フォト

大手札印画紙ネガ全面焼付
連続 五枚一組 五〇〇円
大塚啓子 略号(おお)

股に喰い込むばかりに、きつくりりと締め込んだフンドシ一本の脛下を刃先だけを出して白紙で巻いた短刀でぶすりと突き刺し、真一文字にじりしりと切りさいてゆく有様を血紅を用いて迫真的描写。乳房から下、太股から上のアップによって、女体切腹の妙味を最大限に發揮。切腹マニアの指導による連続五枚の秘蔵品。

女体切腹血紅使用

苦悶表情悦楽篇

大手札印画紙ネガ全面焼付
五枚一組 五〇〇円
大塚啓子 略号(くえ)

最近益々悦楽の表情の豊かさを見せはじめた大塚嬢が、その豊満なヘソ下を思うままに深々と切りさばき、溢れる血汐を飛び散らせ、凄惨きわまりない切腹ポーズを演じ、苦悶に美しくゆがむ顔面の表情と、痺れるように疼れんする全身肢体の真に迫る表情とをハイスピードシャッターによって刻明に捕捉しました。数多く撮影した中から、特に素晴らしいものばかり

りを選んで提供いたします。この肢体と顔面の表情によって皆様の切腹熱は一段と高まるでしょう。

ナルシスの女王

裸身切腹擬態写真

大手札印画紙焼付
五枚一組 五〇〇円
長野良子 略号(なせ)

自分の裸体のすみずみまでを誇示したい長野良子が、大胆なポーズで下腹に刃を擬して一本の白刃に托して彼女得意の自己愛の表現をカメラの前にて演じた一篇。

凄んだ女賊

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(へに)

ドスを逆手に握った女賊が相手をおどすために、ふりかざし、ふり上げ、脅迫する場面を、女の腹巻フンドシ類かぶりの女賊スタイル・マニアの方々のために企画した。白鞘の九寸五分使用。

バンド・ゴム見せ

大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号(はみ)

前当てをはずして替ゴムをあらわに晒して恥しげに月経帯を着用したところ、バンドの種類を変え替ゴムのタッチをいきいきと写真化して手にとる如く目前にお見せするバンドフォトの総合版。

をしめこんだ内股もあらわな大の字なりに、又、一転して豊艶な臀部の双丘きりとわってしめこまれた背面をみせて、その尻をピクつかせ乍ら息絶える時の姿を想像して胸をときめかせています。女斗彦様、前川様、その他同好諸兄弟の通信を待つことや切。(室井英山)

寒気厳しき折から貴誌の御健在心よりお喜び申し上げます。先の悪書追放運動に、あるいはと、きぐの念を抱いていました。が今後も

続刊の由、何よりと存じます。創刊以来十余年、過去幾たびか苦難を克服され、確固たる信念をもって奇ク誌を発行されて来られた編集部の方々ゆえまさかとは思いますが、一まつ不安をぬぐい去ることができませんでした。が、一月号を手にした時は歓喜に胸が震えました。この感激はおそらく生涯忘れ得ないでしょう。そもそもほかの低俗誌はいざ知らず奇ク誌が指定されたのはいささか的是の感がいたします。奇ク誌は赤裸々な人間の真実を追究する文献誌

であり、そこには美をすら感じさせ我々は奇クの愛読者たることに誇を持つてゐるのです。しかし世論は無視できません。今後共くれも自重されて我々の夢を満す奇クを永遠に続けて下さいませ。切にお願い申し上げます。さて一月号読者通信にて原田順子様より私の拙作「重子と昭子のレスリング」に対しご批評いただきました。汗顔の至りに存じます。全く表現力の至らない私ですが今後共私なりにせいといっぱい書いてみる所存です。ご指導ごべんたつのほ

どお願い申し上げます、マニアの皆様へのごあいさつに代えさせていただきます。時節がらご自愛のほどお祈り申し上げます。(熊本八芦浦素舞夫)

「十三人」今回も採用になり感謝しております。「カポー篇」が果して没をまぬがれるかまだわかりませんが、内容のメチャメチャなことに読者の皆様もあきれておられるでしょう。「抵抗篇」をも加え事実はこの何分の一にすぎぬ

新版A組五十集

大手札印画紙(9×13)焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一、七〇〇円
三十組三十枚	二、五〇〇円
四十組四十枚	三、二〇〇円
五十組五十枚	四、〇〇〇円

A 6	全裸手吊りムチ打	(遠藤)
A 7	豊満乳房いじめ	(遠藤)
A 8	乳房責め股間縛り	(遠藤)
A 9	鼻責鼻梁いたぶり	(遠藤)
A 10	全裸後手高小手	(遠藤)
A 11	膨隆臀部さらし	(長野)
A 12	全裸正面強烈縛り	(長野)
A 13	うねる緊縛裸身	(長野)
A 14	色禪の開股しぼり	(長野)
A 15	正面縛蛙股ひらき	(長野)
A 16	裸自慢縛りヌード	(長野)
A 17	正面アグラしぼり	(長野)
A 18	正面大の字開股縛	(長野)
A 19	遅ましき裸しぼり	(長野)
A 20	荒縄縛豆絞り猿轡	(大塚)

A 21	両手前縛り髪首絞	(大塚)
A 22	両手吊り股間吊り	(桜井)
A 23	両手膝下しぼり	(関谷)
A 24	疼れんする裸身像	(関谷)
A 25	両股縄掛け開股縛	(大塚)
A 26	正面裸身強烈本縄	(梨花)
A 27	乳房晒し肉体自慢	(長野)
A 28	責衣にはみ出る肌	(東浦)
A 29	投げ出した全裸縛	(長野)
A 30	捕われの全裸緊縛	(梨花)
A 31	羞らいの両股縛り	(大塚)
A 32	猿轡乳房いたぶり	(遠藤)
A 33	荒縄全身縛り豆絞	(大塚)
A 34	盛り上る乳房縄目	(長野)
A 35	亀甲本縄鼻いじめ	(大塚)

A 36	ムチ打悶えポーズ	(関谷)
A 37	椅子またぎ汚辱責	(東浦)
A 38	縦縄股間縛り正面	(関谷)
A 39	ゴム猿ぐつわ全身	(大塚)
A 40	くさり乳房責め	(長野)
A 41	強制片足挙げ責め	(大塚)
A 42	正面乳房くびり縛	(関谷)
A 43	鴨居正面ハリツケ	(梨花)
A 44	手吊りパンティ落	(絹川)
A 45	白バンド後手吊り	(東浦)
A 46	豆絞り高小手呻	(絹川)
A 47	裸縛り鼻いじめ	(梨花)
A 48	ガンジガラメ立縛	(愛川)
A 49	亀甲本縄股間縛り	(絹川)
A 50	立木縛竹棒責め	(桜井)

とはいふものの、すべてが空想ではありません。大きな町の大量惨殺なら名士たちが訪れ、その模様を知らせておりますが、私の様なしがないセールスマンでもなければ通らぬ小さな町には、それ以上の惨殺がしばしばみられました。海外勤務のうちにあつめた資料には想像を絶する事実もかなりあります。独軍の婦人将校が一人射殺されたところ、その町の女性十人が絞首刑になり、そのなかに臨月間近の妊婦や、十七才の少女もあつた写真を見たことがあります。又軍用列車を止めようと勇敢に線路の上に横たわつた六人の女性はそのまま通過した列車のために無惨にもバラバラになり脱線はさせられたものの、ことごとく首をもち去られた話。拷問にかけられ、腹をたち割られて氷をつめこまれた女性。銃殺になるべきところ、あまりにも美しい皮膚だといふので絞首刑に変更され、その皮膚ははぎとられて本のカバーやスタンドの笠になった話。そして生首のアルコール漬。さては剥製にするなど意外なところに同好者が居たものですが、実際行動に移したのは感心できません。終戦となれば、今度はフランス側に同好者があらわ

れ、カポー達に對する仕うちには、絞首刑が最も幸運だったというさわざ。同胞を苦しめた罪は許せぬというものの、心ならずも敵の将校に身をまかせた女性まで復しゅうを加えたのでした。戦前清純スターとして有名だったある女優の如き、従がわなければ町を焼きはらうといわれ、將軍の愛人となつて町を救つたのですが、彼女に對し世界一の文化人を自称するフランスは感謝するどころか、全身の毛をそりおとし丸坊主として追放に処し、ために彼女は発狂して精神病院で死んだとも又一説によれば乳房をそがれて殺されたとも伝えられます。ドイツ軍の女性に對しても、就職したばかりの二十才に満たぬ乙女を広場の真中で衆人の冷笑下に絞首したり、そうかと思えば前記の皮剥ぎ女性を釈放してみたり、要するにメチャクチャだったわけですね。いくら自分の満足が得られるからといっても、このくりかえしはごめんです。さて私の作品ですが、例の十三人に日本女性三人が加つての死闘トナメント、さらに兩軍一〇〇人いふみだれての大決戦の二作が用意されています。斬首篇の八人の決闘はほんの小手しらべだったので

すが、これらが女斗彦様その他の方々のお氣に入られれば幸いです。美女たちのユニホームは私はビキニの海水着を最も好むのですが、全裸なりふんどし姿なり、それぞれ適当に想像されて下さい。終にのぞみまして本誌が迫害にめげず続刊されることを望みます。(郡山にて八佐出須登)

○ 嗚呼一月号の「瞳孔検査」何んという素晴らしさ。我々顔面奔弄愛好者の魂をえぐる様な構成に思わず五感の震える思いが致しました。其他、鼻責めの記録も御添え下さつて、誠に有難く拝見。いつもながらの慈意感謝致して居ります。余りのうれしさに、御役に立つかどうか解りませんが拙写一葉御参考になれば幸甚に存じます。但し御掲載は御用捨(こんなまずいの役に立つかいですって……御尤も)瞳孔、眼瞼、検査、歯牙点診も、鼻孔検診に劣らず、Sの法悦境につき、何卒今後御手許の麗人モデル嬢を弄顔組上にいけにえとされん事を御願ひ致します。又愛読者諸兄の内同好の方々が御座いましたら誌上で御話したいと思ひます。

(墨堤△Y・K生△)

○ 今年もあと数日貴誌も早い一年をすごされた事と思ひます。今度の不良雑誌店頭販売中止について貴誌がその枠内にはいり一読者としてお願い申し上げます。良し悪しは読者の見方感じ方に有ると思ひます。店頭販売中止後の本誌購入に對して非常に不便を感じておる方が多いと思ひます。小生は現在書店にて購入致しておりますから不便は感じませんが、貴誌ファンとなる新しい方の為に一工夫あらん事を節にお願い致します。今後の結果は小生が申し上げるまでもなく、おわかりの事と在じます。せっかく多くのファンを集めた貴誌のファンに對する夢を散らさぬ様にお願ひする次第です。次に、女相撲ファン(マニヤ)として、此の一年間を振り返つて見ますと、何一つ希望に哉えた事もなく淋しく思っております。多くさんのファン(マニヤ)の希望は、新しき年に何分共に叶えて戴きたく思ひます。とはいふものの、日本中に散つてゐる方々故、貴社として大変な事はよく存じております。ここに書きます同好会の事です。出来ますれば貴社が今日迄誌面上の方々、譬えば、名前を出して申訳

けありませんが、雪崎京人氏・岡平吉夫氏、室井英山氏、又はモデル嬢が推薦し紹介出来る方の紹介状を添えた方々を会員として名簿を作成し同好会を作る事が一番責任を持った安心した会が発足出来るんではないでしょうか。会費とか見学する会が纏ってからでも遅くないと思います。この際、編集長始め企画責任者の方、又この通信欄を御覧の読者の皆様の御意見を願います。先は乱文にて失礼致します皆様の明るい御返事を期待致します。(東京八間和志男)

大阪の泉井恭子様、十一月号に始めて貴女のお便りを拝見致しました。貴女も文面によるとM傾向の方のようですね。私は阪急沿線に住むS傾向二十八才の男性です。もう十年も前からK・K誌を家人に隠れるようにして愛読しており、分譲品も可成り揃えておりますがやはり実際に女性を縛ってみたい気持ちは、日々つのるばかりです。故に貴女のような方と是非お友達になつて頂き色々プレイを行つてみたいと思います。是非共願います。若しお友達になつて頂けるんでしたら年末ですが

十二月二十九日午後一時三十分〇S劇場切符売場附近でお待ちしております。目印は、週刊ベースボールを丸めて右手に持っております。私の特徴は身長一・五五米位で色白眼鏡を掛けております。又証拠として分譲品(えび)を持参します。(尼崎市八松岡寛)

小生のつたない告白を掲載して頂き御礼申し上げます。十二月号及び一月号と少しずつ同好の方が増えて行くのには全く楽しくなつて参ります。数日前、松竹「丹下左膳」に見事なシーンがあり、未だ興奮が醒めない様な次第です。「ソドムとゴモラ」に女奴隷となつて、セクシーなダンスを見せた宝みつ子がお蓮という女に扮して出演しておりますが、中頃で乱斗シーンがあり、鰐淵晴子と二、三立廻りの末丹波哲郎の左膳に、のめって行く後から袈裟掛に斬られて、次のアップ・シーンで、こちら向きにのけぞったところを再び肩先を斬り下げられ(この映画では殺陣で丹波哲郎が本身を用いてゐるため剣の風を斬る音と、肉の斬りさかれる「パシッ」という音が全部入っております)のめり倒れるといったシーンです。宝みつ

子の断末魔の悲鳴が「ウッワー」と出たもの、本当に本身の刀でなぐられたからでしょう。薄い青色綸子の衣装といい迫真的な殺陣といい全く満足しました。それから奇巧の編集部に御願ひするのは女だけの衣装をつけての立廻りのシーン、女の斬られたときの描写を動感を充分に出して、撮影して発表して下さい。先日妻と小旅行を試み、斬られる女の姿を8ミリ及びカラーにて撮影しましたが、この体験は、又後日書いて見ます。「女斗彦」氏その他皆さん、宜しく御願ひします。(中屋敷真)

愛読者の皆様お元気ですか。多くの試練の中にあつても常に正しく健全な本誌を出して下さる編集部の方々に心から感謝したいと思ひます。小生、毎月かかさず読ませて頂いておりますが、最近S女性の方の投書が殆んどなく、我々M男にとってはまことにさびしい限りです。どうか世のS女性の方どしどし体験談なり御意見をお寄せ下さるようお願い致します。小生はM傾向ですが、中でも女性の体臭に強い興味をおぼえます。これまでもいろいろと女性の体臭を求め、又それに接することもで

きました。女性のお尻の下にしかれて、そのかぐわしい臭気を存分に吸っている坐ぶとん、椅子、自転車、サドルを始め、直接肌にふれてじかに体臭を受けたパンティの匂いなどにも何度か接するチャンスはありました。しかし、直接女性の体臭を嗅がされたことは一度もありません。仰向けにねかされた小生の顔の上にスカートをたくしあげて馬のりにまたがって下さる女王様がおられたらどんなにすばらしいでしょう。パンティ一枚に包まれた巨大なヒップは盤石の重みをもって私の顔の上に迫り私の必死の抵抗も空しく押しつぶされます。時をみてあわれみ深い女王様は少しお尻を浮かせて下さいます。重圧から解放された私はやっとの思いで一息すいこみます。ああその時、パンティを通して女王様のお尻のすばらしい匂いが私の鼻の奥までぬけ通ります。直接嗅がされる温かい臭気に私の身も心もとけてしまふようになります。フアンタジーです。このようなおろかな夢を実際になえて下さる若く美しい女王様の出現とおよびかけを切に望みます。又、小用後使用されたチリ紙をお恵み下さる女

今月の新版

女体切腹「血紅立腹」

大手札五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(るな)

フンドシ一本の裸身ですくっと立った大塚啓子が下腹を血だらけにしなげら、キリキリと切りさばいてゆく連続切腹フォト。

木馬責三態

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(もく)

後手高手小手に縛しめられて、両手の自由のきかない女体を鋭い三角板の頂点にまたがされて、痛い痛い悶え苦しむ木馬責め。

椅子責の果

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(いす)

二月号の口絵にのった椅子しばりの女体を、弓のように逆エビに反ったまま、あっちへ転がしこっちへ転がし、さんざんに責んだ果太鼓のような胸部腹部の正面からその苦痛のさまに狙いをつけました。

双胸の強調縛

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野 良子

略号(そう)

全く素晴らしく大きく恰好のよい乳房ですね。彼女は自分でもそれ意識して殊更強調しようとし、す。縄は只さえ巨大な乳房をくくり上げて更に大きくくびる。

動感エビ縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(とう)

柔肌を喰い込むばかりに縛られたばかりか、胸、二の腕の厳しい縄目と両足首の縄目を連結した上右に左に、ごろごろと転がし、お尻を中心にくるぐると回したりする。喰い込む縄にもだえる表情と姿態を早いシャッターでキャッチしました。

色禪開股縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野 良子

略号(いふ)

縛られた縄もはじきかえすばかりのポリウム。喰い込む色フンドシ一本で、思うままにあればまるで美麗な裸身のもだえ。

性の方はいらっしやらないでしうか。貴女の数枚のチリ紙こそ小生にとつては何ものにもかえがたい最大のプレゼントなのです。このような女性の方のおよびかけを併せておねがい致します。(京都△M男▽)

読者の皆様お元気ですか。小生はMで、それも男性に責められてえび責め、サカサ吊りなど素っ裸にされ六尺禪一本で責められたのです。友人に責められておりますが、六尺禪一本はよいですね。近頃はローソク責めなどやられませんが、ローソク責めは最高です。それも高手小手にしばられてえび責めの形で尻を上にして尻の上にローソクを立てて責められるのです。とてもあついですが、がまん出来ます。ローソクは小さいのより大きいのがよいですね。小生はそれに赤の六尺禪が好きで、いつもは白の禪ですが、それもサラシを半分にして、はばをせまくしてしめています。そうしますと服の上からも目立ちませんしきつくしめられますから、よろしいです。MSの方々に東京においでの方がありませんか。お目にかかってお話がしたいです。お便りいただけ

ればかならずお返事致します。局止めですが以前から局へ取りに行つて居りますので二月目ごとに取りに行つて居ります。(東京都北染井郵便局止△大島清▽)

私は、浣腸に飢えた男です。その飢えに耐えている苦しみは、エネマ・ファンの方でなければおわかりにはならないでしょう。毎夜毎夜、ある事情のために、床の中で悶えながらこの飢えに耐えねばなりません。私の願いは、気絶するまで何十本、何百本浣腸されたことです。昼夜を問わず、連日浣腸され続け、身悶え一つ許されず、かすかなうめき声もあげられず、遂に何度目かの気絶の末に、とうとう私は浣腸の飢えをいやされ、さらに、私は、浣腸をするのと(されること)の苦しみを体得し、もう二度と浣腸しようなどとは考えなくなるのです。二度と浣腸など見たくなくなる。これが私の本当の願いでもあるのです。だけれか、私に二度と浣腸のことを考えなくなるまで徹底的に浣腸して下さる方はおられませんか。だれか、私のこの悪い病気をなおして下さい。男女を問いませんが、近くの方で、先着の方に限ります。

住所は編集部の方へお知らせしてありますから。十一月号の浣好兄へ、どうか、私を弟にしていただけませんでしようか。(京都(飢えた男V))

○

神戸の白川様、その後いかがおすごしですか。十月号の孝子嬢のように鼻を存分にいじめてあげたいと思って手ぐすねひいて待っています。毎月すばらしいK・K誌本分に我々マニヤにはたのしい発行日です。今月も二十五日が待ち遠しいのですが、鼻マニヤの白川様のことを案じております。どうぞ御一報下さい。最近読者欄に活発な通信が見られるようになり誠にたのしい限りです。増刊号は浣腸、鼻、切腹と本当にぞくぞくする思いで眺めました。長野良子さんの団子鼻、我々も一度でいいからあんなすばらしい団子鼻をもみくちやにしてみたいものです。白川様、鼻責めをたのしみましょう。そして明石市の伊東恵子さんあなたの呼びかけに私は大きな希望を抱きました。どうぞ私とつき合ってください。我々には異性なんて、とても高嶺の花でしたが、あなたのような若い女性の出現に我々独身にもたのしい夢が芽生えます。

す。とにかく、一度お便りを下さい。当方二十四才、まああの青年、逢いたく思いますが、どうか時間を御指定下さい。(高槻八阪口生V)

○

新年号で最も嬉しかったのはグラビアでも本文でもなく、今後とも確実に発行するという記事、それにして無理難題な連中が多いのはお互に困ったものです。残念だったのは新宮様、前川様の作品がなかったこと、来月号に期待しておりますが、是非水野様も、これに加わっていただきたいと思えます。トリックの方は全然知りませんが、獄門台の生首は斬口と唇のはしに血のりをつけてはしく、槍の先にグサリと刺し貫ぬかれた生首、刑吏に髪を毛をつかまれて高々とかがけられた生首、さては列車の車輪にはねられて空しく線路の脇にころがる生首など。絞首刑の場合は完全に宙に浮いて足首がダラリとたれていなくては面白くありません。或はハリツケにかけられた女体に槍が突き刺さり、処刑後の両脇腹にポッカリと地獄の穴の様な傷口があいて血汐が滴っている場面、更に喉やふくよかな腹部に矢が突き立った瞬間などな

んとか、お願いできないものですか。ところで私の悪文「水責め」が採用になっておりましたが、他の諸兄姉の作品と比べますとお話にならぬ位の世迷言。しかし心臓だけは人一倍強いものですから続いて、「火あぶり」「ハリツケ」「絞首刑」の駄文を投稿してみます。採用になったアカツキはどうもお笑いのほどを。(仙台市八黒田寿V)

○

私は御社発行の奇譚クラブの永年の一愛読者でございしますが、今回出版されました新年号店頭にちよつと現われただけで売切れとなつてしまいました。案外愛読者の多きことにびっくり致しております。本誌を店頭でみてグラビアに高校女子相撲大会のさし絵がのつていましたのに売切れでした。ところで私は女斗美大ファンで本誌中の女プロレス、女相撲の記事、写真はすべてスクラップしてありますが、残念なことに絵ばかりで実写がありません。ぜひともモデルなどによるはちきれんばかりの美女と美女グラマーを取組ませて下さい。また女プロレス、女相撲など女斗美だけのグラフ特集をやつて下さい。全国には多数のフ

ィがいると思われまふ。当方の女子高校でも女子柔道部があり毎日寒げいこをやっています。その生徒たちの話によると女子レスリングのような練習も柔道の寝わざのために護身術のために、生徒同志でやっております。たまには相撲のように四つに組んでもみ合うこともやり相撲は寒い冬には柔道より暖くなりかつ、セックスの発散にもなつてやりました。近頃の中学校でも男女共学のため男子生徒がすもうをやっていると、なりでも女子生徒が夢中になつてすもうをやっているのをたまに見ますが、中学生のため、あまりお色気的なものはありません。聞くところによるとキャバレーなどでは前から女プロレス、女相撲などやっていることが週刊誌などに掲載されていますが、女相撲は近く国技館をかし切つてやるとのことです。私は戦後間もなくですが新宿の駅前、伊勢丹前あき地で山形県の女相撲をみたことがあります。そのころは進駐軍の兵隊やパンスケのような女がやあやあいつて見ていたことを思い出します。御社でもぜひとも実際のモデルグラマーによる女プロレス、女相撲

のもようを特集グラフにして下さることを希望します。特に組合っているところを大きく戦後闘もなかつた雑誌で奇抜クラブというものに毎回よく美女と美女によるはちきれんばかりの女相撲の絵がグラビア(表紙うら)にのっています。(千葉八市川生)

読者の皆様、女の生活に満足されそして、ありふれたネルのオコシに惹かれる気持を持っておられる世の男女の皆様、お元気でございますか。私の変った想いを理解して下さい。私が大分、おられる様になりましたことはとてもうれしくございます。段々淋しくなってきました。この世……ではかない郷愁と共に、日夜思慕して止まない綿ネル仕立ての着衣に、愛着を持っております。私でございます。どうぞ文通にて、うれしいお便りをお聞かせ下さいませ。編集部の方に局留の指定局と名をお願ひ申上げてございますので、毎月十日頃に、お便り下さいませ。奇クをめぐる男女の方々の呼びかけをお待ちしております。(里乃糸枝)

一月号拝見しました。十二月号

に続き「世論動向待ち特集号」といったところ。「花と蛇」の休載「奇クサロン」も同様、替りに「宇宙のどこかで」が掲載されました。特集誌とはいえ公刊誌としてのこの編集方針には賛成出来ません。御一考のほどを。第一グラビヤ、絹川さんの美しい表情と肢体が五葉、S味を欠くうらみがあります。この美しさ「悪書」では出せません。特に最後の一葉は絹川さんの美しさを遺憾なく表しています。表情と顎から喉へかけての線の美しさ、胸の膨らみ、脚線の素晴らしさをこの一葉で集約しています。白マスクの大塚さんは緊縛感に欠けます。やはり口にはキリリと猿轡をかませる方が良いでしょう。バックがいささか気になります。弄顔の梨花悠紀子さん、緊縛美。美しい豊胸、この角度からでしたら乳房の下をもう一度、強く縛れば更に良かったのではないでしようか。表情が少し物足りません。耽美の大塚さん、もし腫が羞恥と屈辱感を表していたなら最高です。「嵌口」と共に縛りは一、二本で強く縛った方が良いでしょう。口絵「イルリガート」の有る部屋」この軽い驚きの表情は状況に適しません。「甘味を

慕う蟻の群」蟻の数をかぞえながら「美人だな」「坐っているのかな」「立っているのかな」「裸にされて埋められているのかな」「土中でひどいことをされているんじゃないかな」等想像しました。それだけの作品。「鼻孔で吸わす煙草」「M画」「女体切腹」「女子相撲」「アイデア画」共に手を抜いた感じ。第二グラビヤ、木下闇の館典子さん、軽い味が出ています。これはこれで良いのですが、一度この人を思いきり苛めてみたい気がします。危ぶまれるものの五月亜紀子さん、十二月号の新井マリ子さんと共に第二回の撮影が待たれます。「沈黙の抵抗」「光沢の拘束」「膨満、胸部のワンカッ」の三点はどうも……。「麻縄にくびれる太腿」脚線美を誇る絹川文代さんの迫力ある作品。次回には是非、腕をこんな風に責めて下さい。「鼻孔清掃」マニヤには迫力ある作品でしょう。囚女の梨花悠紀子さん、胸をもっとはだけた方が、屈辱感が大きいと思います。写真の顔の部分の少しおかしさ。以上のいずれも世論を気にした低姿勢ムードの作品ですが、基準のない悪書批判に対しては無意味な、そして奇ク自身には危険な後

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(るは)

浣腸 プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる液

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸 後排便

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(へき)

便意苦悶像

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(へか)

退ではないかと恐れます。巻頭論稿「読者通信によるファンタジ」は文献誌奇クにふさわしい労作です。更に異った角度から読者通信を取扱った記事を芳野眉美氏に期待します。「十三人の女死刑囚」の中では、アンの釜ゆでの刑を面白く思いました。文章は短いのですが、水漬けから熱湯になるまでの長い時間苦痛を与えられるからです。次回のカポ一篇ではじ

血紅使用腸露出

女体切腹シリーズ

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 大塚啓子 略号(せい12)

左脇腹へぐさりと鋭く光る短刀の刃先を突き刺し、忽ち下腹ににじみ出る血汐のワンカットから初まり、最後に咽喉元をかき切り、左乳房の下を一抉りして絶命するに至るまでの凄惨な女体切腹の過程を、十二枚一組の連続写真として完成。臍下から右脇腹へかけて深々と切つてゆけば、腸が傷口からはみ出て真に迫る女体切腹シーンを展開しています。最近とみに濃艶さを増してきた大塚啓子嬢の手に汗を握る好演技と美しいポーズによって見事な切腹姿態をキャッチしました。何卒、女体切腹写真の最優秀作品としてお手元にて御愛玩下さい。

梨花悠紀子 血紅切腹

絶命ポーズ

大手札印画紙焼付

四枚一組 四〇〇円

モデル 梨花悠紀子 略号(せん)

愁いを帯びた悠紀子が自らの手で下腹を真一文字にかさばけば傷口から一すじ二すじと、たらたら流れる血汐。苦痛にゆがむ美しい表情。やがて思うさま、きりきりと切り果てた上、下腹を血まみれにして仰向けに倒れる女体。傷口を上、血塗られた短刀を右手にしたまま倒れて、今や自虐の恍惚境の中に全身をゆだねて、静かに絶命してゆく可憐な姿態。切腹と絶命の二様を味える迫力作。

新版血紅切腹フォト

祭壇の女体切腹

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号(せぬ)

白布をめぐるした背景、白布をひきつめた台の上に、白フンドシーの裸女が、いけにえの白い肌を晒して、肉づきのよい下腹を白鞘の短刀で切りさばいてゆく。白一色の中に赤い血が美しく彩り、苦悶に乳房を握りかみ、のどに手を当て、台上面に転々と身をくねらすさまはマニヤの心をゆさぶるでしょう。

つくり責めるものを期待します。「商敵」の京子が永枕を下腹に括りつけられ苦悶する様は面白いものです。「お馬責」は一寸分り難い。挿絵をお願いします。責められて苦悶する女体の美しさをできるだけ描写して下さい。「村の祭礼」観念的ではありますが、女体の美しさを表現しようという努力を買いいます。殊に毛を剃り落して美さを強調する事は私の夢でもありましたので嬉しく思いました。然し女性には耐え難い屈辱を与えながら責めるのが最も美しいと思えますので、このストーリーではその点が不満です。「奇譚三十九夜物語」の第七十二話は興味深く読みました。出来ればそのフォトを奇クへ発表して下さい。無理なう分譲品としてでも発表していただきたく思います。「濡れにぞ濡れし」マニヤではありませんが、氏の軽快で小粋な文章が好きです。三と六の(1)は共感をおぼえます。「読者通信」佐野光子さんに對する佐川奈津子さんの反論？について、佐川さんは奇クを楽しむといった貴族趣味をお持ちでないようです。「猫に小判」「豚に真珠」(失礼)挿絵が相変らずひどい、美しいのはP三四P一五〇

の二点だけです。本号のグラビヤ口絵の中では第一グラビヤの絹川さんの作品、記事では芳野眉美氏の巻頭論稿を挙げます。他は一般に低調です。次号を期待します。(佐渡耕作)

本はやつとの思いで些か待ちくたびれて一月号を入手しました。最近悪書追放運動の余波でもう二度と書店では見る事が出来ないのではないかと危惧されましたが無事入手出来まして安堵致しました。一月号を入手して奇クを始めて手にして以来、満十年少々になるかと思うと感慨一入深い思いです。一時は休刊という事態もありましたが、以来続いて来た事は偏に編集部の諸氏の尽力に依るものと存じます。奇クサロンが又も誌上から姿を消した事は全く淋しい事です。何時の日にか再び誌上を飾ることを願ってやみません。御多忙中御手数をおかけ致しまして恐縮に存じますが、次の点について御数示いただけたら幸いに存じます。一、悪書追放運動の声に依ってか、三カ月続けられてきた巻頭口絵、アイデア画、「妊婦のカン腸二態」「カン腸とオシメ」といったものは発表されないもの

でしょうか。二、分譲フォトについてオシメフォトも数はカン腸フォトに比して少いのですが、口絵の様にカン腸とオシメを扱った企画は皆無に等しいのですが、企画の発表の有無。三、勿論私としては決して法に触れるようなものは望みませんが、公刊誌なるが故にモデル嬢の着衣をばだけた処からピッチリとはめられたオムツカバー、その下から、一般的なオシメ地（派手な柄）がハミ出している。カン腸されてオムツカバーをつけられて悶えているポーズといったフォトは全くないのですが、発表される企画はないものでしょうか。オムツ愛好者も案外多い故大いに歓迎されると思います。四、文通（同好者同志での手紙の回送）といった点は一切されないという事は十分存じて居りますが、一月号の通信にて高田章子さんは編集部から小包の転送があったという嬉しいお便りを披露しています。こうした事は特定の読者のみでしょうか。私ももう十年余の愛読者ですが、二、三の同好者への回送は、こうした便宜を叶えていただける方法はないものでしょうか。勿論こうした点に要する料金は負担いたしますが、こ

の点について御厚意ある回答を下さいますよう、御願い申し上げます。（静岡人赤井茂）

『編集部より』一、文献誌という立場から同好者の多少に拘らず出来るだけ広範囲の傾向のものを取り入れたいと考えておりますから御指摘のオシメに関連したものに ついても、今後順次企画してゆきたいと思ひます。二、分譲フォトについては、お申込みさえ多ければ次々と企画発表することにしていきます。流腸フォトとの比較では、オシメの方はうんと少いようです。要は採算点に合う申込さえあれば、手を変え品を変えて、新しい分譲品として追加してゆくこととなります。手初めにオシメの新分譲品を発表してみますから、その成績如何で、今後の方針をきめることに致しましょう。三、文通の幹旋につきましては、この欄でも度々御返事しましたように、只今は原則として一切お引受けしておりません。昭和二十八、九年頃は発行部数が多くて、女子編集部員を一名専属に読者通信係として担当させられるだけの経費が捻出できました故、大々的に文通幹旋をやっていました。現在では、とてもその人件費の負担には

分譲品御注文の栞

○代理部の分譲品は、すべて前金にて御注文願います。直接の訪問並に代金引換はお断りします。

○御注文品は注文書到着と同時に発送申し上げます。

○御送金は、現金書留（封筒は一枚三円にて局が売っています）小為替、定額小為替（小額のときは御便利です）振替（用紙は郵便局にあります）切手代用（十円、二十円、三十四円、十円などの切手で、絶対紙にはりつけないで送り下さい）等を御利用願います。

○御注文品は、雑誌では何年何月号、或は略号の付してあるものは略号。フォトの類はすべて略号をお書き下さい。品名をお書きになると間違いが起り易いので、必ず略号のみ、お書き願います。

○送料は日本国内に限り、すべて当方にて負担させて頂きます。但し速達並に書留それに外国便は、実費御負担下さい。

○局留にてお受取り希望の方が増えてきておりますが、せいぜい御利用下さい。御注文の際、お受取りになりたいた郵便局名（特定局でも結構）とお名前（仮名にて可なれど市販の認印なんかを準備した方がよい）とを当方へ御連絡下さい。

れば、その御指定の局に局留としてお送りします。別に局からは通知がありませんから、局へ出向かされて、お名前をいってお受取り下さい。局での郵便物の留置期間は十日間です。十日間を過ぎると差出人へ返戻されます。

○御注文の宛先は大阪阿倍野郵便局私書函第十四号、天星社です。私書函番号を明記するよう依頼されましたので右の通りお願いします。

○尚、御注文の際、もし代品として第二希望品がございましたら添記頂けますと、万一分譲中止、品切などのとき迅速に処理できて助かります。

○分譲品の新しいものは、毎月号の誌上で『新版案内』として発表しておきます。又、古くなりましたものは漸次打ち切りにします。

○御注文の宛先は必ず楷書ではっきりとお書き願います。肩書きがございましたら、それも忘れなくお書き添え願います。

○御注文者の御氏名は絶対に他へ洩らすようなことは致しません故御安心下さい。

○金額にして五千円以上のフォトをまとめて御注文の際は金額に応じて優秀フォトのサービス品を贈呈させていただきます。

耐えられませんか故中止している次第です。村松芳子さん、高田章子さんなど、二、三の方々に発売後十日間位の間に来た書信を小包で転送したことはありませんが、これは編集部の手で行った一部の例で、一般にはすべて誌上の通信欄を以て交歓して頂くようお願いいたします。そういった希望が殺到しますと、とてもまかないきれません故、原則としてお断りしている次第です。もし発行部数が増大し余裕ができるようになれば、専属の係をおいて復活も夢ではないと考

新人フンドシ姿分譲

本誌の読者通信に投稿された愛読者の栗本ミチ嬢のフンドシ・フォトですが、御本人がグラビアに登場するのを恥かしがって特に分譲品としてほしいと希望を申し出られましたので、ここに芳紀二十一才のBG栗本ミチ嬢の白晒六尺襠一本のりりしい姿をマニヤの方にごらんにいれます。彼女は一六二センチの身長につりあう均整のとれた中肉中背、ピチピチと張りきったスポーツティな肢体、愛らしい童顔の持主です。

えられます。

一月号、読者通信にて新宮明夫様、東京の錦城仙太郎様より私への呼びかけを頂いて有がたく思っています。ほんとうに近くの方たちだったら、妻の首を貴方たちにより切り落として頂いて晒らし首にしたいと思いますが、何しろ遠方のこと故、あきらめては居りますが妻と二人で空想したりして楽しんで居ります。私も暇を見ては妻を写しては居りますが、まだまだ誌上に掲載させて頂く勇気が

フンドシの前後左右

大手札四枚一組 四〇〇円
モデル栗本ミチ略号(ふな)
フンドシをきりりと締めた栗本嬢の魅力を、そのまわりからあまさず狙いうちしました。

フンドシの変わった姿

大手札三枚一組 三〇〇円
モデル栗本ミチ略号(ふに)
両股を開いてかんだポーズや尻の割目に喰い込んだ晒を強調する尻振りポーズ、前袋をあらわにした横臥ポーズなどを揃えました。

なく妻もくどいでは居りますが仲々首をタテにふつてくれません。生首ファンの方たちに見て戴くことが出来ず誠に申し訳なく思っています。私のコレクションを申しますと先般もお便りしましたが、すすきヶ原の晒し首、切腹する妻私の介錯にて首切り(ストーリー写真)ダンボールにつめられた首地上六尺台上に晒された首、長髪を、わしずかみにしてぶら下げた生首、等々数々の生首写真をアルバムに編集して楽しんで居ります。その他、私も女の生首マニアであります。女の切腹、浣腸、全裸縛り等のコレクションを数多く写して居ります。先にものべましたが、まだ誌上発表が出来ませんが、もう暫らく時間を戴いてその内是非掲載させて頂いて皆様の御批判を乞いたいと思ひます。それで同志の方たちと文通でもさせて戴いて写真の交換をした

ジョイできればそれで良いと思ひます。あくまでも紳士同志の文通コレクションの交換などが出来れば幸いと思ひます。では同志のお便りを山深い里にてお待ちして居ります。(岐阜八水野弘)

一月号、森田敬三氏の文を読んで同好の士を発見し、非常にうれしく感じた。拙文「女の斬られるとき」で書いた様に八ミリで撮影する企画を立てていたが、先日妻と小旅行の際、始めて実行して見た。ライト、カメラ、衣裳等で荷物が増くなり閉口したが、夜半十一時頃より撮影を始めた。衣裳は妻が特に準備した。表がベージュ色のサテン、裏が薄青色のサテンの重ねの小袖で、帯は文庫風つけ帯、髪はかつらを準備する余裕もなく、和風らしくセットした。簡単な立ち廻りからの袈裟斬り胴切りといろいろやって見る。斬首も後手に縛り上げ差しのべた妻の首を斬り落す、ぐつとのび上り後は胴から足の断末魔の痙攣のカットというように表現して見た。SSフィルムを使用した、やや露出を間違え少々失敗と見たが、返送されたフィルムではまあまあといった程度に撮影されていた。妻

一月号、森田敬三氏の文を読んで同好の士を発見し、非常にうれしく感じた。拙文「女の斬られるとき」で書いた様に八ミリで撮影する企画を立てていたが、先日妻と小旅行の際、始めて実行して見た。ライト、カメラ、衣裳等で荷物が増くなり閉口したが、夜半十一時頃より撮影を始めた。衣裳は妻が特に準備した。表がベージュ色のサテン、裏が薄青色のサテンの重ねの小袖で、帯は文庫風つけ帯、髪はかつらを準備する余裕もなく、和風らしくセットした。簡単な立ち廻りからの袈裟斬り胴切りといろいろやって見る。斬首も後手に縛り上げ差しのべた妻の首を斬り落す、ぐつとのび上り後は胴から足の断末魔の痙攣のカットというように表現して見た。SSフィルムを使用した、やや露出を間違え少々失敗と見たが、返送されたフィルムではまあまあといった程度に撮影されていた。妻

も「刀を肩先より斬り上げられるときはよく感じが出るわ」と笑っていた。前日より疲労と寝不足のため充分な時間をかけられなかった事は残念だった。なお余分のフィルムがあったので、近所の映画館で松竹「丹下左膳」の中の宝みつ子（ソドムとゴモラのショーダンサーとして出演）が見事に斬り倒される場面があったのを写して見た。やや、暗くはあったが充分写っており編集器で一コマづつ見ると、断末魔の表情、斬られて行く姿態、衣装の動等興味深々である。極く短かいカットであるが肉の裂かれる「パシヤア」という音と剣風等が全部録音してあるの、是非一見おすすめる。（中屋敷真）

最近の悪書追放ブーム、貴誌もその中に数えられていることを知ったが、全く驚き入った話だ。確かにここに二、三カ月書店の店頭に極彩色のドギついセックスを露骨に扱った週刊誌が氾濫しているのは見たが。貴誌のどこがいけないというのか。文学的にみても決して低級なものではないし、一部の趣味をもつ人々が秘かに慰め合っているこの本が、どうして一般

の良俗や秩序を乱しているというのか私には理解できない。然し、どんな苦境にあっても貴誌だけは続けて刊行して下さい。何十万かの人々が貴誌を唯一の楽しみにして働いているということだけでも皆さんは自信をもって仕事をしていただきたい。これが励まし言葉になるかならぬか。免に角堪らなく皆さんに一言申し上げたくて筆をとった次第です。頑張ってください。（堀夏彦）

中川フミ子様、川田幸子様、伊集院かおる様その他サド女性の皆様お元気でしょうか。私奇クの愛読者ですが皆様のお呼び掛けに對しうれしさがこみ上げて来てお便り申し上げおねがいいたします。私は強度のパンティーフェチシストで、若い女性の方々の汚れたパントリーのとりこなのです。汚れた部分に顔をうずめ強くそのかわわしい鼻一杯に吸い込む、その時の幸福感は何にも例え難いものです。どうか私に、思い切り汚れたパンティーを一枚お恵み下さいませんでしょいか。何時迄も大切に保存し毎日々々有難く使用させていただきます。お礼に必ず私がいただいたパンティーをかぶ

○女体切腹資料の部○

女体切腹態

大手札二枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号（ねは）

女体自刃態

大手札三枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号（ねに）

血紅使用血塗れ下腹

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号（わい）

殿中の自決

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号（わこ）

切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号（わは）

豊満に挑戦

大手札五枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号（えん）

介添切腹

大手札四枚一組 四〇〇円
甘木 春子 略号（あか）

腹を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号（やい）

下腹に刺す刃

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号（やお）

柔肌を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号（やえ）

ったり嗅いで居るフォートを送らせていただくことをお約束申し上げます。どうかどうかこのパンティーフェチシストの慾求不満を満足させて御同情ある所志を賜りますようおねがいいたします。どうか左記の場所にお便り下さい。お待ちします。（岡山市桜町郵便局止 八山形達一）

前川様、室井様、佐出須登様、

始め同好諸士の通信と嬉しく拝見いたしました。毎号々々同好の方々の通信が増えていくのが楽しみです。今月号は森田様の一文も興味深くよませていただきました。女が斬られる瞬間の美しさは、たしかに一種独特な凄艶なものがあります。殺されるという悲惨さはこの際考えられず、只、なまめかしい女性が崩折れ、もがき、こと切れて横たわるまでが美しく、又

屍となっても、美人であればある程、妖艶な美があると思います。着衣の場合、裾からのぞく緋の腰巻が白い足にまといついているのも又とない美しさでしょうね。それに斬られて飛沫をあげてのけぞる姿も美しいものと思います。生から死への一瞬が凝結した美しさです。白刃を振り渡り合う二人の乙女共にみずみずしい島田笛に白鉢巻、振袖にたすきがけの姿で赤い腰巻をちらつかせ乍ら丁々発止一方の乙女は肩よりけさがけに斬られ鋭い悲鳴と共にのけぞる姿、そして白い脛を赤い腰巻からこぼれさせてもがき、こと切れるまでの動きには何かしらぐっと胸に来る美しさがあります。この赤い腰

巻が最近次第に一部の粹筋を除いてすたれて行かんとしているのは残念至極です。これが着飾った女の場合ですが「大奥裸女血斗」のようなふんどし一つの裸での場合はどうでしょう。緋のふんどしを白い肌の輝くばかりの美事な体にくきりとしめて二人の裸のうち若い奥女中が白刃を振って斬り合うこと二三合、遂に一方の女中は、血飛沫と共に鋭い悲鳴と共にのけぞるその時のふんどし一つの裸身が、硬直する時の美しさ、そのまま崩れるように倒れ、一転して俯伏せになりもだえる時豊かな臀部の双丘を割っていく緋のふんどしが鮮かに目を射す。その美しいふんどしのしめこまれた双

丘を二三度ピクピクと断末魔のけいれんでうねらせて息たえるまでの美しさを私は想像して、胸を一杯にしています。佐出須登様は私のようにふんどし一つの美女血斗は好みに合わないからですが、それでも次々と、様々な方法で惨殺されて行く美女達を描いて紙面からは血肉の香が漂って来るような興奮を覚えています。現実の殺しは許さるべくありませんが、紙の上では幾人でも、又どんな方法でも、又どんな女でも惨殺しても文句はない筈です。思い切りたくさん美女を裸にして虐殺しましょう。こんなことをいえば女性のファンから抗議されるかも知りませんね。前川様は生首絵の次の作

品を投稿された由、而も血みどろな裸女の屍をあしらってあるとのことと期待しています。前作も貴方がいわれる程、グロ味はなかったと思つています。色彩が入っていればもっと素晴らしかったでしょう。生首絵も結構ですが、室井様もいつておられる累々たるふんどし一つの裸女達の死屍を描いた裸女血斗の修羅場を描いたのも、是非お願いしたいものです。それから前川様、もし私の今まで誌上に発表した裸女血斗のイメージを土台に物語りを作られんとされるならば、結構ですからどしどしお使いになって下さい。思いつく限りのイメージは絞り出しましう。一度是非直接文通したいもの

本誌最近号在庫案内

○本誌最近号は左記の通り在庫しております。送料は当方にて負担いたします。
○昭和35年5月号以前の号は全部売切れとなり在庫ありません。
○各月号の総目次は、漸次誌上に掲載いたします。

昭和35年6月号 (定価三〇〇円)
昭和35年5月号 (定価三〇〇円)
昭和35年4月号 (定価三〇〇円)
昭和35年3月号 (定価三〇〇円)
昭和35年2月号 (定価三〇〇円)
昭和35年1月号 (定価三〇〇円)

昭和35年12月号 (定価四〇〇円)
昭和35年11月号 (定価四〇〇円)
昭和35年10月号 (定価四〇〇円)
昭和35年9月号 (定価四〇〇円)
昭和35年8月号 (定価四〇〇円)
昭和35年7月号 (定価四〇〇円)
昭和35年6月号 (定価四〇〇円)
昭和35年5月号 (定価四〇〇円)
昭和35年4月号 (定価四〇〇円)
昭和35年3月号 (定価四〇〇円)
昭和35年2月号 (定価四〇〇円)
昭和35年1月号 (定価四〇〇円)

昭和35年12月号 (定価四〇〇円)
昭和35年11月号 (定価四〇〇円)
昭和35年10月号 (定価四〇〇円)
昭和35年9月号 (定価四〇〇円)
昭和35年8月号 (定価四〇〇円)
昭和35年7月号 (定価四〇〇円)
昭和35年6月号 (定価四〇〇円)
昭和35年5月号 (定価四〇〇円)
昭和35年4月号 (定価四〇〇円)
昭和35年3月号 (定価四〇〇円)
昭和35年2月号 (定価四〇〇円)
昭和35年1月号 (定価四〇〇円)

昭和35年12月号 (定価四〇〇円)
昭和35年11月号 (定価四〇〇円)
昭和35年10月号 (定価四〇〇円)
昭和35年9月号 (定価四〇〇円)
昭和35年8月号 (定価四〇〇円)
昭和35年7月号 (定価四〇〇円)
昭和35年6月号 (定価四〇〇円)
昭和35年5月号 (定価四〇〇円)
昭和35年4月号 (定価四〇〇円)
昭和35年3月号 (定価四〇〇円)
昭和35年2月号 (定価四〇〇円)
昭和35年1月号 (定価四〇〇円)

です。よろしければ何か方法を御指示下さい。(女斗彦)

○

大西、吉田、神戸のH・H、佐藤、吉沢様、私は貴方達と同じマニヤの本郷綾子です。こしはらく通信しませんでしたが、私は八月、宮城県仙台市に引越たので、でもやっとおちつきました。その間貴方達の通信を拝見致しており、引越する際ゴムのオムツカバーなどぜんぶ見つかることまるので捨ててしない、月経帯を十枚ほど残しただけ、もし私の月経帯と、ゴムのオムツカバーと交換したい方、至急天星社に送って下さい。折返し私の月経バンド送ります。又、仙台にゴムのオムツカバーを売っている所知っている方、教えて下さい。(宮城県八本郷綾子V)

○

編集部の皆様今年も残すところ一日余り、年の瀬にもなれば何かとお忙しさも一段と増すことでしょう。先日、一月号拝見全くすばらしいです。今日はゴムカバーの大好きな大西良子様へお呼びかけしたいのですが、よろしくおねがいします。ゴムカバーの大好きな大西良子様へ、奇ク九月号で「読者

通信にてお便り拝見させて頂きました。私吉川太紀子と申します。どうぞよろしく。奇クは毎月おつとめの帰りに発売日をかかさず買って居りましたが、九月号のみ買ってもらし、先日やっとの思いで市内の古本屋で見つけ出し、恥も外聞もなく買い求め逃げる様にして家路を急ぎました。帰る道すがら何回も後を振りかえっては誰かつけてきはしないか、別にどろぼうしたわけではなく、やはり気になるのは女の弱さでしょうか。家に着いた時は下着などあせでびっしょりでした。早速二階の自分の部屋に入りカギをかけて電気をつけるのももどかしく読者通信を拝見しました所貴女のお便りが目にとまりました。その時の驚きはとうてい口で申せません。全く私の趣向と同じで自分が投書したのかとしばらく錯覚に陥りました。その夜のオムツカバーを着用してのプレイは一段とずてきなものでした。私もゴム愛好家の一人で、日常パンティーやショーツをはいているより、バンドを着用している方がはるかに多いのです。一週間のうち五日まではバンドを着用しています。今まではおつとめのお休みの外出にはいつも大人用ゴムオムツカバー

をタイトの下に着けて出ますが、やはりスカートの下でゴムがキュキュと音を立てるのは気がかりです。所が此の間思い切って女学校時代のクラスメイトと二人で(今までゴムオムツカバーをつけていましたので外出は全て一人)遊びに出ましたがお友達には、その様な音は聞かえないらしく、私のタイトの下にオムツカバーを着用しているなど夢にも知らない様子でいつもの通りしその日一日楽しく何のこともなく無事終ってしまいました。とは申しても着けている本人はやはり人に感づかれなかと神経をつかいますが。平静を装っていれば別にそんなに心配することはないと思います。今日お便り差し上げましたのも出来すれば、一度お逢いして、もちろんゴムカバーを二人共着用して、心ゆくまでゴムカバーについて語り合えたらと思います。大阪と貴女の神戸とはわずか一時間ではありませんこと。是非お逢いしたいですね。御連絡の方法は編集部に住所回送おねがいしてみませんか。それから条件が一つあります。それは、お互いにお写真の交換をすること。お待ち合せの時便利でしょう。最後に今まで奇クに取り上

新宮明夫氏提供

「処刑」フォト 分譲

新宮明夫氏から「夫婦のSMプレイ」として提供を受けましたが本誌口絵発表が不適当です。ので分譲品として処刑マニヤの方々にお分けいたします。

一、絞首刑 略号(こけ)

大手札三枚一組 三〇〇円
後手高手小手、胴じばりにされ目かくしをされた麗人が、首に痛ましい吊り縄をかけられて絞首にされる哀れな処刑の姿を、前、後、側面からごらんいただけます。

二、磔 略号(はみ)

大手札三枚一組 三〇〇円
両手を左右いっぱいひろげて側木に厳じつけられた可憐な女囚が、大の字に、或は十の字に将又哀れみを乞う膝立の姿勢でハリツケられる美しい裸身をどうぞ。

三、晒し 略号(さら)

大手札三枚一組 三〇〇円
両手首を揃えて高々と吊り上げられ、或は万才の形に左右にせい一杯ひろげて吊り上げられ、衆人の目の中にかくすことなき裸身の隅々までを視線になぶられる晒しの処刑ポーズ。

レーを初めて九カ月ですが、その間色々やってみました。その結果この喜びを自分達だけのものにして、おすそ分けしたいと思ひます。京都方面の女性の方で、一度真面目な態度でプレイをしたいとお考えの方がありましたら、手紙を下さい。三十才までの女性の方でしたら結構です。私は二十七才の青年です。お互いに満足のできる素晴らしいプレイをやってみようではありませんか。(京都市八渡辺己津男)

新人異色原稿募集

一、告白

「私は、こんな趣向を持ちます」

○自分はこのように人と言えぬ変わった趣向を持つてゐるという方はペンに托して、その偽らざる真実の告白をお寄せ下さい。どのような奇想天外のものでも驚きませんから、どうか、全国のファンの方々に、貴方（貴女）の真実の告白を引っさげて、お呼びかけ下さるよう心からお待ちします。

二、手記

「私は、このように思います」

○真面目な御批判をお寄せ下さるよう、お待ちしております。御自分の生活のこと、社会一

般のこと、本誌のこと、同好者への呼びかけ等なんでも結構です。

三、体験

「私はこんな変わった体験をしました」

○長い人生の中には、誰でも一度や二度は凄く体験をするものです。ぜひ、どっておき異色体験記をお書き下さい。また、特に変わった体験でなくとも、御自身で非常に強い印象を受けた事柄を、この際再び追体験して下さい。

◎以上の「告白」「手記」「体験」の三項目の応募原稿は、近く発行予定の「特集号」に一括掲載したいと思ひます。採用篇には、相当稿料お支払い致します故、奮って御応募あらんことを。
◎締切日、毎月三十日

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記△

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるものたえど、どうか皆様の真実の叫びを、しどし文字にしてお寄せ下さい。採用には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語△

御自分の描く夢をまとめて下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△（映画、雑誌）通信△

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポートマニヤ通信△

新聞記事等で関心をお持ちの事項或はマニヤ各傾向の本

誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。

◎尚、以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作成の各種フォトを贈呈いたします。

△読者通信△

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、思ひ出話、或いは読者相互の交歓文通、応答などをお寄せ下さい。

☆本誌御購読の葉☆

一月分（1冊）二五〇円（送共）
三月分（3冊）七〇〇円（送共）
半年分（6冊）一三〇〇円（送共）

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価二五〇円

二月号

（第十八巻第二号）
（通刊第一八六号）

昭和三十八年一月二十日 印刷
昭和三十九年二月一日 発行

編集印刷兼発行人 箕田 京二
阿倍野局私書函第十四号

発行所 天星社

（振替口座大阪五〇〇四二番）
（昭和三年四月三日第三種郵便物認可）
（国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号）

☆代理部分譲品について☆

○代理部分譲品は本誌に広告してある分は全部在庫しておりますから、略号明記の上お申込み下さい。尚、分譲品の詳細は、目錄を御請求の上ごらん願ひます。
○既刊雑誌の旧号は別項の通り在庫してありますから、売切れぬ中御注文願ひます。
○口絵写真の複写転載は固く禁じます。